6号配石遺構，116号住居跡，98・109号土壙と重複，本住居跡はいずれよりも古い。

〈平面形・規模〉　3.70×(3.74)mの円形を呈する。主軸方向はN—1°—E，床面積は9.92㎡を計る。

〈堆積土〉　2層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともV層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは，残存する壁際に一巡し，その規模は24～68cmの幅で，床面から10～20cmの高さにある。床面はレンズ状で，テラス面と同様にしまりがある。床面の東側と東壁は116号住居構築により，南西壁及び北壁の一部は98・106号土壙により消失している。残存壁はⅣ・V層より成り，緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は西壁37cm，南壁41cm，北壁42cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より8個のピットが検出された。このうちPit 1～3・6・7または8を主柱穴とし，主軸線上のPit 1と，軸線に対称な2対4個（Pit 2・7または8，Pit 3・6）の計5個を基本とする柱配置である。

第115号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

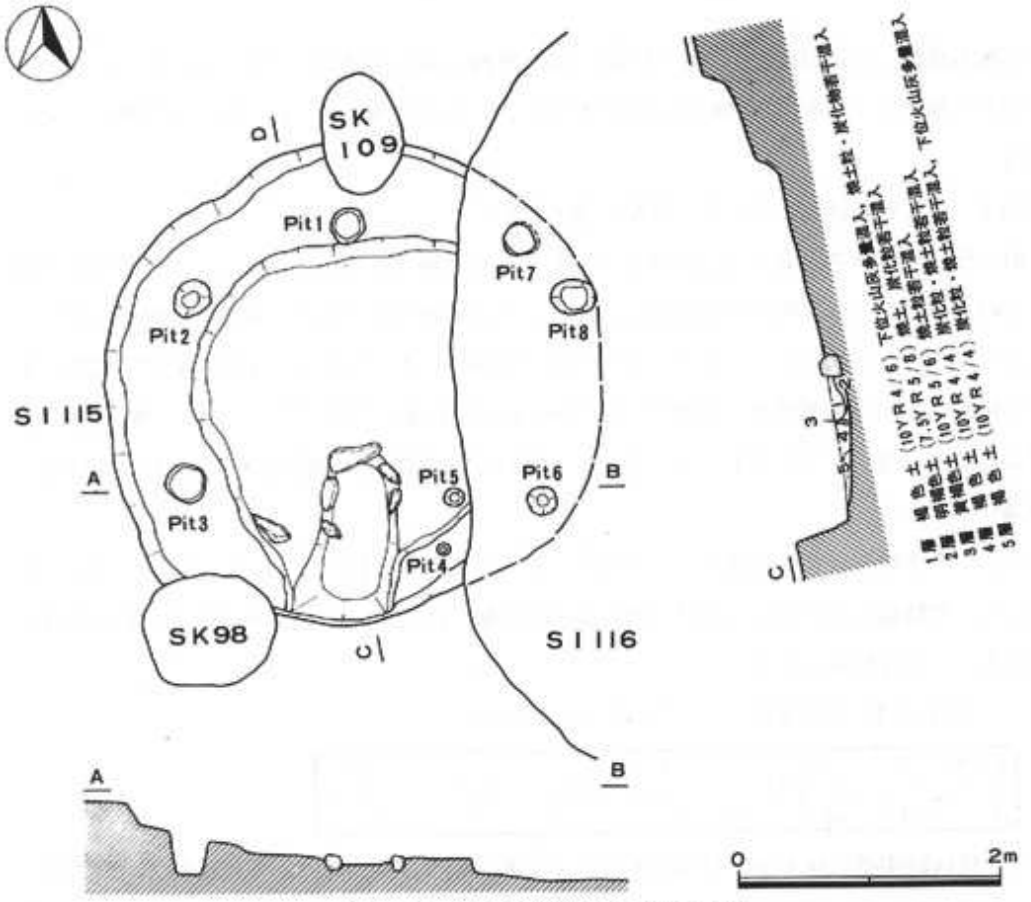
Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8
規　模	27×27	31×26	30×30	9×9	15×13	22×21	23×22	34×26
深　さ	14.5	41.9	31.8	16.6	14.5			

〈炉〉　住居跡南壁に接する。石囲部＋掘り込み部から成る 130×70cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は，22～42cm大の自然石を「∪」状に配したもので，石囲部内北側に24×32cmの範囲で最大9cmの深さの焼土が確認された。掘り込み部は，65×70cmの隅丸方形で，石囲部側から壁にかけて浅くなる。

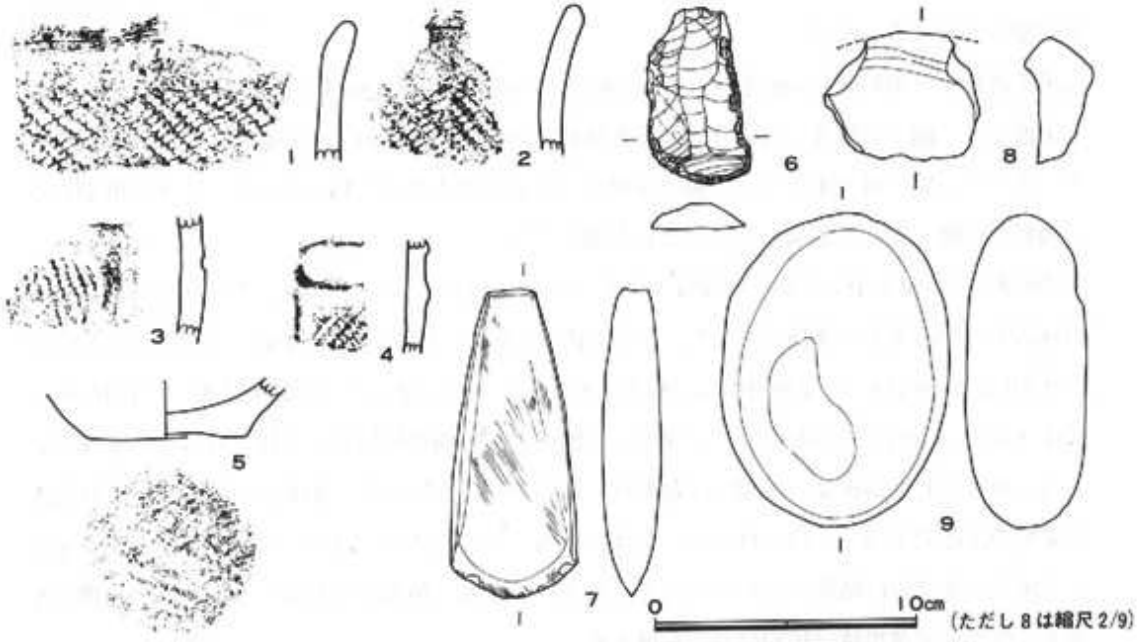
〈出土遺物〉（第334図，396図5・10・14，400図1・8，401図22，409図9，428図2）

床面より2個の完形及び復元可能土器と10数点の土器片，床直より10数点の土器片を出土した。またこの他に覆土中より，6個の完形及び復元可能土器，1/3箱の土器片，1点の磨製石斧・掻器・石皿・有孔石製品，2点の磨石を出土した。

396図5は，覆土中より出土の深鉢形土器で，口径16.0cm，底径5.8cm，器高20.9cmを計る。口縁部から胴部上半に文様帯をもち，「∟」状文を施文，地文はRL斜縄文，色調は暗赤褐色（5YR3/2）を呈する。396図10は，覆土中より出土の広口壺に近い深鉢形土器で口径15.0cm，底径 6.7cm，器高17.2cmを計る。口縁部から胴部上半に横位楕円文を主体文様とする文様帯をもつ。地文はLR斜縄文，色調は灰黄褐色（10YR5/2）を呈する。396図14は，覆土中より出土の完形の深鉢形土器で，口径14.8cm，底径 7.7cm，器高19.6cmを計る。口唇部に凹線文を施文，3カ所で渦巻文の簡略化と思われる円文（凹文）となる。頸部から胴部下半までRL斜縄文を施文，色調は灰黄褐色（10YR4/2）を呈する。



第333図　第115号竪穴住居跡実測図



（ただし 8 は縮尺 2/9）

第334図　第115号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

400図1は，覆土中より出土の深鉢形土器で，口径20.3cmを計る。口縁部は無文，胴部には平行沈線文による「∩」文を施文，地文はＬＲ斜縄文，色調は黒褐色（10YR3/2）を呈する。400図8は，南西寄り床面出土の完形の深鉢形土器で，口径18.5cm，底径 7.0cm，器高28.5cmを計る。口縁部中位より胴部下半にかけＲＬ斜縄文を施文，色調はにぶい橙色（7.5ＹＲ7/4）を呈する。401図22は，覆土中より出土の小型鉢形と思われる土器で，底径2.7cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，色調はにぶい橙色(7.5YR7/4) を呈する。409図9は，北寄り床面出土の深鉢形土器で，口径21.9cmを計る。器面にはLR斜縄文を施文，焼成はやや不良で，色調は灰褐色（7.5ＹＲ4/2）を呈する。

床面の出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は，中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第116号竪穴住居跡と出土遺物（第335，336，394，402図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区南部のＥ・Ｆ—16・17グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。９・102・115号住居跡，110号土壙と重複，本住居跡は115号住居跡より新しく，９・102号住居跡，110号土壙より古い。

〈平面形・規模〉　7.20×(7.36)ｍの円形を呈する。主軸方向はＮ—66°—Ｗ，床面積は41.60㎡と推定される。

〈堆積土〉　人為堆積と考えられる。（セクション図略）

〈床面・壁〉　テラスを有する二段構造で，床・テラス面ともＶ層を掘り込んでそれぞれの面としている。テラスは北西壁際に位置し，75×85cmの規模で，床面から16.8cmの高さにある。壁高は南東壁64.7cm，南西壁66.2cm，北西壁63.7cmを計る。床面はほぼ平坦で，テラスと同様に堅くしまっている。北東壁とその側の床面は９号住居構築により，南東壁とその側の床面の一部は102号住居・110号土壙構築により消失している。西壁は115号住居跡覆土及びＶ層，他の壁はⅣ・Ⅴ層より成る。

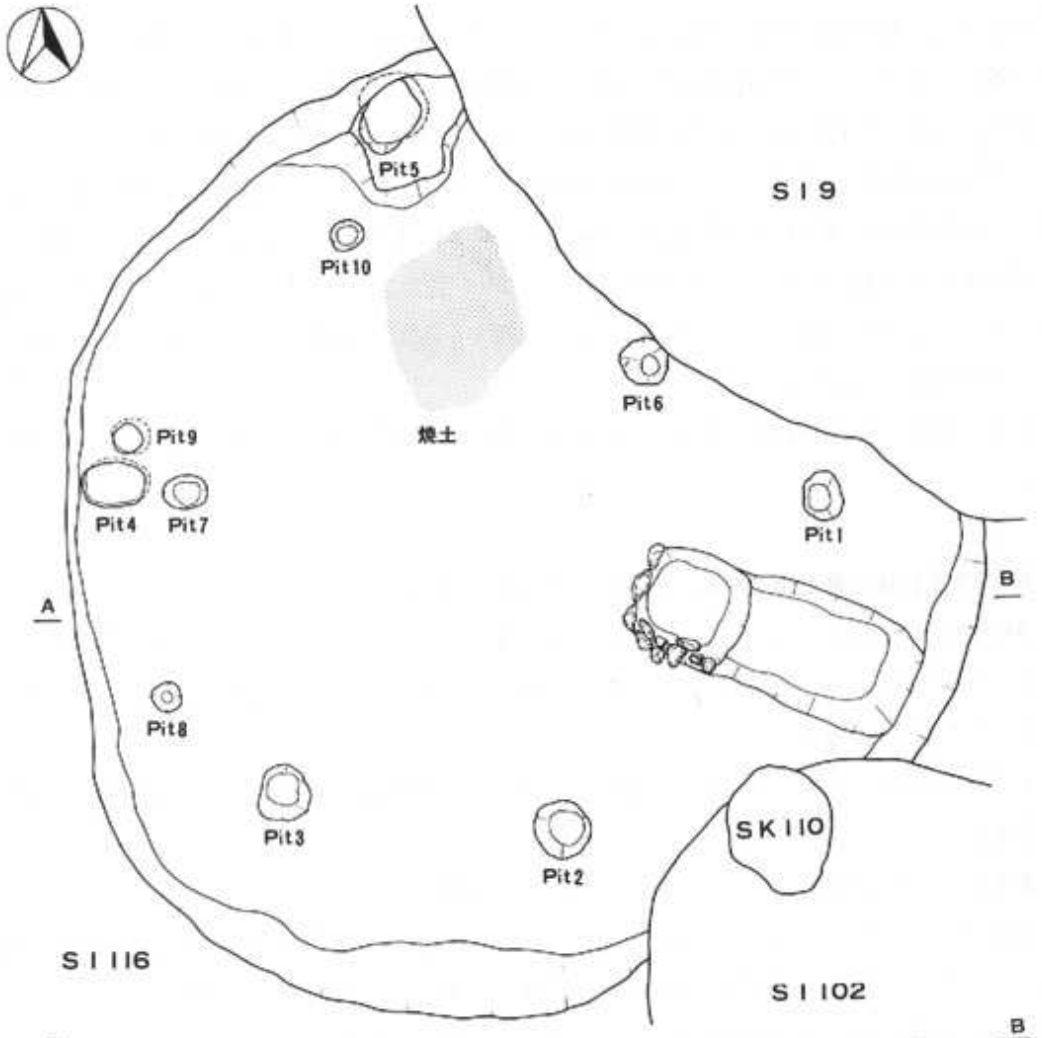
〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　本住居跡より10個のピットが検出された。Pit 1 ～ 3・7・10を主柱穴とし，９号住居跡により消失した柱穴を加えて，主軸線に対称な３対６個（Pit 1・2，Pit 3・(未検出)，Pit 7・10）の柱配置と考えられる。

第116号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規　模	38×30	44×42	43×41	50×33	52×40	38×38	34×28	23×22	23×22	25×22
深　さ	44.7	28.4	49.6	33.7	35.0	43.4	52.5	22.3	36.3	41.7

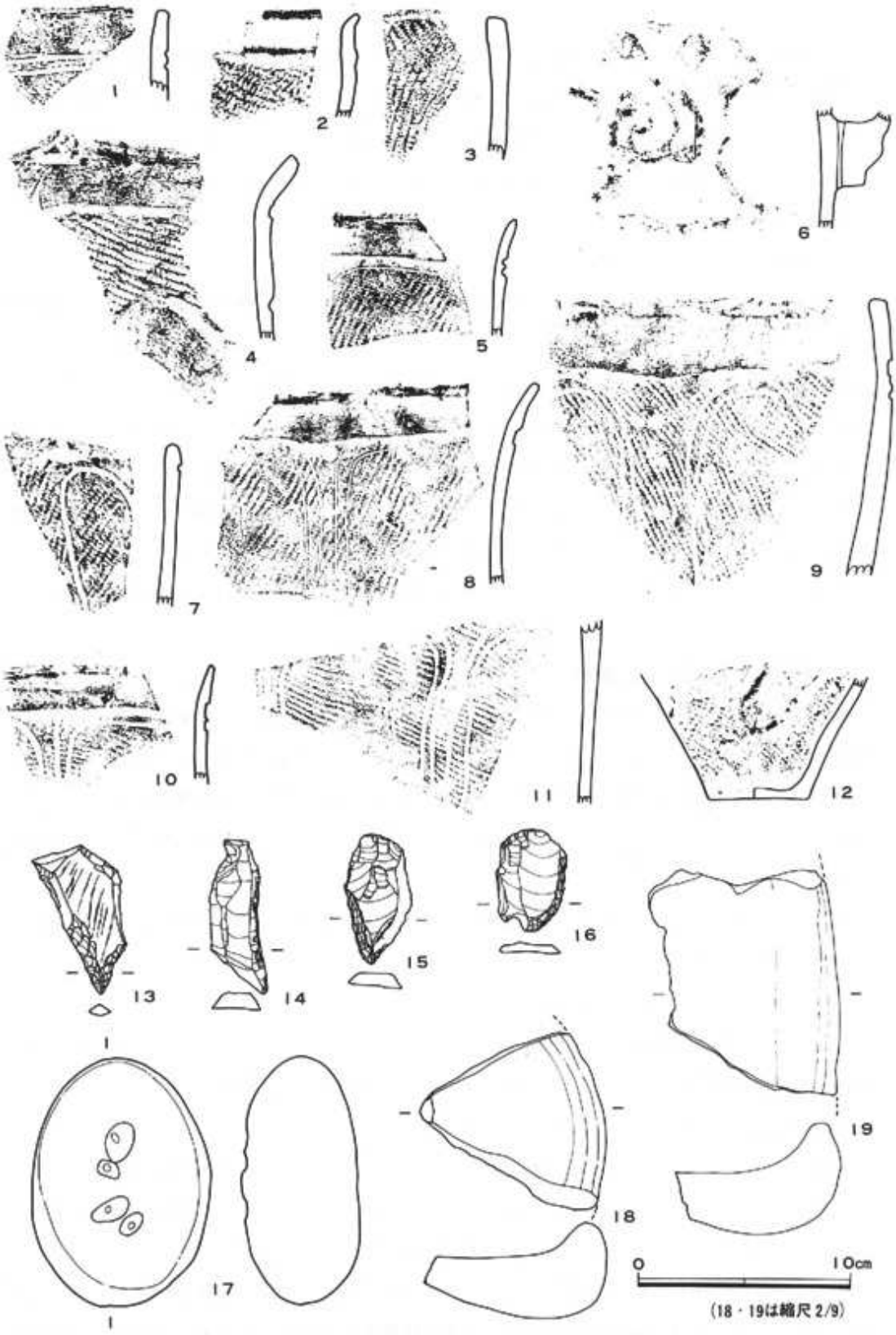
〈炉〉　地床炉と石囲複式炉の２つが検出された。石囲複式炉は，石囲部＋掘り込み部から成



1層　黄褐色土（10YR 5/6）下位火山灰少量混入，炭化粒若干混入
2層　褐 色 土（7.5YR 4/6）
3層　褐 色 土（10YR 4/4）下位火山灰多量混入，焼土・炭化粒若干混入
4層　暗褐色土（7.5YR 3/4）
5層　橙 色 土（7.5YR 6/8）焼土
6層　明褐色土（7.5YR 5/6）若干焼土化
7層　明赤褐色土（2.5YR 5/8）焼土
8層　黄褐色土（10YR 5/6）下位火山灰多量混入
9層　暗褐色土（10YR 3/3）下位火山灰若干混入

0　2m

第335図　第116号竪穴住居跡実測図



第336図　第116号住居跡出土土器拓影図・石器実測図

り，住居跡南東壁に接する。石囲部は遺存状態が悪いが，10～28cm大の自然石を「∪」状に配したものと考えられる。片側縁の炉石は２重に配されている。炉内底面は，最大５cmの深さまで焼土化している。掘り込み部は，138×92cmの隅丸方形で，最大の深さは11cmを計る。

地床炉は，住居跡中央より北寄りに位置し，116×105cmの範囲で，最大 4.5cmの厚さで焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第336図，394図17，407図７）

本住居からは３個の復元可能土器の他，2/3箱の土器片と１点の石錐・石匙・磨石，２点の掻器・凹石・石皿を出土した。

394図17は，折り返し口縁の深鉢形土器で，口径10.7cm，底径5.6cm，器高18.3cmを計る。折り返し口縁部は無文，胴部には平行沈線文による「∩」文を施文，地文はＲＬ斜縄文，色調は灰褐色（7.5ＹＲ4/2）を呈する。407図7は深鉢形土器で，推定口径18.8cmを計る。口縁部上半は無文，口頸部には沈線文による連続「∩」文，懸垂文，「∩」文が施文されている。地文はＲＬ斜縄文，色調は褐灰色（５YR4/1）を呈する。

出土土器及び新旧関係より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第117号竪穴住居跡と出土遺物（第337図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のＡ・Ｂ—12・13グリッドに位置する。重複が多い地点で，遺構の存在は確認したものの，平面プランは床面まで下げ，周溝・柱列等より推測せざるを得なかった。109・114・118号住居跡，91号土壙と重複，本住居跡は109号住居跡より古く，91号土壙より新しい。114・118号住居跡との新旧関係は不明である。また，101号住居跡との重複関係は判然としない。

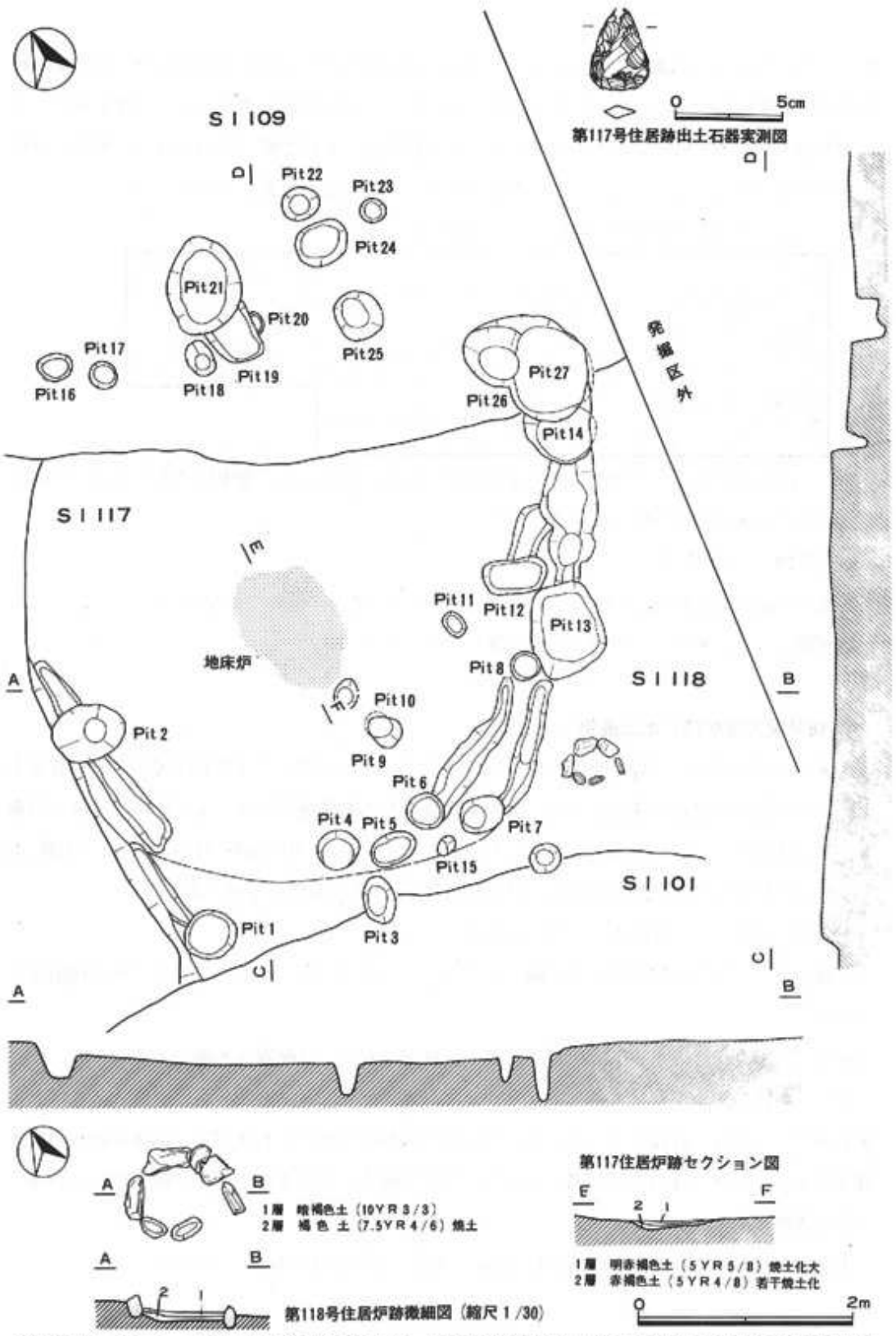
〈平面形・規模〉　残存する西壁の一部及び周溝より，短軸 5.3m の楕円形を呈すると推定される。主軸方向はＮ—30°—Ｅである。

〈堆積土〉　不明である。（図面作成せず）

〈床面・壁〉　Ｖ層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，堅くしまっている。北側の床面は，109号住居構築により消失している。前述のように西壁及び南東壁の一部を，床面からそれぞれ14cm，５cmの高さを確認したにすぎない。

〈周溝〉　西壁下に１条，東壁から南壁東半にかけての壁下付近に２条の周溝が検出された。西壁下の周溝は幅約27cm，深さ21.4cm，長さ2.12m を計り，南東壁下の周溝は幅24cm，深さ21.4cm，長さ2.12m，その内側に位置する周溝は幅28cm，深さ25.2cmを計る。

〈柱穴〉　117・118号住居跡に関連するピットが計27個検出された。本住居跡については，西壁から南壁にかけての２重の周溝と共に，２重の柱列が見られることから，増改築の可能性も



第337図　第117・118号竪穴住居跡実測図・同住居跡微細図，第117号住居跡出土石器実測図

ある。この場合，改築前のプランには，Pit 2・6・14または27・17を主柱穴とし，主軸線に対称な2対4個（Pit 2・6，17・14または27）を基本とする柱配置と考えられる。改築後のプランはPit 2・4・12・16・24・26を主柱穴とし，主軸線上の1対2個（Pit 4・24）と軸線に対称な2対4個（Pit 2・12，16・26）の計6個を基本とする柱配置と考えられる。

第117・118号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
規模	51×46	68×55	45×30	38×38	45×29	35×34	44×33	28×27	33×28	29×22
深さ	65	99	46	46	48	32	42	49	27	27
Pit No.	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
規模	24×20	60×33	80×66	70×59	19×15	31×27	26×26	33×25	42×30	18×22
深さ	37	66	17	43	22	15	16	26	29	26
Pit No.	21	22	23	24	25	26	27			
規模	88×70	36×30	25×22	50×40	49×43	55×55	95×65			
深さ	59	16	13	30	48	96	59			

〈炉〉　住居跡中央よりやや南寄りと想定される地点に位置する。地床炉であり，130×90cmの範囲で最大10cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第337図）

土器片の総出量は1/3箱であるが，床面，床直からの出土は極めて少ない。

重複関係より，本住居の時期は中期後葉と考えられる。

第118号竪穴住居跡と出土遺物（第337図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区西部のB・C—13グリッドに位置する。117号住居跡と共にⅣ層上面において遺構の存在を確認したが，東側が農道のため未発掘であり，また他の住居跡との重複が多いことより，その全容をつかむことができなかった。101・109・117号住居跡と重複，本住居跡は101・109号住居跡より古く，117号住居跡との新旧関係は不明である。

〈平面形・規模〉　〈堆積土〉　不明である。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としている。平坦で，堅くしまっている。壁は検出されていない。

〈柱穴〉　他遺構との重複部分以外でピットが検出できず，柱配置は不明である。

〈炉〉　本住居跡のプランを確認できなかったため，位置関係は不明である。遺存状態が悪く，炉北半にしか炉石が存在しないが，12～22cm大の自然石を配した石囲炉で，南半分の石の抜き取り痕より，51×43cmの規模と考えられる。炉内全域が，最大4cmの深さで焼土化している。

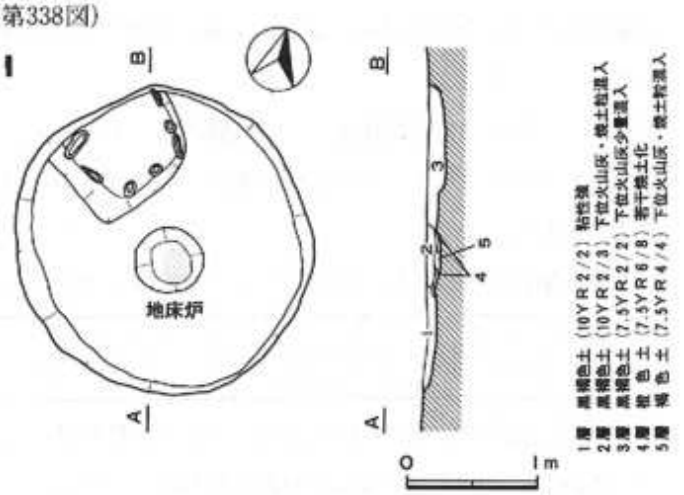
〈出土遺物〉

土器片の総出量は1/6箱程度であり，床面，床直からの出土は極めて少ない。

第119号竪穴住居跡と出土遺物（第338図）

〈遺構の位置と確認〉　B区南西部のZ—40グリッドに位置する。V層上面での確認である。本住居跡の南西側に104号土壙，北西側に103号土壙が存在する。

〈平面形・規模〉　2.33×2.25mの円形を呈する。主軸方向はN—24°—W，床面積は3.52㎡を計る。



第338図　第119号竪穴住居跡実測図

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　V層を掘り込んで床面としている。北壁際から南壁際へ若干傾斜があり，平坦で堅くしまっている。壁はV層から成り，掘り込みが浅く，緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁10.1cm，西壁11.8cm，南壁4.6cm，北壁5.9cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　確認できなかった。

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。地床炉で，52×50cmの円形を呈する3cmの深さの掘り込みのほぼ中央より，28×18cmの範囲で最大1.2cmの厚さの焼土が確認された。

〈その他の施設〉　住居北西壁に接して，97×74cmの台形の浅い掘り込みを有する。この下端には，7個の石の抜き取り痕状のピットが検出された。

〈出土遺物〉

本住居からは，若干の土器片を出土したのみである。

第120号竪穴住居跡と出土遺物（第339，340，342，406図）

〈遺構の位置と確認〉　C区南端のＡＳ・ＡＴ—49グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。121号住居跡と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　3.85×3.80mの方形を呈する。主軸方向N—87°—W，床面積12.44㎡を計る。

〈堆積土〉　8層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　V層を掘り込んで床面としている。ほぼ平坦で，堅くしまっている。東壁は121号住居跡覆土及びV層より，他の壁はⅣ・V層より成る。ほぼ垂直な立ち上がりを呈し，壁高

は東壁45.7cm，西壁49.2cm，南壁45.8cm，北壁55.5cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　120・121号住居跡で，計11個のピットが検出された。このうち本住居跡に付随すると思われるのは，Pit 1 ～ 5 の 5 個である。各壁寄りの 4 個（Pit 1 ～ 4 ）を主柱穴とする柱配置と考えられる。

第120・121号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
規　模	26×25	29×24	23×20	26×22	23×17	17×16	28×18	32×30	31×31	34×25	23×20
深　さ	23.9	17.2	16.2	24.0			17.1	19.2	33.2	22.8	26.0

〈炉〉　住居跡ほぼ中央に位置する。3重の土器埋設炉で，2つの土器の底部を重ね，さらにその周囲に1つの土器口縁部を配置したもの，または，2重の土器埋設炉＋土器片囲炉より成るものである。土器埋設のための掘り方は，規模は36×26cm，深さ23cmを計る。内側の土器の中位に，4 cmの厚さの焼土が確認された。

〈出土遺物〉（第342図，406図6）

土器埋設炉内より1個の復元可能な小型深鉢形土器と数点の土器片，他に住居内北東部などから1/5箱の土器片を出土した。

406図6は，土器埋設炉の土器で，底径14.8cmを計る。器面にはＬＲ斜縄文を施文，色調はにぶい褐色（7.5ＹＲ5/3）を呈する。また，図写はしなかったが，土器埋設炉の最も外側の土器は，口唇部に斜位沈線文（刻み目文）をもち，頸部から胴部下半にＲＬ斜縄文を施文した深鉢形土器である。

342図4は，炉の埋設土器内出土の土器である。

炉を構成する土器より，本住居の時期は中期中葉（円筒上層ｅ式併行期）と考えられる。

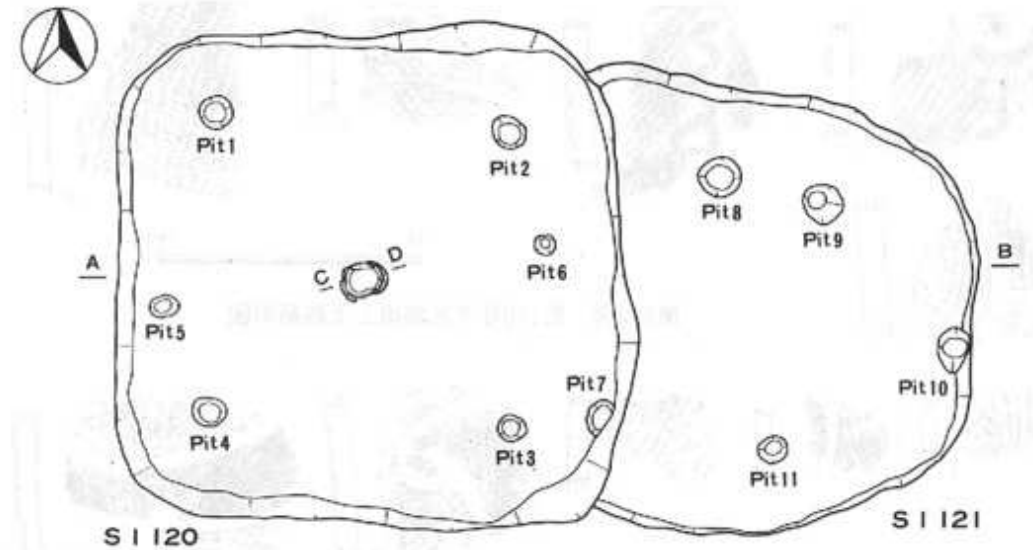
第121号竪穴住居跡と出土遺物（第339図）

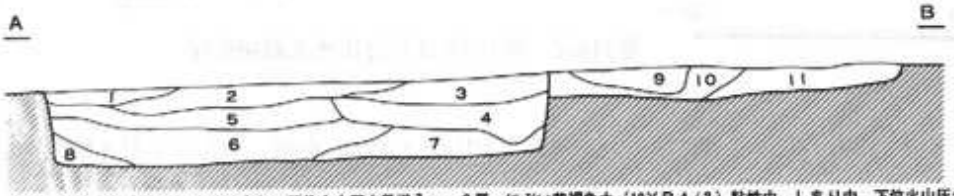
〈遺構の位置と確認〉　Ｃ区南端のＡＳ・ＡＴ—49・50グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。120号住居跡と重複，本住居跡が古い。

〈平面形・規模〉　（3.82）×3.45m の楕円形を呈する。主軸方向はＮ—75°—Ｗ，推定床面積は9.92㎡を計る。

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　Ⅴ層を掘り込んで床面としているが，西壁とその側の床面は，120号住居構築により消失している。床面は，東壁際から西側へ若干傾斜し，平坦でしまりは弱い。壁はⅣ・Ⅴ層から成り，急な立ち上がりを呈する。壁高は北東壁19.3cm，南東壁16.0cm，南西壁14.0cmを計る。

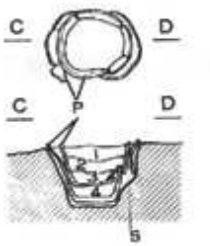




1層　褐 色 土（10YR 4/4）粘性・しまりなし，下位火山灰少量混入
2層　黒褐色土（10YR 2/2）粘性弱，しまり中，下位火山灰少量混入
3層　暗褐色土（10YR 3/3）粘性中，しまり弱，下位火山灰多量混入
4層　暗褐色土（10YR 3/4）粘性弱，しまり中，下位火山灰多量混入
5層　黒褐色土（10YR 2/2）粘性弱，しまり中，下位火山灰多量混入
6層　黒褐色土（10YR 3/1）粘性弱，しまり中，下位火山灰多量混入
7層　暗褐色土（10YR 3/3）粘性中，しまり強，下位火山灰多量混入
8層　にぶい黄褐色土（10YR 4/3）粘性中，しまり中，下位火山灰少量混入
9層　褐 色 土（10YR 4/6）粘性弱，しまり弱，浮石粒・下位火山灰少量混入
10層　黒褐色土（10YR 3/2）粘性弱，しまり弱，下位火山灰若干混入
11層　褐 色 土（10YR 4/4）しまり中，下位火山灰少量混入

0　2m

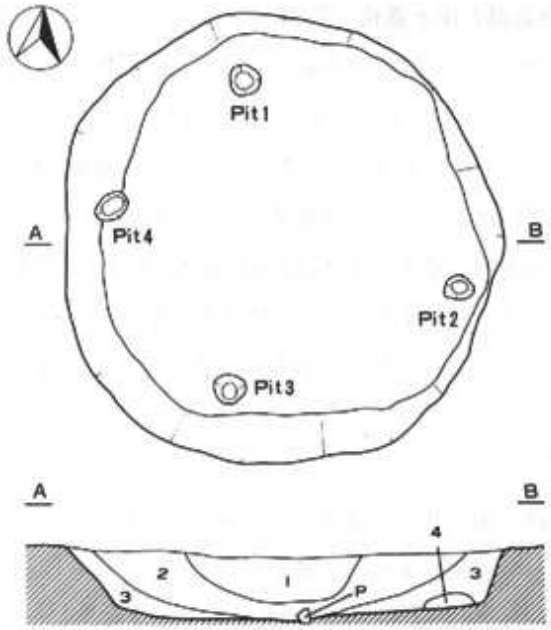
第339図　第120・121号竪穴住居跡実測図



0　50cm

1層　黒 色 土（10YR 2/1）炭化物混入
2層　赤褐色土（5YR 4/8）焼土
3層　暗褐色土（10YR 3/4）若干焼土化
4層　黄褐色土（10YR 5/8）
5層　褐 色 土（10YR 4/6）若干焼土化

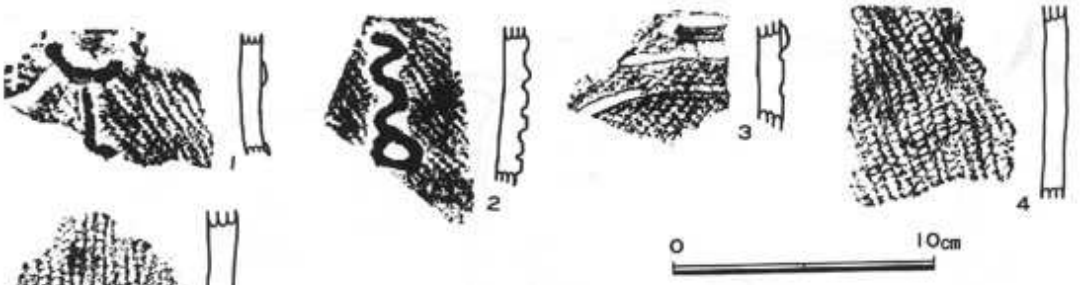
第340図
第120号住居炉跡微細図



1層　黒褐色土（10YR 2/2）
粘性・しまりなし，
下位火山灰若干混入
2層　黒褐色土（10YR 2/3）
粘性・しまり中，
下位火山灰多量混入
3層　暗褐色土（10YR 3/3）
粘性中，しまりなし
4層　下位火山灰ブロック

0　1m

第341図　第122号竪穴住居跡実測図



第342図　第120号住居跡出土土器拓影図

第343図　第122号住居跡出土土器拓影図

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　Pit6～11を主柱穴とし，主軸線上のPit 6・10と，軸線に対称な2対4個（Pit 7・8，Pit 9・11）の計6個を基本とする柱配置である。（ピット一覧は，120号住居跡に付す）

〈炉〉　検出できなかった。

〈出土遺物〉　本住居からは遺物は確認されなかった。

第122号竪穴住居跡と出土遺物（第341・343・394図）

〈遺構の位置と確認〉　C区ほぼ中央のAN・AO—48・49グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。123号土壙と重複，本住居跡が新しい。

〈平面形・規模〉　3.45×3.33mの円形を呈する。床面積は6.88㎡を計る。

〈堆積土〉　3層に区分でき，人為堆積と考えられる。

〈床面・壁〉　中央部の重複部分は123号土壙覆土を，他の部分はⅤ層を掘り込んで床面としている。若干凹凸があり，しまりは弱い。壁はⅣ・Ⅴ層より成り，東壁はほぼ垂直な立ち上がりを，他の壁は緩やかな立ち上がりを呈する。壁高は東壁32.3cm，西壁40.7cm，南壁39.2cm，北壁45.5cmを計る。

〈周溝〉　なし

〈柱穴〉　東・西・南・北の各壁際から，計4個のピットが検出された。若干浅いものもあるが，配置よりこれら4個が主柱穴と考えられる。

第122号竪穴住居跡ピット一覧表（単位：cm）

Pit No.	1	2	3	4
規　模	24×24	22×20	25×23	26×20
深　さ	15.8	32.0	18.3	14.5

〈炉〉　検出されなかった。

〈出土遺物〉（第343図，394図12）

覆土中より，１個の完形土器と若干の土器を出土した。

394図12は，覆土中より出土の完形土器で，２つの頂部をもつ大波状口縁の広口壺形土器である。口径12.5cm，底径 6.0cm，器高14.2cmを計る。口縁部上半は無文，頸部より胴部上半にかけ隆沈文による縦位渦巻楕円文を施文，地文はＬＲ斜縄文，色調はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する。

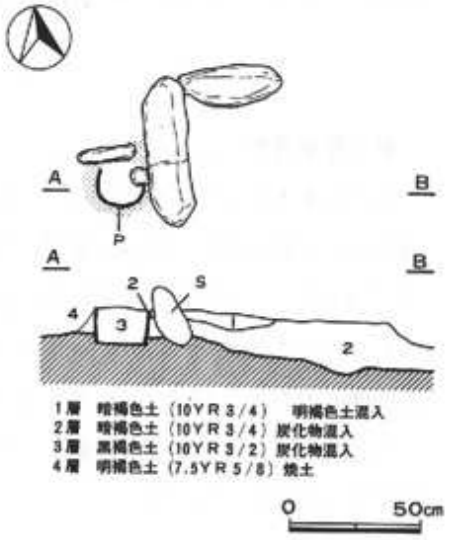
出土土器より，本住居の時期は中期後葉（大木９式併行期）と考えられる。

第123号竪穴住居跡と出土遺物（第344・345図）

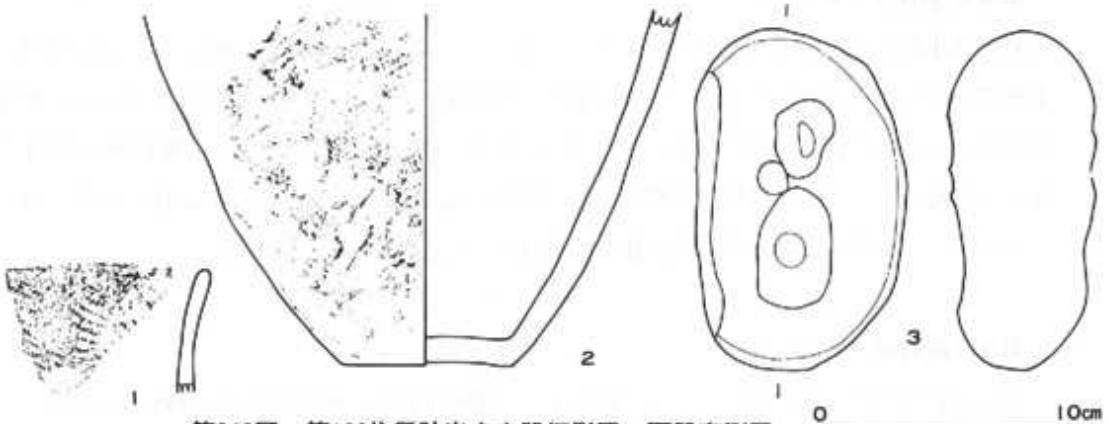
〈遺構の位置と確認〉　Ｃ区南部のＡＲ—49・50グリッドに位置する。バックホーの操作ミスで炉跡周辺を残しカッテングされ，住居跡の全容については調査できなかった。この周辺に他の遺構がないことから，重複はないものと思われる。本住居跡の南側に120・121号住居跡が存在する。

〈床面〉　Ｖ層を掘り込んで床面としている。炉周辺に残存する床面は，ほぼ平坦で，堅くしまっている。

〈炉〉　東側をカッティングにより消失し，土器埋設部と石囲部しか残存しないが，掘り込み部を有する土器埋設石囲複式炉と推測される。埋設土器は径21cmの深鉢形土器の口縁部で，その外周に幅10cm，厚さ７cmの焼土が検出された。内部には炭化物の混



第344図　第123号住居炉跡微細図



第345図　第123住居跡出土土器拓影図・石器実測図

入が確認された。石囲部は58cmと40cmの自然石２個しき残存しない。両石が直交していることから，方形プランと考えられる。石囲部内からは焼土は検出できず，わずかに炭化物の混入が確認できただけである。

〈出土遺物〉（第345図）

炉内及び覆土中より，数点の土器片を出土した。

345図１は，炉内の出土土器である。

出土土器より，本住居の時期は中期後葉～末葉（大木９～10式併行期）と考えられる。

（秋元信夫）

２．屋外炉と出土遺物

本遺跡より７基の屋外炉が検出された。第27・85号住居跡覆土上面で確認された屋外炉については，すでにそれぞれの住居跡の項で述べているので，ここではその他の５基について記述する。

第１号屋外炉（第346図）

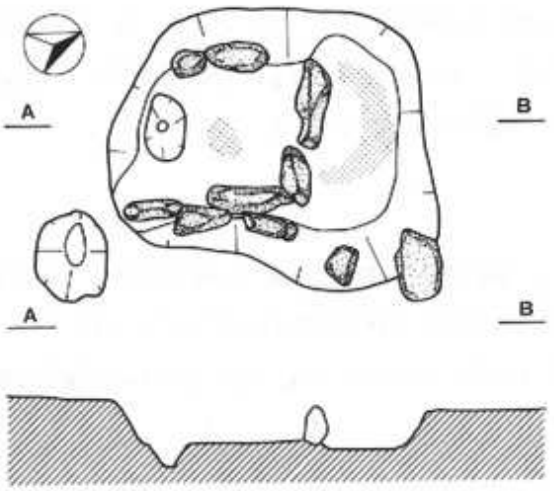
A_1区北東部のＺＤ—22グリッドに位置する。Ⅲ層下位での確認である。本炉は石囲部と掘り込み部から成る100×88cmの規模の石囲複式炉である。石囲部からは７～27cm大の炉石９個が62×58cmの「コ」字状に検出され，南縁部からは炉石の抜き取り痕と思われるピットが確認された。このことより，石囲部は方形に炉石が配されていたと考えられる。堀り込み部は40×88cmの隅丸方形で，石囲部より若干深い13cmの堀り込みである。石囲部中央より14×10cmの範囲に焼土及び炭化粒，堀り込み部より22×40cmの三日月状に焼土が確認された。炉内より深鉢胴部片１点の出土があった。

第２号屋外炉（第346図）

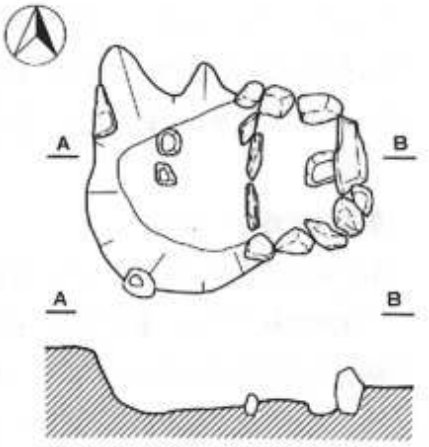
A_1区北東部のＺＨ・ＺＧ—22グリッドに位置する。第25号住居跡覆土上面での確認である。石囲部と掘り込み部から成る89×73cmの規模の石囲複式炉である。石囲部は11～26cm大の炉石13個を38×50cmの横長の台形に配したもので，炉内一様に１～２cmの厚さの焼土が確認された。掘り込み部は50×73cmの横長の不整楕円形を呈し，石囲部より若干深い16cmの掘り込みである。炉内より５～６点の中期後葉（榎林Ⅱ）の土器片と１点の瑪瑙を出土した。

第３号屋外炉（第346図）

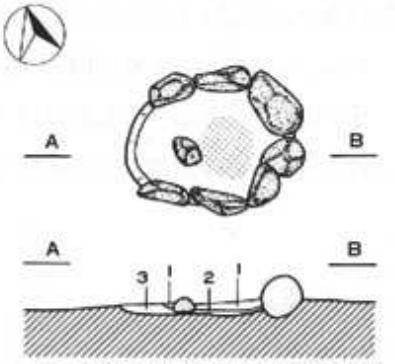
A_1区南東部のＣ・Ｄ—22グリッドに位置する。Ⅲ層下位での確認である。西側の炉石を欠い



第1号屋外炉

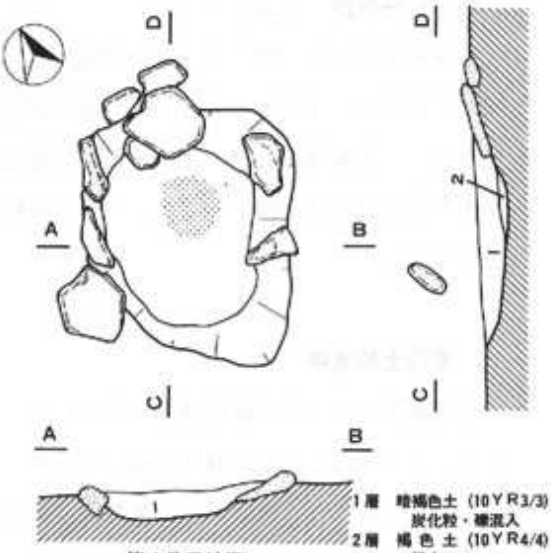


第2号屋外炉



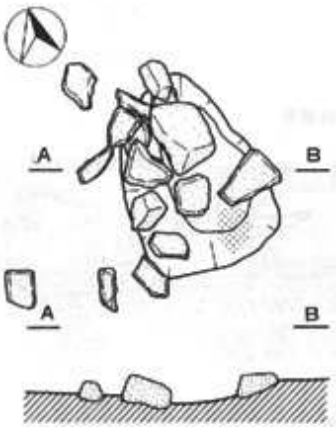
1層　黒褐色土（10YR2/2）下位火山灰若干混入
2層　明褐色土（7.5YR7/8）炭化粒・焼土混入
3層　黒色土（7.5YR2/1）下位火山灰若干混入

第3号屋外炉

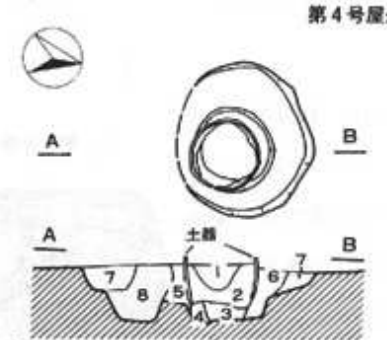


1層　暗褐色土（10YR3/3）炭化粒・礫混入
2層　褐色土（10YR4/4）焼土

第4号屋外炉

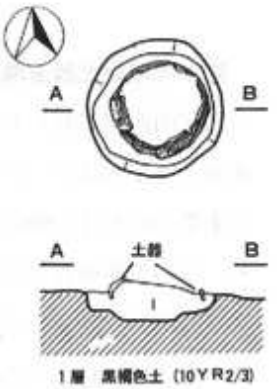


第5号屋外炉



1層　黒褐色土（10YR2/3）焼土・炭化物混入
2層　暗褐色土（10YR3/4）下位火山灰多量混入
3層　褐色土（10YR4/4）下位火山灰混入
4層　暗褐色土（10YR3/4）下位火山灰若干混入
5層　褐色土（10YR4/4）下位火山灰多量混入
6層　暗褐色土（10YR3/4）下位火山灰若干混入
7層　褐色土（10YR4/4）
8層　褐色土（10YR4/4）

第1号埋設土器実測図



1層　黒褐色土（10YR2/3）

第2号埋設土器

0　1m

第346図　第1～5号屋外炉・第1・2号埋設土器実測図

ているが，その近傍より炉石と思われる自然石１点を出土していることから，11～22cm大の自然石を56×47cmの楕円形に配した石囲炉と考えられる。炉内中央より若干東寄りに21×18cm，厚さ１～２cmの焼土を確認した。本遺構より遺物の出土はなかった。

第４号屋外炉（第346図）

A_1区南東部のH～21グリッドに位置する。第45号住居跡覆土上面での確認である。５号屋外炉と重複関係にあり，本炉が新しい。残存状態が悪く南西部の炉石を欠いているが，81×65cmの隅丸方形の石囲炉と考えられる。炉内のほぼ中央より20×19cm，最大厚さ３cmの焼土が確認された。本遺構より遺物の出土はなかった。

第５号屋外炉（第346図）

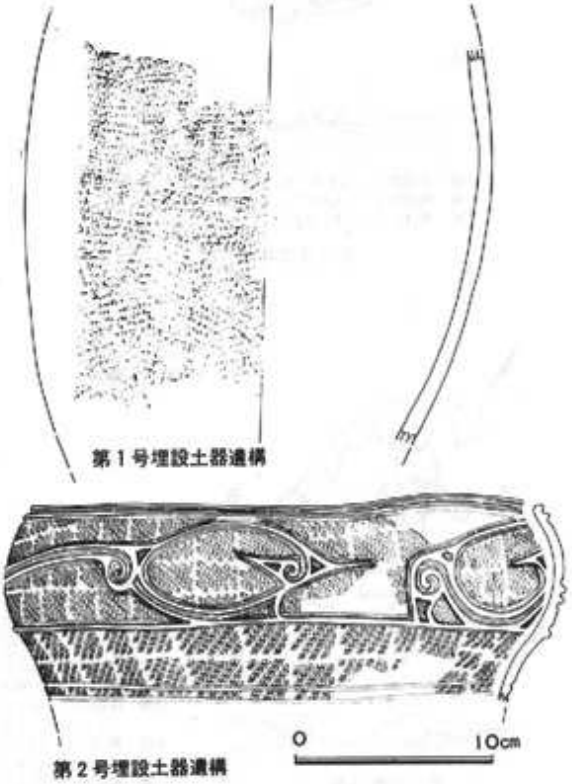
A_1区南東部のH—21グリッドに位置する。第４号屋外炉精査中に確認されたもので，４号炉東側に位置し，４号炉より若干低い面で確認された。62×45cm，深さ６cmの不整楕円形の掘り込みとその南東隅から14×12cmの範囲で焼土が確認され，その周辺から炉石と思われる14～24cm大の自然石16個が検出された。64×50cm規模の石囲炉と考えられる。本遺構からの遺物の出土はなかった。

３．埋設土器遺構

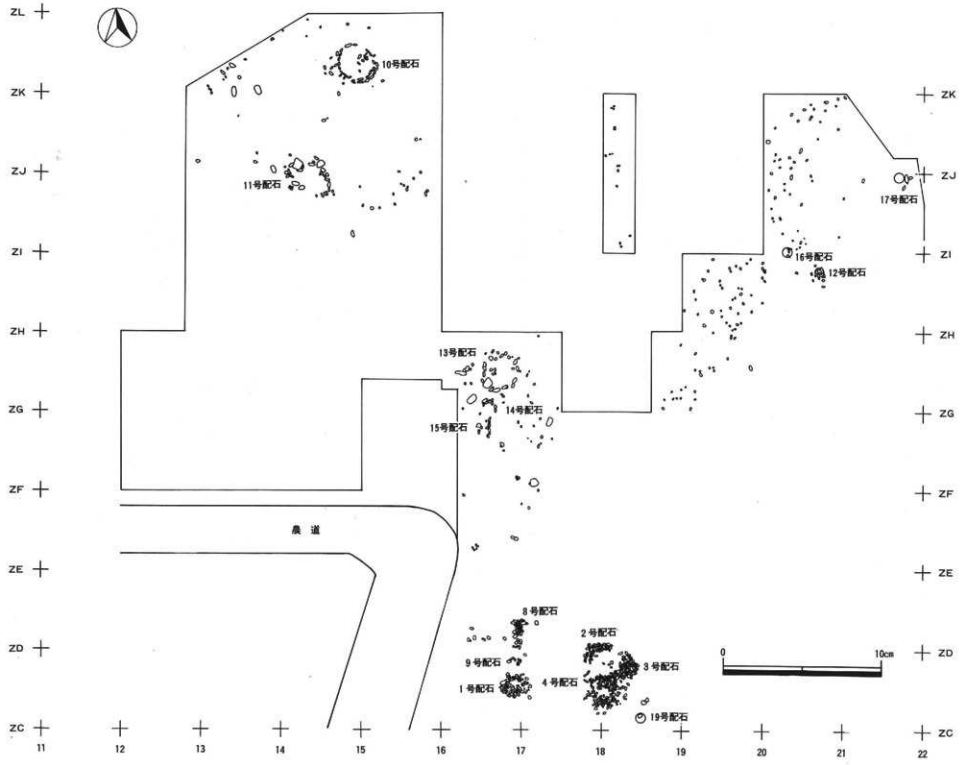
当該遺構のうち各遺構内検出のものについては，すでにそれぞれの遺構の項で述べている。ここでは屋外に構築された２基の埋設土器遺構について記述する。

第１号埋設土器遺構（第346，347図）

A_1区南西部のB—９グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。胴部径21cmの深鉢形土器の胴部1/3個体が正立の状態で出土した。この土器器面にはＬＲの原体を無方向に回転押圧した地文のみが施されている。なお掘り方は49×44cmの楕円形で，深さは18cmを計る。同掘り方より埋設土器以外として，大木８ｂ式土器片が２点出土した。土器内覆土



第347図　第1・2号埋設土器遺構埋設土器実測図



第348図　遺跡北端に存在する配石遺構配置図

上位の黒褐色土に焼土・炭化粒の混入があった。

第2号埋設土器遺構（第346・347図）

A_1区北部のＺＢ—19グリッドに位置する。Ⅳ層上面での確認である。口径25cmの大木8ｂ式期のキャリパー形土器の口縁部が正立の状態で出土した。口縁部文様は隆沈文による横位渦巻文で地文はＲＬ原体の横位回転押圧，頸部下端には２条の平行沈線文がＲＬＲ原体の縦位回転押圧した地文上に施文されている。掘り方は44×43cmの円形で深さは10cmを計る。（秋元信夫）

4．配石遺構

本遺跡で「配石遺構」としたものは，大小の河原石，山石を組み合せてつくった組石遺構，石を塊状に集めた集合遺構と呼ばれているものであり，このほか環状列石，帯状列石，立石遺構と呼ばれている遺構の総合的な名称として使用した。

今回の調査で確認された配石遺構は21基で，遺跡の存在する舌状台地北端の緩斜面にその多くがつくられている。（第348図）

以下，各々の観察事項にしたがい説明していく。

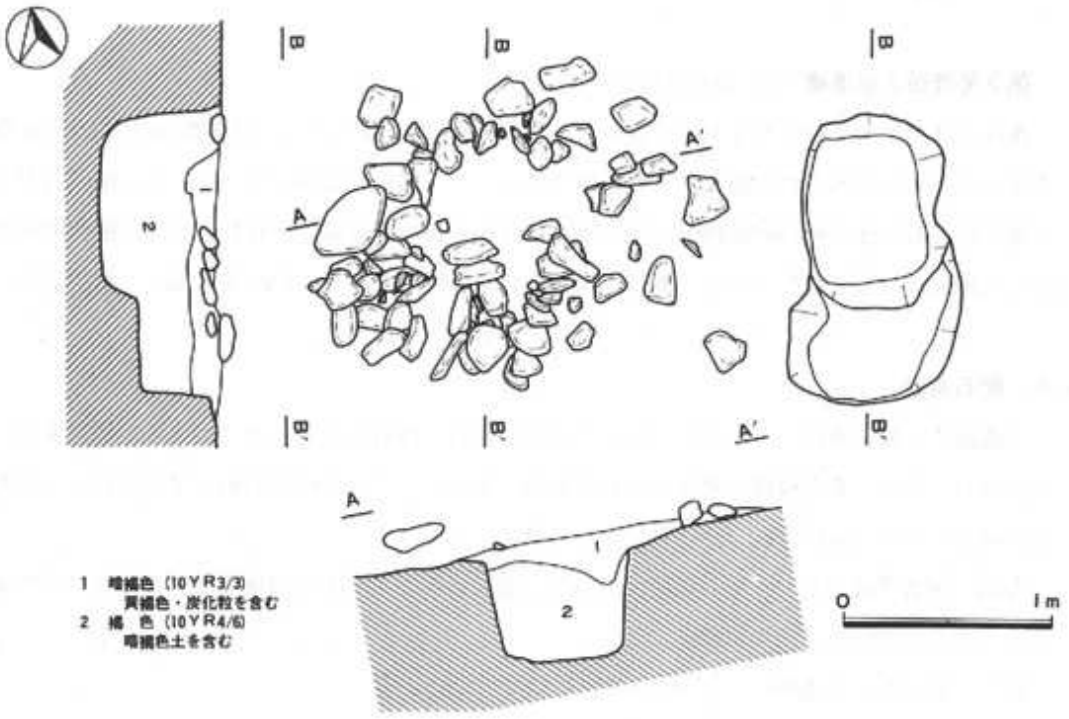
第1号配石遺構（第349，ＰＬ７）

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区，ＺＤ—16・17グリッドに位置しており，第Ⅴ層上面において確認した。本遺構は遺跡のなかでも最も標高の高い所に位置し，西側に２～４号配石遺構，北側に９号配石遺構が隣接する。

〈配石遺構〉　配石は東西204cm，南北157cmを測り，平面形は略楕円形を呈する。配石は５～45cmのコブシ大から人頭大の扁平な河原石を雑然と積み上げたものである。配石は主として南西側にかたよった形を示すが，これは他の配石への石の転用，または後世の攪乱によるものであろう。

〈土壙〉　配石除去後に確認した。第Ⅴ層から掘り込まれており，平面形は隅丸長方形を呈し，長軸138cm，短軸60cm，深さ50～57cmの規模をもつ。土壙長軸方向はＮ—11°—Ｅを指す。壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がり，底面は段をもつ。土壙埋土は２層に分層され，人為的な堆積を示す。

〈出土遺物〉　配石内より縄文土器片２点（第356図１，２）と，土壙内より土器片１点（第356図３）が出土しているほか，周辺より縄文中期中葉～後葉の多くの土器片が出土している。



第349図　第１号配石遺構実測図

第２号配石遺構（第350図，ＰＬ７・８）

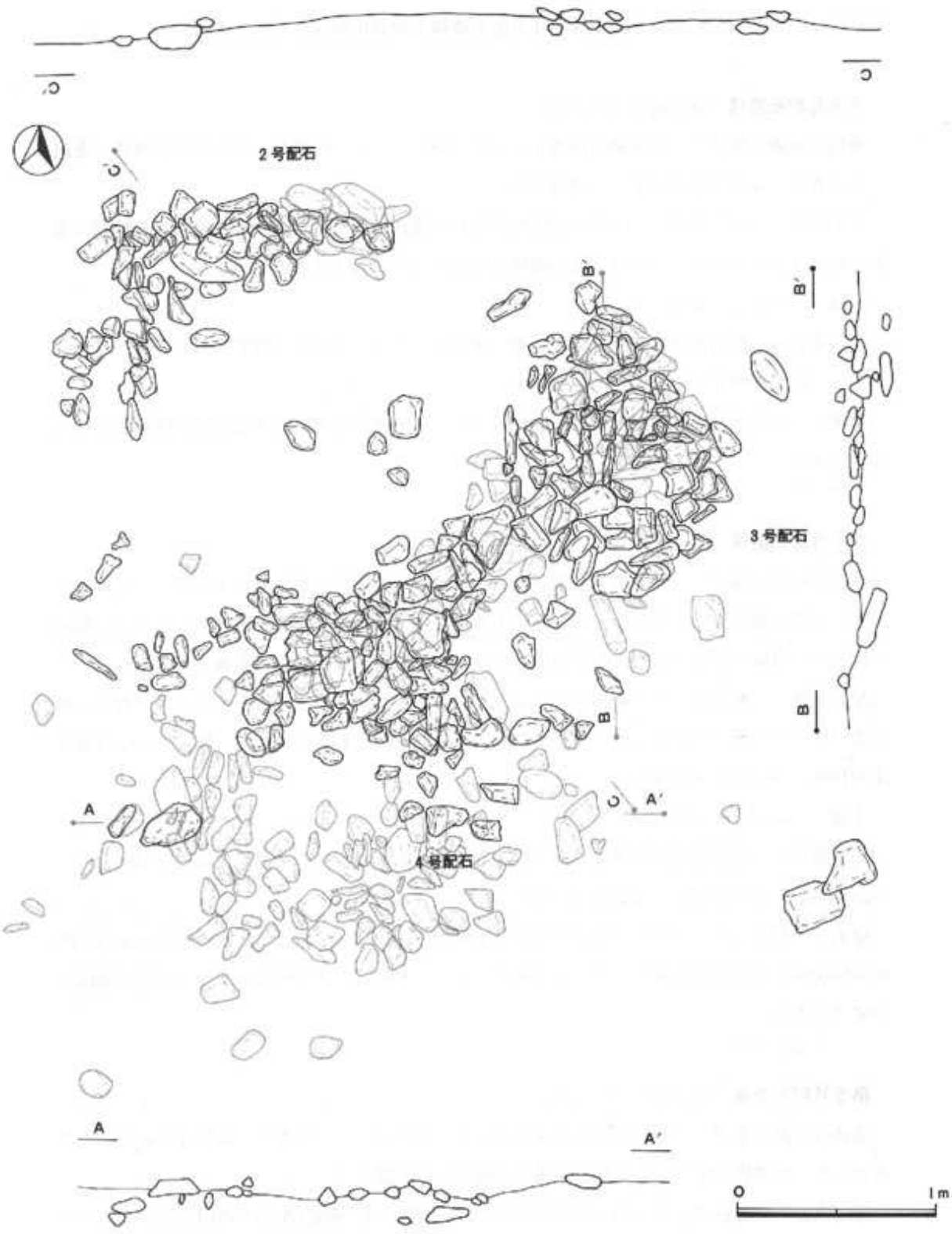
〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区，ＺＤ—17・18，ＺＥ—17・18の４グリッドに跨って位置する。第Ⅴ層上面において確認した。本遺構は遺跡のなかでも最も標高の高い場所にあり，遺跡全体を，さらに鹿角盆地北西部を一望することができる位置にある。なお本遺構は表土面からの覆土が薄く，後世の撹乱を受けていることが考えられ，これは隣接する３・４号配石遺構にも同じくいえる。

〈配石遺構〉　配石の平面形は略円形を呈し，東西270cm，南北280cmを測る。配石は７～40cmのコブシ大から人頭大の扁平な河原石を帯状に雑然と積み上げて，さらにこの帯を環状（ドーナツ状）に巡らせたものである。環状内には石の積み上げはみられない。また，配石の北東および西側の一部に配石が存在しないが，これは他の配石への転用や後世の撹乱によるものであろう。

〈土壙〉　確認できなかった。

〈出土遺物〉　配石に伴う土器の出土はなかった。なお配石周辺から縄文中期後葉の土器片（第356図４～23，第357図１～９）と石器２点（第361図１・２）が出土した。

〈備考〉　本配石は，第３・４号配石遺構，第70号住居跡と重複している。新旧関係は第70号



第350図　第2・3・4号配石遺構実測図

住居跡より本配石が新しいが，第３・４号配石遺構との新旧関係は不明である。

第３号配石遺構（第350図，ＰＬ８）

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区，ＺＤ—18グリッドに位置し，第２号配石遺構と重複して存在し，第Ⅴ層上面において確認した。

〈配石遺構〉　配石は５～30cm大の扁平な河原石を東西120cm，南北150cmの略円形の範囲に雑然と積み上げたもので，いわゆる集石遺構と呼ばれる類に属するものである。

〈土壙〉　確認できなかった。

〈出土遺物〉　配石周辺より縄文中期中葉～後期にかけての土器片（第357図14～19）のほか，これらと同時期の多くの土器が出土している。

〈備考〉　本配石は第２号配石遺構と重複するが，新旧関係を判断できる資料が極めて少なく，不明である。

第４号配石遺構（第350図，ＰＬ８）

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区，ＺＤ—17・18，ＺＥ—17・18の４グリッドに跨って存在し，第Ⅴ層上面および70号住居跡埋土上面において確認した。また本遺構も２・３号配石と同様に，遺跡のなかでも標高の高い地点に位置し，北側で２号配石と重複している。

〈配石遺構〉　配石は，７～40cmのコブシ大から人頭大の河原石を雑然と積み上げ，幅広く環状帯（ドーナツ状）に巡らすもので，その内部にはわずかに石が存在する。推定される規模は東西160cm，南北180cmを測る。

〈土壙〉　確認できなかった。

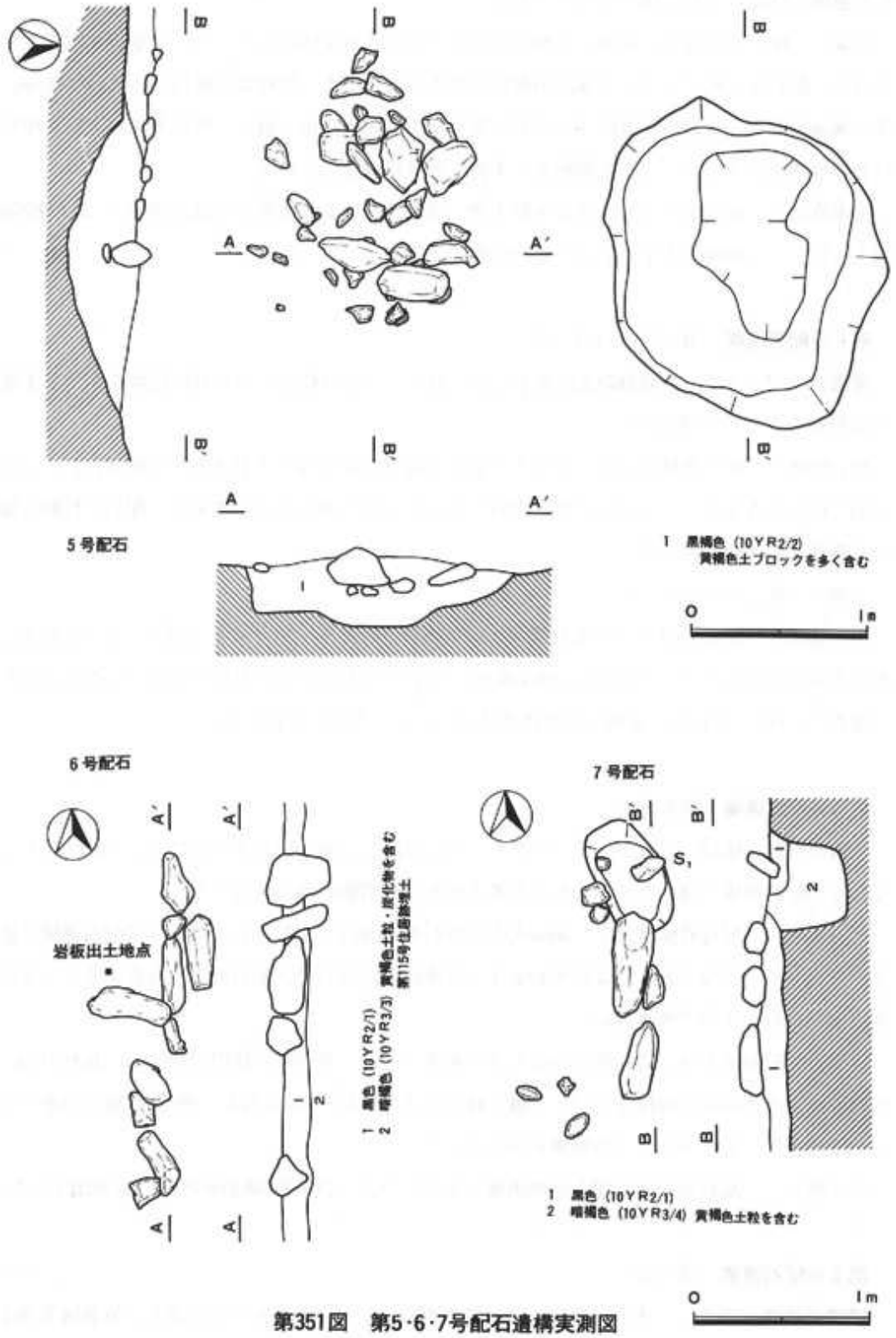
〈出土遺物〉　配石周辺から多量の縄文中期中葉～後期にかけての土器片（第357図10～19）のほか石器（第361図３）が出土している。

〈備考〉　配石は，２号配石と70号住居跡と重複または切り合っている。確認時の状況から第70号住居跡より本配石が新しいことが判断できるが，本配石と２号配石についての新旧関係は判断できなかった。

第５号配石遺構（第351図，ＰＬ８）

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区南側，Ｈ—18グリッドに位置し，第Ⅳ層上面において確認した。本遺構は確認された配石遺構中で最も南に位置する。

〈配石遺構〉　配石は，５～40cm大の河原石を，東西150cm，南北120cmの略円形内に集めたもので，配石上部に大型の河原石を，下部にはそれよりも小さな河原石を配している。いわゆる



第351図　第5·6·7号配石遺構実測図

集石遺構と呼ばれる類に属するものである。

〈土壙〉　配石確認時に，東側に土壙と思われる落ち込みを確認した。ただし全容を掌握できたのは，配石除去後である。土壙は平面形が略楕円形を呈す。規模は長軸197cm，短軸156cm，深さ34cmを測る。土壙長軸方向はN—76°—Eを指す。埋土は単一層で一度に多量の土砂を埋め戻した堆積状態を示す。なお上部施設は土壙の西側に偏在している。

〈出土遺物〉　配石周辺より，縄文中期中葉～後葉にかけての土器片（第357図20～25・第358図1～11）と土壙埋土中より石器（第361図4）が出土している。

第6号配石遺構（第351図，PL 8）

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区，E—16グリッドに位置し，115号住居跡を覆う基本層序第Ⅲ層の中ほどで確認した。

〈配石遺構〉　配石遺構は，15～46cm大の横長の扁平な河原石を立石状または横立石状に，直線的に配列したもので，いわゆる帯状列石と呼ばれる類に属するものである。配石の長軸は205cmを測り，ほぼ磁北を指す。

〈土壙〉　確認できなかった。

〈出土遺物〉　配石周辺から縄文中期中葉～後葉にかけての土器片が多く出土しているほか，配石中央部西側30cmほどの地点から縄文晩期の所産と考えられる岩版（第410図1）が1点出土した。

〈備考〉　115号住居跡と重複するが確認状況からみて本配石が新しい。

第7号配石遺構（第351図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，F—16グリッドに位置し，第Ⅲ層なかほどにおいて確認した。なお6号配石遺構と連続しているものと考えられるが別個の番号を付した。

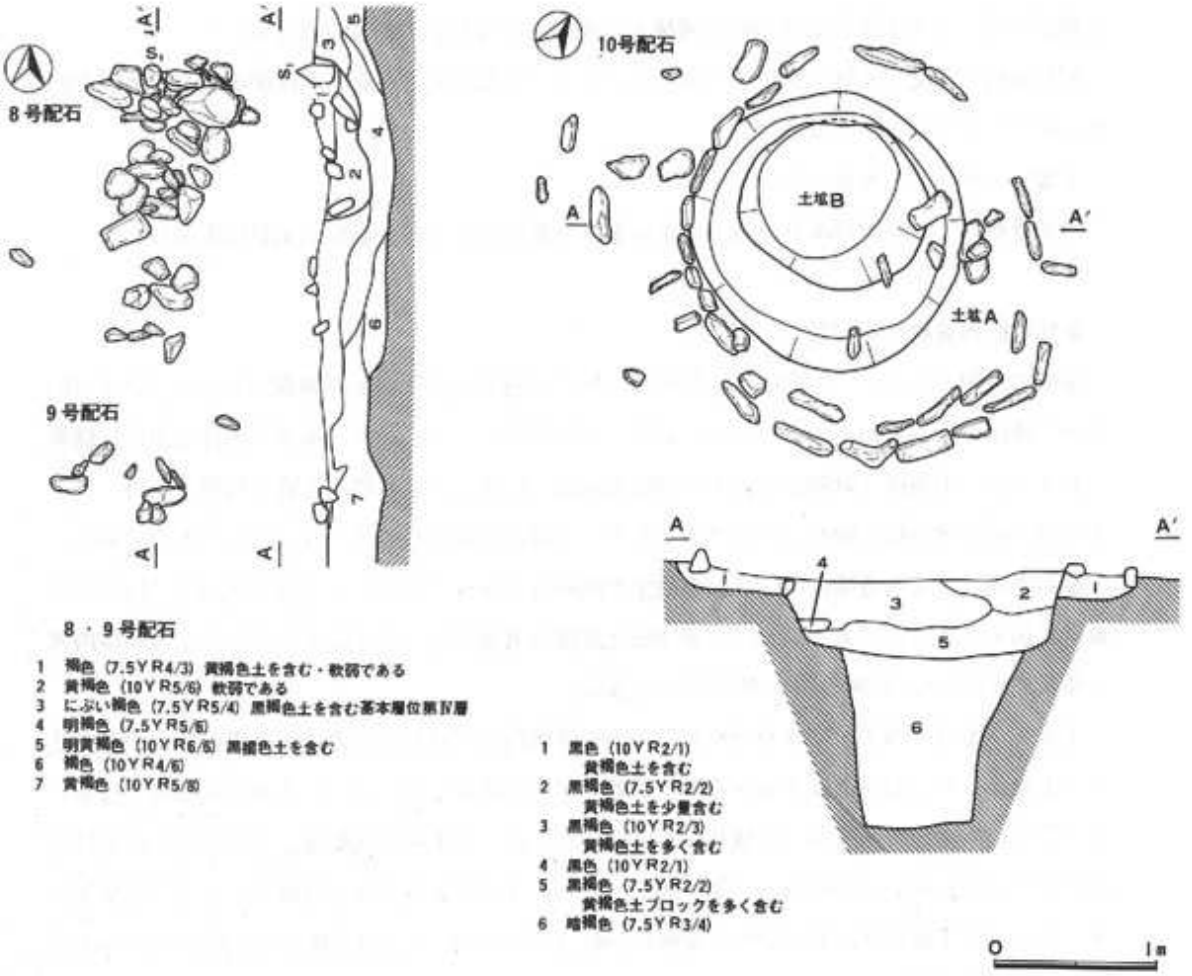
〈配石遺構〉　配石遺構は，7～56cm大の河原石を直線的に配したもので，6号配石遺構と趣を同じにする。北端にあるS_1は長さ30cmほどの棒状の河原石で，配石の下に存在するピット中央に立てられた状態で確認された。

〈土壙〉　配石除去後に暗褐色土の落ち込みを確認した。平面形は楕円形を呈し，長軸61cm，短軸37cm，深さ33cmの規模をもつ。土壙長軸方向はN—18°—Wを指す。埋土は2層に分層され，その堆積状況，混入土から人為堆積と判断された。

〈出土遺物〉　配石周辺から縄文中期中葉～末葉にかけての土器（第358図12・13）が出土した。

第8号配石遺構（第352図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，ZE—16・17の両グリッドにまたがって位置し，第Ⅲ層黒色土



第352図　第8・9・10号配石遺構実測図

中ほどにおいて確認した。本遺構の南側に第9号，第1号配石遺構が存在する。

〈配石遺構〉　配石遺構は10～37cmのコブシ大から人頭大の河原石を，直径1mほどの円形に雑然と積み重ねたものであるが，配石の下部に小形の石を，上部に大形の石を配する傾向がみられ，S_1は立石である。

〈土壙〉　遺構確認時および遺構除去後，土壙の有無を確認したが，平面的には確認できなかった。しかし土層断面を観察すると，1・2層は軟弱であり，土壙としての立ち上がりがみられた。推定される土壙の規模は，長軸100cm，深さ30cmを測る。

〈出土遺物〉　配石周辺より縄文中期中葉から後葉にかけての土器片が多量に出土した。

第9号配石遺構（第352図）

〈遺構の位置と確認〉　A区，ZD－16グリッドに位置し，第Ⅳ層にぶい黄褐色土上面におい

て確認した。本配石北側に8号配石遺構が，南側に1号配石遺構が存在する。

〈配石遺構〉　配石遺構は，10～30cmのコブシ大から人頭大の河原石を径60cmほどの単純な円形に配したものと思われる。

〈土壙〉　確認されなかった。

〈出土遺物〉　配石周辺より，縄文中期中葉～後葉にかけての土器片が多量に出土した。

第10号配石遺構（第352図，ＰＬ９）

〈遺構の位置と確認〉　本遺構は，81年度の秋に実施された範囲確認調査の第1トレンチ北端において確認されたものである。A_1区，ＺＬ—14・15グリッドに跨り，第Ⅲ層黒色土中位に構築されている。本遺構は遺跡の存在する台地先端部に位置し，最も標高の低い場所である。また本遺構を覆う基本層は撹乱などうけておらず，当時の原形を最もよく残しているものである。

〈配石遺構〉　配石遺構は10～45cmの扁平な河原石を周縁と平行させ２個を並列して横に立て，環状に巡らしたものであり，その状態は配石遺構南東部にみいだすことができる。規模は内側の環状で径230cm，外側の環状で径240cmを測る。

〈土壙〉　配石遺構平面形確認時において配石遺構内部に黄褐色土を含んだ黒褐色土の落ち込み（土壙Ａ）を，配石遺構中央からやや西側にずれて確認した。さらに土壙Ａ調査時に底面において暗褐色土の落ち込み（土壙Ｂ）を確認した。各々の土壙の規模は，土壙Ａは平面形は円形を示す長軸178cm，短軸158cm，深さ50cmを測る。土壙埋土は４層に分層され，人為堆積を示す。土壙Ｂは平面形は円形を呈す。長軸115cm，短軸100cm，深さは土壙Ａの底面より105cmを測り，埋土は単一層である。

〈出土遺物〉　配石周辺より，縄文時代後葉の土器片（第358図14～21）が出土している。

〈備考〉　本配石の土壙においては，第３・５・６層の埋土をサンプリングし，リン分析を行なった。その結果は付2の通りであり，その濃度は高い数値を示している。

第11号配石遺構（第353図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，北端の斜面，ＺＫ—13・14，ＺＬ—13・14の４グリッドにまたがっており，第10号配石の南西５cmの所に位置する。確認面は第Ⅲ層黒色土中位である。なお本遺構は確認当時単独のものと思われたが，調査の結果第11—ａ・ｂ配石遺構の２基からなるものと判断された。

〈配石遺構〉　第11—ａ号配石遺構は，７～20cm大の河原石11個を径50cmの単純な円形に配列させ，その内部に中型の河原石S_1（27×37cm）を，覆いかぶせるかのように配するものである。第11—ｂ号配石遺構本来は10～25cm大の扁平な横長の河原石を周縁と平行に２個一対として並

列し，環状に巡らしたものと考えられるものであるがその状態は配石遺構の東側のみにみられる。他は崩壊が著しい。

〈土壙〉　第11－a号配石遺構除去後，平面形が楕円形を呈す。長軸90cm，短軸50cm，深さ24cmを測る。長軸方向はN－45°－Wを指す。配石遺構は土壙のほぼ中央に位置する。埋土は人為堆積を示す。第11－b号配石遺構除去後，平面形が楕円形を呈す。長軸173cm，短軸140cm，深さ16cmの土壙が存在し，長軸方向は，N－40°－Wを指す。また土壙は配石遺構の範囲とほぼ重なりあう。土壙埋土は5層に分層されその混入土から判断して人為的な堆積を示す。本土壙においてもリン分析を行なった。その結果は付2の通りである。

〈出土遺物〉　配石内と，その下に存在する土壙a・bの埋土中から縄文中期後葉の土器片（第359図1～10）が出土したほか，配石周辺からもこれらと同時期の土器が出土している。

第12号配石遺構（第353図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，北端部東側のZI－20グリッドに位置し，土壙らしい落ち込みと，これにともなう10数個の河原石を確認した。

〈配石遺構〉　配石遺構は10～24cm大の横長の河原石を径1mの円の内側に雑然的に積み上げたもので，いわゆる集石遺構とよばれる類に属するものである。

〈土壙〉　配石遺構と中心を同一にして口径138～158cm，底径260～279cm，深さ130cmのいわゆるフラスコ状ピットが存在する。土壙埋土は16層に分層され，人為的な堆積状況を示す。おそらく，土壙墓として転用されたものであろう。

〈出土遺構〉　土壙埋土中より，縄文中期後葉の土器片数点（第359図11～15）と石鏃（第360図5）が出土している。このほか配石周辺より同時期のものが出土している。

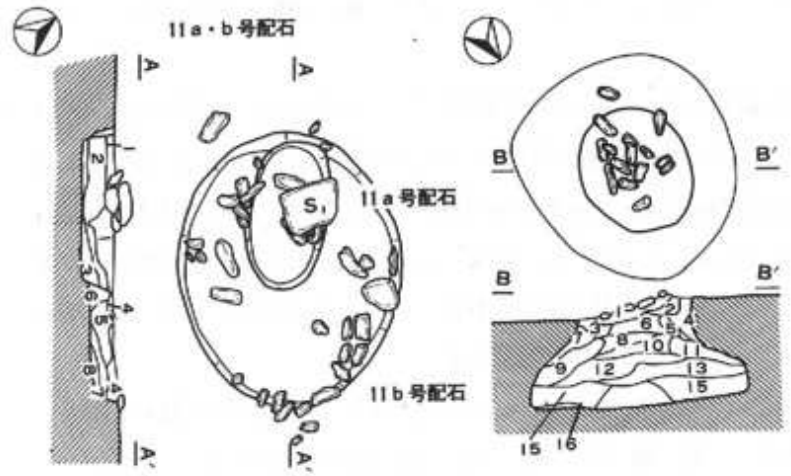
第13号配石遺構（第353図，PL9）

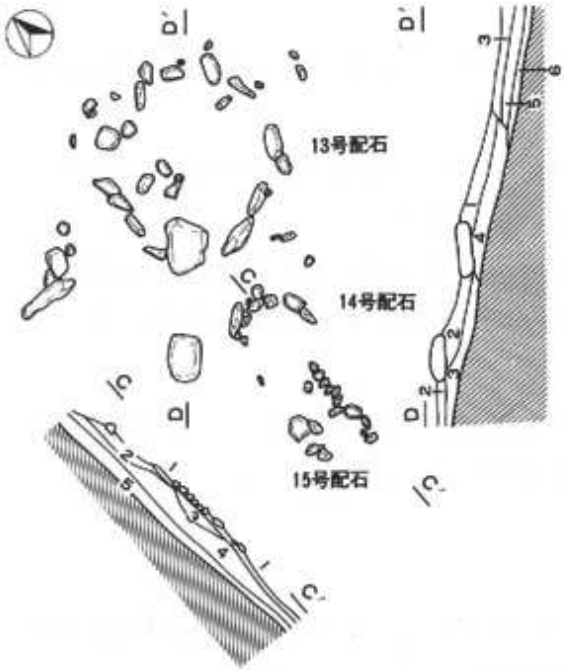
〈遺構の位置と確認〉　A_1区，先端の斜面中央，ZH－16グリッドに位置し第Ⅲ層黒色土中位で確認した。本遺構の南側に第14・15号配石遺構が連結するかのように存在する。

〈配石遺構〉　配石遺構は10～60cm大の横長の河原石を径105～120cmの単純な環状に巡らしたものである。河原石の配置は円周と平行に河原石の長軸を合せるという規則性がみられる。

〈土壙〉　確認できなかった。

〈出土遺物〉　遺構周辺より，縄文中期後葉の土器片とともに，後期前葉の土器片が少量出土している。また配石西側にわずかに離れた地点から大型の石皿が伏された状態で出土した。





11a・b号配石

1 黒　色 (7.5YR2/1) 黄褐色土を含む
2 黒褐色 (5YR2/1) 〃
3 黒褐色 (7.5YR2/2) 〃
4 黒　色 (7.5YR2/1)
5 黒褐色 (7.5YR3/2) 黄褐色土を多く含む
6 黒褐色 (7.5YR3/2)
7 暗褐色 (7.5YR3/3) 黄褐色土を多く含む
8 黒　色 (10YR2/1)

12号配石

1 褐　色 (7.5YR4/4) 黄褐色土を含む
2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 〃
3 褐　色 (10YR4/4)
4 黄褐色 (10YR5/6)
5 褐　色 (7.5YR4/4)
6 暗褐色 (10YR3/3)
7 褐　色 (10YR4/6)
8 暗褐色 (10YR3/4)
9 黄褐色 (10YR5/6) 壁の崩壊したもの
10 黒褐色 (10YR3/2)
11 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
12 黒褐色 (10YR2/2)
13 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
14 黒褐色 (7.5YR3/2)
15 褐　色 (7.5YR4/6)
16 黒　色 (10YR2/1)

13号配石

1 黒　色 (10YR2/1)
2 黒褐色 (10YR2/3)
3 褐　色 (10YR4/4)
4 黒褐色 (10YR3/2)
5 暗褐色 (10YR3/3)

14・15号配石

1 暗褐色 (10YR3/4)
2 黒褐色 (10YR3/2)
3 暗褐色 (10YR3/3)
4 黒褐色 (10YR2/2)
5 褐　色 (10YR4/4)
6 にぶい黄褐色 (10YR4/3)

0　2m

第353図　第11～15号配石遺構実測図

第14号配石遺構（第353図，ＰＬ９）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，北端斜面のＺＨ—16，ＺＧ—16の両グリッドにまたがり，第13号配石遺構のすぐ南側に位置する。本遺構の確認面は第Ⅲ層黒色土中位層である。

〈配石遺構〉　配石遺構は，５～25cm大のコブシ大，または横長の河原石を径80cmほどの単純な円形に巡らしたものと考えられるが，南側半分は攪乱のためか存在しない。

〈土壙〉　確認できなかった。

〈出土遺物〉　配石周辺より，縄文中期中葉～後葉の土器片とともに後期初頭の土器片が数点出土している。

第15号配石遺構（第353図，ＰＬ９）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，北側斜面の中央，ＺＧ—16グリッドに位置し，第Ⅲ層黒色土中位において確認した。本遺構は第13・14号配石遺構と南北方向に連結して存在し，その南端のものである。

〈配石遺構〉　配石遺構は10～20cm大のやや小ぶりな河原石を径45cmの単純な環状に巡らしたものである。なお，この配石遺構より北側に突出する７個の河原石は，本遺構にともなうものかは判断できなかった。

〈土壙〉　確認されなかった。

〈出土遺物〉　配石周辺より，縄文中期後葉の土器片が出土している。

第16号配石遺構（第354図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区の北端で，北西方向にゆるく下がる斜面ＺＩ—20・ＺＪ—20の両グリッドにまたがり，第Ⅳ層にぶい横褐色土上面において，立石とこれを埋設する土壙（ピット）を確認した。

〈配石遺構〉　長さ15cmの棒状の河原石を土壙西側に立て，立石としたもので，このほかに10cm大の数個の河原石をこの周辺に集めたもので，土壙の大きさと，河原石の集まりの大きさはほぼ同じである。

〈土壙〉　平面形は小判形を呈す。長軸46cm，短軸39cm，深さ14cmを測る。土壙長軸は，Ｎ—39°—Ｗを指す。土壙埋土は５層に分層され，人為的な堆積状況を示す。

〈出土遺物〉　土壙埋土中より，縄文中期中葉の土器片（第361図１～７）を10数点出土した。またこの配石周辺から，縄文中期中葉から後葉にかけての土器片が出土している。

第17号配石遺構（第354図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区北端の北西へゆるやかに下る斜面の中腹，ＺＪ—21，ＺＫ—21の両グリッドにまたがり存在し，第Ⅳ層にぶい黄褐色土上面において確認した。

〈配石遺構〉　長さ５～32cm大の扁平な，または横長の４個の河原石を雑然とおいたものである。またS_1は立石であったものと考えられる。

〈土壙〉　土壙は，配石遺構の位置より北西側にわずかにずれて，土壙Ａ・Ｂの２基が存在する。土壙Ａの平面形は隅丸方形を呈し，長軸75cm，短軸49cm，深さ28cmを測る。土壙長軸方向はＮ—35°—Ｗを指す。埋土は単一層であり人為堆積であった。土壙Ｂの平面形は隅丸方形を呈し，長軸60cm，短軸（推定）60cm，深さ24cmを測る。埋土は２層に分層され，混入土から判断すると人為堆積である。

〈出土遺物〉　土壙内から遺物は出土しなかった。なお配石周辺より，縄文中期後葉の土器片が出土している。

第18号配石遺構（第354図）

〈遺構の位置と確認〉　A_1区，ＺＡ—10グリッドに位置する。第Ⅳ層にぶい黄褐色土上面において確認した。本遺構は遺構中最も西側に位置するものである。

〈配石遺構・土壙〉　長さ40cmの棒状の河原石とこれを立てるための，直径50cm，深さ30cmの深鉢状のピットからなるもので，いわゆる立石遺構の類に属するものである。

〈出土遺物〉　配石周辺より縄文中期中葉～後葉にかけての土器片が多く出土しているが，特に中期中葉のものが多い。

第19号配石遺構（第354図，ＰＬ９）

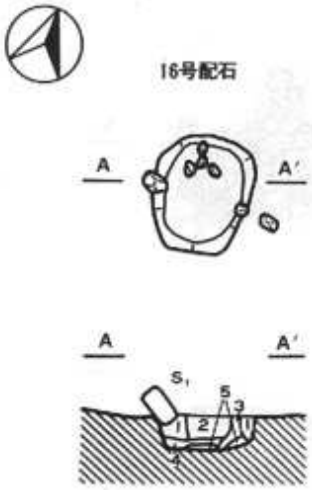
〈遺構の位置と確認〉　A_1区，ＺＤ—18グリッドに位置し，第Ⅳ層にぶい黄褐色土上面において確認した。本遺構の北西２ｍの場所に，２～４号配石遺構が存在する。

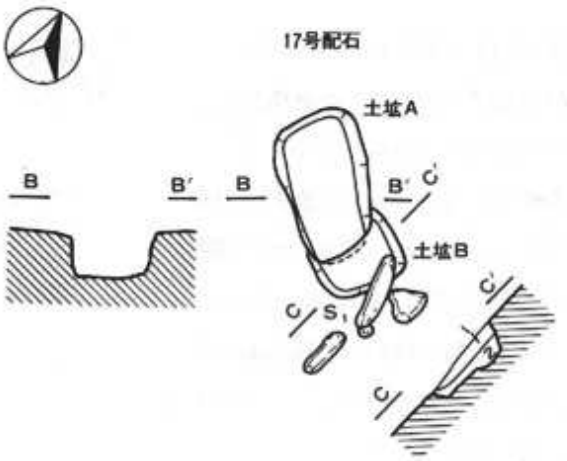
〈配石遺構・土壙〉　長さ32cmのやや大形の河原石S_1と，これを埋設するための平面形は，楕円形を呈する長軸70cm，短軸40cm，深さ30cmの土壙をもつ。土壙長軸方向は，Ｎ—18°—Ｗを指し，埋土は９層に分層され，人為的な堆積状況を示す。S_1は，土壙北側を覆いかぶすかのように存在した。

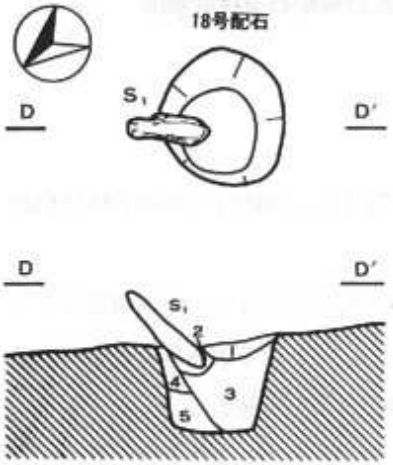
〈出土遺物〉　配石周辺から縄文中期中葉～末葉にかけての土器片が多く出土している。

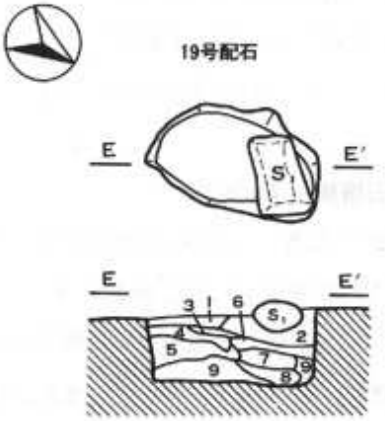
第20号配石遺構（第354図，ＰＬ９）

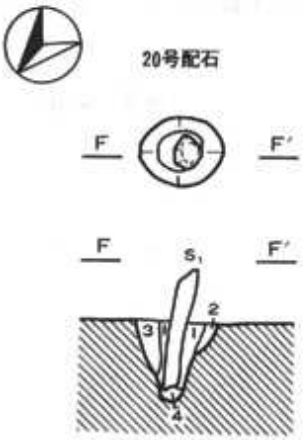
〈遺構の位置と確認〉　A_1区，平坦部のＨ—16グリッド，ＳＫ100の東側に位置し，第Ⅳ層にぶ











土 色 説 明

16号配石
1層 暗褐色 (10YR3/4)
2層 黒褐色 (10YR3/2)
3層 褐 色 (10YR4/4)
4層 黒褐色 (10YR2/3)
5層 にぶい黄褐色 (10YR4/3)

17号配石
1層 暗褐色 (10YR3/3)
2層 にぶい黄褐色 (10YR5/4)

18号配石
1層 黒褐色 (10YR2/3)
2層 黒褐色 (10YR3/2)
3層 黒褐色 (10YR2/2)
4層 黒褐色 (7.5YR3/2)
5層 黒褐色 (7.5YR2/2)

19号配石
1層 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
2層 褐 色 (10YR4/4)
3層 黒褐色 (10YR3/2)
4層 褐 色 (10YR4/4)
5層 黄褐色 (10YR5/6)
6層 黄褐色 (10YR5/8)
7層 暗褐色 (10YR3/3)
8層 褐 色 (10YR4/4)
9層 にぶい黄褐色 (10YR5/4)

20号配石
1層 暗褐色 (10YR3/4)
2層 褐 色 (10YR4/6)
3層 黄褐色 (10YR5/6)
4層 褐 色 (10YR4/4)

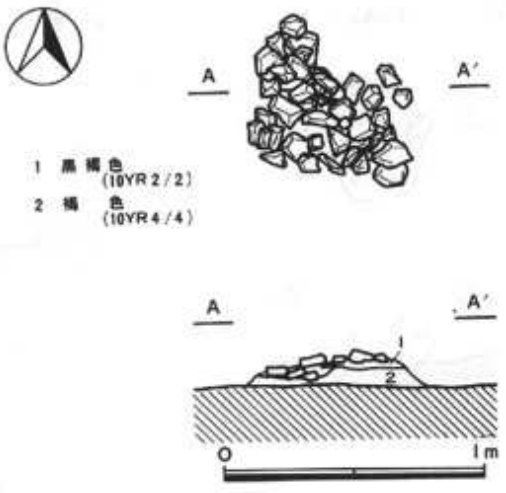
0 1m

第354図 第16～20号配石遺構実測図

い黄褐色土上面において確認した。

〈配石遺構・土壙〉　本遺構は長さ49cmの棒状の河原石（S1）と，これを埋設するための，平面形は円形を呈する，径30cm，深さ32cmの規模のピットより成る。S1は，ピットに対しほぼ直角に埋設され確認面から20cmほど突出していた。ピット内は4層に分層された。

〈出土遺物〉　配石周辺から，縄文中期中葉～末葉にかけての土器片が多く出土している。特に末葉のものが多い。



第355図　第21号配石遺構実測図

第21号配石遺構（第355図）

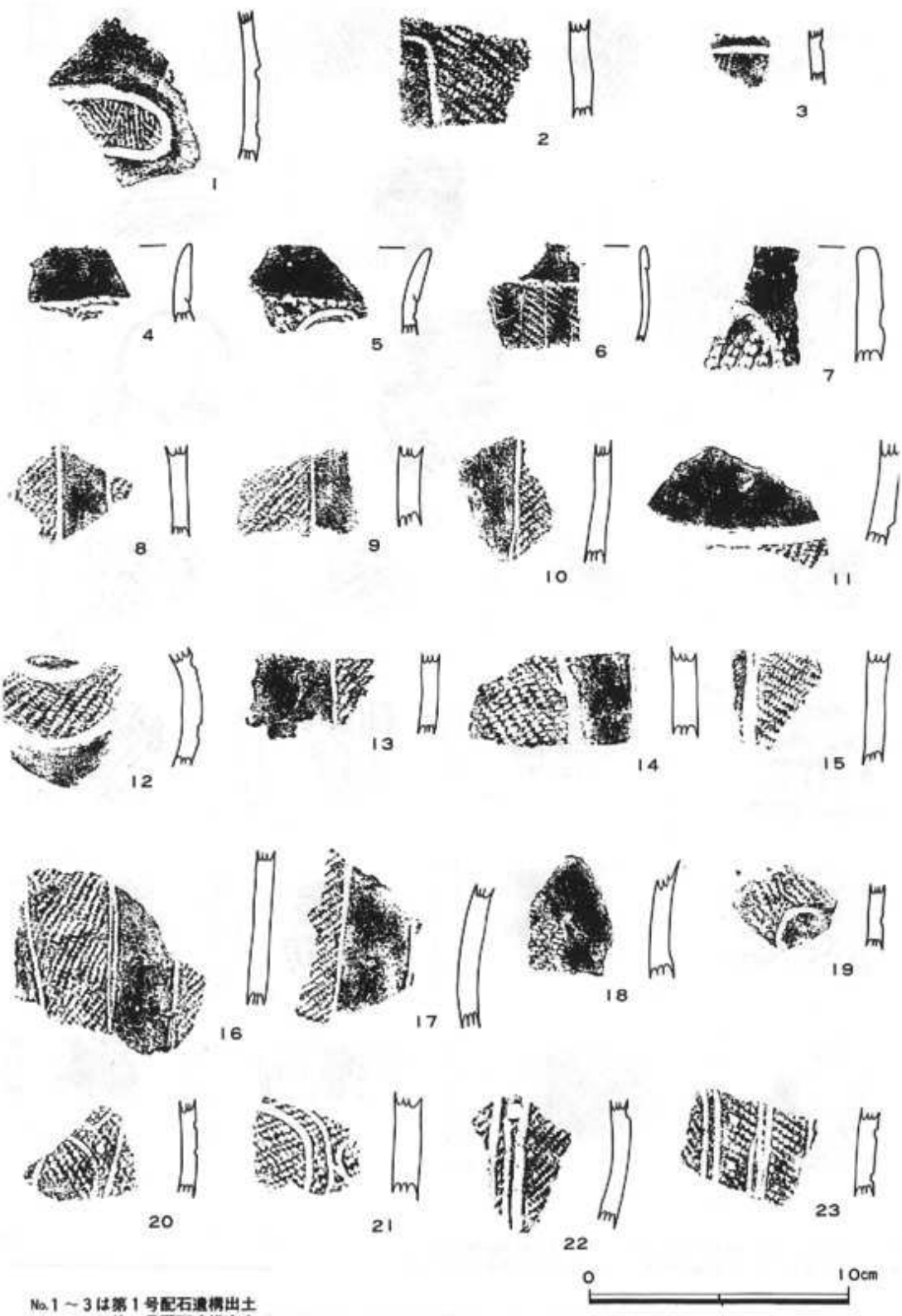
〈遺構の位置と確認〉　A₁区，西側のZE—27グリッドに位置する。23号住居跡調査中住居跡中央より南寄りの埋土下位層で確認した。

〈配石遺構〉　本遺構は角礫を用いて構築されている点で他のものと異なる。配石遺構は5～15cm大の角礫を一辺60cmほどの範囲に雑然と積み上げたもので，いわゆる集石遺構とよばれる類に属するものである。配石遺構の北東部は，23号住居跡調査中に礫を除去してしまった。

〈土壙〉　確認されなかった。

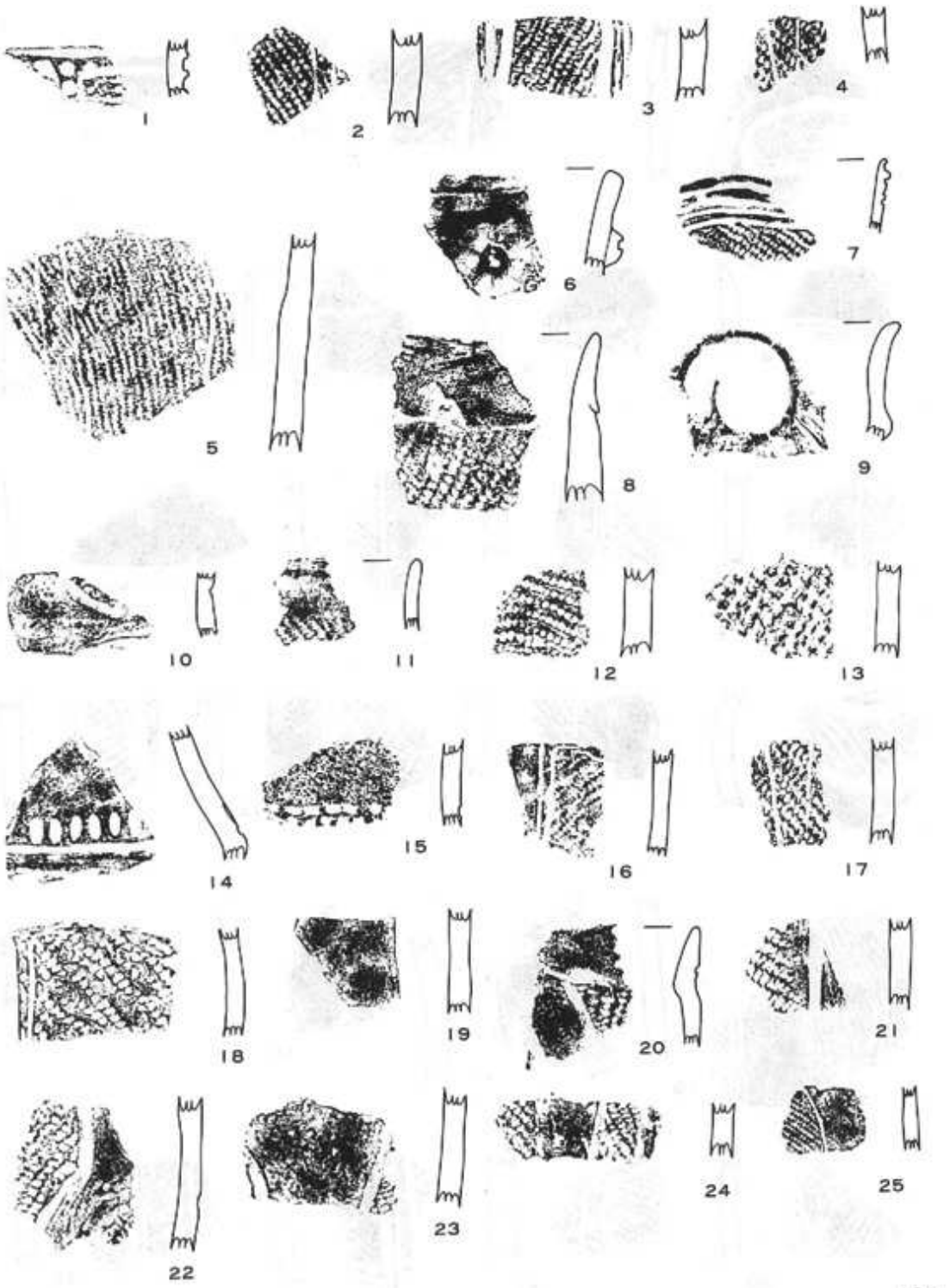
〈出土遺物〉　配石のつくられる住居跡から，縄文中期後葉の土器片が多数出土しているが，配石にともなうものかは判断できなかった。

（藤井　安正）



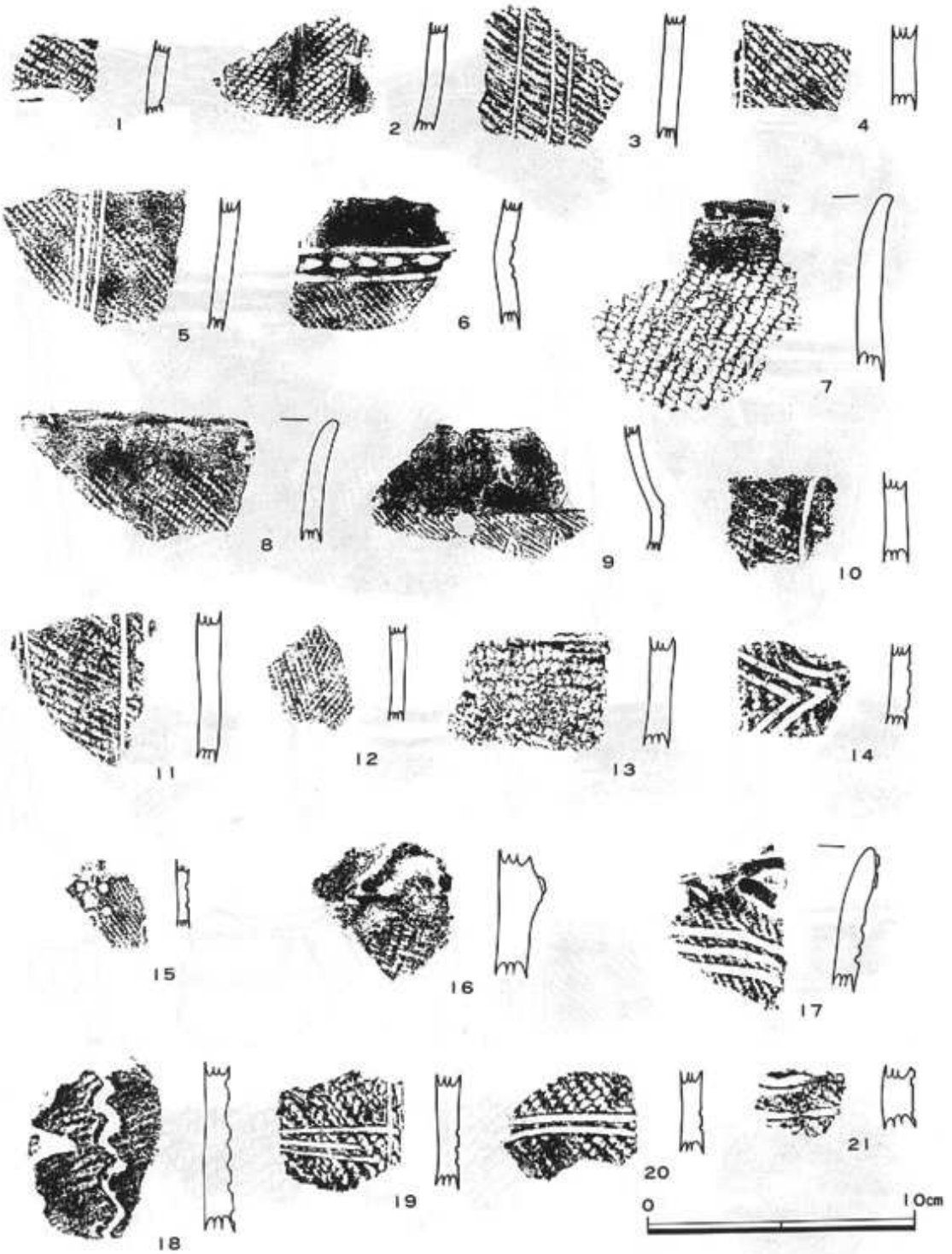
No.1～3は第1号配石遺構出土
No.4～23は第2号配石遺構出土

第356図　第1・2号配石遺構出土土器拓影図（1）



No.1～9は第2号配石遺構出土・No.10～13は第4号配石遺構出土
No.14～19は第1～4号配石遺構出土・No.20～25は第5号配石遺構出土

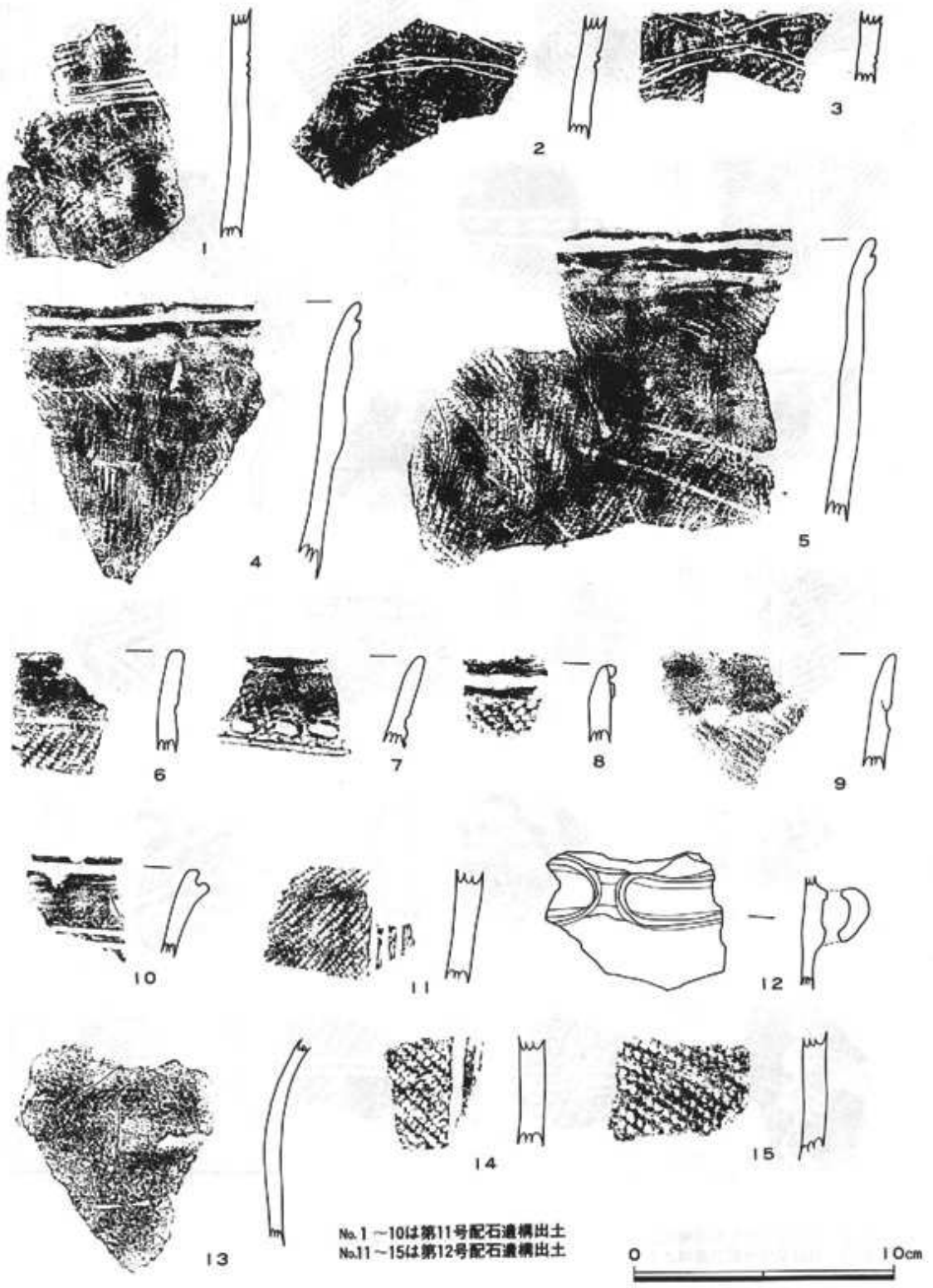
第357図　第1·2·4·5号配石遺構出土土器拓影図　(2)



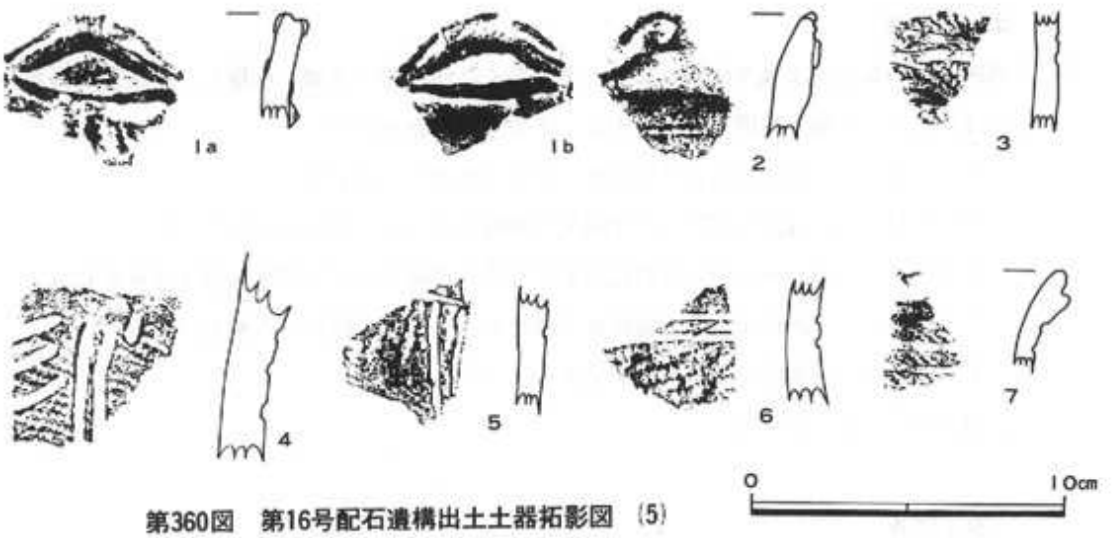
No.1 ～11は第5号配石遺構出土
No.14～21は第10号配石遺構出土

No.12，13は第7号配石遺構出土

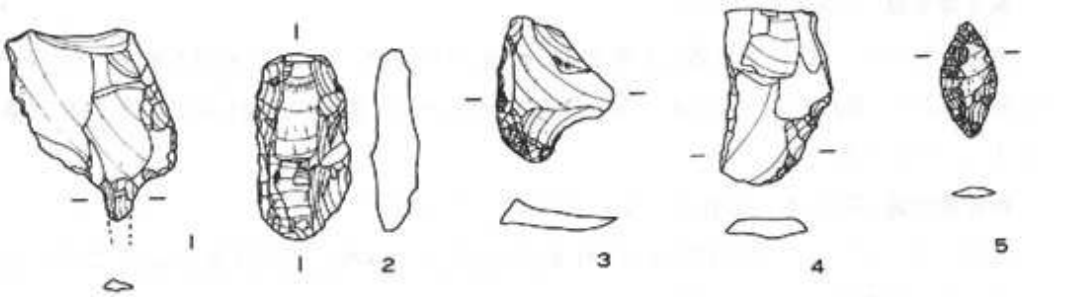
第358図　第5，7，10号配石遺構出土土器拓影図 (3)

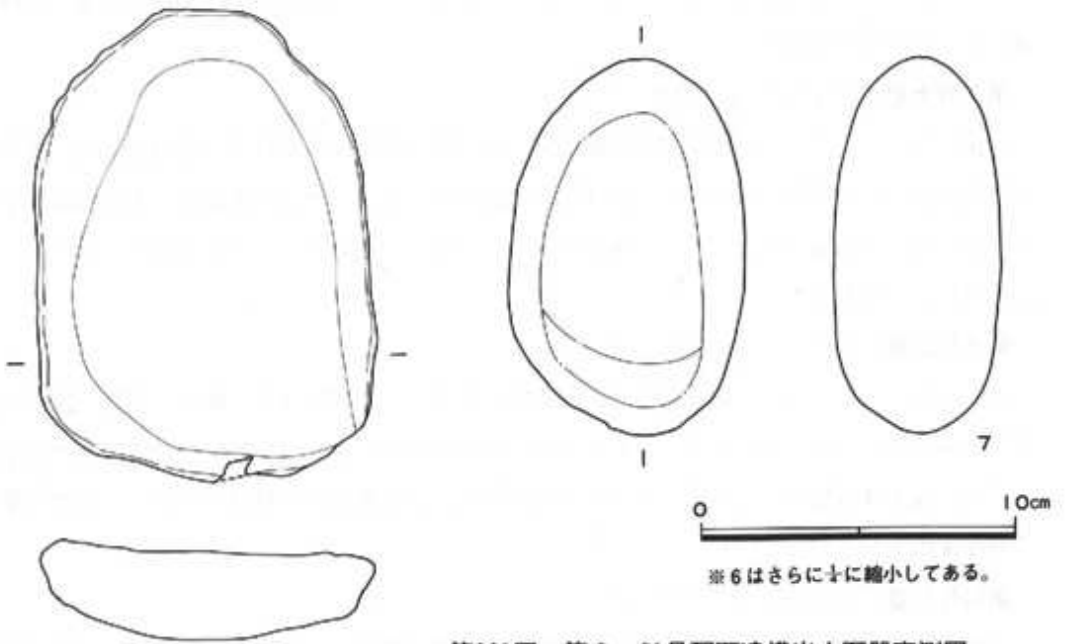


第359図　第11，12号配石遺構出土土器拓影図 (4)



第360図　第16号配石遺構出土土器拓影図　(5)





※6はさらに½に縮小してある。

第361図　第2～21号配石遺構出土石器実測図

5．土　　壙

本遺跡より103基の土壙が検出された。その多くは住居跡・土壙と重複し，単独で検出されたものは少ない。形態・規模もさまざまで，その平・断面形より

タイプA……下方が末広がりになりフラスコ状を呈するもの

タイプB……口縁部・底部がほぼ同等の規模を有し深い掘り込みをもつもの

タイプC……平面形が円形及び楕円形で垂直及び緩やかに外傾する掘り込みをもつもの

タイプD……平面形が方形で垂直及び緩やかに外傾する掘り込みをもつもの

タイプE……平面形が長楕円形を呈するもの

とし，以下タイプ別に述べる。

タイプA

第3号土壙（第362図，377図5）

A_1区，B—16グリッドに位置しⅣ層上面で確認，口径1.27×1.19m，底径2.92×1.88，深さ180.5cmを計る。南東壁は自然崩壊し底面はほぼ平坦である。覆土は18層に区分でき，自然堆積を呈する。石鏃1点出土。

第6号土壙（第362図，371図7～12，378図5～7・11）

A_1区，A—15グリッド，第15号住居内中央やや西寄りに位置し，住居床面で確認。第15号住居と重複し，本遺構が古い。口径1.00×0.95m，底径2.60×2.60m，深さ 105.2cmを計る。覆土は7層に区分でき人為堆積と考えられる。第3・4層中から多量の中期中葉の土器片と石棒3，砥石1，凹石1点を出土。

第7号土壙（第362図，371図13～17）

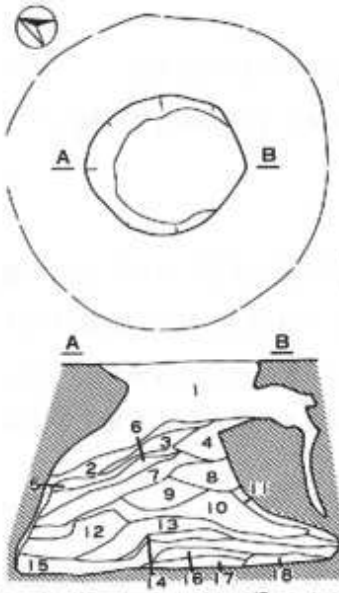
A_1区，A—17グリッド，第14号住居内北寄りに位置し，住居床面で確認。第14号住居と重複し，本遺構が古い。口径0.62×0.62m，底径2.60×2.36m，深さ 102.8cmを計る。底面はほぼ平坦である。覆土は13層に区分でき人為堆積と考えられる。中期後葉の土器片を出土。その多くは底面付近からである。

第8号土壙（第362図，372図1～8）

A_1区，B—18グリッド，第13号住居内南東際に位置し，住居床面にて確認。第13号住居と重複し，本遺構が古い。口径0.84×0.80，底径2.53×2.68m，深さ 145.6cmを計る。底面は平坦である。覆土は17層に区分でき，上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

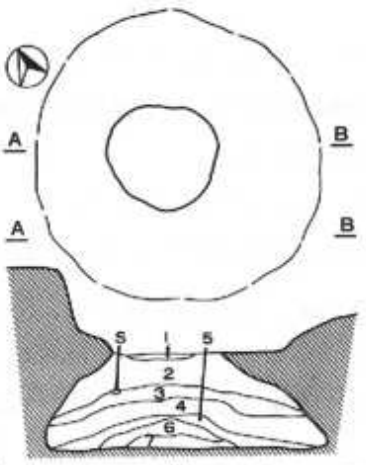
第14号土壙（第362図，372図11～14）

A_1区，ZB—17・18グリッド，第16号住居内南西際に位置し，住居床面で確認。第16号住居



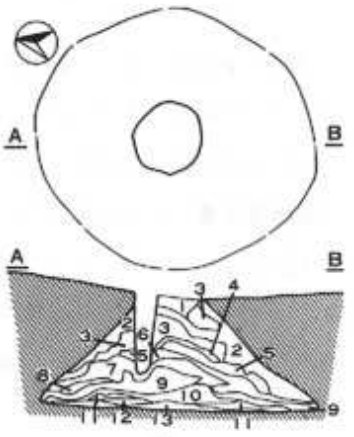
1層 褐色土 (7.5YR4/3)
2層 暗褐色土 (7.5YR3/3)
3層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
4層 褐色土 (7.5YR4/4)
6層 暗褐色土 (7.5YR4/4)
7層 黒褐色土 (10YR3/3)
8層 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
9層 褐色土 (7.5YR4/6)
10層 暗褐色土 (10YR3/4)
11層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
12層 にぶい黄褐色土 (10YR6/4)
13層 暗褐色土 (10YR3/3)
14層 黒褐色土 (7.5YR2/2)
15層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
16層 灰褐色土 (7.5YR4/2)
17層 褐色土 (7.5YR4/3)
18層 灰黄褐色土 (10YR4/2)

第3号土壙



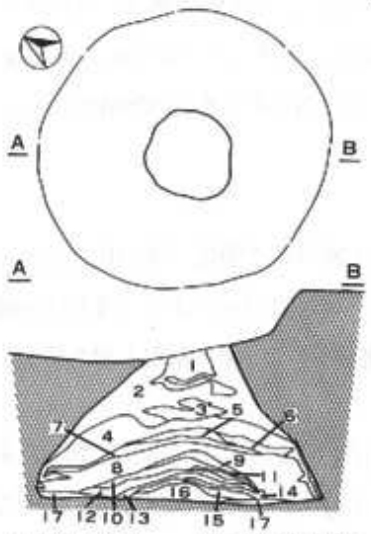
1層 黒褐色土 (10YR2/2) 15号住居跡貼床
2層 黒色土 (10YR1.7/1)
3層 黒色土 (10YR2/1) 灰混入
4層 黒色土 (10YR1.7/1) 焼土・灰混入
5層 黒褐色土 (10YR3/1) 灰混入
6層 黒色土 (10YR2/1)
7層 黒色土 (10YR2/1) 暗褐色粘土混入

第6号土壙



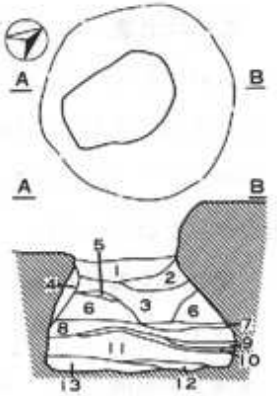
1層 暗褐色土 (10YR3/3)
2層 暗褐色土 (10YR3/4)
3層 暗褐色土 (10YR2/2)
4層 暗褐色土 (10YR3/4)
5層 暗褐色土 (10YR3/3)
6層 暗褐色土 (10YR3/3)
7層 にぶい黄橙色土 (10YR6/3)
8層 にぶい黄橙色土 (10YR7/3)
9層 黒褐色土 (10YR2/2)
10層 暗褐色土 (10YR3/3)
11層 明黄褐色土 (10YR6/6)
12層 褐色土 (10YR4/4)
13層 明黄褐色土 (10YR6/6)

第7号土壙



1層 黒褐色土 (10YR3/2)
2層 黒褐色土 (10YR2/2)
3層 黒褐色土 (10YR2/2)
4層 黒色土 (10YR2/1)
5層 黒褐色土 (10YR2/2)
6層 黒褐色土 (10YR2/2)
7層 黒色土 (10YR2/1)
8層 黒色土 (10YR2/1)
9層 黒色土 (10YR2/1)
10層 黒褐色土 (10YR2/2)
11層 黒色土 (10YR1.7/1)
12層 黒褐色土 (10YR2/2)
13層 黒褐色土 (10YR2/2)
14層 黒色土 (10YR2/1)
15層 黄褐色土 (10YR5/6)
16層 黒褐色土 (10YR2/2)

第14号土壙

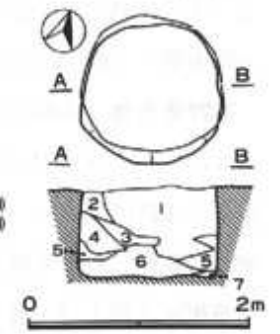


1層 黒褐色土 (10YR3/2)
2層 暗褐色土 (10YR3/4)
3層 暗褐色土 (10YR3/3)
4層 暗褐色土 (10YR3/4)
5層 暗褐色土 (10YR3/3)
6層 暗褐色土 (10YR3/4)
7層 黒褐色土 (10YR3/2)
8層 暗褐色土 (10YR3/3)
9層 黄褐色土 (10YR5/6)
10層 黒色土 (10YR2/1)
11層 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
12層 黒褐色土 (10YR2/2)
13層 暗褐色土 (10YR3/3)

第15号土壙

1層 黒褐色土 (10YR3/2)
2層 黒褐色土 (10YR2/2)
3層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
4層 にぶい黄褐色土 (10YR6/4)
5層 黒褐色土 (10YR2/3)
6層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
7層 黒褐色土 (10YR3/2)
8層 黒褐色土 (10YR2/3)
9層 暗褐色土 (10YR3/3)
10層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
11層 黒褐色土 (10YR2/2)
12層 にぶい黄褐色土 (10YR5/3)
13層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
14層 黒褐色土 (10YR2/2)
15層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)
16層 黒褐色土 (10YR2/3)
17層 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)

第8号土壙



1層 黒褐色土 (10YR2/3)
2層 黒褐色土 (10YR3/2)
3層 褐色土 (10YR4/4)
4層 暗褐色土 (10YR3/3)
5層 黄褐色土 (10YR5/6)
6層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
7層 にぶい黄橙色土 (10YR6/4)

第16号土壙

0 2m

第362図　第3・6～8・14～16号土壙実測図

と重複し本遺構が古い。口径1.55×1.00m，底径2.75×2.70m，深さ 116.7cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は16層に区分でき，上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。上・中層中より中期後葉の土器片を出土。

第15号土壙（第362図，372図15～28，377図７，378図３）

A_1区，ＺＣ—17グリッド，第19号住居内北東際に位置し，住居床面で確認。第19号住居と重複し本遺構が古い。口径1.00×0.73m，底径1.80×1.80m，深さ 114.0cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は13層に区分でき，上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。上層中より中期前葉（若干），中期後葉（多量）の土器片，散在する自然石，また覆土中より石匙１，掻器１点を出土。

第16号土壙（第362図，372図29～31，378図４）

A_1区，ＺＤ—23グリッド，第27号住居北壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第27号住居と重複し本遺構が古い。口径1.26×1.25m，底径1.24×1.28m，深さ80.7cmを計る。底面は若干凹凸がありやや軟弱である。覆土は７層に区分でき，上層部は人為堆積を呈し，下層部は口頸部が自然崩壊したものと考えられる。中期後葉と考えられる土器片と，掻器１点を出土。

第18号土壙（第363図）

A_1区，ＺＡ—16・17グリッド，第17Ａ号住居跡北西壁際に位置し，住居面で確認。第17Ａ・18号住居と重複し本遺構はいずれよりも古い。口径0.92×0.82m，底径1.88×1.50m，深さ48.3cmを計る。底面はレンズ状を呈し，やや軟弱である。覆土は８に区分でき人為堆積を呈し，少量の土器片を出土。

第25号土壙（第363図，372図32～34，378図２）

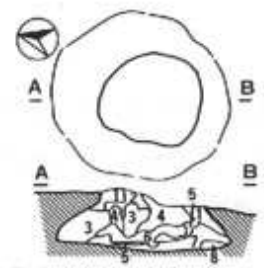
A_1区，ＺＥ—20グリッド，第29Ｂ号住居内西寄りに位置し，住居床面で確認。第29Ｂ号住居と重複し本遺構が古い。口径3.04×3.04m，底径3.15×2.96m，深さ53.0cmを計る。覆土は10層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉（多量），中期後葉(若干)の土器片，掻器１点を出土。

第26号土壙（第363図，372図35～41）

A_1区，ＺＥ—21・22グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口径1.35×1.11m，底径2.76×2.66m，深さ 103.8cmを計る。底面は平坦で軟弱である。覆土は４層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉の土器片を出土。

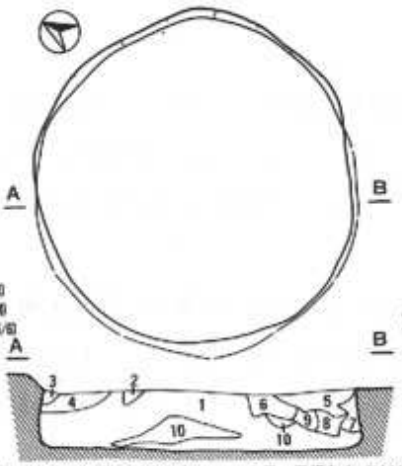
第27号土壙（第363図，378図８，390図１）

A_1区，Ｆ—20・21グリッド，第40号住居内南西際に位置し，住居床面で確認，第40号住居と重複し本遺構が古い。口径1.16×1.04m，底径2.90×2.78m，深さ 108.5cmを計る。床面は南側から北側に若干傾斜し，平坦で軟弱である。覆土は５層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉復元土器１点，磨石２点を出土。



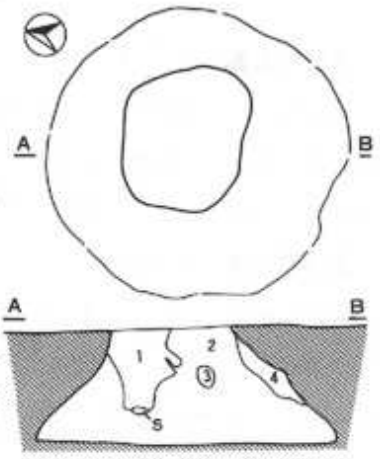
1層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
2層 褐色土 (10YR4/4)　6層 黒褐色土 (10YR2/3)
3層 褐色土 (10YR4/4)　7層 暗褐色土 (10YR3/4)
4層 暗褐色土 (10YR3/4)　8層 明黄褐色土 (10YR6/6)
5層 褐色土 (10YR4/4)

第18号　土壙



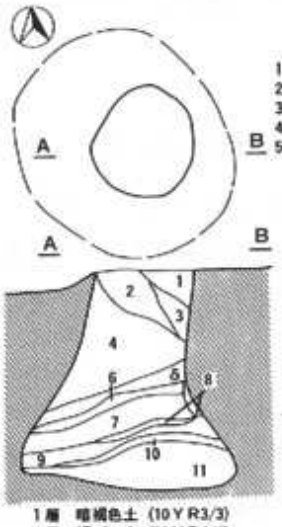
1層 黒色土 (7.5YR2/1)　6層 黒褐色土 (10YR2/2)
2層 褐色土 (7.5YR4/4)　7層 にぶい褐色土 (7.5YR6/4)
3層 にぶい褐色土 (7.5YR5/4)　8層 暗褐色土 (7.5YR3/4)
4層 にぶい黄褐色土 (10YR5/4)　9層 褐色土 (7.5YR4/6)
5層 暗褐色土 (10YR3/4)　10層 黒褐色土 (7.5YR2/2)

第25号　土壙



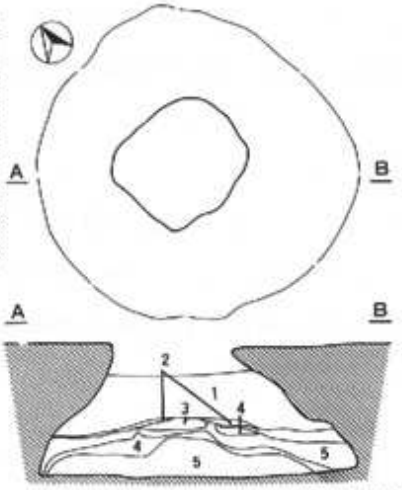
1層 黒色土 (10YR2/1)
2層 黒色土 (7.5YR2/1)
3層 褐色土 (7.5YR4/6)
4層 黒褐色土 (7.5YR3/2)

第26号　土壙



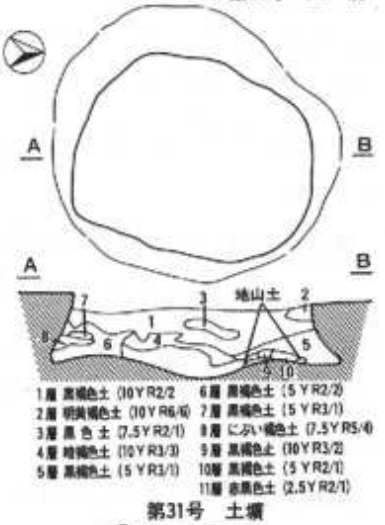
1層 暗褐色土 (10YR3/3)
2層 褐色土 (10YR4/4)
3層 暗褐色土 (10YR3/4)
4層 黒褐色土 (10YR2/3)
5層 黒褐色土 (10YR2/3)
6層 暗褐色土 (10YR3/4)
7層 黄褐色土 (10YR5/6)
8層 黒褐色土 (10YR2/2)
9層 褐色土 (10YR4/4)
10層 明黄褐色土 (10YR6/6)
11層 黒褐色土 (7.5YR2/2)

第34号　土壙



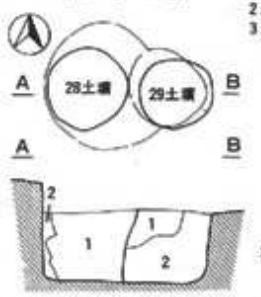
1層 黒色土 (10YR2/1)　4層 にぶい黄褐色土 (10YR4/3)
2層 褐色土 (10YR4/6)　5層 黒褐色土 (10YR2/2)
3層 黒褐色土 (10YR2/3)

第27号　土壙



1層 黒褐色土 (10YR2/2　6層 黒褐色土 (5YR2/2)
2層 明黄褐色土 (10YR6/6)　7層 黒褐色土 (5YR3/1)
3層 黒色土 (7.5YR2/1)　8層 にぶい褐色土 (7.5YR5/4)
4層 暗褐色土 (10YR3/3)　9層 黒褐色土 (10YR3/2)
5層 黒褐色土 (5YR3/1)　10層 黒褐色土 (5YR2/1)
11層 赤黒色土 (2.5YR2/1)

第31号　土壙



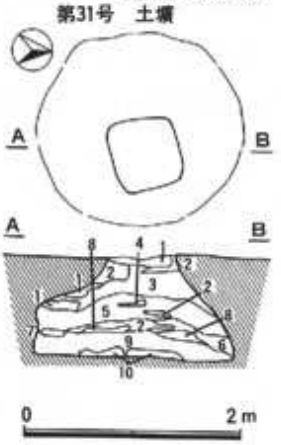
第28号土壙土層注記
1層 黒褐色土 (10YR2/2)
2層 黒褐色土 (10YR3/2)

第29号土壙
土層注記
1層 黒褐色土 (10YR2/3)
2層 暗褐色土 (10YR3/3)

第28・29号土壙

1層 明黄褐色土 (2.5YR6/8)
2層 暗褐色土 (10YR3/3)
3層 黒褐色土 (10YR2/3)
4層 黒色土 (10YR2/1)
5層 黒褐色土 (10YR3/2)
6層 黒褐色土 (10YR2/2)
7層 暗褐色土 (7.5YR3/3)
8層 褐色土 (10YR4/6)
9層 明褐色土 (7.5YR5/6)
10層 黒褐色土 (5YR3/1)

第38号　土壙



0　2m

第363図　第18・25～29・31・34・38号土壙実測図

第28号土壙（第363図）

A_1区，ＺＣ—19グリッド，第34号住居南壁際に位置し，住居床面で確認。第34号住居・第29号土壙と重複し本遺構はいずれよりも古い。口径0.82×0.80m，底径1.20×1.09m，深さ78.9cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は２層に区分でき人為堆積を呈する。

第29号土壙（第363図）

A_1区，ＺＣ—19グリッド，第34号住居南壁際に位置し，住居床面で確認。第34号住居・第28号土壙と重複し第34号住居より古く第28号土壙より新しい。口径0.68×0.63m，底径0.73×0.65m，深さ92.3cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は２層に区分でき人為堆積を呈する。

第31号土壙（第363図，373図１～９・11，377図３，391図１）

A_1区，ＺＥ・ＺＤ—20・21グリッド，第29Ａ号住居内南壁際に位置し，住居床面で確認。第29Ａ号住居と重複し本遺構が古い。口径2.22×1.89m，底径2.67×2.42m，深さ65.0cmを計る。底面は大きな波状を呈する。覆土は11層に区分でき人為堆積を呈する。上・中層中より中期中葉（多量），中期後葉（若干）の土器片，下層より中期末葉復元土器１点，また覆土中より石鏃１点を出土。

第34号土壙（第363図，373図10・12～14）

A_1区，ＺＢ—18，ＺＡ—18・19グリッドに位置し，Ⅲ層下面で確認。口径1.04×0.94m，底径2.02×1.96m，深さ 205.2cmを計る。底面は西側から東側に若干傾斜し凹凸がありやや軟弱である。覆土は11層に区分でき上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第36号土壙（第364図，373図15・16）

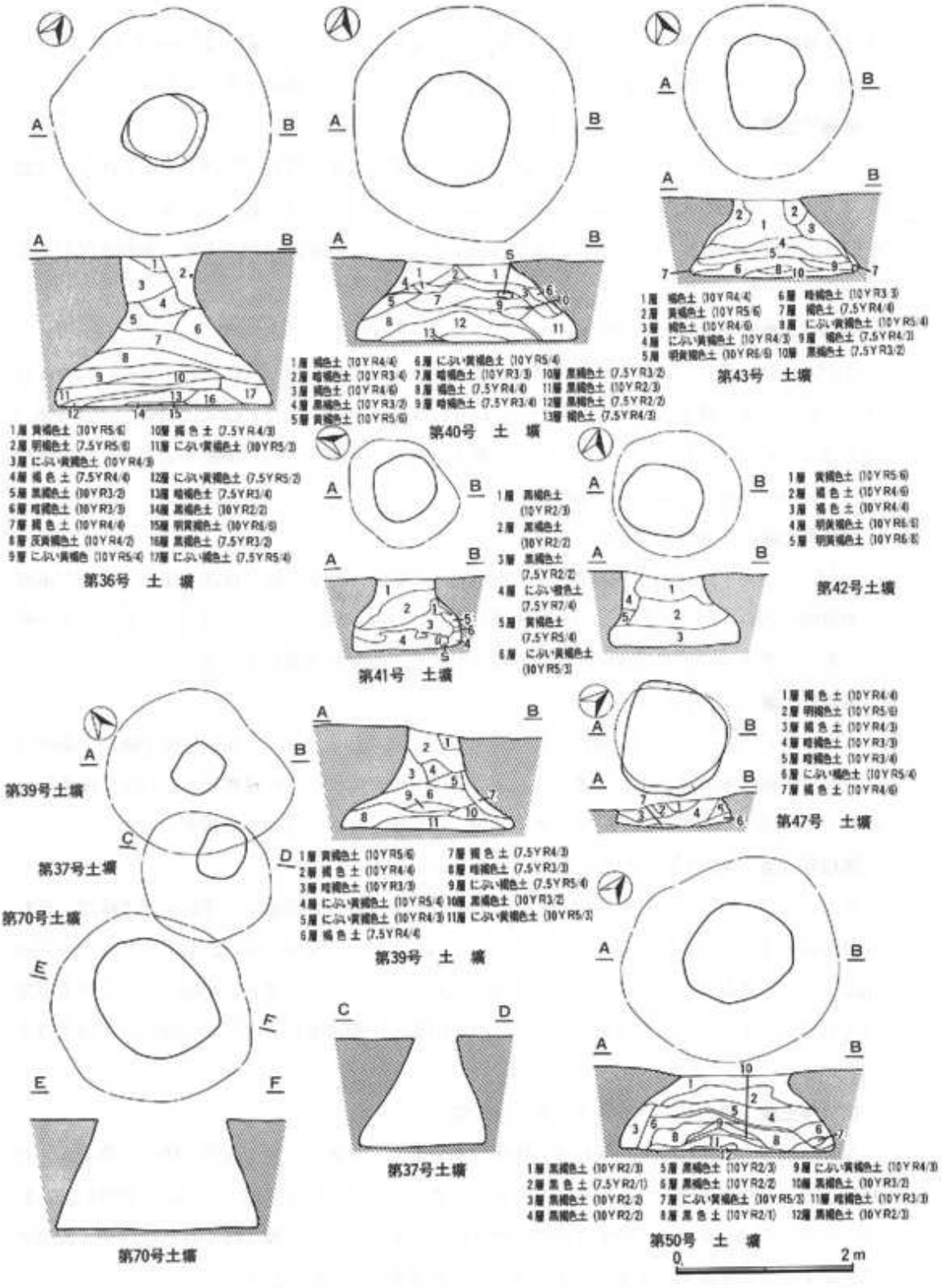
A_1区，ＺＡ—18グリッド，第63号住居北西壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第63号住居と重複し本遺構が古い。口径0.86×0.83m，底径2.57×2.54m，深さ 167.1cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は17層に区分でき，上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。中期中葉の土器片を出土。

第37号土壙（第364図，373図17～20）

A_1区，Ａ—18グリッド，第66号住居内西壁際に位置し，住居床面で確認。第66号住居・第39号土壙と重複し本遺構は第66号住居より古く，第39号土壙より古いと考えられる。口径0.84×0.62m，底径2.06×1.82m，深さ 117.2cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は11層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉の土器片を出土。

第38号土壙（第363図，373図21～23）

A_1区，Ｂ—18グリッド，第60号住居内中央やや西寄りに位置し，住居床面で確認。第60号住



第364図　第36・37・39・40～43・47・50・70号土壙実測図

居と重複し本遺構が古い。口径0.69×0.63m，底径1.91×1.82m，深さ112.5cmを計る。底面は平坦である。覆土は10層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉の土器片を出土。

第39号土壙（第364図，373図24・25）

A_1区，A—18グリッド，第66号住居南西壁際に位置し，Ⅲ層下面で確認。第66号住居・第37・70号土壙と重複し本遺構は第66号住居より古く，第37号土壙より新しいと考えられる。口径0.65×0.49m，底径1.55×1.42m，深さ 122.3cmを計る。底面は平坦である。中期後葉の土器片を出土。

第40号土壙（第364図，373図26～34）

A_1区，ＺＤ・ＺＣ—21グリッド，第42Ａ住居内北寄りに位置し，住居床面で確認。第42Ａ号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。口径1.26×1.26m，底径2.64×2.63m，深さ 106.3cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は13層に区分でき自然堆積を呈する。中期中葉（若干），中期後葉（多量）の土器片を出土。

第41号土壙（第364図，373図35）

A_1区，A—18・19グリッド，第66住居内中央に位置し，住居床面で確認。第66号住居と重複し本遺構が古い。口径0.80×0.74m，底径1.33×1.11m，深さ80.0cmを計る。底面は平坦で軟弱である。覆土は６層に区分でき人為堆積を呈する。少量の土器片を出土。

第42号土壙（第364図）

A_1区，ＺＣ—21グリッド，第42Ａ号住居中央やや北寄りに位置し，住居床面で確認。第42Ａ号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。口径0.88×0.80m，底径1.45×1.42m，深さ75.5cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は５層に区分でき人為堆積を呈する。

第43号土壙（第364図，374図１・２，377図１）

A_1区，ＺＣ—21グリッド，第42Ａ号住居内中央やや東寄りに位置し，住居床面で確認。第42Ａ号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。口径1.05×0.88m，底径2.44×1.90m，深さ88.0cmを計る。底面は軽いレンズ状を呈し北壁側が若干低くなる。覆土は10層に区分でき上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。中期中葉・中期後葉の土器片，４層から石鏃１点を出土。

第47号土壙（第364図，374図７・８，386図25）

A_1区，ＺＢ—21グリッド，第42Ａ号住居内南東寄りに位置し，住居床面で確認。第42Ａ・42Ｂ号住居と重複し本遺構はいずれよりも古いと考えられる。口径1.32×1.13m，底径1.31×1.15m，深さ27.4cmを計る。底面は凹凸があり堅くしまっている。覆土は７層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉～末葉復元土器１点，中期後葉の土器片を出土。

第49号土壙（第365図，374図９）

A_1区，ＺＤ—21・22グリッド，第42Ａ号住居北東壁際に位置し，住居床面で確認。第42Ａ号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。口径2.36×2.00m，底径3.25×2.62m，深さ64.5cmを計る。底面は凹凸がありやや軟弱である。堆積は人為堆積と考えられる。中期中葉，中期後葉の土器片を出土。

第50号土壙（第364図，374 図50・51，377図４）

A_1区，Ｉ—10グリッド，第71Ｂ号住居内南東壁際に位置し，住居床面で確認。第71Ｂ号住居と重複し本遺構が古い。口径1.24×1.10m，底径2.50×2.34m，深さ 107.7cmを計る。底面は軟弱である。覆土は12層に区分でき自然堆積を呈する。中期中葉・中期後葉の土器片，石鏃１点を出土。

第51号土壙（第365図，374図12～14）

A_1区，Ｅ—18グリッド，第58号住居内北西寄りに位置し，住居床面で確認。第58号住居，第52号土壙と重複し本遺構はいずれよりも古い。口径0.96×0.95m，底径2.54×2.31m，深さ88.2cmを計る。底面は軽いレンズ状を呈する。覆土は７層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉～後葉の土器片を出土。

第52号土壙（第365図，374図 5・16）

A_1区，Ｅ—18グリッド，第58号住居内北西寄りに位置し，住居床面で確認。第58号住居・第51号土壙と重複し本遺構は第58号住居より古く，第51号土壙より新しい。口径1.11×1.06m，底径2.49×2.34m，深さ72.3cmを計る。底面は平坦である。覆土は11層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉と考えられる土器片を出土。

第53号土壙（第365図，374図17～20）

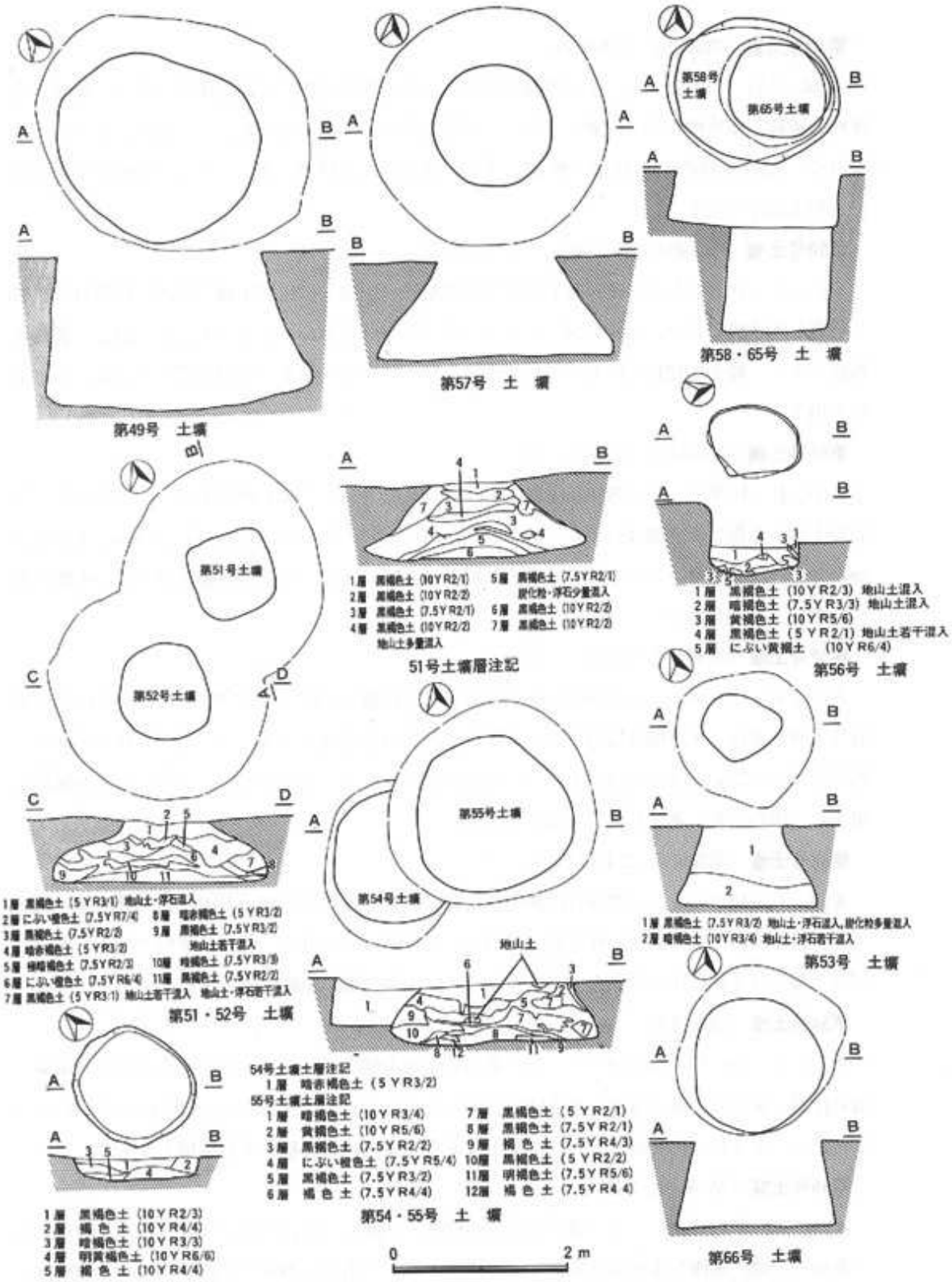
A_1区，Ｆ—18グリッド，第58号住居内西壁際に位置し，住居床面で確認。第58号住居と重複する。口径0.88×0.74m，底径1.59×1.44m，深さ92.5cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は２層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉，中期末葉の土器片を出土。

第54号土壙（第365図）

A_1区，Ｆ—19，Ｇ—18・19グリッド，第58号住居南壁際に位置し，住居床面で確認。第58・84号住居，第55号土壙と重複し本遺構はいずれよりも古い。口径1.50×(1.46)m，底径1.92×(1.63)m，深さ40.3cmを計る。底面は平坦である。覆土は単一層で人為堆積を呈する。

第55号土壙（第365図，374図21～23）

A_1区，Ｆ・Ｇ—19グリッド，第58号住居南壁際に位置し，住居床面で確認。第58・84号住居・第54号土壙と重複し本遺構は第58・54号住居より古く第54号土壙より新しい。口径 200.0×1.64m，底径2.25×2.16m，深さ66.8cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は12層に区



第365図 第49・51～59・65・66号土壙実測図

分でき，人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第57号土壙（第365図）

A₁区，G・H—18グリッド，第59号住居内北西壁際に位置し，住居床面で確認。第59号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。口径1.38×1.36m，底径2.74×2.71m，深さ 111.8cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は3層に区分でき人為堆積と考えられる。

第58号土壙（第365図）

A₁区，H—18グリッド，第59号住居西壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第1号溝，第59号住居，第65号土壙と重複し本遺構は第1号溝より古く，第65号土壙より新しい。また第59号住居より古いと考えられる。口径1.88×1.67m，底径1.90×1.57m，深さ59.3cmを計る。底面はほぼ平坦である。堆積は人為堆積と考えられる。

第65号土壙（第365図，374図24～26）

A₁区，H—18グリッド，第59号住居西壁際に位置し，第58号土壙底面で確認。第1号溝，第59号住居，第58号土壙と重複し本遺構は第1号溝，第58号土壙より古く，第59号住居より古いと考えられる。口径1.07×1.05m，底径1.26×1.23m，深さ 120.0cmを計る。底面は平坦である。中期後葉の土器片を出土。

第66号土壙（第365図，374図27）

A₁区，G—18グリッド，第59号住居北西壁際に位置しⅣ層上面で確認。第59号住居と重複する。口径1.56×1.46m，底径1.92×1.82m，深さ97.8cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。中期後葉の土器片を出土。

第67号土壙（第366図，375図1～3）

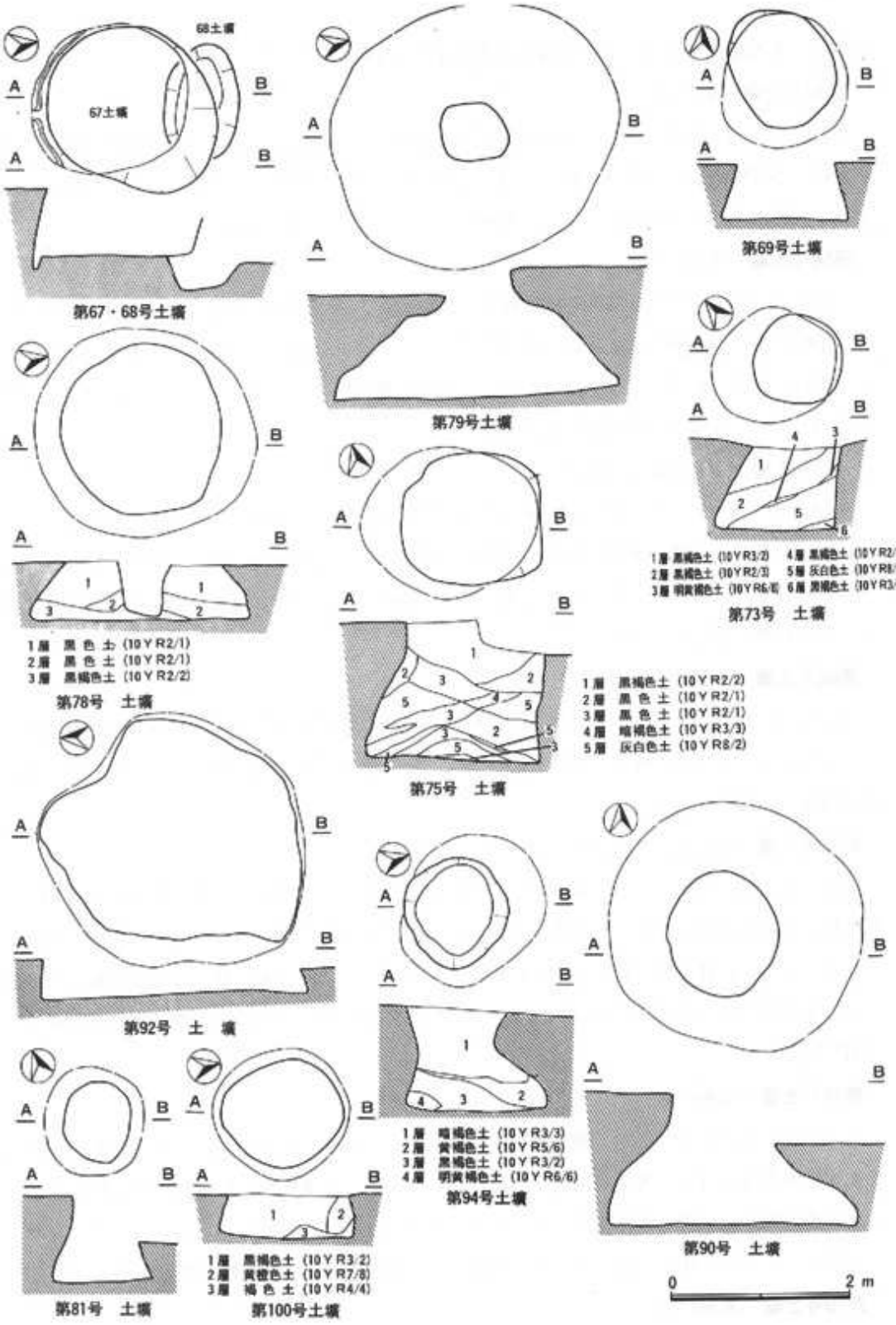
A₁区，F・G—17グリッド，第102号住居南壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第1号溝，第102号住居，第68号土壙と重複し本遺構は第1号溝，第102号住居より古く，第68号土壙より新しいと思われる。口径2.02×1.73m，底径1.78×1.72m，深さ96.7cmを計る。南壁側底面に巾約10cm，深さ約15cmの溝が約1/3周する。底面は平坦で堅くしまっている。中期後葉，中期末葉の土器片を出土。

第69号土壙（第366図）

A₁区，H—18・19グリッド，第59号住居内南西寄りに位置し，住居床面で確認。第59号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。口径1.30×1.10m，底径1.52×1.41m，深さ61.5cmを計る。底面北側に68×59cmの範囲内に3～8cmの自然石が約270個敷きつめられている。このうち比較的大きな16×10×8cmの自然石が北東側から出土。覆土は単一層で人為堆積を呈する。

第70号土壙（第364 図）

A₁区，A—18グリッド，第14号住居北東壁際に位置し，住居床面で確認。第14号住居，第39



第366図 第67～69・73・75・78・79・81・90・92・94・100号土壙実測図

号土壙と重複し本遺構が第14号住居より古い。口径1.47×1.13m，底径2.34×1.09m，深さ124.3cmを計る。

第73号土壙（第366図）

A_1区，ＺＡ—12グリッド，第106号住居内北東壁際に位置し，住居床面で確認。第106号住居と重複し本遺構は同時期と考えられる。口径1.00×1.00m，底径1.50×1.30m，深さ96.3cmを計る。底面は平坦で軟弱である。覆土は６層に区分でき人為堆積を呈する。

第75号土壙（第366図，375図５・６，378図９）

A_1区，Ａ—12グリッド，第109号住居南西壁際に位置し，住居床面で確認。第106・109号住居と重複し本遺構は第109号住居より古く第106号住居より新しい。口径1.60×1.50m，底径2.02×1.72m，深さ 153.0cmを計る。底面は平坦で軟弱である。覆土は６層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉の土器片，凹石１点を出土。

第77号土壙（第368図，378図10・12）

A_1区，Ａ—13グリッド，第109号住居内中央やや西寄りに位置し，住居床面で確認。第109号住居と重複し本遺構が古い。口径1.34×0.89m，底径1.02×1.01m，深さ97.0cmを計る。底面は南西側から北東側に若干傾斜しやや凹凸があり堅くしまっている。上層部より深鉢（地文のみ）複元土器１点，覆土中より凹石２点を出土。

第78号土壙（第366図，375図10～12）

A_1区，ＺＡ—13グリッド，第109住居内北壁際に位置し，住居床面で確認。第109号住居と重複し本遺構が古い。口径1.90×1.80m，底径2.40×2.40m，深さ59.2cmを計る。底面は南側から北側に若干傾斜し，平坦で軟弱である。覆土は 3層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第79号土壙（第366図，375図13～16）

A_1区，ＺＣ—13グリッド，110Ｂ号住居北壁際に位置し，住居床面で確認。第110Ｂ号住居と重複し本遺構が古い。口径0.78×0.65m，底径3.25×2.92m，深さ 117.0cmを計る。底面はほぼ平坦で軟弱である。堆積は人為堆積と考えられる。中期中葉（多量），中期後葉（少量）の土器片を出土。

第80号土壙（第368図，375図17・18）

A_1区，Ｇ—19グリッド，第59号住居内北東寄りに位置し，住居床面で確認。第59・84号住居と重複し本遺構はいずれよりも古い。口径1.60×1.35m，底径2.24×2.22m，深さ72.0cmを計る。底面中央に45×20×１cmの炭化板を確認。底面は平坦で軟弱である。覆土は12層に区分でき自然堆積と考えられる。中期後葉の土器片を出土。

第81号土壙（第366図）

A₁区，D－9グリッド，第107号住居北西壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第107号住居と重複し本遺構が古い。口径0.86×0.72m，底径1.20×1.09m，深さ98.3cmを計る。底面は平坦で軟弱である。

第90号土壙（第366図，375図19）

A₁区，ZD—17グリッド，第70号住居北西壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第70号住居と重複し本遺構が古い。口径1.28×0.89m，底径1.92×1.42m，深さ 139.6cmを計る。底面は平坦で軟弱である。堆積は人為堆積と考えられる。中期後葉の土器片を出土。

第91号土壙（第367図，384図3）

A₁区，B—13グリッド，第117号住居内中央に位置し，住居床面で確認。第117号住居と重複し本遺構が古い。口径0.95×0.90m，底径2.98×2.98m，深さ 105.0cmを計る。底面は軽いレンズ状を呈し軟弱である。上層部より中期後葉キャリパー形復元土器（内外面朱塗り）を出土。

第92号土壙（第366図，375図20～22）

A₁区，C—12，D—12・13グリッド，第101号住居内南壁際に位置し，住居床面で確認。第101号住居と重複し本遺構が古い。口径2.80×2.45m，底径3.00×2.75m，深さ43.0cmを計る。底面は中央部が若干高くなり軟弱である。中期中葉(多量)，中期後葉(若干)の土器片を出土。

第94号土壙（第366図，375図23～25）

A₁区，G—16グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。第96号土壙と重複し本遺構が古いと考えられる。口径1.16×1.09m，底径1.59×1.47m，深さ 121.0cmを計る。底面はやや凹凸があり軟弱である。覆土は4層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第95号土壙（第367図，375図26～28）

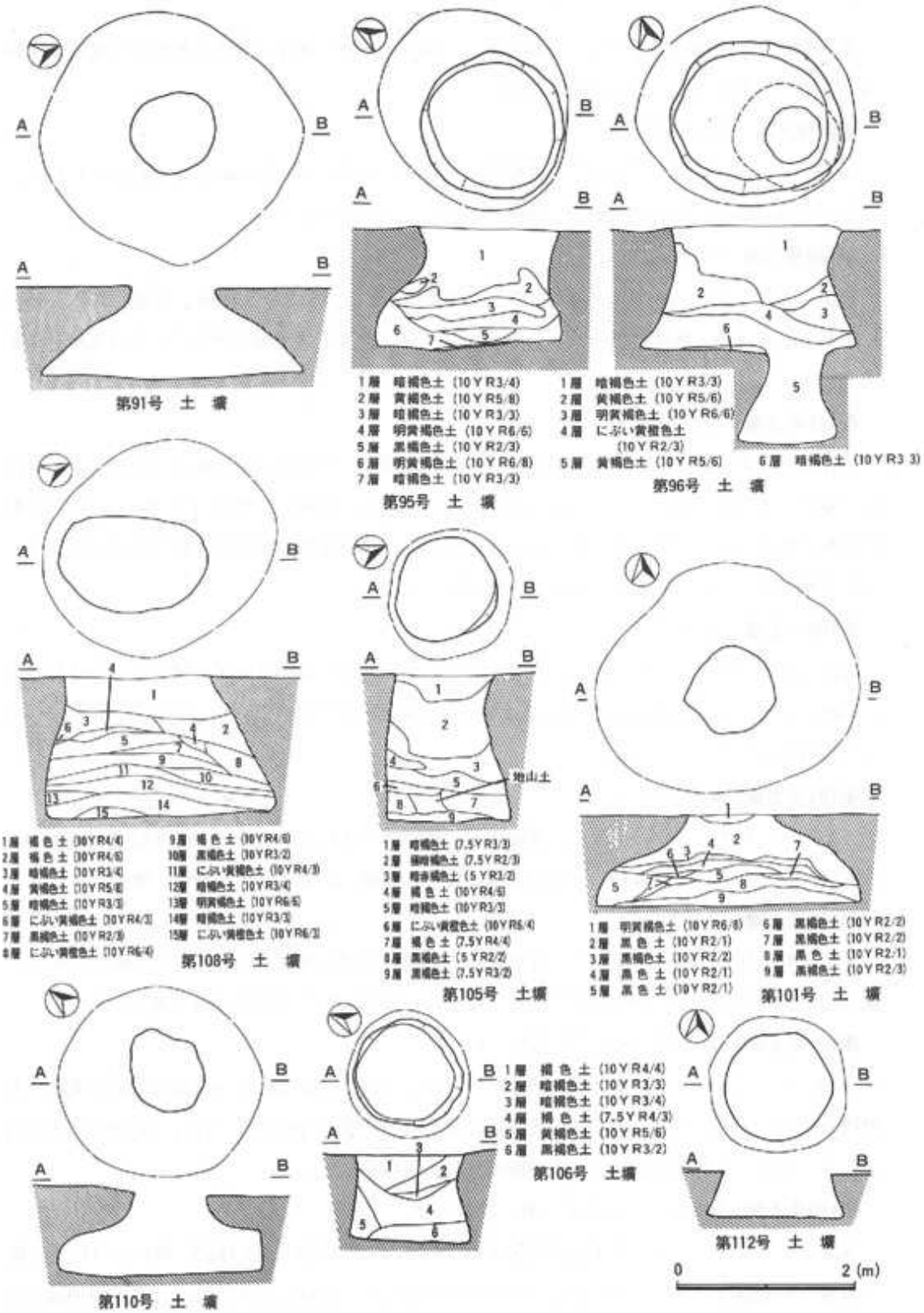
A₁区，G—17グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口径1.60×1.54m，底径2.28×2.07m，深さ 139.3cmを計る。底面は凹凸があり軟弱である。覆土は7層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第96号土壙（第367図，375図29・30）

A₁区，G—16・17グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。第94号土壙と重複し本遺構が新しいと考えられる。口径1.93×1.74m，底径2.43×2.33m，深さ 157.0cmを計る。南東側床面に口径0.62×0.61m，底径1.20×1.18m，深さ 102.8cmの小型のフラスコ状ピットをもつ。覆土は6層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉と考えられる土器片を出土。

第98号土壙（第368図，376図5・6）

A₁区，E・F—16グリッド，第115号住居南西壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第115号住居と重複し本遺構が新しい。口径1.02×0.84m，底径1.40×0.91m，深さ 113.2cmを計る。底面



第367図 第91・95・96・101・105・106・108・110・112号土壙実測図

は北西側から南東側に緩く傾斜し平坦である。覆土は4層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉，中期末葉と考えられる土器片を出土。

第99号土壙（第368図）

A_1区，G—16グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口径0.72×0.70m，底径1.24×1.18m，深さ57.5cmを計る。底面は東側から西側に傾斜しており平坦である。

第100号土壙（第366図）

A_1区，ZC—11グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口径1.36×1.20m，底径1.52×1.46m，深さ46.2cmを計る。底面は軽いレンズ状を呈している。覆土は3層に区分でき人為堆積を呈する。

第101号土壙（第367図，376図7～11）

A_1区，G・H—21グリッド，第45号住居内南西壁寄りに位置し，住居床面で確認。第45号住居と重複し本遺構が古い。口径1.02×0.96m，底径3.00×3.00m，深さ 107.2cmを計る。底面は平坦で軟弱である。覆土は9層に区分でき上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。中期中葉（若干），中期後葉（多量）の土器片を出土。

第105号土壙（第367図）

A_1区，E—19グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。西側に第53号住居と接する。口径1.17×1.13m，底径1.45×1.26m，深さ64.9cmを計る。底面は若干凹凸がある。覆土は9層に区分でき人為堆積と考えられる。

第106号土壙（第367図）

A_1区，H—17グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口径1.21×1.19m，底径1.46×1.38m，深さ98.7cmを計る。底面は若干凹凸がある。覆土は6層に区分でき人為堆積と考えられる。

第108号土壙（第367図）

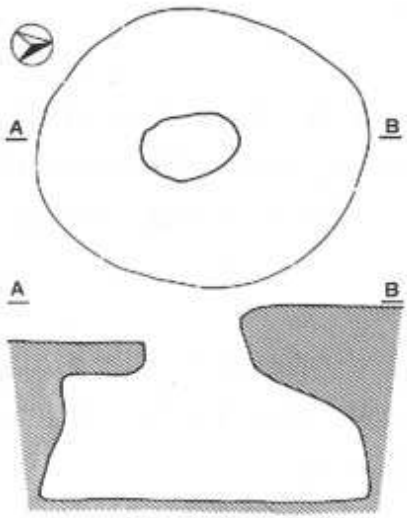
A_1区，H—16グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口径1.68×1.09m，底径2.65×2.45m，深さ 155.8cmを計る。底面は平坦である。覆土は15層に区分でき自然堆積と考えられる。

第109号土壙（第368図，376図19・20）

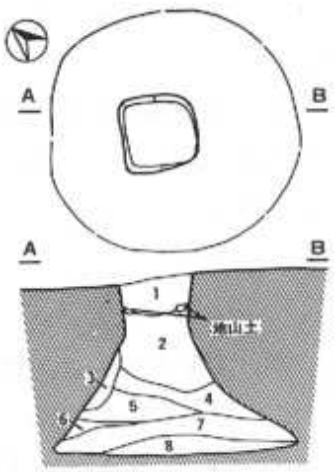
A_1区，E—16グリッド，第115号北壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第115号住居と重複し本遺構が新しい。口径0.92×0.59m，底径3.11×2.61m，深さ 183.0cmを計る。底面はほぼ平坦である。堆積は人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第110号土壙（第367図，376図15・16，389図5）

A_1区，F—17グリッド，第116号住居南東壁際に位置し住居床面で確認。第102・116号住居と重複し本遺構はいずれよりも古い。口径1.00×0.82m，底径2.22×2.21m，深さ89.0cmを計る。底面は若干凹凸がありやや軟弱である。復元土器（地文のみ），中期後葉の土器片を出土。

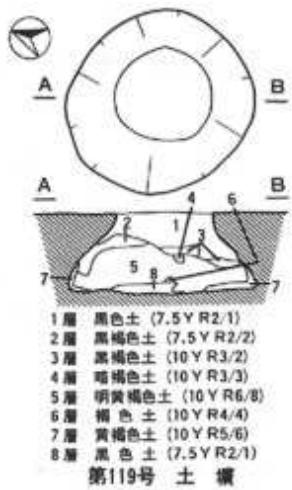


第109号 土 壙



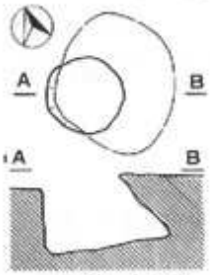
1層 褐 色 土 (10Y R4/4)
2層 暗褐色土 (10Y R3/3)
3層 褐 色 土 (10Y R4/6)
4層 暗褐色土 (10Y R3/4)
5層 にぶい黄褐色土 (10Y R4/3)
6層 黒褐色土 (10Y R2/3)
7層 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4)
8層 黒褐色土 (10Y R3/2)

第117号 土 壙

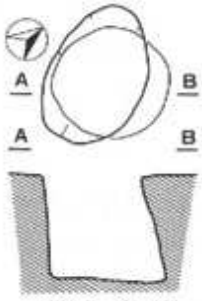


1層 黒色土 (7.5Y R2/1)
2層 黒褐色土 (7.5Y R2/2)
3層 黒褐色土 (10Y R3/2)
4層 暗褐色土 (10Y R3/3)
5層 明黄褐色土 (10Y R6/8)
6層 褐 色 土 (10Y R4/4)
7層 黄褐色土 (10Y R5/6)
8層 黒 色 土 (7.5Y R2/1)

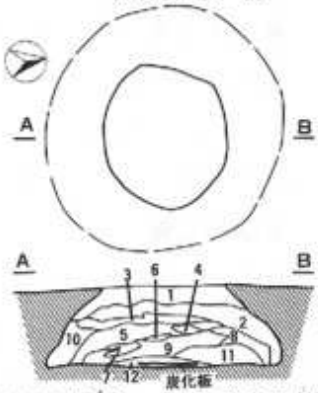
第119号 土 壙



第99号 土 壙

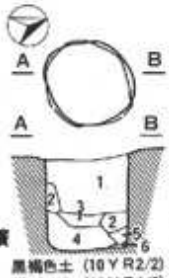


第77号 土 壙



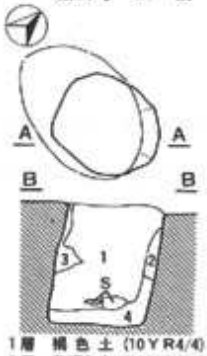
1層 黒褐色土 (5 Y R3/1)
2層 暗赤褐色土 (5 Y R3/2)
3層 褐 色 土 (7.5Y R4/4)
4層 褐 色 土 (10Y R4/4)
5層 暗褐色土 (10Y R3/3)
6層 暗褐色土 (10Y R3/4)
7層 褐 色 土 (7.5Y R4/4)
8層 黒褐色土 (7.5Y R3/2)
9層 黒褐色土 (10Y R3/2)
10層 暗褐色土 (10Y R3/3)
11層 黒褐色土 (10Y R2/3)
12層 黒褐色土 (7.5Y R2/2)
炭化物

第80号 土 壙



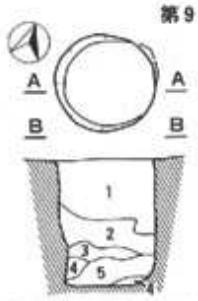
1層 黒褐色土 (10Y R2/2)
2層 褐 色 土 (10Y R4/6)
3層 黒 色 土 (10Y R2/1)
4層 暗褐色土 (10Y R3/4)
5層 黒 色 土 (10Y R2/1)
6層 明黄褐色土 (10Y R6/6)

第9号 土壙



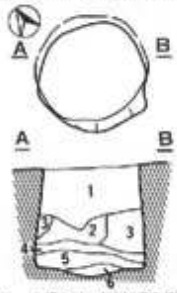
1層 褐 色 土 (10Y R4/4)
2層 黄褐色土 (10Y R5/4)
3層 明黄褐色土 (10Y R6/6)
4層 黄褐色土 (10Y R5/6)

第98号 土 壙



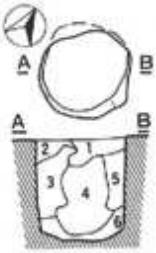
1層 黒褐色土 (10Y R3/4)
2層 黒 色 土 (10Y R2/1)
3層 黒 色 土 (10Y R2/1)
4層 にぶい黄褐色土 (10Y R5/4)
5層 黒 色 土 (10Y R2/1)

第10号 土 壙



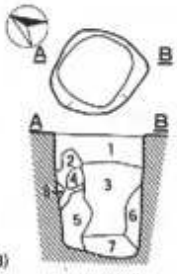
1層 暗褐色土 (10Y R3/3)
2層 褐 色 土 (10Y R4/6)
3層 黄褐色土 (10Y R5/6)
4層 黄褐色土 (10Y R5/6)
5層 黒 色 土 (10Y R2/1)
6層 褐 色 土 (10Y R4/6)

第19号 土 壙



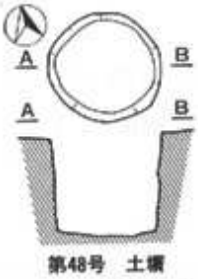
1層 極暗褐色土 (7.5Y R2/3)
2層 黒褐色土 (7.5Y R3/2)
3層 にぶい赤褐色土 (5 Y R4/4)
4層 黒褐色土 (5 Y R2/2)
5層 黒褐色土 (5 Y R2/2)
6層 褐 色 土 (7.5Y R4/3)

第20号 土 壙

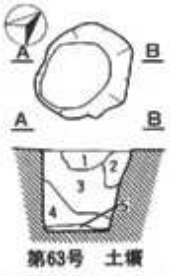


1層 黒褐色土 (5 Y R2/2)
2層 褐色土 (7.5Y R4/4)
3層 黒褐色土 (5 Y R2/2)
4層 赤黒色土 (2.5Y R2/1)
5層 明褐色土 (7.5Y R5/6)
6層 にぶい褐色土 (7.5Y R5/4)
7層 暗褐色土 (10Y R3/3)
8層 黒褐色土 (5 Y R2/2)

第24号 土 壙



第48号 土壙



1層 黒褐色土 (10Y R2/3)
2層 暗褐色土 (10Y R3/3)
3層 黒褐色土 (10Y R2/3)
4層 黒褐色土 (10Y R2/2)
5層 黒 色 土 (10Y R2/1)

第63号 土壙

0 2 (m)

第368図 第9・10・19・20・24・48・63・77・80・98・99・109・117・119号土壙実測図

第111 B号土壙（第370図）

A_1区，ＺＤ－７グリッド，第87号住居西壁際に位置し，第111Ａ号土壙底面で確認。第87号住居・第111Ａ号土壙と重複し本遺構は第111Ａ号土壙より古いと考えられる。遺構西側半分は未発掘部で全貌は明かでないが口径1.24m，底径1.50m，を一つの径とし住居床面から深さ87.5cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。

第112号土壙（第367図）

A_1区，ＺＢ－８グリッド，第87号住居南東寄りに位置し，住居床面で確認。第１号溝・第87号住居と重複し本遺構がいずれよりも古い。口径1.20×1.20m，底径1.54×1.52m，深さ44.0cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。堆積は人為堆積を呈する。

第117号土壙（第368図，376図17・18）

A_1区，ＺＧ－19グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。口縁部は0.70×0.69mの方形，底径2.24×2.10m，深さ 163.5cmを計る。底面は南側から北側に若干傾斜し，平坦でやや軟弱である。覆土は８層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉の土器片を出土。

第119号土壙（第368図）

Ｂ区，Ｘ－38グリッドに位置し，Ⅴ層上面で確認。口径0.49×0.48m，底径1.73×1.60m，深さ72.1cmを計る。底面南東壁側に37×36×37.2cmの方形のピットをもつ。底面は若干凹凸があり軟弱である。覆土は８層に区分でき人為堆積を呈する。

第122号土壙（第370図）

Ｃ区，ＡＫ－47グリッドに位置し，第121号土壙底面で確認。第121号土壙と重複し本遺構が古い。口径0.81×0.78m，底径0.97×0.91m，深さ50.3cmを計る。底面は若干凹凸がありやや軟弱である。覆土は３層に区分でき人為堆積を呈する。

タイプＢ

第９号土壙（第368図，372図９）

A_1区，ＺＤ－23グリッド，第21Ａ号住居東壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第21Ａ号住居と重複する。平面形は0.85×0.76mの円形を呈し深さ79.7cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は６層に区分でき人為堆積を呈する。覆土中より少量の土器片を出土。

第10号土壙（第368図，372図10）

A_1区，ＺＥ－23グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は0.94×0.90mの円形を呈し深さ 116.2cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は５層に区分でき人為堆積を呈する。中期中葉と考えられる土器片を出土。

第19号土壙（第368図，378図１）

A_1区，ＺＤ－22・23グリッド，第32号住居北壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第21Ｂ・32号

住居と重複し本遺構はいずれよりも古い。平面形は1.00×0.95mの円形を呈し深さ94.0cmを計る。底面は中央部付近が深く軟弱である。覆土は6層に区分でき上層部は人為堆積，下層部は自然堆積を呈する。覆土中より掻器1点を出土。

第20号土壙（第368図）

A_1区，ZD—21グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は0.86×0.85mの円形を呈し深さ88.6cmを計る。底面は軽いレンズ状を呈し堅くしまっている。覆土は6層に区分でき人為堆積を呈する。

第24号土壙（第368図）

A_1区　ZE—21グリッド，第31号住居北東壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第31号住居と重複し本遺構が古い。平面形は0.81×0.76mの円形を呈し深さ55.2cmを計る。底面は北西側から南東側にゆるく傾斜しており平坦で堅くしまっている。覆土は8層に区分でき人為堆積を呈する。

第48号土壙（第368図）

A_1区　ZC—21グリッド，第42A住居内中央に位置し，住居床面で確認。第42A号住居と重複する。平面形は1.03×1.02mの円形を呈し深さ94.9cmを計る。底面は凹凸があり軟弱である。底面より自然石2個(35×10cm，15×10cm）を出土。

第56号土壙（第365図）

A_1区，G—20グリッド，第84号住居南東壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第84号住居と重複し本遺構が古い。平面形は1.09×0.84mの楕円形を呈し深さ79.1cmを計る。底面は軽いレンズ状を呈し堅くしまっている。覆土は5層に区分でき人為堆積を呈する。

第63号土壙（第368図）

A_1区，D—21グリッドに位置し，Ⅳ層下面で確認。南側に第62F号住居が近接する。平面形は0.96×0.82mの円形を呈し深さ80.5cmを計る。底面は平坦でやや軟弱である。覆土は5層に区分でき人為堆積を呈する。

第76号土壙（第369図，375図7～9）

A_1区，A—12・13グリッド，第109号住居内南西壁際に位置し，住居床面で確認。第109号住居と重複し本遺構が古い。平面形は1.50×1.38mの円形を呈し深さ91.0cmを計る。底面は若干凹凸があり軟弱である。覆土は2層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第97号土壙（第369図，376図1～4）

A_1区，G—16グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は1.23×1.02mの円形を呈し深さ79.3cmを計る。底面は北西側から南東側に軽く傾斜し平坦である。覆土は5層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

タイプC

第2号土壙（第369図）

A₁区，B—15グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は1.04×0.81mの楕円形を呈し深さ32.9cmを計る。壁・底面とも軽いレンズ状を呈する。覆土は6層に区分でき人為堆積と考えられる。2～4層から少量の土器片出土。

第5号土壙（第396図，371図4～6）

A₁区，B—15グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は1.45×1.08mの楕円形を呈し深さ90.7cmを計る。壁は直線的で北壁側は浅い掘り込みをもち底面はほぼ平坦で堅くしまっている。覆土は4層に区分でき人為堆積と考えられる。遺構南側覆土中より中期後葉の土器片を出土。

第12号土壙（第369図）

A₁区，D—18グリッド，第9号住居内中央やや北寄りに位置し住居床面で確認。第9号住居と重複し本遺構が古い。平面形は0.70×0.58mの楕円形を呈し深さ36.3cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面はほぼ平坦である。覆土は4層に区分でき人為堆積を呈する。

第30号土壙（第369図）

A₁区，ZE—21グリッド，第29A号住居中央に位置し，住居床面で確認。第29A号住居と重複し本遺構が古い。平面形は1.45×1.30mの円形を呈し深さ28.3cmを計る。壁・底面とも軽いレンズを呈する。覆土は8層に区分でき人為堆積を呈する。

第44号土壙（第369図，374図3～6）

A₁区，ZB—20グリッド，第42A号住居内南西寄りに位置し，住居床面で確認。第42A・42B・64号住居と重複し本遺構はいずれより新しい。平面形は2.26×1.86mの楕円形を呈し深さ40.5cmを計る。南西壁は鋭く他は緩く立ち上がり底面は大きな波状を呈する。覆土は9層に区分でき人為堆積を呈する。中期後葉，後期初頭の土器片，円盤状土製品1点を出土。

第59号土壙（第365図）

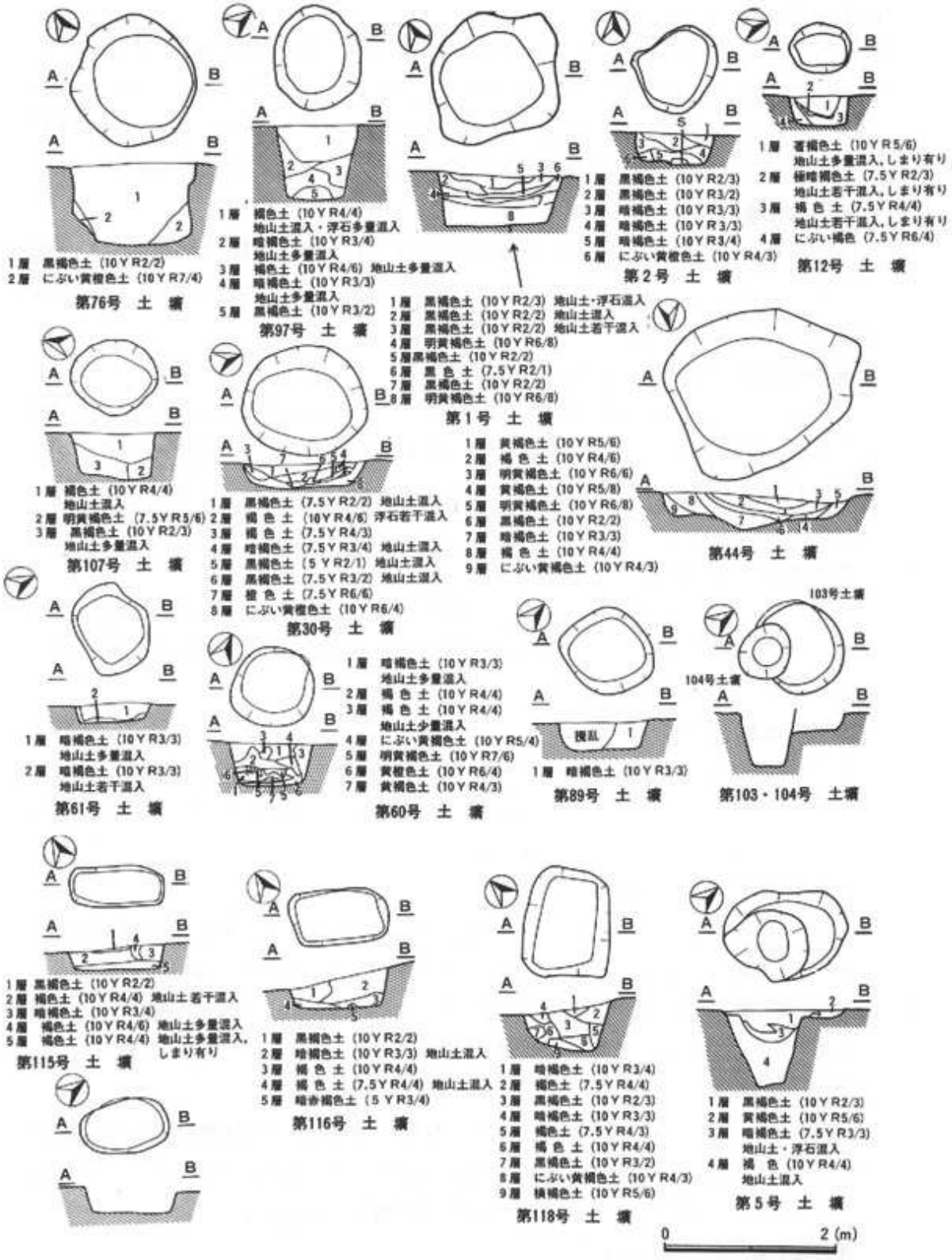
A₁区，G—18グリッドに位置しⅣ層上面で確認。平面形は1.40×1.24mの円形を呈し深さ26.3cmを計る。底面は平坦で堅くしまっている。覆土は5層に区分でき人為堆積を呈する。

第60号土壙（第369図）

A₁区，ZE—23グリッド，第24号住居内南壁際に位置し，住居床面で確認。第24号住居と重複し本遺構が古い。平面形は1.02×0.94mの円形を呈し深さ51.5cmを計る。底面は堅くしまっている。覆土は7層に区分でき人為堆積を呈する。

第61号土壙（第369図）

A₁区，ZE—23グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は1.06×0.84mの楕円形を呈し深さ22.0cmを計る。覆土は2層に区分でき人為堆積を呈する。



第369図　第1・2・5・12・30・44・60・61・76・89・97・103・104・107・115・116・118・127号土壙実測図

第68号土壙（第366図，375図４）

A₁区，F—17グリッド，第102号住居南壁際に位置し第67号土壙底面で確認。第１号溝，第102号住居，第67号土壙と重複し本遺構は第１号溝，第102号住居より古く第67号土壙より古いと考えられる。平面形は1.34×0.84mの楕円形を呈する。底面は２段になっており深さは東側で70.1cm，西側で22.0cmを計る。堆積は人為堆積を呈する。中期後葉の土器片を出土。

第103号土壙（第369図）

A₁区，D—13グリッドに位置しⅣ層上面で確認。第104号土壙と重複し本遺構が古い。平面形は1.04×(0.94)mの円形を呈し深さ20.5cmを計る。底面は若干凹凸があり堅くしまっている。覆土中より若干の土器片を出土。

第104号土壙（第369図，376図12～14，377図６）

A₁区，D—13グリッド，第108号住居北壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第108号住居，第103号土壙と重複し本遺構は第108号住居より古く第103号土壙より新しい。平面形は0.66×0.60mの円形を呈し深さ59.7cmを計る。底面は若干凹凸があり堅くしまっている。中期中葉の土器片，石篦１点を出土。

第107号土壙（第369図）

A₁区，H—16グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。平面形は1.01×0.90mの楕円形を呈し深さ72.8cmを計る。壁は鋭く立ち上がり底面は北側から南側に緩く傾斜し若干凹凸がある。覆土は３層に区分でき人為堆積を呈する。

第120号土壙（第370図）

B区，W—37・38グリッドに位置し，Ⅴ層上面で確認。西側は未発掘区で全貌は明かでないが，平面形は(2.78)×2.61mの円形を呈し深さ 9.6cmを計る。壁は緩やかに立ち上がり底面はほぼ平坦で堅くしまっている。覆土は単一層である。

第121号土壙（第370図，378図13）

C区，AK—47グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。第122号土壙と重複し本遺構が新しい。北東側が未発掘区の為一部を欠くが平面形は2.58×2.11mの楕円形を呈し深さ48.9cmを計る。東半分の壁は若干外側に入り込み底面は凹凸がありやや軟弱である。覆土は５層に区分でき人為堆積を呈する。覆土中より凹石１点出土する。

第123号土壙（第370図）

C区，AN・AO—48・49グリッド，第122号住居中央に位置し住居床面で確認。第122号住居と重複し本遺構が古い。平面形は2.16×2.05mの円形を呈し深さ 126.1cmを計る。床面は凹凸があり中央がやや深い。覆土は４層に区分でき人為堆積を呈する。

第71号土壙（第370図，382図４）

A₁区，ZD—18グリッド，第87号住居北東壁際に位置し，住居床面で確認。第87号住居と重

複し本遺構が新しいと考えられる。平面形は1.81×1.32mの楕円形を呈し深さ 6.1cmを計る。底面は若干凹凸があり堅くしまっている。遺構底面西壁際に底部欠損土器が倒立状態で埋設されている。同底部は埋設穴覆土より出土。埋設穴は69.0×58.0cmの楕円形を呈し深さ45.3cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は東側から西側に軽く傾斜する。埋設された土器は口径46.2cm，底径12.0cm，器高51.0cmの中期後葉大型深鉢形土器である。

第111 A号土壙（第370図，387図4）

A_1区，ZD－7グリッド，第87号住居内西壁に位置し，住居床面で確認。第87号住居，第111B号土壙と重複し本遺構は第87号住居より新しく第111B号土壙より新しいと考えられる。平面形は2.00×(1.96)mの円形を呈し深さ37.7cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦で堅くしまっている。堆積は人為堆積と考えられる。遺構底面ほぼ中央に口縁部欠損土器が正立状態で埋設されている。埋設穴は20.5×18.5cmの円形を呈し深さ12.6cmを計る。壁は緩やかに立ち上がる。埋設された土器は底径 6.7cm，推定口径16.5cm，推定器高23.0cmの中期後葉深鉢形土器である。

タイプD

第1号土壙（第369図，371図1～3，377図2）

A_1区，C－15グリッド，第7号住居西壁際に位置し，Ⅳ層上面で確認。第7・8号住居と重複し本遺構がいずれよりも古い。規模1.46×1.44m，深さ57.7cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。覆土は8層に区分でき自然堆積と考えられる。覆土上層部より中期後葉の土器片，覆土より石鏃1点を出土。

第89号土壙（第369図）

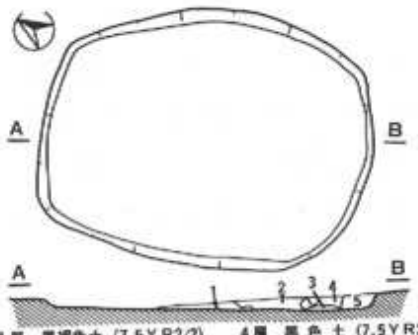
A_1区，ZD－17グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。長軸方向N－72°－W，規模1.00×0.94m，深さ29.6cmを計る。堆積は人為堆積と考えられる。

第113号土壙（第370図）

B区，XY－39グリッドに位置し，Ⅴ層上面で確認。長軸方向N－21°－W，規模3.07×2.42m，深さ 9.4cmを計る。遺構北西隅（40×30×19.9cm，楕円形）とほぼ中央（48×30×3.3cm，方形）にピットをもつ。また遺構外北東壁脇にピット（35×34×18.2cm，円形）をもつ。底面は北西側から南東側に緩く傾斜しやや凹凸があり堅くしまっている。覆土は5層に区分でき人為堆積を呈する。

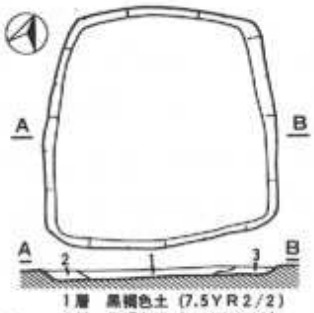
第114号土壙（第370図）

B区，AA・AB－39グリッドに位置し，Ⅴ層上面で確認。長軸方向N－18°－W，規模2.23×2.14m，深さ 9.8cmを計る。壁は緩やかに立ち上がり底面は平坦で堅くしまっている。覆土は3層に区分でき自然堆積を呈する。



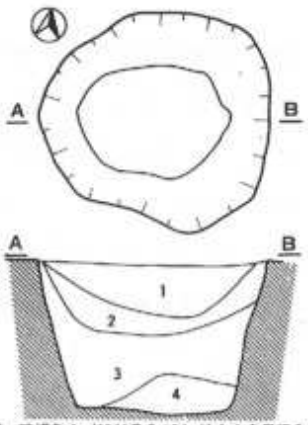
1層　黒褐色土（7.5YR2/2）
2層　黒褐色土（10YR2/2）
3層　黒褐色土（10YR2/3）
4層　黒色土（7.5YR2/1）
5層　黒褐色土（7.5YR2/2）

第113号　土　壙



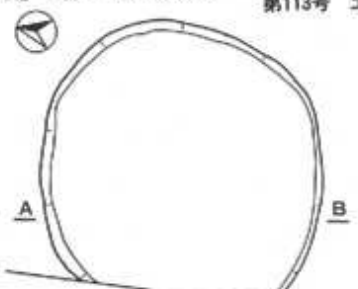
1層　黒褐色土（7.5YR2/2）
2層　黒褐色土（10YR2/2）
3層　黒褐色土（10YR2/2）

第114号　土　壙



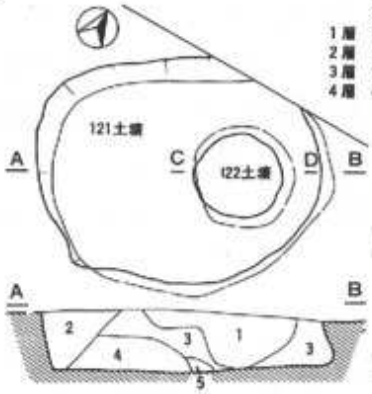
1層　暗褐色土（10YR3/3）地山土多量混入
2層　褐色土（10YR4/6）地山土多量混入
3層　黄褐色土（10YR5/6）地山土多量混入
4層　暗褐色土（10YR3/4）地山土・浮石多量混入

第123号　土　壙



1層　黒褐色土（10YR2/2）地山土少量混入

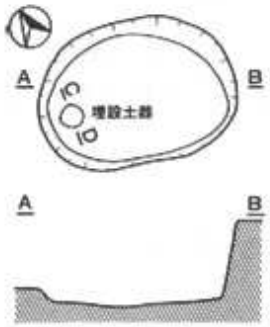
第120号　土　壙



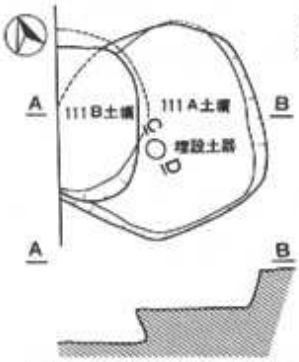
第121・122号　土　壙

第121号土壙土層注記
1層　黒褐色土（10YR2/2）地山土多量混入
2層　黒褐色土（10YR2/3）
3層　黒褐色土（10YR2/2）
4層　黄褐色土（10YR5/6）地山土多量混入
5層　灰黄褐色土（10YR4/2）浮石多量混入

第122号土壙土層注記
1層　黒褐色土（10YR2/2）地山土多量混入
2層　黒褐色土（10YR3/1）地山土少量混入
3層　黒褐色土（10YR3/2）地山土多量混入

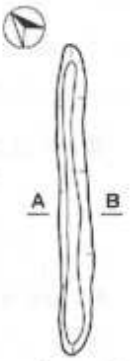


第71号　土　壙



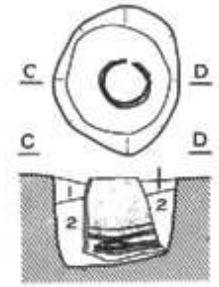
第111号A・111B号　土　壙

第124号　土　壙



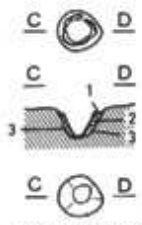
1層　黒色土（10YR2/1）

第125号　土　壙



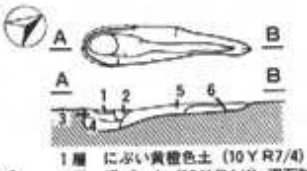
1層　黄褐色土（10YR5/6）
2層　明黄褐色土（10YR6/6）

第71号土壙内埋設土器微細図
（縮尺1/30）



1層　明黄褐色土（10YR6/6）
2層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）
3層　にぶい黄橙色土（10YR6/4）

第111A号土壙内埋設土器微細図
（縮尺1/30）



1層　にぶい黄橙色土（10YR7/4）地山粒・浮石粒混入
2層　褐色土（10YR4/4）浮石粒混入
3層　黒褐色土（5YR2/2）地山粒若干混入
4層　暗褐色土（7.5YR3/3）
5層　黒褐色土（5YR2/1）地山粒・浮石粒若干混入
6層　褐色土（7.5YR4/4）地山粒・浮石粒若干混入

第126号　土　壙

第370図　第71・111A・111B・113・114・120～126号土壙実測図

0　2(m)

第115号土壙（第369図）

A_1区，ＺＨ・ＺＧ—20グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。西側に第116号土壙が近接する。長軸方向Ｎ—65°—Ｗ，規模1.13×0.47m，深さ24.6cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面はやや凹凸があり堅くしまっている。覆土は５層に区分でき人為堆積を呈する。

第116号土壙（第369図）

A_1区，ＺＨ・ＺＧ—19グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。東側に第115土壙が近接する。長軸方向Ｎ—54°—Ｗ，規模1.15×0.63m，深さ31.7cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面はやや凹凸があり堅くしまっている。覆土は５層に区分でき人為堆積を呈する。

第118号土壙（第369図）

A_1区，ＺＪ—20グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。長軸方向Ｎ—31°—Ｅ，規模1.24×1.01m，深さ43.4cmを計る。底面は北東側から南西側に緩く傾斜する。覆土は９層に区分でき人為堆積を呈する。

第127号土壙（第369図）

A_1区，ＺＨ—16グリッドに位置し，Ⅳ層上面で確認。東側に第13号配石遺構が近接する。長軸方向Ｎ—27°—Ｅ，規模1.04×0.64m，深さ29.5cmを計る。北西壁の一部が若干外側に入り込み底面はほぼ平坦で堅くしまっている。

タイプＥ

第124号土壙（第370図）

A_1区，ＺＥ・ＺＤ—８グリッド，第87号住居内北東寄りに位置し，住居床面で確認。第87号住居と重複し本遺構が新しい。長軸方向Ｎ—13°—Ｗ，規模2.25×0.77m，深さ98.0cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦でやや軟弱である。堆積は自然堆積を呈する。

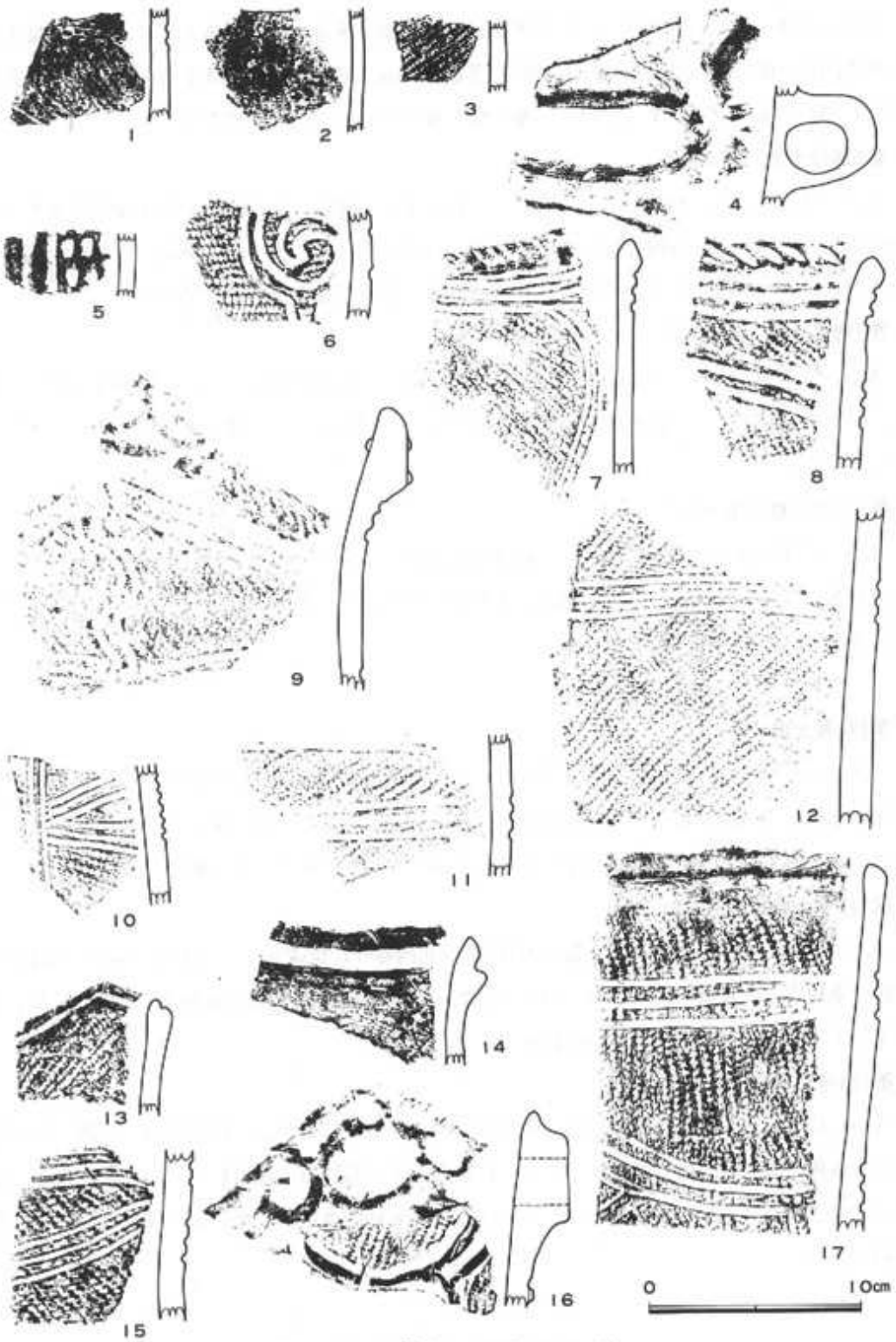
第125号土壙（第370図）

A_1区，ＺＢ—13・14グリッド，第110号住居内北西寄りに位置し，住居床面で確認。第110号住居と重複する。長軸方向Ｎ—43°—Ｅ，規模2.90×0.27m，深さ52.0cmを計る。壁は「Ｖ」字状を呈する。覆土は単一層で人為堆積を呈する。

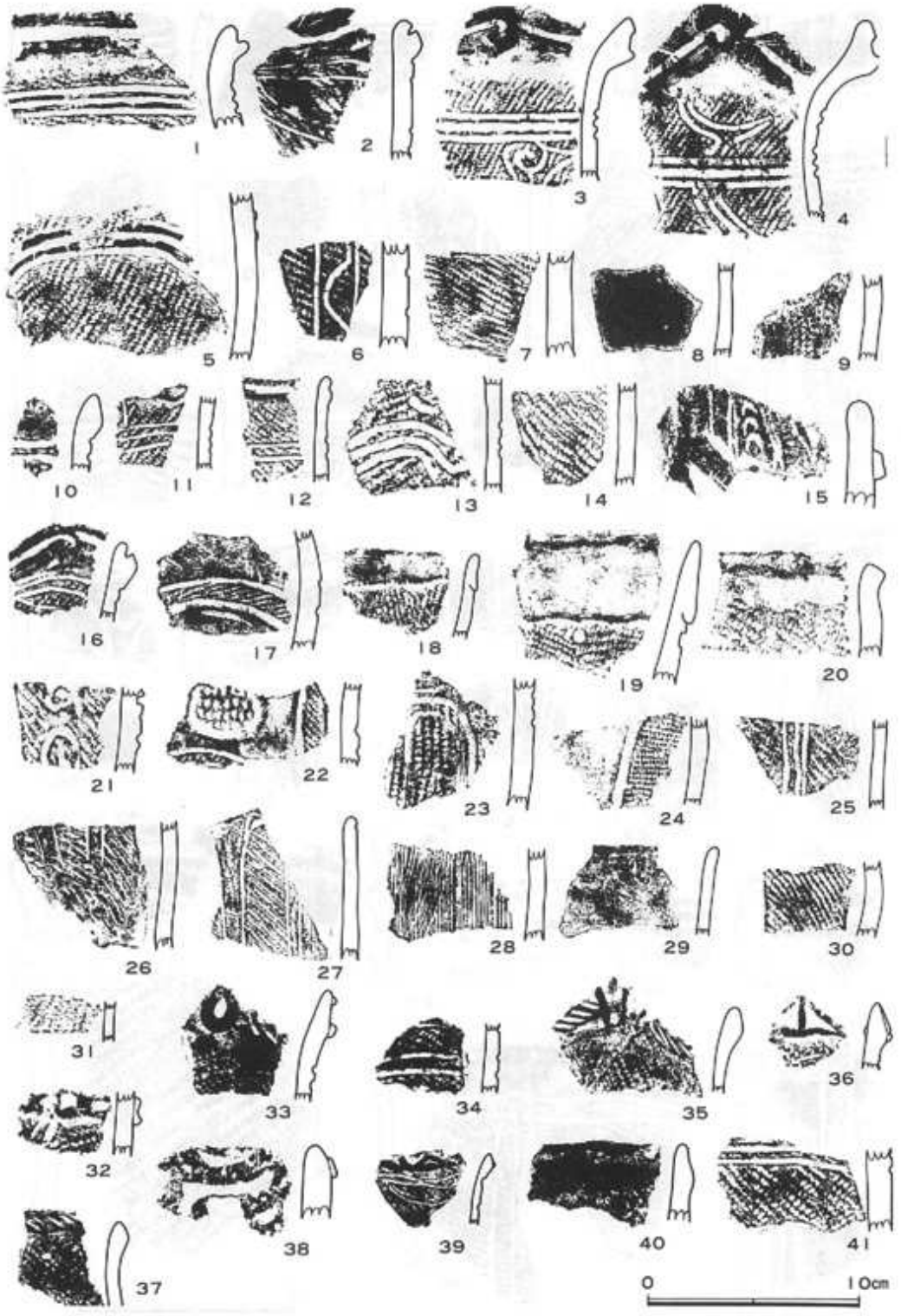
第126号土壙（第370図）

A_1区，Ｇ—19グリッド，第58号住居内中央やや南西寄りに位置し，住居床面で確認。第58号住居と重複し本遺構が古いと考えられる。長軸方向Ｎ—35°—Ｅ，規模1.54×0.33m，深さは最深部で20.6cmを計る。最深部をもつ南西壁は若干外側に入り込む。覆土は６層に区分でき人為堆積を呈する。

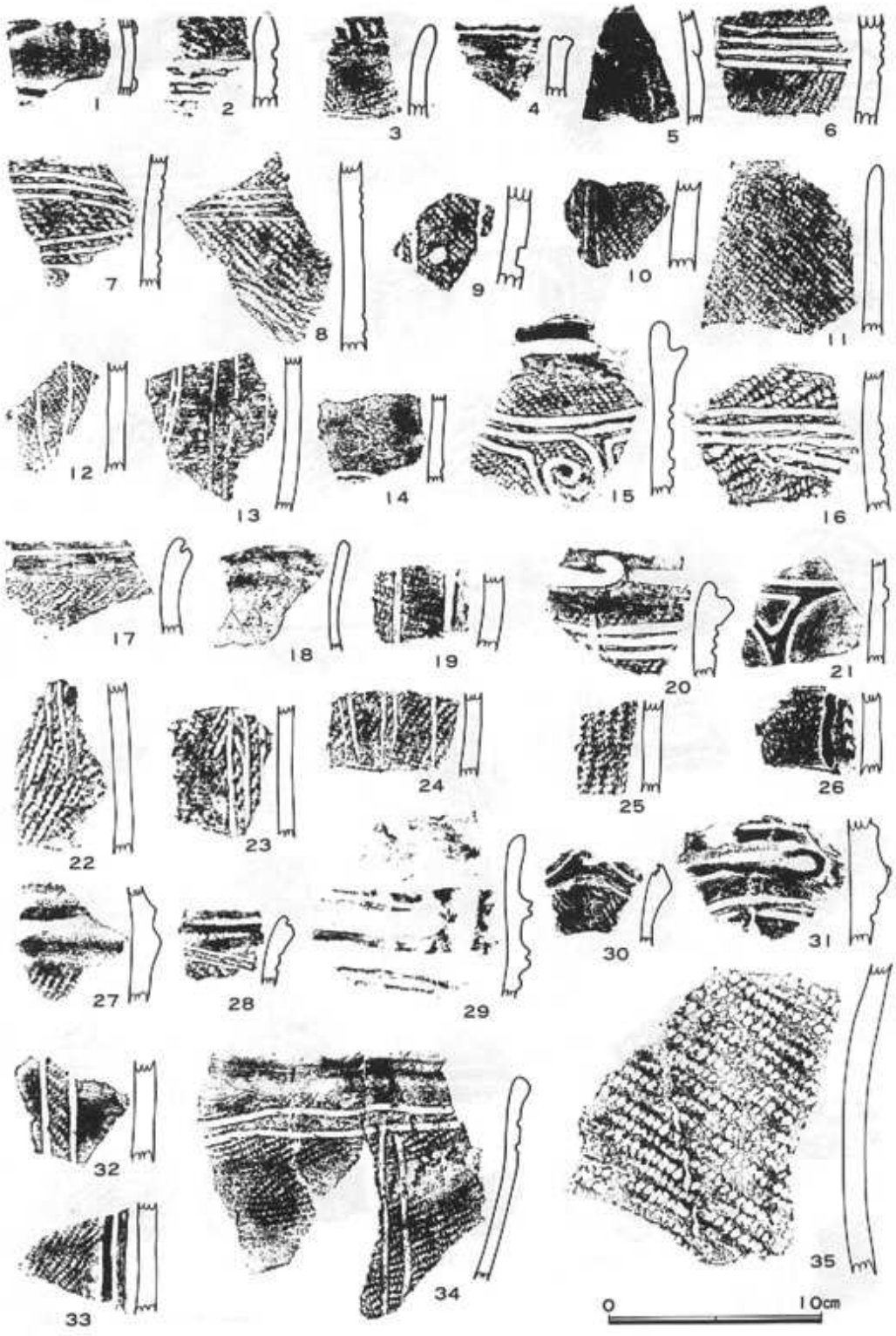
（佐藤　樹）



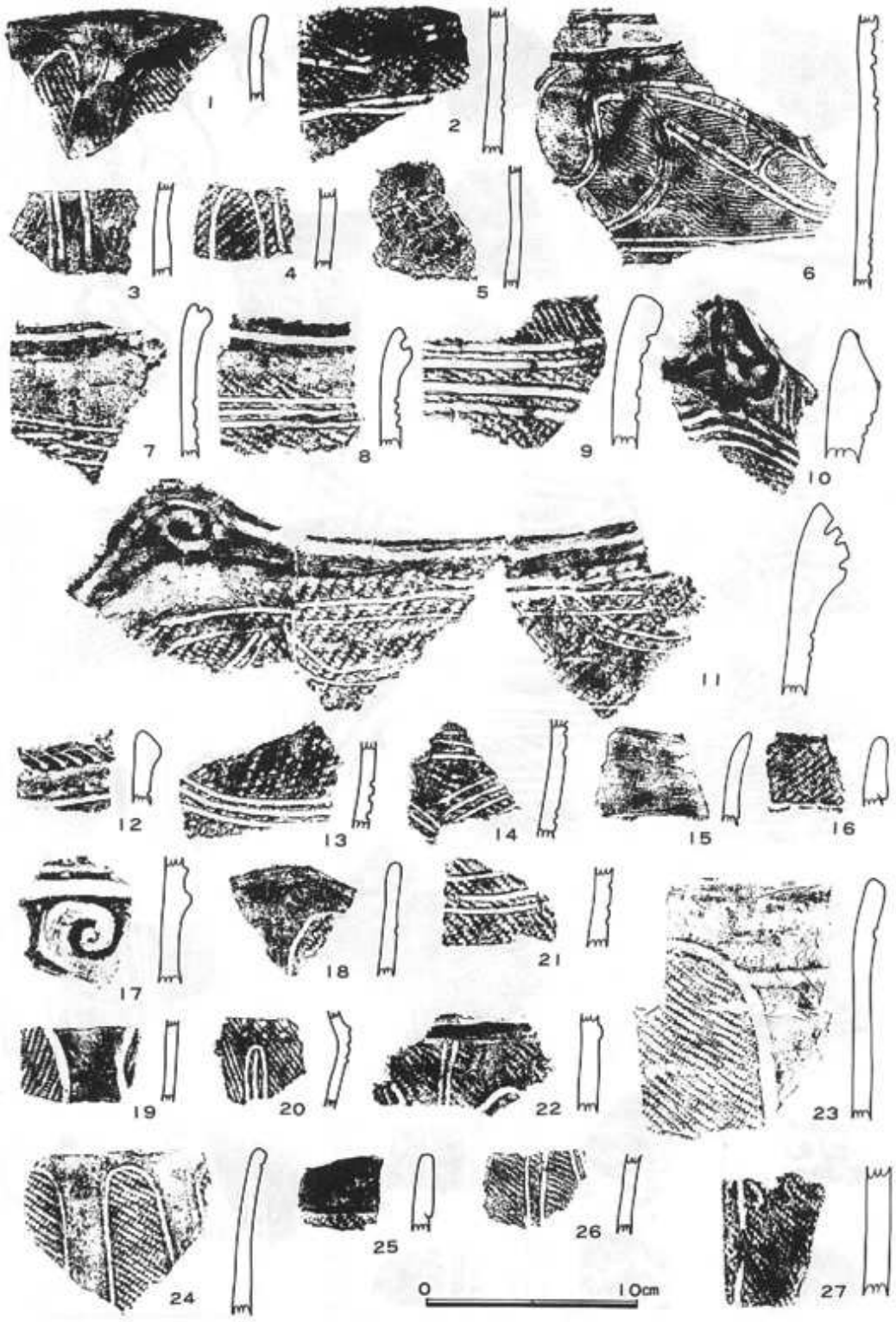
第371図　土壙出土土器拓影図（1）



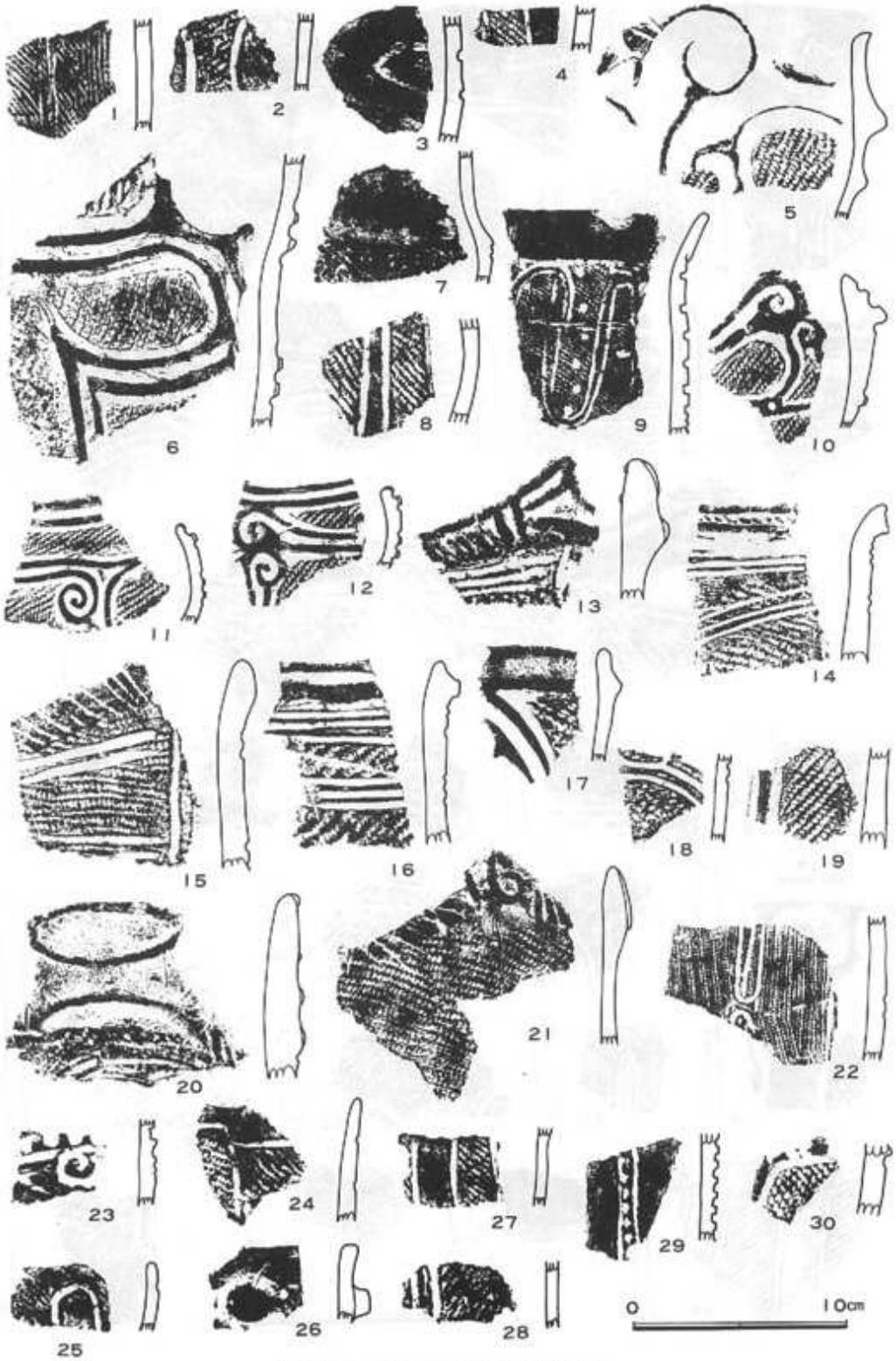
第372図　土壙出土土器拓影図　(2)



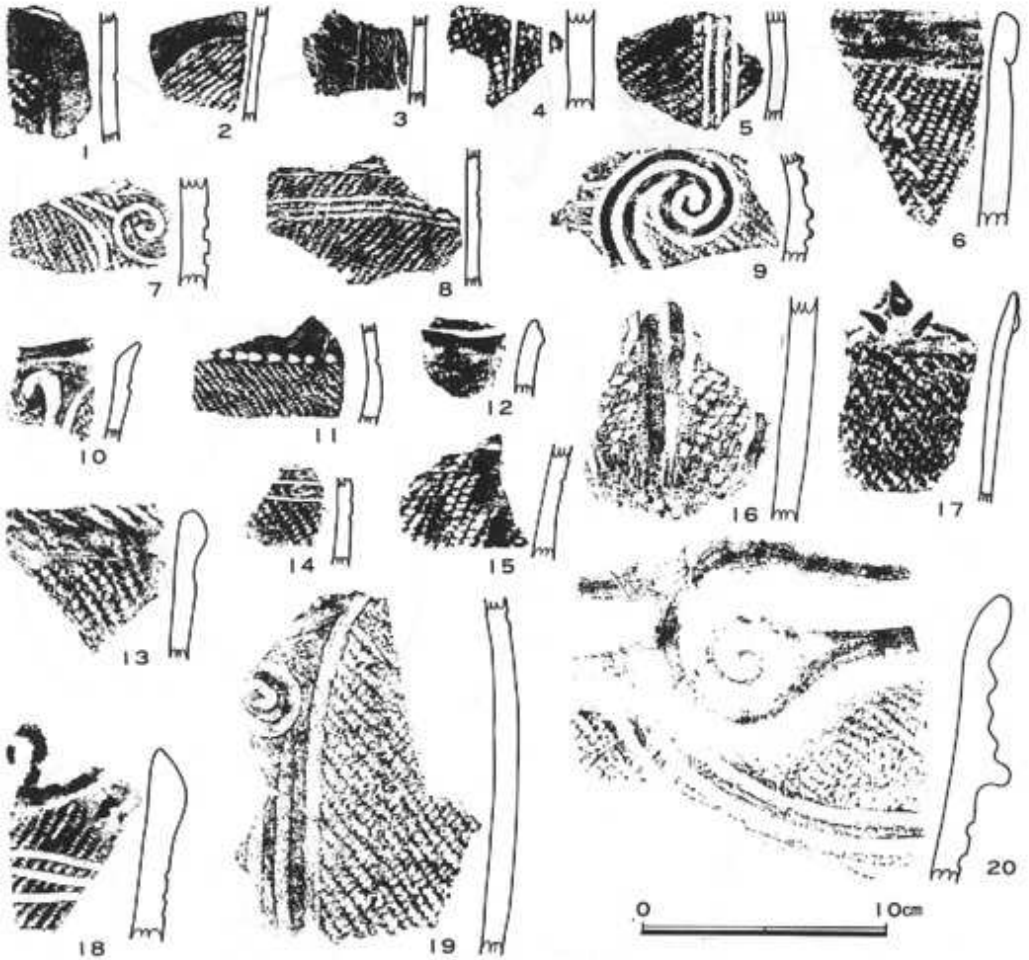
第373図　土壙出土土器拓影図(3)



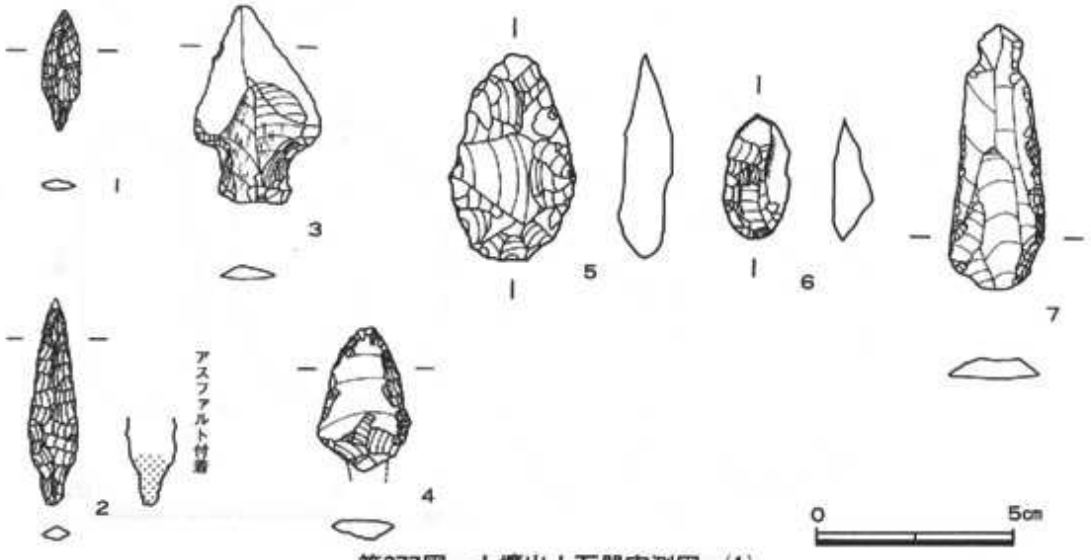
第374図　土壙出土土器拓影図(4)



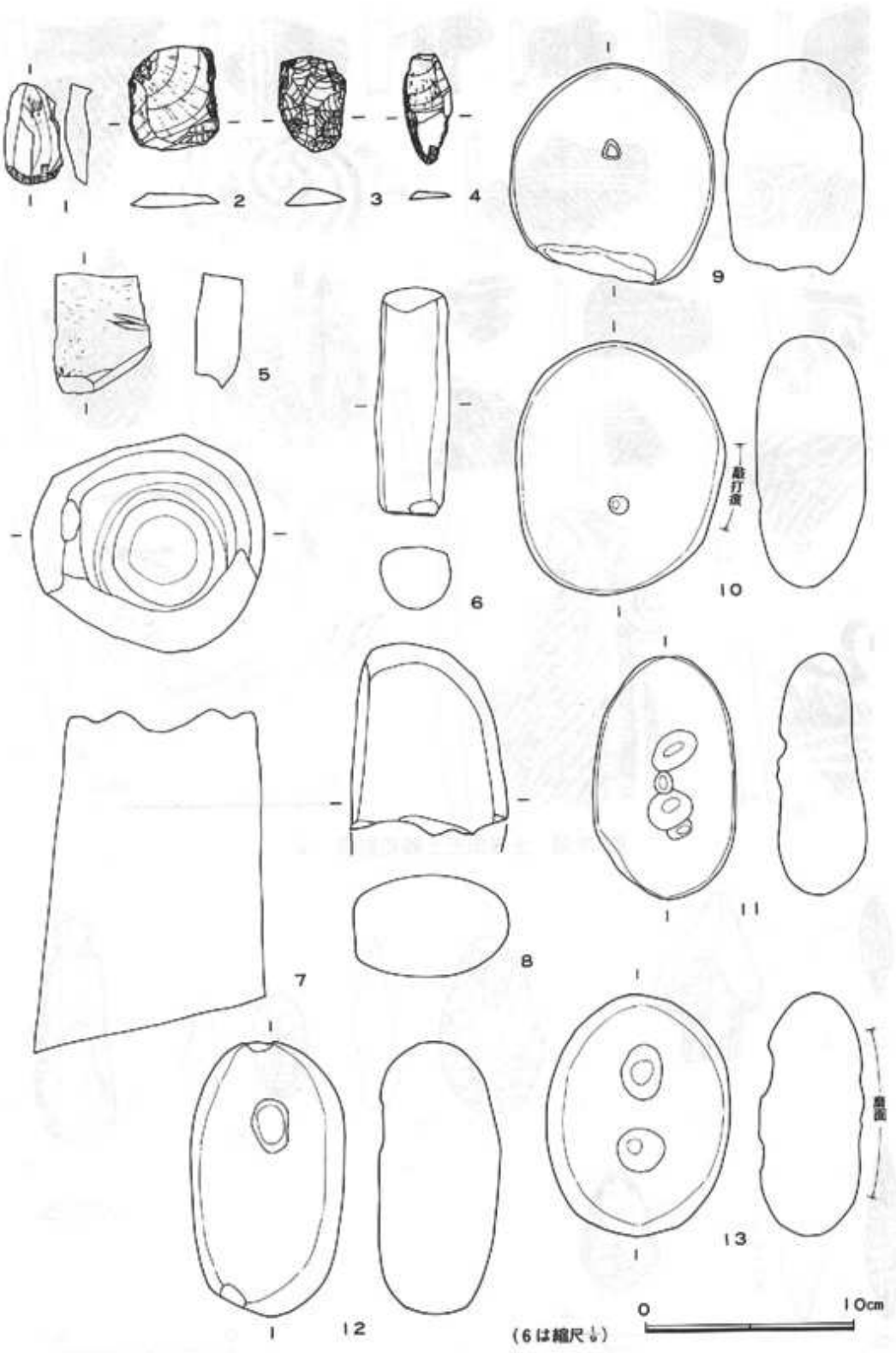
第375図　土壙出土土器拓影図(5)



第376図　土壙出土土器拓影図　(6)



第377図　土壙出土石器実測図　(1)



第378図　土壙出土石器実測図 (2)

第Ⅳ章　歴史時代の検出遺構

今回の調査で確認され，調査された歴史時代の遺構は，竪穴住居跡３棟，溝状遺構２条の計５遺構である。以下，各々の観察項目にしたがって述べていく。

１．竪穴住居跡

第１号竪穴住居跡（ＳＴ０１）第379図，ＰＬ31

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区Ａ₁区，ＺＤ—19，ＺＥ—19グリッドに位置し，第Ⅳ層上面において白色浮石粒を少量含んだ暗褐色土の落ち込みを確認した。本住居跡は遺跡内で最も標高の高い場所にあり，鹿角盆地を一望できる。重複関係は認められない。

〈形態・規模〉　平面形は方形を呈す。壁長は東壁305cm，西壁320cm，南壁365cm，北壁360cmを測る。床面積は8.20㎡を測る。主軸方向は磁北を指しＮ—0°—Ｅである。

〈壁・床〉　壁は床面よりほぼ垂直に立ち上がり，壁高は東壁59cm，西壁58cm，南壁67cm，北壁65cmを測る。床面は平坦で，カマドを中心として半径２ｍの範囲内が堅く踏み固められるが壁際に近くなるほど軟かくなる。

〈カマド〉　南壁の中央やや西寄りに構築され，残存状態は極めて良好である。袖部は大型の扁平な河原石を芯材として立て並べ，これに黄褐色粘土を貼りつけたものである。天井部は崩壊しており確認できなかった。熱焼部内は平坦で，ほぼ中央に坏形土器（第383図１）を倒立させ支脚としていた。煙道部は壁とともに垂直に立ち上がり，強い火熱をうけ赤変していた。

〈柱穴・ピット〉　確認できなかった。

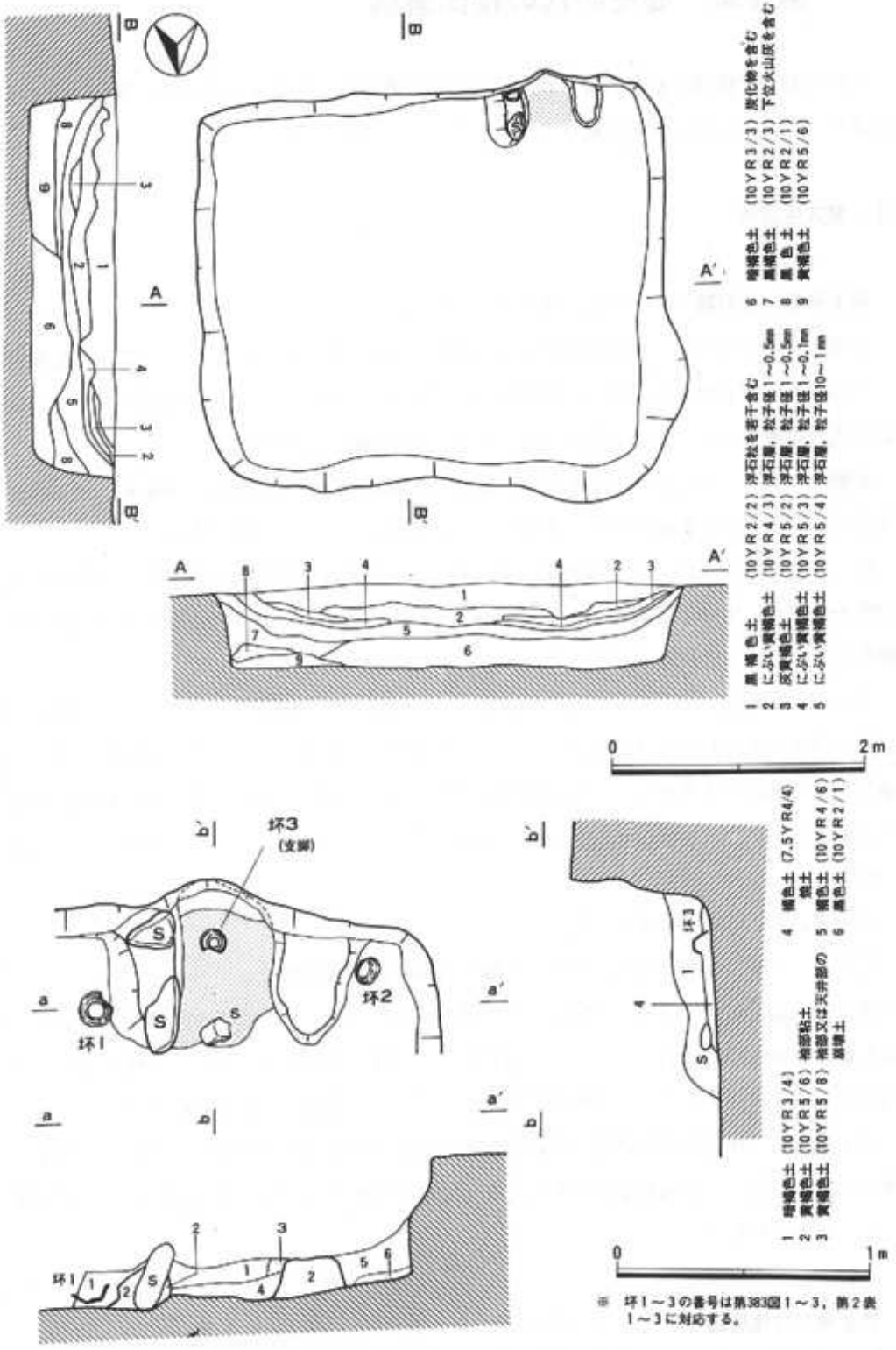
〈付属施設〉　確認されなかった。

〈埋土〉　９層に分層された。第２～５層は純粋な浮石堆積層でレンズ状を呈し，いわゆる自然堆積の状態を示す。第６～９層は一度に埋め戻されたような不規則な堆積状態を示す。なお浮石堆積層をつくる浮石粒において，色彩および粒径の違いがみられた。２層と４層をつくる白色浮石粒は粒径も小さく，３層と５層をつくるにぶい黄褐色浮石粒は粒径が粗い。

〈出土遺物〉　埋土中より縄文土器破片と土師器破片が出土したが極めて出土量は少ない。カマド熱焼部内および両袖部の外側付近から完形の坏形土器３点（第383図１～３，ＰＬ32—１～３）が出土した。

第２号竪穴住居跡（ＳＴ０２）第380図，ＰＬ31

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区Ａ₁区のやや南よりの，Ｅ—24・25，Ｆ—24・25グリッドに



※ 坏1～3の番号は第383図1～3，第2表1～3に対応する。

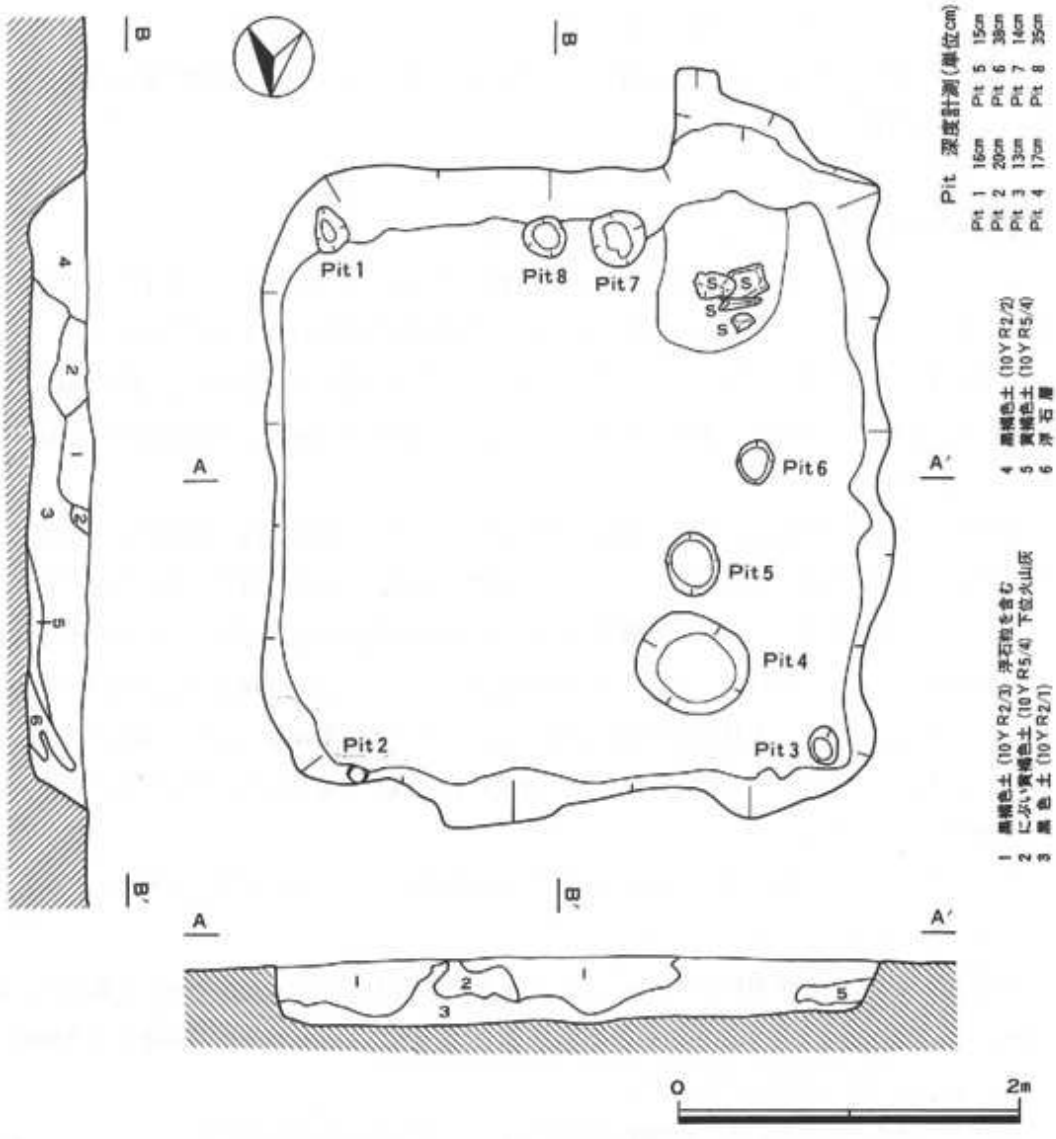
第379図　第1号竪穴住居跡・カマド実測図

位置する。第Ⅲ層上面において黒褐色土の落ち込みを確認した。第２号溝状遺構と切り合う。

〈形態・規模〉　平面形は方形を呈す。壁長は東壁355cm，西壁360cm，南壁343cm，北壁350cmを測る。床面積は10.8㎡を測る。主軸方向はＮ—0°—Ｅで磁北を指す。

〈壁・床〉　東・西壁は床面とほぼ垂直に，南・北壁は床面よりやや大きく外反して立ち上がる。各々の壁高は東壁36cm，西壁30cm，南壁33cm，北壁35cmを測る。床面はわずかに起伏を示し全体的に堅くしまるが，カマド付近は特に堅い。

〈カマド〉　南壁の中央西寄りに構築されていた。残存状態は非常に悪い。調査の結果，袖部



第380図　第２号竪穴住居跡実測図

の芯材として使用された扁平な河原石の集まりと，その下に熱焼部と考えられる焼土範囲が確認された。

〈柱穴・ピット〉　床および壁際において８個のピットを確認した。その位置からみてPit1～3が柱穴と考えられる。

〈付属施設〉　確認されなかった。

〈埋土〉　６層に分層された。堆積状態は不規則で，人為による埋め戻しであろう。

〈出土遺物〉　埋土中から縄文土器，土師器破片が出土した。縄文土器は出土状態から判断して後世の流れ込みであろう。土師器は坏（第383図４），甕（第384図１）でカマド内とその付近に集中して出土した。（ＰＬ32－４・11）

〈備考〉　本住居跡は第２号溝状遺構によって南北に分断されている。新旧関係は本住居跡→第２号溝状遺構である。

第３号竪穴住居跡（ＳＴ０３）第381図，ＰＬ31

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区Ｂ区，Ｖ－38・39，Ｗ－38・39グリッドにまたがり位置する。第Ⅳ層上面において，白色浮石粒を多く含んだ黒褐色の落ち込みを確認した。

〈形態・規模〉　本遺跡で確認されたなかで最大のもので，壁長は東壁420cm，西壁400cm，南壁416cm，北壁405cmを測る。床面積は16.5㎡を測る。主軸方向は磁北より西側にやや振れＮ－13°－Ｅを指す。

〈壁・床〉　各壁とも床面よりほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁28cm，西壁33cm，南壁23cm，北壁28cmを測る。床面は平坦で堅くしまるが，壁際は中央部・カマド付近に比べ軟弱である。

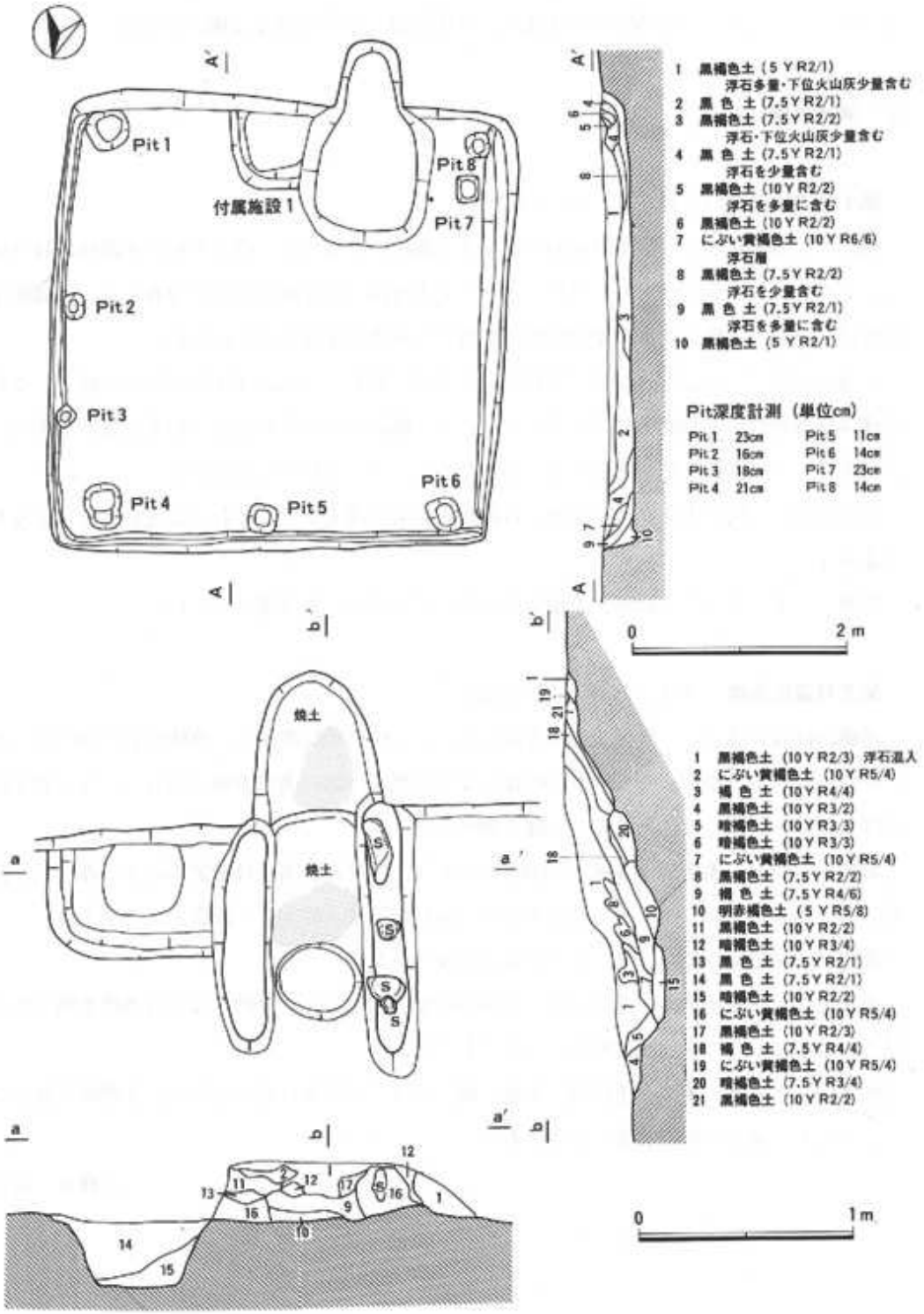
〈カマド〉　南壁中央より西寄りに構築され，残存状態は極めて良好である。カマド本体は扁平な河原石を立て並べ芯材とし，これに浮石粒を含んだにぶい黄褐色粘土を貼りつけて袖部をつくりだすものである。天井部は崩壊し存在しない。熱焼部は径40cm，深さ５cmほどの浅いくぼみと，その後方の焼土からなる。煙道部は壁より約60cmほど張り出し，ゆるやかに立ち上がる半地下式のものである。

〈柱穴・ピット〉　壁溝に沿って８個のピットを確認した。ピットの位置から判断してPit１，２，４～６，８が柱穴と考えられる。

〈付属施設〉　カマド東側袖部に隣接して，平面形が長方形を呈し，長軸70cm，短軸50cm，深さ30cmほどの落ち込み（付属施設１）を確認した。またカマドの構築される南壁を除き幅10～25cm，深さ５～10cmの壁溝が存在する。

〈埋土〉　10層に分層された。自然堆積状態を示す。各層に浮石粒を混入する。

〈出土遺物〉　埋土中より縄文土器，土師器破片が出土した。土師器（第383図５・６，384図



第381図　第3号竪穴住居跡・カマド実測図

2・3）の多くはカマド内からの出土で，付属施設1からの出土は極めて少ない。

2．溝状遺構

第1号溝状遺構（ＳＤ０１）第6・382図

〈遺構の位置と確認〉　調査区A_1区，19ライン西側に位置する。確認された本遺構はＨ—18グリッドからＺＢ—7グリッドに渡り，大きく北東方向へ弧を画くように存在する。確認面は第Ⅲ層浮石層直下で確認した。歴史時代の遺構との重複関係は認められない。

〈形態・規模〉　確認された長さは約90m を測り，幅55～110cm，深さ20～50cmを測る。なお本遺構は発掘調査区A_1区南側に延びるものである。横断面形は「Ｕ字」，「鍋底」状を呈する。

〈埋土〉　土層堆積の観察地点によって異なるが，1～3層に分層される。

〈出土遺物〉　埋土中より縄文土器，石器類が多量に出土した。これらは流れ込みによるものであろう。

〈備考〉　多くの竪穴住居跡・土壙と切り合っているが，本遺構が新しい。

第2号溝状遺構（ＳＤ０２）第6・382図

〈遺構の位置と確認〉　発掘調査区A_1区，18ライン東側に位置する。遺構はＢ—18グリッドとＦ—25グリッドに渡り，ゆるやかに蛇行しながら標高の低い南東方向へ流れる。なお表土除去の際，重機を導入したことにより一部を削平した。

〈形態・規模〉　本遺構は各所で切断されており，規模の計測値は推定の域をでないが，長さ約50m，幅30～50cm，深さ10～35cmを測る。横断面形は「Ｕ字」，「鍋底」状を呈する。

〈埋土〉　観察地点によって，1～7層に分層された。

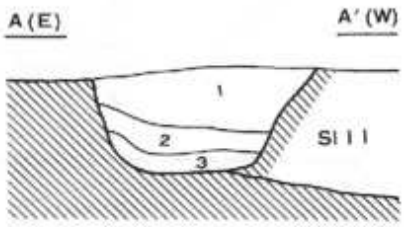
〈出土遺物〉　埋土中より縄文土器，土師器破片を出土した。量的には1号溝状遺構と比べ少量である。これらの遺物は流れ込みによるものである。

〈備考〉　本遺構は多くの住居跡，土壙と切り合って構築されることから，本遺構が新しい。しかし1号溝との新旧関係は不明である。

（藤井　安正）

第１号溝状遺構

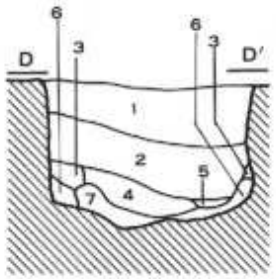
B-16グリット



1 黒 色 土 (10YR2/1) 浮石粒を含む
2 黒 色 土 (10YR2/1)
3 黄褐色土 (10YR5/6) 砂粒を含む

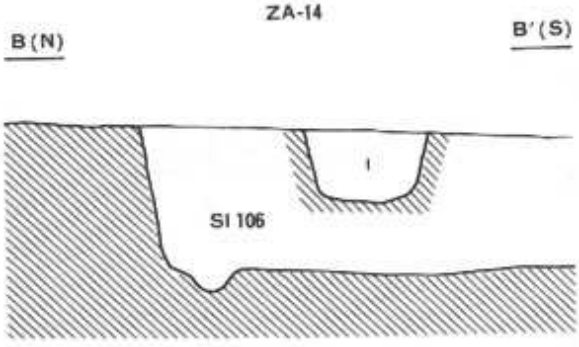
第２号溝状遺構

D-20



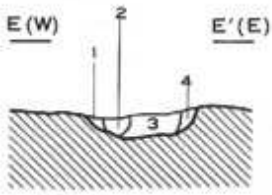
1 黒 色 土 (10YR2/1) 浮石粒を含む
2 黒褐色土 (10YR2/2)
3 黒 色 土 (10YR2/1)
4 黒褐色土 (10YR2/2)
5 黒 色 土 (10YR2/1)
6 黒 色 土 (7.5YR2/1)
7 黒褐色土 (10YR3/2)

ZA-14



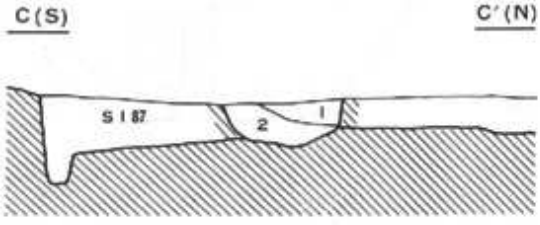
1 黒 色 土 (10YR2/1) 浮石粒を含む

B-18



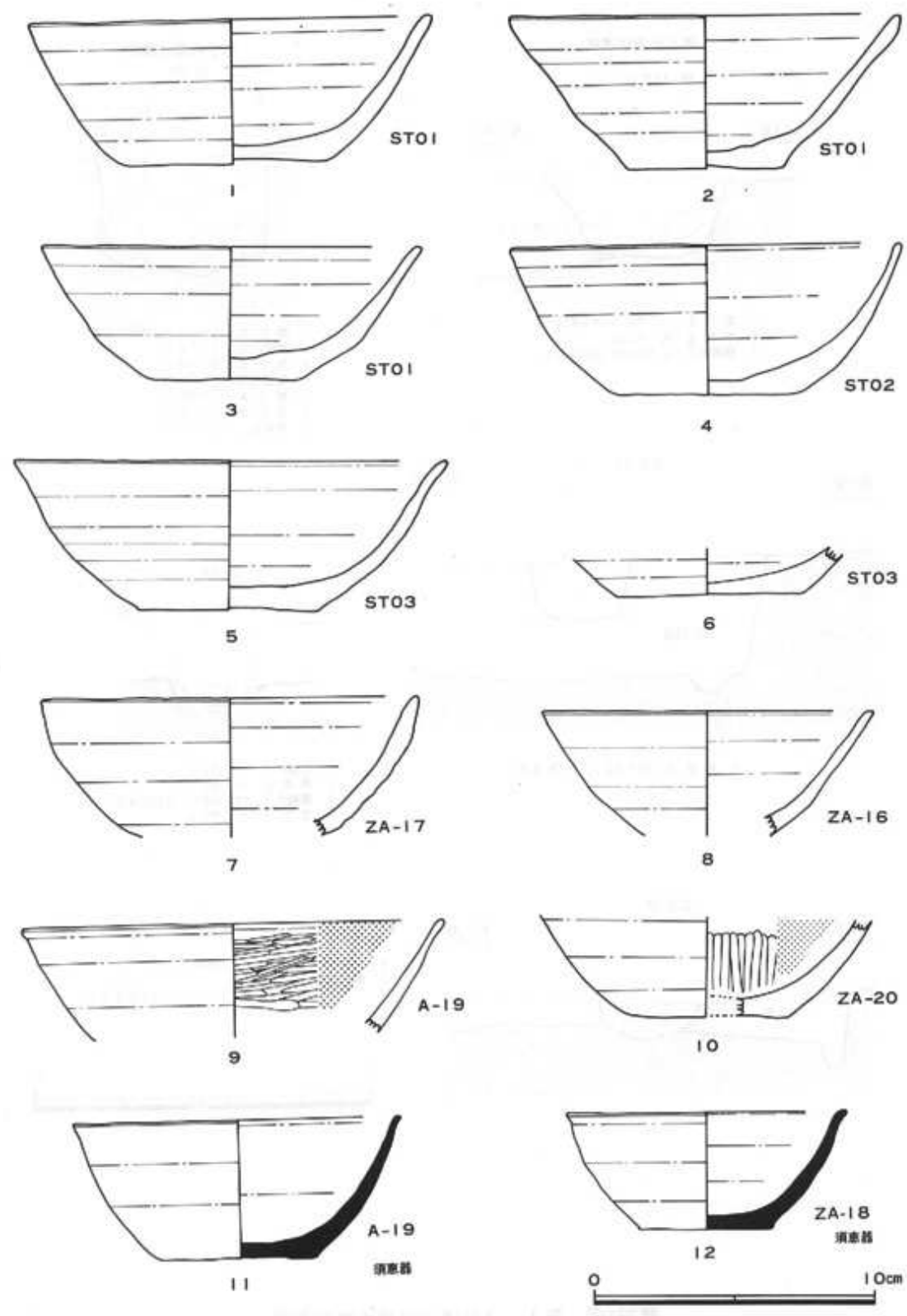
1 暗褐色土 (10YR3/4)
2 黒 色 土 (10YR1.7/1)
3 黒褐色土 (10YR2/2) 浮石粒を含む
4 褐 色 土 (10YR4/4)

ZB-7



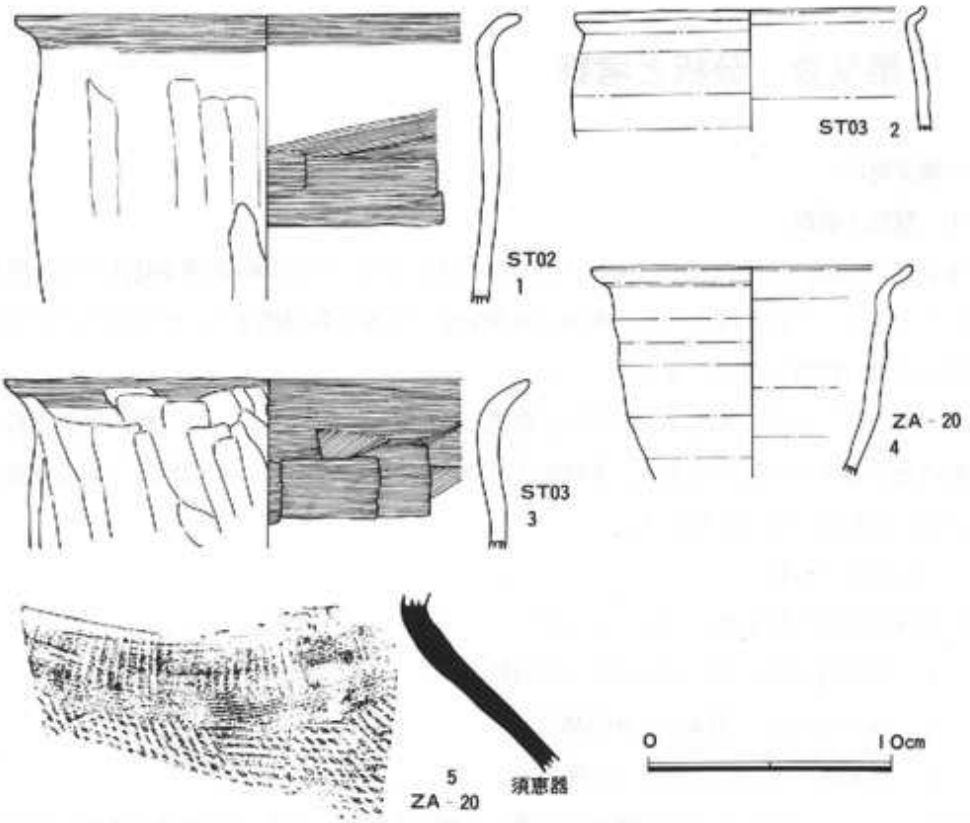
1 黒褐色土 (10YR2/3) 浮石粒を含む
2 黒褐色土 (10YR3/2)
※( )内のアルファベットは方位を示す

第382図 第１，２号溝状遺構土層断面図



スクリーントーンは黒色処理を表わす。

第383図　歴史時代の出土遺物　(1)



第384図　歴史時代の出土遺物(2)

図版 No.	PL No.	器種	出土地	法量 (cm) 口径	底径	器高	切離し技法	備考
第383図1	PL32－1	土師器坏	ST 01	14.5	7.2	5.3	回転糸切り	
2	2	〃	〃	14.0	5.7	5.5	〃	
3	3	〃	〃	13.6	5.5	4.8	〃	
4	4	〃	ST 02	14.1	6.6	5.5	〃	
5	5	〃	ST 03	15.5	6.5	5.4	〃	
6		〃	〃	—	6.7	—	〃	
7		〃	ZA－17	13.5	—	—	—	
8		〃	ZA－16	12.0	—	—	—	
9	6	〃	A － 19	15.0	—	—	—	ミガキ十黒色処理
10		〃	ZA－20	—	6.6	—	回転糸切り	〃
11	7	須恵器坏	A － 19	11.8	5.0	5.6	〃	
12	8	〃	ZA－18	10.2	4.8	4.3	〃	
第384図1	9	土師器甕	ST 02	21.0	—	—	—	
2	11	〃	ST 03	14.5	—	—	—	
3	10	〃	〃	21.8	—	—	—	
4	12	〃	ZA－20	13.4	—	—	—	
5		須恵器壺	ZA－20	—	—	—	—	

第2表　歴史時代の出土遺物

第Ⅴ章　分析と考察

1．縄文時代

(1) 竪穴住居跡

本遺跡からは，A区135軒，B区1軒，C区4軒の合わせて140軒の縄文時代の住居跡が検出された。これらの住居跡は，出土遺物，重複関係，形態の類似性より，そのほとんどが中期中葉から末葉に位置づけられる。

ここでは，これらの住居跡を平面形，規模，柱配置，炉跡等について分析，出土土器により，時期の推定できる住居跡を使い，各期の住居跡の形態を把握，その類似性及び新旧関係によりその他の住居跡の時期を推定する。

a）　住居跡の時期

住居跡の時期を推定する方法としては，

i　住居跡の確認面と基本層序との関係

ii　他の住居跡，遺構との重複関係

iii　住居跡とその出土土器との関係

等がある。縄文時代の住居跡の確認面はⅢ～Ⅴ層であるが，これらの差異は地形に左右されており，本来の掘り込み面とは考えられない。すなわち最下層（Ⅴ層）確認の遺構はいずれも微高地で，表土が薄く，耕作等による攪乱が遺構にまで及んでいる地区であり，Ⅳ層確認のものも少なからずその傾向がある。このため，iによる時期推定は本遺跡の場合不可能である。

本遺跡においては，多数の遺構の重複がみられること，住居跡内出土遺物が比較的豊富であること等より，ii，iiiの方法を用い，次のような順位で住居跡の時期を推定することとした。

ア）　埋設土器，炉を構成する土器，炉，柱穴他付属施設出土土器等，明らかに住居跡に伴う遺物からの推定

イ）　床面及び床直出土の1個体土器及びそれに近い土器からの推定

ウ）　床面及び床直上の出土土器及び遺構の新旧関係からの推定

エ）　覆土中の出土土器及び新旧関係からの推定

ア）の方法により，時期推定できた住居跡は第6，15，16，27，29A，43，45，56，62AB，67，71A，72，87，90，99，101，106，113，120，123号住居跡の20軒，イ）の方法による住居跡は第1，5A，8，9，11，12，13，14，17A，25，34，44，47，50，52，58，60，62D，70，79，80，82，84，86，91，103，104，108，110A，115号住居跡の30軒，またウ）の方法によるものは第2，10，17B，18，20号住居跡等44軒，エ）の方法により時期推定したものは第3，4，

5B，7，19号住居跡等41軒である。

以上の方法により，時期推察した結果が下表である。本遺跡の場合，覆土中からの出土遺物の年代の幅が比較的広く，ウ），エ）による方法では新旧関係に依存するところが多く，明確な時期決定ができないものが多い。これらのものについては幅をもたせて処理した。

時期		住居番号
中期中葉	円筒上層e式併行期	20,26,39,57,64,69,76,78B,79,87,88A,100A,106,120
中期中葉～後葉	円筒上層e式併行期～大木8b式併行期	96B,97B,100B,111
	円筒上層e式併行期～大木9式併行期	42B
中期後葉	大木8b式併行期	2,23,24,33,37,38,41,46,47,51,56,65,68,72,73,74,75,77,78A,80,81,82,85,86,88B,89,91,92,93,96A,97A,98,99,100C，113,114
	大木8b～9式併行期	3,4,10,36,43,50,62D,71B,71C,83,94,95,103,105A,105B,107,117
	大木9式併行期	1，5A，5B，6，7，8，11,12,13,14,15,18,19,21A,21B,22,27,29A,29B,31,32,44,45,48,52,54,55,59,62AB,62C,62E,63,67,84,90,101,108,109,110A,115,116,122
中期後葉～末葉	大木8b～10式併行期	42A
	大木9～10式併行期	16,28,30,40,49,53,58,62F,102,110B,123
中期末葉	大木10式併行期	9,17A,17B,25,34,60,61,66,70,71A,104
時期不明		118,119,121

第3表　住居跡の時期一覧表

b）　平面形

先に述べたとおり，本遺跡の検出遺構はほとんど重複関係を有し，他遺構の構築により，壁，床等を消失している住居跡が多い。このため，重複，未掘等により，一部プランの不明の部分があっても，残存壁，柱配置，周溝等によりプランを推測できる住居跡を含め137軒の住居跡について考察する。

平面プランについては，円形基調，方形基調，その他に大別し，さらに次のように細分した。

平面形
- 円形基調
  - 円形……第1，5A，9，11，21A，21B，22，23，26，29B，31，33，34，36，38，39，40，44，46，49，52，54，55，56，57，61，62C，62E，67，70，71A，73，82，83，89，90，91，92，97A，105B,108,110A,111,115,116,119,122号住居跡
  - 楕円形…第6，7，8，14，15，16，17A，18，19，24，25，27，28，29A，32，37，42A，42B，43，45，48，50，51，53，60，62AB，62D，62F，63，64，65，66，69，71B，71C，72，74，76，77，78A，78B，79，80，81，84，85，86，88A，88B，93，94，95，

- 円形基調
  - 楕円形……96A，97B，98，100A，100B，100C，101，102，103，104，105A，107，109，114，117，121号住居跡
  - 不明……第2，3，4，30，59号住居跡
- 方形基調
  - 方形……第96B，113，120号住居跡
  - 隅丸方形…第10，12，13，20，58，68，75，106号住居跡
  - 五角形…第41号住居跡
- その他
  - 張り出しをもつもの…第5B，47，87，99号住居跡
  - 不明……第17B，123，118号住居跡

なお，円形—楕円形，方形—隅丸方形の細分は幾何学的に厳密なものではなく，視覚的に判別できるラインを基準とした。円形—楕円形の基準については，長軸／短軸≦1.1を円形，長軸／短軸＞1.1を楕円形とした。楕円形としたものには長軸方向の壁が直線的なものもあるが細分しなかった。また方形—隅丸方形の基準については，隅丸部分の半径が短軸径の25%以下のものを方形，それ以上のものを隅丸方形とした。

この基準に従って，住居跡を分類すると，円形基調のものは，円形48軒，楕円形68軒，不明5軒で，全体に占める割合は86.4%である。一方，方形基調のものは，方形3軒，隅丸方形8軒，五角形1軒で，わずか8.6%にすぎない。次にこれらを時期別にみるならば，各期の住居数に占める方形基調のものは，円筒上層e式併行期では21.4%，大木8b式併行期では11.1%，大木9式併行期では4.8%であり，大木10式併行期では0%となる。

また，円形基調に占める円形の割合は円筒上層e式併行期で30%，大木8b式併行期で36.7%，大木9式併行期で53.8%，大木10式併行期では50.0%となる。

このことから，中期中葉から末葉にかけ，方形を基調とするプランの減少推移と，楕円形から円形への変遷が認められる。

第4表　平面形態と時期

	円形基調			方形基調			その他
	円形	楕円形	不明	方形	隅丸方形	五角形	
円筒上層e式併行期	3	7	0	1	2	0	1
円筒上層e～大木8b式併行期	1	2	0	1	0	0	0
円筒上層e～大木9式併行期	0	1	0	0	0	0	0
大木8b式併行期	11	18	1	1	2	1	2
大木8b～大木9式併行期	3	11	2	0	1	0	0
大木9式併行期	21	17	1	0	2	0	1
大木8b～大木10式併行期	0	1	0	0	0	0	0
大木9～大木10式併行期	3	5	1	0	1	0	1
大木10式併行期	5	5	0	0	0	0	1

c） 規模

平面形がほぼ復原できる住居跡の長軸—短軸径及び床面積の比較検討から，住居跡の規模について考える。なお，床面積は，周溝を有するものでは周溝外側下端，無いものは住居跡壁下端を計測した。また，テラス，張り出し部等を有するものは，その部分も含めた。

各住居跡の長軸—短軸径，面積をグラフに表わすと第385図，第386図のようになる。この2つのグラフから，住居跡は次の3類に分類される。

A類　床面積が120～72㎡のもの……大型住居

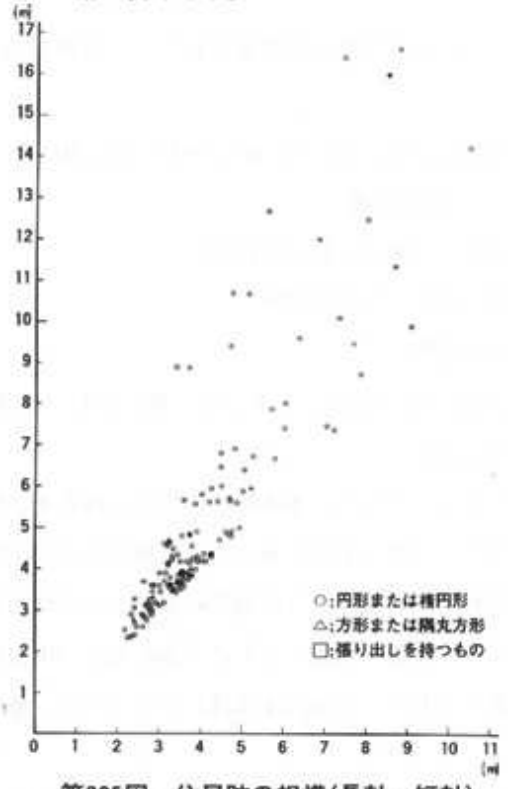
B類　床面積が 56～16㎡のもの……中型住居

C類　床面積が 4～15㎡のもの……小型住居

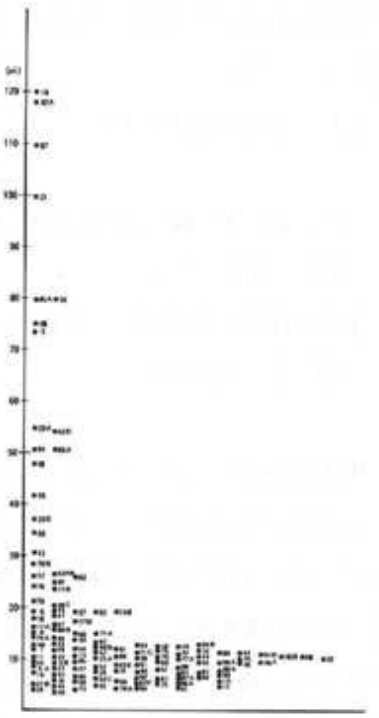
これらを長軸，短軸の長さからみると，A類は長軸が11～16.6m，短軸が8～10.5m，C類は長軸が2.75～5.5m，短軸が2.25～4.5mの規模である。

なお，A類（大型住居）にはグラフに表示した住居以外に，全掘に至らずデーターを取れなかった第100A，109，110A住居跡も，残存部からの推測から含まれると考えられる。

さて，時期推定できた103軒の住居跡の各期ごとのA，B，C類の軒数と比率をまとめたのが第5表，そのうち面積を測定できた92軒の住居跡の各期，各類ごとの面積の平均値を表わしたのが第6表である。



第385図　住居跡の規模(長軸—短軸)



第386図　住居跡の規模(面積)

第5表　大・中・小型住居跡数

時期	大型住居	中型住居	小型住居	計
円筒上層e式併行期	3(21%)	2(14%)	9(65%)	14
大木8b式併行期	1(3%)	10(28%)	25(69%)	36
大木9式併行期	4(10%)	11(26%)	27(64%)	42
大木10式併行期	2(18%)	4(36%)	5(46%)	11

(増改築住居については最終プランを使用,( )内の数字は各期に占める割合)

第6表　大・中・小型住居平均面積

	大型住居	中型住居	小型住居
円筒上層e式併行期	92.24㎡(2)	27.12㎡(2)	8.70㎡(7)
大木8b式併行期	119.99㎡(1)	24.41㎡(9)	8.52㎡(24)
大木9式併行期	79.76㎡(1)	32.49㎡(11)	8.96㎡(29)
大木10式併行期	86.48㎡(2)	18.49㎡(3)	12.34㎡(5)

(増改築住居については最終プランを使用,( )内の数字は使用した住居数)

この2つの表から，次のような事が読み取れる。

1）円筒上層e式併行期では大型，小型住居の占める割合が大きいが，大型から小型までの規模の差はさほど大きくない。

2）大木8b式併行期では大型が少なく，小型の占める割合が大きくなり，大型のものは規模が大きく，小型のものは小さくなる。

3）大木10式併行期には大型，中型の占める割合が大きくなり，小型は減少する。また大型の規模は再び小さくなる。逆に小型住居の規模が大きくなり，中，小型の差がほとんどなくなる。

d）　周溝

周溝を有する住居跡は140軒中34軒を数える。これらを周溝の位置及び長さより分類すると次のようになる。

1類　ほぼ全周するもの……第21A，71C，74，77，79，80，85，88B，99，100C，109，110A，117号住居跡

2類　複式炉の掘り込み部を除きほぼ全周するもの…第45，103号住居跡

3類　半周するもの……第6，8，87，106，114号住居跡

4類　対峙する壁下に巡るもの…第91，97A号住居跡

5類　部分的なもの……第9，42A，46，59，62AB，71B，86，90，101，105A，105B，107号住居跡

周溝の機能については，諸説があり，未だ解明されていない。本遺跡の場合も，機能を示唆する痕跡を見い出せなかった。ただ，1，2類のようにほぼ全周するもの，3類のように半周するもの，4類のように対峙する壁下に位置するもの，5類のように部分的なものに分けて考えてみる必要を感じる。特に5類については，テラス直下に位置するもの（第62AB，101号住居跡）や，出入口を想定させる部分の直下に位置するもの（第59号住居跡）などがあり，他の類とは機能を異にするものと考えられる。

周溝を有する住居跡を時期別に分類，各期に占める割合を表わしたのが第7表，住居跡の平

面形で分類，周溝を有する住居の割合を示したのが第８表である。

周溝を有する住居跡は，住居平面形が円形基調，特に楕円形を呈するものが多い。また，時期的には，大木８ｂ式併行期でピークに達し，以下減少する傾向にある。

時　　期	周溝を有する住居数（各期住居に占める割合）
円筒上層ｅ式併行期	3（21.4%）
大木８ｂ式併行期	12（33.3%）
大木９式併行期	10（23.8%）
大木10式併行期	1（9.1%）

第7表 周溝を有する住居数の時期的推移

平面形	周溝を有する住居数（各プランに占める割合）
円　　形	8（16.7%）
楕円形	22（32.4%）
方　　形	0（0　%）
隅丸方形	1（12.5%）

第8表 周溝を有する住居と平面プランとの関係

ｅ）　住居跡の主軸

住居構築の際，基本となる軸線が主軸である。本遺跡の場合，そのほとんどの住居跡が明らかに主軸を意識し，構築されている。すなわち，遺構の長軸，炉軸はほぼこの主軸と一致し，炉の位置及び主柱穴配置は，この軸線に対称となるように設置されている。

ｆ）　主柱穴配置

住居跡内及びその近傍より検出されたピットのうち，住居廃棄後のピットや攪乱を除いたピットをその住居の柱穴とし，そのプラン，大きさ，深さ及び配置から上屋構造上主体となる柱穴を主柱穴，補助柱穴的なものを副柱穴，壁際に一巡するものを壁柱穴とした。

本遺跡からは，種々の柱配置の住居跡が検出されたが，主軸を意識した主柱穴配置のものが多い。そのため，主軸と主柱穴配置との関係より，次のように分類した。

Ａ類　主軸に対称な数対の柱穴から成る柱配置

1　2対4本柱……第５Ａ，５Ｂ，７，17Ａ，19，20，21Ａ，22，23，28，32，33，36，39，44，50，63，64，68，70，71Ｃ，75，77Ｂ，84，94，97Ｂ，99，102，103，104，105Ａ，117（改築前），120号住居跡

2　3対6本柱……第６，29Ｂ，34，40，42Ｂ，45Ｃ，62Ｄ，69，77Ａ，78Ｂ，80，116号住居跡

3　4対8本柱……第58，71Ｂ，74Ｂ，79，86，109，114号住居跡

4　5対10本柱……第25，29Ａ，45Ａ，45Ｂ，85Ａ，85Ｃ，85Ｄ，85Ｅ号住居跡

5　6対12本柱……第85Ｂ，87，106号住居跡

6　7対14本柱……第42Ａ号住居跡

Ｂ類　主軸線上の１対と軸線に対称な数対の柱穴から成る柱配置

1　1対＋1対の4本柱……第56号住居跡

2　1対＋2対の6本柱……第18，74Ａ，100Ｃ，117（改築後），121号住居跡

3　1対＋3対の8本柱……第12，107号住居跡

C類　主軸線上の1個と軸線に対称な数対の柱穴から成る柱配置

1　1本＋2対の5本柱……第1，9，38，41，49，54，60，61，65，83，90，91，115号住居跡

2　1本＋3対の7本柱……第14，16，27，43，47，53，88B（改築前）号住居跡

3　1本＋4対の9本柱……第88B（改築後），101号住居跡

D類　その他の配置

1　2本柱……第88A，95，96B号住居跡

2　4本柱……第108号住居跡

3　中央部の1本と1対2本の計3本柱……第62F号住居跡

4　中央部の1本と4壁際の計5本柱……第72号住居跡

5　中央部の1本の主柱穴と壁柱穴……第21B号住居跡

6　壁外に柱穴を有するもの……第26，31号住居跡

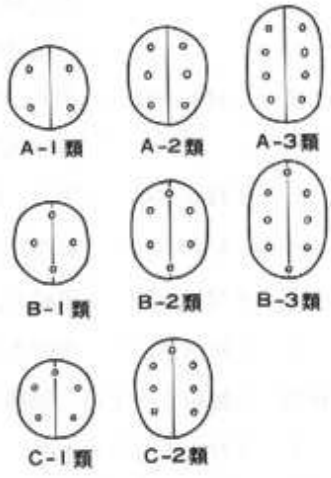
E類　不明

1　2通りの柱配置が考えられるもの……第13，15，24，37，46，52，62AB，62C，71A，89，97A，100B，105B，111，122号住居跡

2　規則的な柱配置を有しないもの……第10，11，15，51，57，66，67，73，76，78A，82，96A，110B，113，119号住居跡

3　攪乱，重複，完掘に至らない等により柱配置が不明なもの……第2，3，4，8，17B，30，48，55，62E，92，93，98，100A，118，123号住居跡

柱配置は住居跡の平面形，規模及び炉跡の位置等と密接な関係を有する。柱は上屋を支えるものであり，柱の規模（径及び長さ）がある程度制約される以上，住居の規模の拡大とともに柱の本数を増やす必要がある。この傾向はA，B，C類ともに認められ，住居跡の規模と柱穴数はほぼ比例する。柱配置と時期との関係は第9表に示す通りで，全期を通し，A，C，E－1類が多く，主軸を意識した規則的な柱配置のものが多いことを表わしている。この規則的な配置は時期を下るに従い，その傾向を強くし，柱穴の規模，深さとも増す。B類が大木9式併行期で減少し，大木10式併行期で消滅するのは，複式炉の出現と関連するもの



第387図　主柱穴配置模式図

第9表　主柱穴配置と時期

主柱穴配置 / 時期	A類	B類	C類	D類						E類		
				1	2	3	4	5	6	1	2	3
円筒上層e式併行期	9	0	0	1	0	0	0	0	1	0	3	1
大木8b式併行期	16	3	7	0	0	0	1	0	0	5	6	4
大木9式併行期	18	2	7	0	1	0	0	1	1	6	2	4
大木10式併行期	5	0	3	0	0	0	0	0	0	1	1	1

と考えられる。

g）　炉跡

〈炉の形態〉　住居跡に伴う炉には，種々の構造がある。ここでは，区画された空間の数より，単式炉と複式炉に分類し，さらに，区画材の種類と形態によりそれぞれ細分した。

Ⅰ類　単式炉

ⅠA類　地床炉……第33，37，46，47，50，56，59，68，71C，75，76，78B，79，80，82，84，85，89，91，95，96B，97A，97B，98，99，100A，100C，106，109，110A，110B，111，117，119号住居跡

ⅠB1類　土器埋設炉……第87，90，120号住居跡

ⅠB2類　土器埋設石囲炉

ⅠC類　土器片囲炉……第113号住居跡

ⅠD類　石囲炉……第1，3，17B，18，19，23，24，27，28，29B，30，36，38，48，51，52，55，58，62AB，62E，65，66，74，77，78A，83，86，88B，96A，118号住居跡

Ⅱ類　複式炉

ⅡA類　本類は石囲部と掘り込み部からなる石囲複式炉類で，区画された空間数及び炉石配置より，次のように細分した。

1類　石囲部（開放）＋掘り込み部（両側縁に炉石なし）

第13，14，22，63，104，115号住居跡

2a類　石囲部（閉鎖）＋掘り込み部（両側縁に炉石あり）

第6，8，32，40，43，60，61，70，71B，101，102，108号住居跡

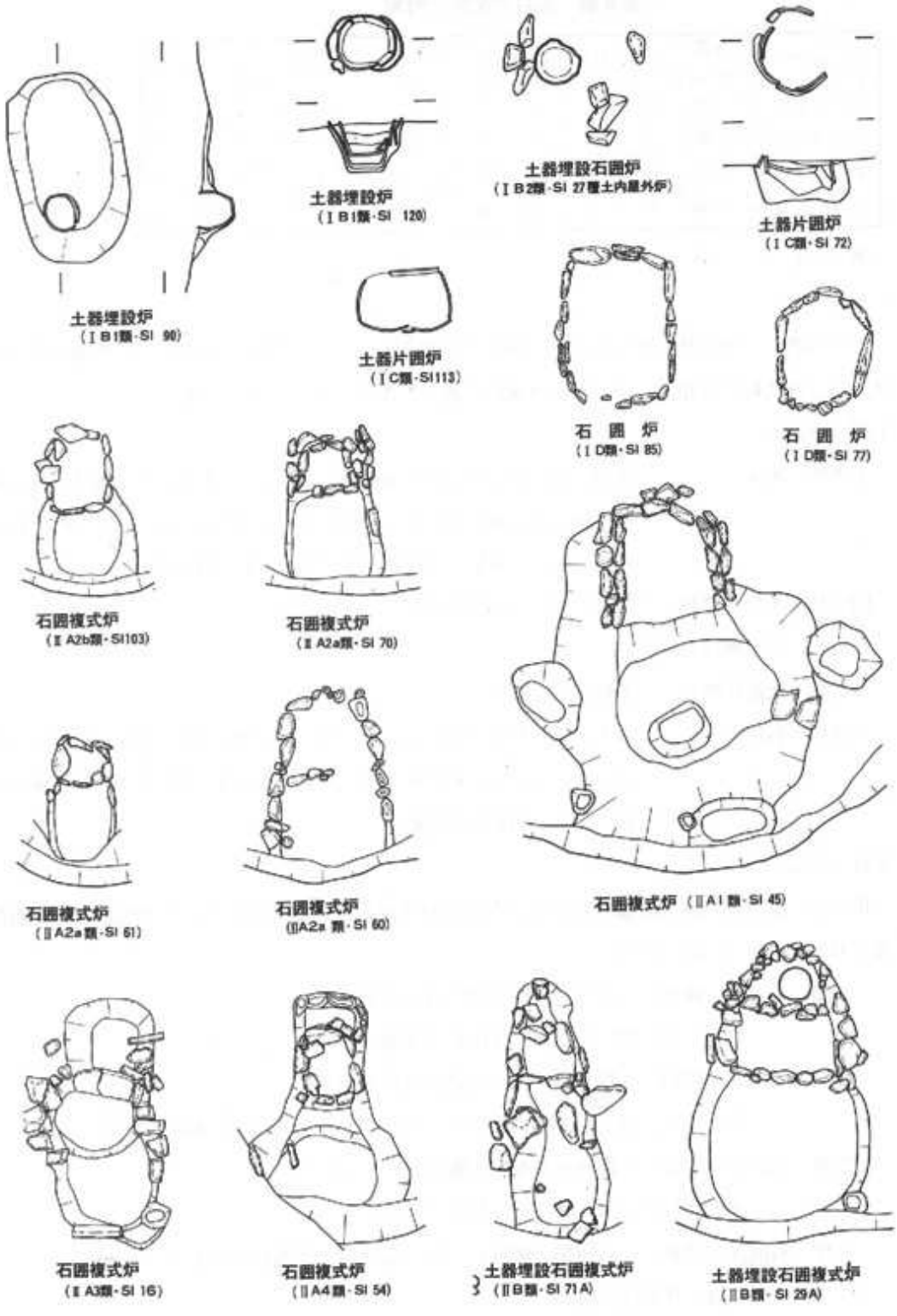
2b類　石囲部（閉鎖）＋掘り込み部（両側縁に炉石なし）

第5A，31，34，49，53，103号住居跡

3類　石囲部（閉鎖）＋石囲部（開放）＋掘り込み部（両側縁に炉石なし）

第9，16号住居跡

4類　石囲部（閉鎖）＋石囲部（閉鎖）＋掘り込み部（両側縁に炉石なし）


土器埋設炉
(I B1類・SI 90)
土器埋設炉
(I B1類・SI 120)
土器埋設石囲炉
(I B2類・SI 27覆土内最外炉)
土器片囲炉
(I C類・SI 72)
土器片囲炉
(I C類・SI113)
石 囲 炉
(I D類・SI 85)
石 囲 炉
(I D類・SI 77)
石囲複式炉
(II A2b類・SI103)
石囲複式炉
(II A2a類・SI 70)
石囲複式炉
(II A2a類・SI 61)
石囲複式炉
(IIA2a 類・SI 60)
石囲複式炉 (II A1 類・SI 45)
石囲複式炉
(II A3類・SI 16)
石囲複式炉
(II A4類・SI 54)
土器埋設石囲複式炉
(II B類・SI 71A)
土器埋設石囲複式炉
(II B類・SI 29A)

第388図　炉跡分類図

5類　タイプ不明

第5B，7，11，12，15，17A，21B，62F 号住居跡

ⅡB類　本類は土器埋設石囲部＋石囲部＋掘り込み部から成る土器埋設石囲複式炉である。

第29A，67，71A，123号住居跡

上記炉の分類において，炉石が残存しなくとも，炉石の抜き取り痕が確認されたものについては，石囲炉，石囲複式炉等に分類した。

120 号住居跡の炉は，3個体の土器を3重に埋設したものか，あるいは，2個体の土器を埋設したその周囲を他の1個体の土器口縁部で囲ったものか，判然としなかった。ⅠB2類は住居跡に付随するものはないが，第27号住居跡覆土上面で確認された屋外炉がこの類に入る。

ⅡA類は，東北地方北部の中期後～末葉（大木8b～10式併行期）の遺跡での検出例が増えている広義の複式炉であり，「ㅁ」字形，「∩」字形石囲炉と呼ばれているものである。東北地方南部及び北陸地方ではこの時期，土器埋設部＋石組部＋掘り込み部（掘り込み部を欠く場合もある）より成る土器埋設石組複式炉が発達するが，本類はその流れをくむ炉と考えられる。「上原型複式炉」で代表されるそれらの複式炉と本類との類似点は，石囲部と掘り込み部という2つの接続した空間より成ることであり，相違点は，土器埋設部を有しないことと，敷石石組部に該当する部分が，その簡略化ともとれる石囲部に変わることである。

これらの炉の使用痕（焼土）は石囲部において観察される。2つの石囲部を有する炉（3，4類）では，いずれの石囲部も火熱を受けた痕跡を有する。

ⅡB類は土器埋設石囲部＋石囲部＋掘り込み部からなる土器埋設石囲複式炉である。71A号住居跡の炉は，土器が炉先端部に斜位に埋設されており，斜位土器埋設複式炉として細分すべきものかもしれない。67号住居跡の炉は，土器埋設炉（ⅠB1類）と石囲複式炉（ⅡA2a類）との重複とも考えられる。

上記に分類した住居跡は1個の炉を有している。これに対し，複数の炉を有する住居跡もある。25号住居跡は1個の石囲炉と4個の地床炉，42A号住居跡は1個の石囲複式炉（ⅡA2b類）と2個の地床炉，45・116号住居跡は石囲複式炉（ⅡA1類）と地床炉をそれぞれ1個，54号住居跡は石囲複式炉（ⅡA4類）と地床炉をそれぞれ1個，72号住居跡は土器片囲炉と地床炉をそれぞれ1個，69号住居跡は2個の地床炉をそれぞれ有する。また，114 号住居跡は重複によりそのほとんどを消失しているが，残存部より2個の地床炉が確認されている。

これら複数の炉を有する住居跡は，大型のものが多く，炉跡は主軸線上に並ぶ傾向にある。東北，北陸地方の縄文時代前期から中期の遺跡に多く，秋田県内では，前期の能代市杉沢台遺跡，八竜町萢刈沢遺跡，秋田市柳沢遺跡，中期の男鹿市大畑台遺跡，能代市館下Ⅰ遺跡，秋田市下堤A遺跡，上小阿仁村不動羅遺跡等で報告されている。

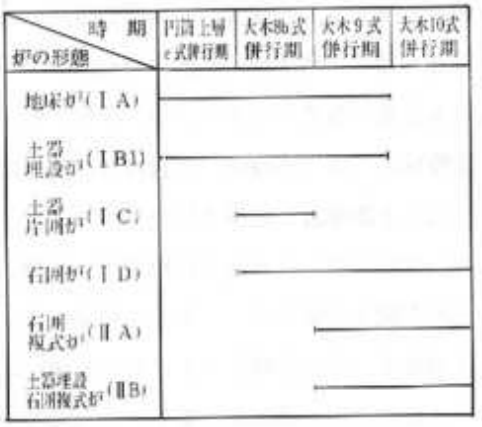
〈炉の位置〉　前述の炉はほとんど主軸線上に位置する。石囲炉で若干ずれるものもあるが，Ⅰ類のほとんどは住居跡中央に位置する。一方，Ⅱ類は一壁に接するか，あるいは近接する。

〈炉の時期〉　炉の形態と住居の時期との関係は，第10表の通りである。円筒上層ｅ式併行期では地床炉と土器埋設炉のみである。大木８ｂ式併行期では地床炉が最も多いが，石囲炉の占める割合も大きくなる。また，土器片囲炉はこの時期にのみ検出された。大木９式併行期では石囲複式炉に主体が移り，地床炉，石囲炉の占める割合は小さくなる。この傾向は大木10式併行期にさらに強くなり，地床炉は消滅している。炉の形態の推移を第11表に示す。

第10表　炉の形態と住居の時期

炉の形態＼時期		円筒上層e式併行期	大木8b式併行期	大木9式併行期	大木10式併行期	計
地床炉	ⅠA	5	16	4	0	25
土器埋設炉	ⅠB1	2	0	1	0	3
土器埋設石囲炉	ⅠB2	0	0	0	0	0
土器片囲炉	ⅠC	0	1	0	0	1
石囲炉	ⅠD	0	11	10	2	23
石囲複式炉	ⅡA1	0	0	5	1	6
	ⅡA2a	0	0	5	3	8
	ⅡA2b	0	0	2	1	3
	ⅡA3	0	0	0	1	1
	ⅡA4	0	0	0	0	0
	ⅡA5	0	0	6	1	7
土器埋設石囲複式炉	ⅡB	0	0	2	1	3
複数個の炉を有する住居跡		1	2	3	1	7
計		8	30	38	11	87

第11表　炉の形態の変遷



h）　床面

本遺跡における住居跡の床面については，そのほとんどが，掘り込み面そのものを床面として使用，貼床を施している住居跡は少なく，12軒を数えるのみである。貼床が床面ほぼ全域に及ぶものは，61号住居跡１軒で，他のものは他住居跡との重複部分（第16，25，49，71Ａ，88Ａ，91号住居跡），土壙との重複部分(第15，45，109号住居跡)，増改築前の周溝（第74，99号住居跡）等，軟弱な部分へのみ，若干粘性のある下位火山灰（第Ⅴ層土）等で貼床を施している。

i）　テラス

本遺跡からは，24軒のテラス状施設を有する住居跡が検出された。テラスの規模及び位置より，次のように分類される。

１類　ほぼ全周するもの……第13，60，62Ｅ，115号住居跡

２類　対峙する壁際に位置するもの……第１，30号住居跡

３類　半周するもの……第27，62ＡＢ号住居跡

４類　一壁際に位置するもの……第28，39，40，51，59，71Ｂ，101，110Ｂ，113，

5類　部分的なもの……第25，34，65，78B，108，116号住居跡

テラス状施設の機能については，寝床説，土器・石器の置場説，祭祀施設説等があるが，本遺跡では推定し得える資料に乏しい。寝床説については，その規模から可能な1～4類を合わせても，全住居跡数140軒のうち18軒にすぎず，否定的にならざるを得ない。むしろ，その比率の小ささから，特異な住居跡と考えるべきであろう。5類の第65号住居跡のテラス（台状施設）上面からは焼土と多数のフレークを出土，石器製作場と想定される。また，第25，108号住居跡のテラス（台状施設）の上面は堅く，出入口の施設と考えられる。

j）　その他の施設

前述の施設の他に，堤状施設（83，106号住居跡），石の抜き取り痕状のピットが一巡する掘り込み（119号住居跡），埋設土器施設（106号住居跡），張り出し施設（47，87，88B号住居跡），掘り込み（11，25，47，68，92，93，99,105号住居跡），スロープ状施設（14号住居跡）が，それぞれの住居跡内より検出された。

k）　各期の住居跡の特徴

これまで天戸森遺跡から検出された140軒の住居跡について，平面形，規模，周溝，柱配置，炉跡等から検討を加えてきた。ここでは，出土遺物よりほぼ時期推定できる住居跡を使用し，各期の住居跡の特徴をまとめたい。

i）　円筒上層e式併行期

○平面形は楕円形，円形，隅丸方形，方形を呈する。円形基調，特に楕円形のものが多いが，円形基調に対する方形基調の割合は，この時期が最も高い。

○住居の規模（住居床平均面積）は，大型住居で92.24㎡，中型住居27.12㎡，小型住居8.70㎡を計る。

○周溝を有する住居の割合は21.4%である。

○柱配置は主軸に対称な数対（A類）の他，二本柱（D－1類），壁外の柱配置（D－6類）がある。また，柱列が判然としないものも多い。

○炉跡には地床炉，土器埋設炉，地床炉＋地床炉があり，確認できなかった住居跡も多い。

ii）　大木8b式併行期

○平面形は楕円形，円形，隅丸方形，方形，五角形を呈する。円形基調に対する方形基調の割合は小さくなる。

○住居の規模は大型住居で119.99㎡，中型住居 24.41㎡，小型住居8.52㎡を計り，前の時期に比べて，大型は大きく，小型はより小さくなり，その差が大きくなる。

○周溝を有する住居の割合は33.3%で，ピークとなる。

○柱配置はA類の他にB類（主軸線上の1対と軸線に対称な数対），C類（主軸線上の1本と軸線に対称な数対）が出現し，C類はA類に次いで多い。

○炉跡には地床炉，石囲炉，土器片囲炉，土器片囲炉＋地床炉，地床炉＋地床炉がある。依然地床炉が最も多いが，石囲炉も37%を占める。

iii）　大木9式併行期

○平面形は円形，楕円形，隅丸方形を呈する。方形基調のものは一層少なくなり，方形は消失する。また円形と楕円形の割合が逆転，円形のものが最も多くなる。

○住居の規模は大型住居で79.76㎡，中型住居32.49㎡，小型住居8.96㎡を計り，大型が小さくなり，中，小型の規模が大きくなる。

○周溝を有する住居の割合は23.8%で，前の時期より減少する。

○柱配置はA，B，C類等があるが，A，C類が主体を占める。B類の減少は，壁際に偏在，接する複式炉の出現との関連と考えられる。

○炉跡は地床炉，土器埋設炉，石囲炉等もあるが，石囲複式炉が主体をなす。また，土器埋設石囲複式炉も出現する。これらの複式炉は壁に接するか，近接した位置に構築される。石囲炉も，住居中央から若干偏在する傾向を有する。

Ⅳ）　大木10式併行期

○平面形は円形または楕円形を呈し，方形基調のものは消失する。円形と楕円形の割合はほぼ同じである。

○住居の規模は大型住居で86.48㎡，中型住居で18.49㎡，小型住居で12.34㎡を計り，中型が小さく，小型の規模が大きくなり，中，小型住居の規模の差がほとんどなくなる。

○周溝を有する住居の割合は9.1%で，1割を割る。

○柱配置はA，C類が主体となり，B類は消滅する。

○炉は石囲炉，石囲複式炉，土器埋設石囲複式炉，石囲炉＋4個の地床炉のみとなる。量的には石囲複式炉が最も多い。

次に出土遺物，新旧関係から狭く時期推定できなかった住居跡を，前述の形態の類似性を用い，時期推定を行ないたい。

円筒上層e～大木8b式併行期と推定された96B号住居跡は，方形プランであること，2本柱であること，地床炉であることから，円筒上層e式併行期の可能性が高い。大木8b～9式併行期と推定された10号住居跡は，隅丸方形プランであること，炉跡が確認されなかったこと規則的な柱列を有しないことから，大木8b式併行期の可能性が高く，43，71B，103号住居跡は，楕円形プランであり，規則的なAまたはC類の柱配置であること，炉の形態が石囲複式炉であることから，大木9式併行期と考えられる。また，大木8b～10式併行期と推定された42

A号住居跡は，楕円形プランであること，A類の柱配置であること，石囲複式炉＋2個の地床炉を有することから，大木9～10式併行期に時期を狭めることができると考えられる。

ℓ）　住居跡の分布

本遺跡からは140軒もの縄文時代中期中葉から末葉の住居跡が検出された。これらの住居跡の大部分は，台地先端部のA区からの検出であり，B区からは1軒，C区からは4軒が検出されたのみである。さらにA区東側の微高地（A_2区）からの遺構の検出はなく，A区中央部から西部（A_1区）に遺構が集中する。

ここでは，A_1区の各時期の住居群の立地及び分布についてまとめたい。

〈円筒上層e式併行期〉

円筒上層e式併行期の住居跡は，大型住居3軒，中型住居2軒，小型住居9軒の計14軒で，その可能性のある住居跡を含めると大型住居3軒，中型住居3軒，小型住居12軒となる。これらの住居跡はA_1区西部から西端，北東部，南東部の3ヵ所に偏在する。西部から西端の部分には，3軒の大型住居，1軒の中型住居，8軒の小型住居が位置するが，住居の配置から4グルーピングができる。すなわち，この領域の北西端，南西端，東端に位置する大型住居（87，100A，106号住居跡）及び南東部に位置する中型住居（78B号住居跡）とそれぞれの近傍に位置する2軒の小型住居から成るグループである。新旧関係及び位置関係から87号住居跡と69・76号住居跡の2軒，100A号住居跡と88A・96B号住居跡の2軒が共伴するものと考えられる。また，78号住居跡は99B・100B・111号住居跡のうち2軒，106号住居跡は79号住居跡と残りの1軒と共伴関係になるものと考えられる。このように，大型または中型住居1軒と小型住居2軒から成るグリーピングは，北東部及び南東部ではその東側が未掘であるため，明確でない。しかし，両部分の中型，小型住居の割合は1：2であり，集落構成上の基本単位が，大型または中型住居1軒と小型住居2軒である可能性がある。なお重複関係より，一期間の住居数は1～4単位，3～12軒と考えられる。

〈大木8b式併行期〉

本時期の住居跡は，大型住居1軒，中型住居10軒，小型住居26軒で，大木8bか9式併行期か判別できなかった住居跡を加えると，大型住居3軒，中型住居11軒，小型住居38軒となり，住居数が大幅に増加する。これらの住居はやはりA_1区西部，北東部及び南東部の3ヵ所に偏在するが，いずれも前時期より若干A_1区中央部に移動している。10号住居跡は，前項において住居形態の類似性より，大木8b式併行期に時期を狭めたが，この分布から，逆に大木9式併行期とすべきものかもしれない。西部のブロックには1軒の大型住居，8軒の中型住居，25軒の小型住居が位置し，北東部，南東部にはいずれも1軒の中型住居と6軒の小型住居が位置する。

さて，北東部，南東部の中型住居を除く，それぞれ6軒の小型住居の主軸方向を検討すると，

北東部では，24・38号住居跡，23・33号住居跡，36・72号住居跡，南東部では41・46号住居跡，50・51号住居跡がほぼ同一である。このことから，小型住居構築の基本単位は2軒と考えられ，北部の住居跡についても，同様の分析結果がでるものと考えられる。また西部の東端部は，唯一の大型住居（114号住居跡）や増改築の行なわれた住居（85・74・77・99号住居跡）が集中し，特異な位置と言える。3ブロックの中心的な位置にあり，3ブロックを包括する住居跡群の場と考えられる。

〈大木9式併行期〉

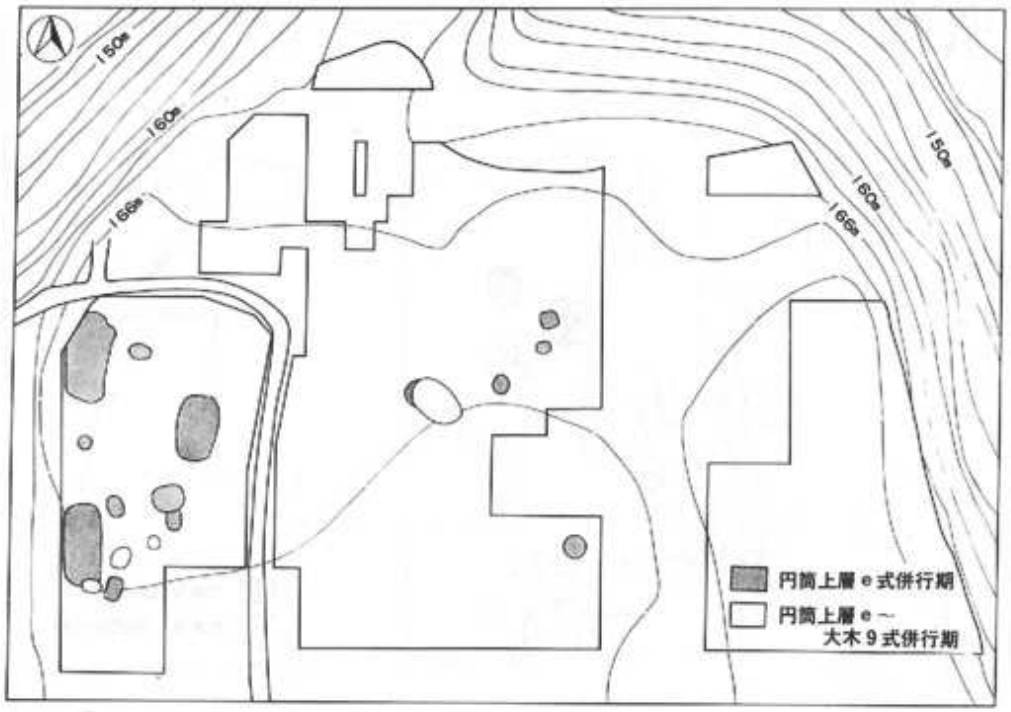
本時期の住居跡は，大型住居4軒，中型住居13軒，小型住居27軒の計44軒で，大木9か10式併行期か判別できなかった住居跡を加えると，大型住居6軒，中型住居14軒，小型住居36軒となり，集落の規模が最も大きくなる。これらの住居跡は，前時期よりさらにA_1区中央部に集中し，ほとんどの住居はA_1区東側の小沢状低地を広場とし，東側に開口部をもつ馬蹄形に分布する。大木9式併行期のみの住居跡は，主軸方向，炉の位置及び石棒のあり方から6類にグルーピングされる。この数は大型住居の数と一致し，中型住居の約1/2，小型住居の1/6にあたる。このことから，1軒の大型住居，2軒の中型住居，6軒の小型住居が，集落構成上の基本単位となるものと見られる。重複関係より本期の住居群は最低3期にわたると思われるので，1期間には1～3単位，9～27軒の住居が共存したものと考えられる。

〈大木10式併行期〉

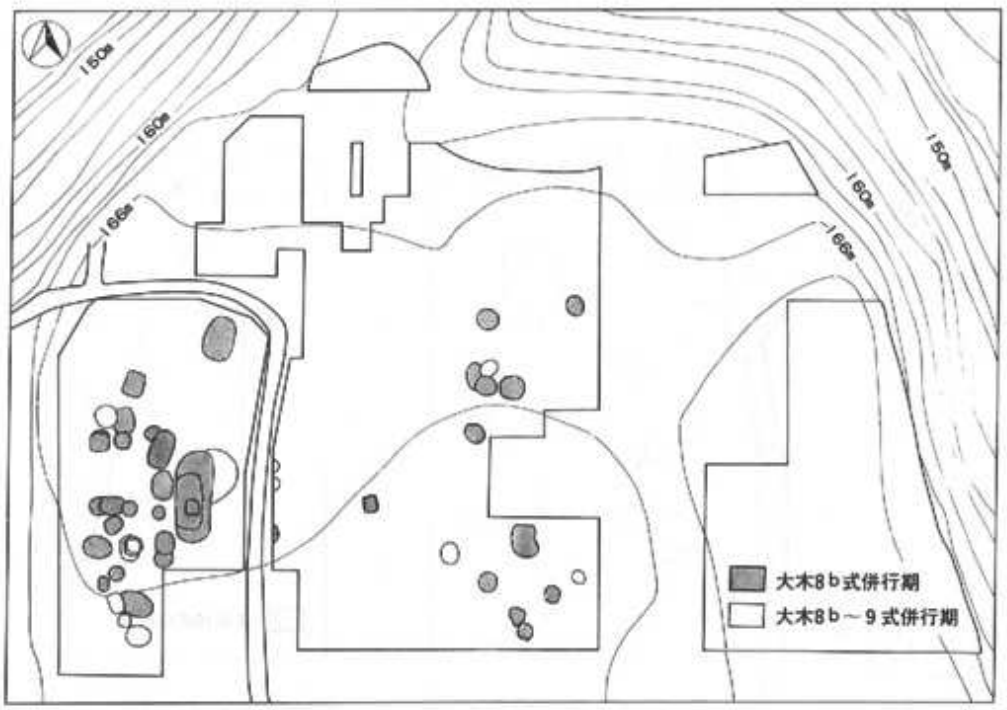
本時期の住居跡は，大型住居2軒，中型住居3軒，小型住居6軒の計11軒で，前時期に比べ大幅に集落の規模が縮小する。これらの住居跡は71A号住居跡を除き，A_1区中央部及び北東部に位置し，小沢に向かう緩斜面，最高部に弧状に分布する。全体的に，大木9式併行期より若干北側に移動している。

これらの住居跡は，その形態，主軸方向，炉の位置より，4類にグルーピングされる。すなわち，2軒の小型住居（17B・66号住居跡），3軒の小型住居（34・61・104号住居跡），1軒の大型住居と2軒の中型住居（9・17A・60号住居跡），大型・中型・小型それぞれ1軒の住居（25・70・71A号住居跡）である。第1番目のグループに，大木9～10式併行期と推定された28号住居跡を，住居形態及び規模の類似から本時期に位置づけると，大木10式併行期においては3軒を1単位と数えることができる。c）規模で述べたように，本時期の中型・小型住居の差はほとんどなくなり，分類も無意味となることを考えると，4グルーピングしたうちの前の2つは小型住居のみ，後の2つは大型と2軒の小型または中型住居より成り，共通性をもつ。これらの共通性を有するもの同士が対となるのか，相反するもの同士が対となるのかは不明であるが，いずれにしても，3軒から成る1単位が2つ集まり1群を成すものと考えられる。

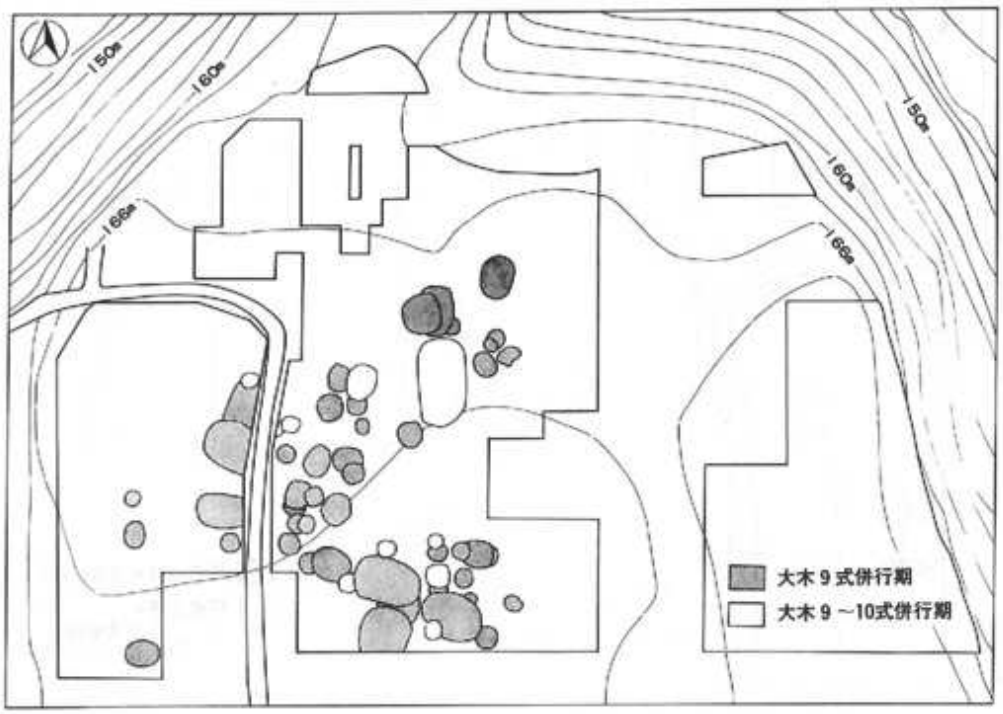
（秋元　信夫）



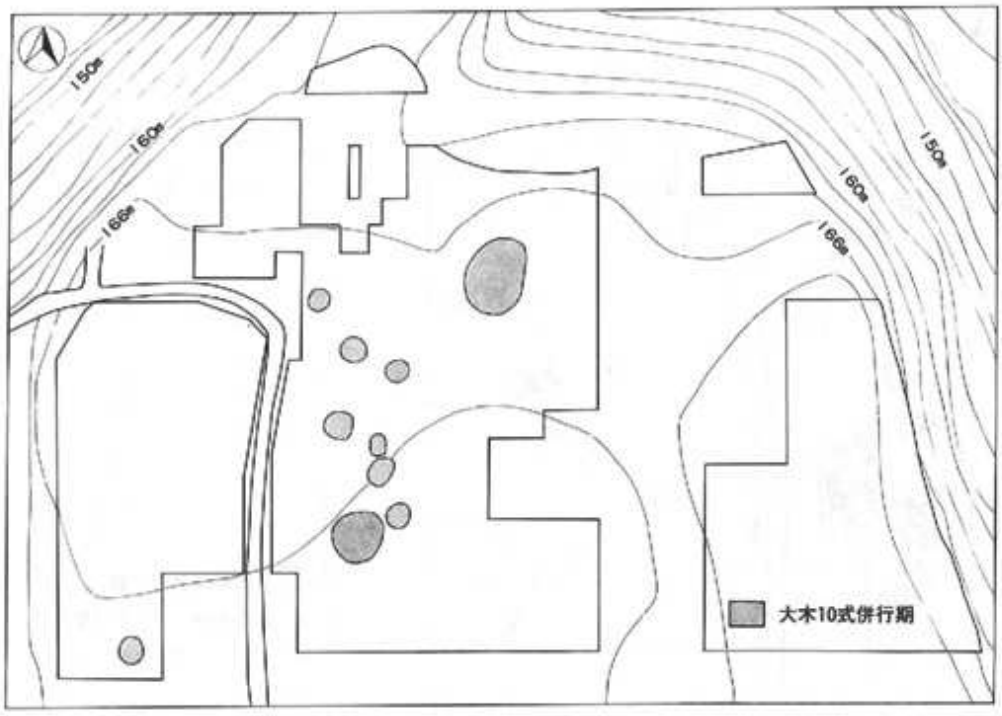
第389図　住居跡群分布図（円筒上層e式併行期）



第390図　住居跡群分布図（大木8b式併行期）



第391図　住居跡群分布図（大木9式併行期）



第392図　住居跡群分布図（大木10式併行期）

(2) 配石遺構

本遺跡で確認された配石遺構（以下配石と呼ぶ）は21基である。以下配石の分布，平面形態，配石下の土壙，構築時期について分類，説明し配石の機能について考えていきたい。

配石の分布は概観して次のように大きく群別された。

Ⅰ群　舌状台地北端の緩斜面に構築され，その配置は馬蹄形を呈する。

第10～17号配石遺構……8基

Ⅱ群　遺構の存在する地域のなかでも最も標高の高い場所に構築され，その配置は群をなす。　第1～4，8，9，19号配石遺構……7基

Ⅲ群　台地の平坦地に構築され，その配置は散在する。

第5～7，18，20号配石遺構……6基

このような分布の状況を示す。とくにⅠ，Ⅱ群の地域は住居跡・土壙の重複し切り合う地域，出土遺物の多い地域と比べ，まったく配石以外の遺構のみられない地域，又は希薄な地域，あるいは出土遺物の極めて少ない地域である。さらにⅠ群は標高の高い場所を境として生活の場である住居跡群と大きな隔たりをもたせ，ある特定の場（否生活の場）をつくり出している。さらにⅡ群はこの生活の場と否生活の場とのほぼ中央に位置し，これらとは違うもう一つの場をつくり出している。

配石の平面形態においても多様性に富んでおり，いくつかに分類された。

Ⅰ類　河原石をある範囲内に雑然と積み重ねて構築しているもので，いわゆる集石遺構と呼ばれているものである。なお，使用される河原石は，すべて丸みを帯びたものであるが，21号配石はコブシ大に打ち欠いたものを使用している。配石下に土壙を有するものが4例存在する。　第1，3，5，8，12，21号配石遺構……6基

Ⅱ類　偏平な河原石を環状（ドーナツ状）にめぐらすもので，河原石は雑然と積み重ねられている。本来はⅠ類に近いものであったであろうが，配石中央に河原石が存在しないことから分類した。なお，配石下に土壙は確認されなかった。

第2・4号配石遺構……2基

Ⅲ類　偏平な河原石を周縁に立石，横立石あるいは平石として，円形または楕円形に配するもので，単円または二重円に配列させるものがある。規模は径0.8～2.4mのものが存在する。なお，配石下に土壙を有するものが2例ある。

第9～11，13～15号配石遺構……6基

Ⅳ類　大型の河原石を直線的に配置したものである。配石下に小土壙を有するものが1例存在する。　第6，7号配石遺構……2基

V類　棒状の河原石を立石とし，それを埋設するための小土壙からなるもので，立石のみ，または立石を中心として数個の河原石を配置したものである。なお，1例のみ伏せたものが存在する。配石下に土壙または小土壙が存在する。

第16～20号配石遺構……5基

以上のように平面形態によって5分類された。

次に配石下で確認された土壙についてみていく。

確認された配石21基中その下に土壙，小土壙をもつものは12基認められた。その内訳は土壙9基，小土壙3基，土壙の存在しないもの10基である。それらの概略は次の通りである。

土壙の平面形は円形または楕円形を呈する。その規模は長軸60～178cm，短軸60～158cm，深さ24～130cmを測る。底面は平坦又は鍋底状を呈す。なお1例，フラスコ状を呈するものがある。土壙を有するものは1，5，8，10～12，16，17，19号配石の9基である。

小土壙の平面形は円形，又は楕円形を呈する。その規模は径45～55cm，深さ45cmを測り，円筒状を示す。7，18，20号配石である。

配石下に土壙，小土壙をもたないものは2～4，6，9，13～15，21号配石の9基である。とくに配石下に土壙をもつものはⅠ，Ⅱ，V類に多く，土壙，小土壙の存在しないものはⅢ，Ⅳ類に限られる。

次に，これら配石の構築時期であるが，積極的に時期決定できる資料がない。そのため土壙埋土中の土器片，他遺構との切り合いや，重複関係，構築される層位出土の土器から，その時期を導き出したいと思う。

土壙埋土中より遺物の出土する例は6例認められる。しかし，その量は極めて少ない。その遺構名と出土土器の形式名を列記すると次の通りである。

1号配石……細破片のため不明

7号配石……不明

10号配石……泉山式，榎林Ⅱ式，中ノ平Ⅲ式期

11号配石……榎林Ⅰ式，中ノ平Ⅲ式期

12号配石……大木8b式，中ノ平Ⅲ式期

16号配石……泉山式，榎林Ⅰ式期

他遺構と重複し切り合うものは3例存在し，すべて住居跡との重複である。それらの住居跡の使用時期，廃棄時期を列記すると次の通りである。

4号配石……70号住居跡と重複する。大木10式併行期

6号配石……115号住居跡と重複する。大木9，中ノ平Ⅲ式併行期

21号配石……23号住居跡と重複する。大木8b式併行期

これら3基の配石はすべて住居跡確認面上に，または埋土中に構築されている。さらに，配石の構築されている基本層位第Ⅲ層遺物包含層の出土遺物は，泉山式～中ノ平Ⅲ式期および大木8b式～大木10式期の特徴をもっているものである。これら3点を総括し，配石遺構の構築年代を考えてみると，まず土壙埋土出土の土器は人為による埋め戻しの際に混入したものと考えられることから，上記した土器は配石構築時期に使用されているか，またはすでに廃棄されていなければ埋土中に混入することはあり得ないことであるため中ノ平Ⅲ式期を含めたそれ以前，さらに重複関係からみると，中の平Ⅲ式（大木9と併行）と大木10式土器を出土する3棟の住居跡より重複する配石はすべて新しく，また配石遺構の構築される基本層位からも土壙埋土からもほぼ同時期のものが出土している。これらの点から配石構築時期は中ノ平Ⅲ式期（大木9新と併行）～大木10式期の縄文中期後葉から末葉にかけてつくられたものと考えられる。

以上，本遺跡で確認された配石遺構について観察点をもうけ分類し，説明を加えてきた。次に配石の機能について考えていきたい。配石は周知の如く，いまだ墓地説と祭祀説とが対立しているが，近年その下に土壙をもち，人骨または副葬品を確認，出土するものが多く報告されており，墓地説が有力である。

では，本遺跡の場合はどうであろうか。

前述した通り配石は21基確認された。これらは分布する地域によって，または配石下に存在する土壙の有無によって次のような機能の違いがみられた。

まず分布Ⅰ群の地域に馬蹄形を呈するように配置された配石は，平面形態はバラエティーに富むが，その下にいずれも土壙をもっている。さらにこれらの配石は遺跡の存在する台地で最も標高の高いところを境とし，住居跡または遺物の極めて希薄な地域を選び構築している。これは生活の場である住居跡と否生活の場がすでに隔たりをもたせて存在させたことをうかがわせるものである。また配石下に存在する土壙が縄文時代全期を通じて普遍的に行なわれた「屈葬」による埋葬を目的として穿たれたものであるならば，その規模は埋葬施設としては十分に可能な広さをもっているものである。これらのことから分布Ⅰ群の地域に存在する配石の下に土壙をもつもの，さらに他の地域においてもその下に土壙をもつものについては，配石墓としての機能をもっていたものであり，その配石は土壙（埋葬施設）の存在を標示するものと考えられる。

また，土壙をもつ配石の他に，配石下に埋葬施設としては認められない小土壙をもつものや，土壙のまったく確認されなかったもの，確認できなかったものがあり，これらについては配石墓となるための資料をみつけだせなかった。

特に配石下に土壙をもたない平面形態のⅡ・Ⅲ類は，分布のⅡ群の地域内に集中し群をなしている。この地域は分布Ⅰ群に構築された配石墓と，生活の場である住居跡群のほぼ中央に位置していることから，生活の場から否生活の場への通過点のような役割りをもっていたものと推察される。

以上のことから配石下に土壙をもたず，かつ分布Ⅱ群に構築されているものは野辺送り，または殯を行なう祭祀的な機能をもたせていたものであろう。しかし，このような機能をもつものであっても，埋葬当時配石が地表に盛り上がっていたことを容認すれば埋葬可能であることを考慮しなければならないであろう。

すなわち，本遺跡において確認された配石遺構は積極的に配石墓として，あるいは祭祀跡としてその機能を裏付ける資料を欠く。しかし配石下に土壙をもつものについては配石墓の機能をもち，配石は土壙の存在をあらわす標示であると考えられる。また，その下に土壙をもたないものについては，配石墓になりうる可能性を残すが，祭祀跡の機能をもつものであると考えられる。これらの構築時期は縄文中期後葉（中ノ平Ⅲ式，大木９式）～末葉（大木10式）にかけてのものである。また墓地と集落の位置，相互関係については共通点をもつ。たとえば分布Ⅰ群の配石墓の配置は，配石の構築時期と同時期である大木10式期の住居跡の配置と類似してつくりだされており，分布Ⅱ群を境として生活の場と，否生活の場を明確に分離し，隔たりをもたせていることが知れた。

（藤井　安正）

(3) 土　壙

本遺跡より検出された土壙は合計 103 基である。これらの内，土壙内から土器を出土したのは56.3%の58基である。石器類を出土したものは15基でその内訳は，石鏃４点，石匙２点，石錐１点，掻器３点，砥石１点，石棒３点，磨石１点，凹石５点である。土器を出土した土壙のうち所属時期を明確にできるものが39基あり，時期別遺構数は，中期中葉が６基，中期後葉前半が17期，中期後葉後半が15期，中期末葉が１基で中期後葉前半と後半ではほぼ同数となる。各土壙を平・断面形から次のように分けた。

タイプA……下方が末広がりになりフラスコ状と呈するもの。

1　平面形が円形を呈するもの。（第３・６・７・８・16・18・25・28・29・34・35・40・41・42・47・50・52・53・54・55・57・58・65・66・73・78・80・81・91・92・94・95・96・98・99・100・101・105・106・112・119・122号土壙）

2　平面形が楕円形を呈するもの。（第14・15・31・37・43・49・67・69・70・77・90・108・109・110・111Ｂ号土壙）

3　平面形が方形を呈するもの。（第26・27・38・39・51・75・79・117号土壙）

タイプB……口縁部・底部がほぼ同等の規模を有し，深い掘り込みをもつもの。

（第9・10・19・20・24・48・56・63・76・97号土壙）

タイプC……平面形が円形及び楕円形で垂直及び緩やかに外傾する掘り込みをもつもの。

1　平面形が円形を呈するもの。（第30・59・60・103・104・120・123・111A号土壙）

2　平面形が楕円形を呈するもの。（第2・5・12・44・61・68・71・107・121号土壙）

タイプD……平面形が方形で垂直及び緩やかに外傾する掘り込みをもつもの。

1　長軸・短軸が等しく正方形を呈するもの。（第1号土壙）

2　長軸・短軸の差をもち長方形を呈するもの。（第89・115・116・118・127号土壙）

3　長軸・短軸の差をもち規模が大きく非常に浅い掘り込みをもつもの。（第113・114号土壙）

タイプE……平面形が長楕円形を呈するもの。（第124・125・126号土壙）

タイプA　65基が検出され全体の64.1%を占める。時期別遺構数は中期中葉が5基，中期後葉前半が15基，中期中葉後半が11基，中期末葉が1基である。タイプA－1は64.6%の42基，タイプA－2は23.1%の15基，タイプA－3は12.3%の8基で，タイプA－1の占める割合が多い。時期を明確にできるものの中で，中期中葉では底部の規模が底面積5㎡以上となり，小規模なものは見られない。中期後葉では規模・形態の差違は認められない。第96号土壙はフラスコ状ピットの底面南東側にもう一つの小型のフラスコ状ピットをもつ二重構造を示しており上段と下段の比率はおよそ口径3：1，底径2：1，深さ3：2となる。二重構造をもつフラスコ状ピットの県内での検出例は，能代市館下Ⅰ遺跡，鹿角市猿ヶ平Ⅱ遺跡・北の林Ⅱ遺跡がある。

タイプB　10基が検出され全体の9.7%を占める。平面形はほとんどが円形を呈し，最小規模は0.81×0.76m，最大規模は1.50×1.38mで大部分が径0.80～1.00m，深さ80～95mの範囲内に入るものである。これら10基のうち6基までが住居跡検出区の北東側に位置する。

タイプC　17基が検出され全体の16.5%を占める。タイプC－1は8基，タイプC－2は9基とほぼ同数である。平面形が楕円形を呈するタイプC－2の最小規模は，0.70×0.58m，最大規模は2.58×2.11mでほとんどのものが長径・短径の比率が4：3となる。タイプCとした中に土壙底面に土器が埋設されたものが2基検出された（第71・111A号土壙）。平面形は円形，楕円形を呈し土壙底面を掘り込み，中期後葉前半の大型深鉢土器，おなじく中期後葉前半の深鉢土器をそれぞれ設施している。第71号土壙埋設土器覆土について，リン分析を行なった結果が付2である。

タイプD　8基が検出され全体の7.8%を占める。タイプD－2は規模，深さとも近似して

おりすべて人為的な埋め戻しが行なわれている。これらの土壙は遺跡北端の馬蹄形に配置される配石墓群の一部に位置するか，配石墓の近傍に位置する。第115号土壙底直，第116号土壙底面中央（5層）と壁際（4層）についてリン分析（付2）を行なった結果，両土壙ともリン含量は高く，これらの土壙は埋葬施設と考えられる。長軸方向は西位をとるもの（54°，65°，72°），東位をとるもの（27°，31°）があり統一性は見られない。

タイプE　3基が検出され全体の 2.9%を占める。平面形は長楕円形で溝状を呈する。第124・125号土壙は，短径断面が「U」,「V」字状を呈し，形態・性格から「Tピット」,「溝状遺構」,「溝状ピット」,「溝状土壙」などといわれているものと類似する。

検出された土壙は発掘区南西側と南東側にはほとんどみられず，住居検出区中央から北東側にかけて，また，南側中央に分布する。中央から北東側にかけて分布する多くのものが住居跡と重複し，住居跡の密集が高い程土壙のそれも増す。しかしながら規模，形態，時期に明らかな差違はなく整然とした区画を成すものでない。南側中央に集中する多くのものはフラスコ状ピットで，中期後葉後半期のものが大半を占める。いずれの場合も住居跡から近い距離にあり，生活域において住居跡との有機的なつながりがうかがえる。

（佐藤　樹）

(4) 縄文土器

本遺跡からは，遺構内・外より 250 個体以上の完形及び復元可能土器を含み，20kg 入りダンボール箱で約 180 箱の縄文土器を出土した。多量の遺物の出土と整理人員の不足から，整理作業は遺構内出土遺物に主力をおき，遺構外の土器については，完形土器及び復元が容易にできる状態で出土した 1 個体土器についてのみ整理を行なった。その他のものについては，昭和59年度に整理を行なう予定である。ここでは完形土器と現在までに復元・図化のできた 171 個体の土器について分類・観察を行ないたい。

a)　土器の分類と観察

深鉢形土器

深鉢形土器の出土量は最も多く，完形及び復元された土器の約60%を占める。これらの土器をまず文様帯，地文の有無から 3 類に大別し，文様帯の有するもの（Ⅰ類）については文様帯の位置，文様及び施文技法等により，また地文を有するもの（Ⅱ類）については折り返し口縁，無文帯の有無により細分した。

Ⅰ類　本類は文様帯を有する土器類で，文様帯の位置により細分した。

ⅠA類　口唇部のみに文様帯をもち，他は地文のもので，文様及び施文技法により次の 3 類

に細分した。

1類　口唇部に斜位の沈線文（刻み目文）を施文するもので，1点（402図1）が本類に該当する。2つの山形突起を有し，口縁部が若干外反する深鉢で，突起部には「L」字状粘土紐貼付文，口唇部には斜位の刻み目を有し，口縁部から胴部下半までRL斜縄文が施文されている。焼成はやや不良で，色調は灰褐色を呈する。

2類　口唇部に連続刺突文を施文するもので，1点（407図2）が本類に該当する。3つの頂部をもつ波状口縁で，口縁部が外反，胴部が若干張り出す器形を呈し，波状口縁頂部には粘土紐貼付による円文を主体とした文様，口唇部には連続刺突文が施文されている。地文はRL斜縄文で，焼成はやや不良，色調はにぶい橙色を呈する。

3類　口唇部に凹線文を施文するもので，本類には3点（396図14,405図3,407図1）が該当する。波状口縁のものと，平口縁のものがあり，口縁部が外反，胴部が若干張る器形を呈する。口縁部は膨隆し，肥厚する口唇部に凹線文が施文される。波状口縁のものは頂部に円文（凹文）を，平口縁のものは3ヵ所で切れる凹線文の初点，終点部が円文（凹文）となる。地文はLR，RL斜縄文で，焼成はいずれもやや不良，色調はにぶい黄橙色，灰黄褐色を呈する。

IB類　本類は口唇部と口縁部から胴上半部に文様帯をもつものである。口唇部には，粘土紐貼付文，斜位刻み目文，縄文斜位圧痕文，凹線文，口縁部から胴部上半には沈線による胸骨文に類似する文様，弧状文等を施文する土器類である。本類については，口唇部文様により細分した。

1類　平口縁の口唇部に粘土紐貼付けによる波形文を有するもので，1点（397図1）が本類に該当する。口縁部上半は無文，口頸部の3条の横位平行沈線文下から胴部下半に下りた懸垂文により4区画，それぞれの区画内胴上半部に横位渦巻文を主体とする曲線文が施文される。地文はLR縄文，焼成はやや不良で，色調は橙色を呈する。

2類　口唇部に縄文斜位圧痕文と隆線文を有するもので，1点（397図2）が本類に該当する。1個の把手と3個の突起を有する土器で，把手部には隆沈文による渦巻文を主体とする文様，突起部には粘土紐貼付文，口縁部から胴部上半には木葉文，波状文を施文，突起部下の弧状文最下部からは1条の懸垂文が垂下，把手部下の木葉文の端には縦位渦巻文が付加される。地文はRLR斜縄文，色調はやや不良，色調は灰褐色を呈する。

3類　口唇部に縄文斜位圧痕文を有するもので，1点（399図2）が本類に該当する。4個の山形突起を有し，突起部には「W」字状粘土紐貼付文，口縁部から胴上部には2～3条の平行沈線による弧状文が施文される。地文はLR斜縄文で，焼成はやや不良，色調は黒褐色を呈する。

4類　口唇部に斜位刻み目を有するもので，2点（394図3，397図3）が本類に該当する。3個の山形突起を有し，突起頂部から胴部中央まで1条の懸垂文が垂下，その間に木葉文が施文され

るものと4個の山形突起を有し，口頸部に弧状文，木葉文を施文するものとがある。地文はLR斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄褐色・にぶい黄橙色を呈する。

5類　肥厚した口唇部に凹線文を有するもので，2点（397図4，405図1）が本類に該当する。いずれも大型の土器で，大小4個ずつの突起をもつ。口唇部には凹線文を有し，突起部では渦巻文または「∞」状文に変わる。口縁部から胴上半部には突起下から垂下する弧状連結文間に菱形状文を施文するものと，弧状文を施文するものとがある。前者のいたるところに渦巻文及びその変形文が施文されている。いずれも地文はRL斜縄文で焼成はやや良好である。色調は397図4がにぶい褐色，405図1がにぶい橙色を呈する。

IC類　本類は口縁部から胴部上半に文様帯をもつ土器類である。文様及び施文技法より3類に細分した。

1類　口縁部から胴部上半に2～3条の横位平行沈線文を有する土器類で懸垂文の有無で2分類される。

a類　突起部下に懸垂文を有するもので，1点（399図1）が本類に該当する。4個の山形突起を有し，突起下から胴部中央まで波状懸垂文，その間には横位平行沈線文を施文している。地文はRLR斜縄文，焼成はやや良好，色調はにぶい褐色を呈する。

b類　懸垂文を有しないもので，1点（394図4）が本類に該当する。2つの頂部をもつ波状口縁の土器で，3条の平行沈線文を施文，頂部下には平行沈線による弧状文が付加される。地文はRL斜縄文，焼成はやや不良で色調はにぶい褐色を呈する。

2類　口頸部から胴部上半に連結「∩」文の施文される土器類で，1点（407図7）が本類に該当する。平口縁で，口縁部が外反，胴部が張る器形である。口縁部上半は無文，口頸部から胴部上半には「∩」文の下端をそれぞれ結合した文様が施文され，その間には1条の懸垂文が付加される。地文はRL斜縄文で，焼成はやや不良，色調は褐灰色を呈する。

3類　口縁部から胴部上半に磨消縄文または充塡縄文による区画文を施文する土器類で，文様及び施文技法により3分類した。

a類　波状文を主体文様とする土器類（396図4，398図4）で，区画文内にRLまたはLR縄文が充塡される。396図4の口頸部には，波状口縁と合わせて1条の沈線と連続刺突文が一巡し，波状区画文頂部には「L」字状区画文が接続される。いずれも焼成は良好で，色調は灰黄褐色，浅黄橙色を呈する。

b類　連結「L」,「U」,「D」字状文が横位方向に展開する土器類（396図5，400図7・9）である。400図7は2つの頂部をもつ波状口縁，他は平口縁である。いずれもLR斜縄文上に太く浅い沈線で文様を施文，区画文外を磨消している。焼成はやや良好で，色調はにぶい褐色，にぶい赤褐色，黒褐色を呈する。

c類　稜線による連結横位楕円文を主文様とする土器類で，1点（396図11）が本類に該当する。楕円文は口頸部の稜線に接してほぼ一巡するが，一部胴部上位にずれるものや，楕円文に「C」字状文が付加するものがあり，若干規則性に欠ける。区画文外にはLR縄文が充塡される。焼成は良好で，色調は暗赤褐色を呈する。

ID類　本類は口唇部と口縁部から胴部下半まで文様帯をもつ土器類である。口唇部文様により2分類した。

1類　口唇部に斜位縄文圧痕文を有するもので，1点（394図2）が本類に該当する。2個の山形突起をもつ深鉢で，口唇部に斜位のRL縄文圧痕文，口頸部には平行沈線文が一巡し，胴上部には弧状文，胴中央から下部にかけては幾何学的な文様が沈線により施文される。地文はRL斜縄文，焼成は良好で，色調は灰褐色を呈する。

2類　口唇部に横位渦巻文を有するもので，口縁部，胴部文様より次のように細分される。

a類　口縁部に弧状文，胴部に「丫」状懸垂文を施文する土器類で2点（398図7，399図4）が本類に該当する。大小3個ずつまたは6個の頂部をもつ波状口縁の大型土器で，肥厚した口唇部には簡略化した横位渦巻文，口縁部には3条の平行沈線による弧状文，横位線文，胴部には2条の平行沈線による「丫」状懸垂文が施文される。393図7の地文は胴部上半までがRLR，RL斜縄文，胴部下半がL斜縄文で，焼成は不良，色調は明赤褐色を呈する。399図4の地文はLR縄文，焼成はやや良好で，色調は橙色を呈する。

b類　口縁部に波状文，胴部に渦巻文を主体とした文様を施文する土器で，1点（398図8）が本類に該当する。大小3個ずつの突起をもつ深鉢で，大突起下胴部には懸垂文が施文され，3区画される。区画内には渦巻文が施文されるが，その初点である口頸部との接点部では小渦巻文を形成，渦巻文の下端からは懸垂文が垂下する。これらの文様はすべて隆沈文で施文されている。地文はRL斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい赤褐色を呈する。

IE類　本類は口縁部文様帯と胴部文様帯をもつ土器類で，いずれもキャリパー形を呈する。胴部文様及び施文技法により細分した。

1類　胴部に隆線による波状懸垂文を有する土器類で，1点（394図1）が本類に該当する。地文はRLR斜縄文，焼成は良好で，色調はにぶい赤褐色を呈する。

2類　口縁部に隆沈文による有棘横位渦巻文を主体とする文様，胴部には2～3条の平行沈線による渦巻文を伴う曲線文（394図5，399図3），曲折文（398図2），曲線文（394図8）等が施文される。口縁部文様は渦巻文がそれぞれと，または口縁部上・下端の隆沈文と結合，一部に区画部分を生じさせている。地文は口縁部がRL斜縄文，口頸部以下がRLR斜縄文のものと，口頸部の回転方向が違いながらも同一原体の回転押捺文のものとがある。この場合，RLR，RL，LR縄文が施文される。焼成は良好なものが多く，色調はにぶい赤褐色，にぶい褐色等

を呈する。

ＩＦ類　本類は胴部上半と胴部下半に文様帯をもつもので，文様の違いより次のように細分した。

1類　口縁部から胴上部に平行沈線による波状文が，その上部には「∩」文と「∪」文が対となった文様，下部には1～2条の平行沈線による縦位楕円文，「∩」文が施文される土器(400図6）である。区画文内にはＬＲ縄文が充填される。焼成はやや良好で，色調はにぶい赤褐色を呈する。なお器形は，平口縁で，口縁部が外反し胴部が張る広口壺に近い深鉢である。

2類　口縁部から胴部上半に波状区画文，胴下半に「∩」状文を有する土器(401図37)である。口縁部が内彎するキャリパー形に近い小型土器であり，区画文内にはＲＬ縄文を充填している。焼成はやや良好で，色調はにぶい黄褐色を呈する。

ＩＧ類　本類は口縁部から連続した文様帯をもつもので，1点（399図6）が該当する。5つの頂部をもつ波状口縁で，口縁部が内彎する深鉢を呈する。頂部間に施文される文様は上半は「∪」字状文とその内に1対の縦位渦巻文を付加した懸垂文で，下半の「∩」文か「⋒」文が接続される。これらの文様はすべて1～2条の沈線で施文される。地文はＬ斜縄文，焼成はやや良好で，色調は明黄褐色を呈する。

ＩＨ類　本類は口縁部が無文で，口頸部から胴部下半まで連続した文様帯を有するものである。本類については境界文の有無，折り返し口縁か否かで3類に分類した。

1類　本類は，口頸部に横位沈線文，刺突文等を施文，文様帯を区画する土器類である。胴部文様より4類に細分した。

a類　口頸部の横位沈線文から曲線文，懸垂文が展開する土器類で，1点（394図7）が本類に該当する。3つの頂部をもつ波状口縁で，口縁が外反，胴部が若干張る器形で，口頸下の文様はすべて3条の平行沈線によって施文される。地文はＬＲ斜縄文で，焼成はやや良好，色調はにぶい赤褐色を呈する。

b類　口頸部に横位連続刺突文，胴上部に弧状文を施文，1つおきに弧状文から懸垂文が垂下する土器類で，1点（399図5）が本類に該当する。2個の山形小突起を有し，口縁部が外反，若干胴部が張る器形で，刺突文以下の文様は平行沈線により施文される。地文はＲＬ斜縄文で，焼成はやや良好，色調は灰褐色を呈する。

c類　口頸部に1条の横位沈線文，口頸部から胴上部に平行沈線による波状文を施文，その下端より3条の懸垂文が垂下する土器類で，1点（395図1）が本類に該当する。平口縁の広口壺に近い器形で，地文はＲＬ斜縄文である。焼成はやや良好，色調は灰褐色を呈する。

d類　口縁部の無文帯に横位連続刺突文，口頸部に沈線文，胴部に懸垂文が施文される土器類で，1点（395図2）が本類に該当する。2つの頂部をもつ波状口縁で，口縁部が若干内彎す

る深鉢形を呈する。地文はＬＲ斜縄文で，刺突文以外の文様はすべて沈線により施文される。焼成は良好で，色調はにぶい黄褐色を呈する。

e類　口頸部に円形文と横位沈線文，胴部に「∩」文を施文する土器類で，１点（395図5）が本類に該当する。平口縁で，口縁部が若干内彎する深鉢形を呈する。地文はＬＲ斜縄文で，文様はすべて沈線により施文される。焼成はやや良好で，色調はにぶい黄褐色を呈する。

２類　本類は無文の折り返し口縁下から胴部下半まで連続した文様帯を有する土器類である。胴部文様より次のように細分される。

a類　平行沈線による「∩」文を施文するもの（394図17，400図３）

b類　平行沈線による「∩」文を連続して施文するもの（400図２・４，407図５）

c類　２つの「∩」文が胴中央部で連結した「H」状文のもの（405図４）

２類はいずれも平口縁で，胴部が若干張り，口縁部は直立または外傾する器形のものが多い。b，c類には刺突文をアクセサリー風に施文するものが多い。地文はＲＬかＬＲ斜縄文で，ＲＬ斜縄文の方が多い。焼成はあまり良くなく，色調はにぶい黄褐色，にぶい褐色等を呈する。

３類　本類は口縁部上半が無文で，口縁部から胴部下半まで連続した文様帯をもつ土器類である。施文技法により３分類した。

a類　地文上に１～２条の沈線により文様を施文するもので，さらに文様の差異より，

a_1類　１条の沈線による「∩」文を施文するもの（395図４）

a_2類　平行沈線による「∩」文を連続して施文するもの（400図１）

に細分される。

395図4は，底部から口縁部にかけ外傾する小型の土器である。地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調は灰黄褐色を呈する。400図1は平口縁で，口縁部が外反し，胴部が若干張る深鉢形を呈する。地文はＬＲ斜縄文で，焼成はやや不良，色調は黒褐色を呈する。

b類　地文上に「∩」文や縦位楕円文を施文，区画文内を磨り消す土器類で，文様の差異より，

b_1類　「∩」文を施文するもの（395図12）

b_2類　縦位楕円文と「∩」文の組み合わせ文（395図８）

に細分される。

いずれも３～４つの頂部をもつ波状口縁で，口縁部が外反し，胴部が張る深鉢形を呈する。文様は細い沈線で施文され，区面文内の磨り消しは雑である。地文はＬＲ斜縄文で，焼成は不良，色調は灰黄褐色，橙色を呈する。

c類　磨消縄文による縦位楕円文と「∩」文の組み合せ文を施文するもので，文様の組み合わせで次のように細分される。

c_1類　縦位楕円文＋「∩」文と「∩」文が交互に施文されるもの（395図16・17）

c_2類　縦位楕円文＋「∩」文と２つの「∩」文が交互に施文されるもの（395図14）

c_3類　縦位楕円文＋「∩」文をさらに「∩」文でつつむ文様単位と縦位楕円文＋「∩」文からなる文様のもの（400図５）

c類には平口縁のものもあるが，４つの頂部をもつ波状口縁のものが多く，頸部でくびれ，そのまま外反する口縁のものと，内彎する口縁のものとがある。地文にはＬＲとＲＬ斜縄文があるが，ＲＬ斜縄文のものが多い。焼成は良好で，色調は灰黄褐色，黒褐色，にぶい黄橙色，橙色を呈する。

ＩＩ類　本類は口頸から胴部下半まで文様帯をもつもので，文様帯の位置はＩＨ類と同じであるが，口縁部上半に無文帯を有するか否かで分類した。本類は口縁部全域に地文が及ぶものである。本類については，胴部文様により細分した。

１類　口頸部に平行沈線と刺突文，胴部に円形文と懸垂文からなる文様を主体とする土器類で１点（394図10）が本類に該当する。３つの頂部をもつ波状口縁で，口縁部が外反し，若干胴が張る深鉢形を呈する。胴部に施文される円形懸垂文は，流れるような曲線文により連結される。胴部文様の施文技法はすべて沈線文で，地文はＲＬ斜縄文である。焼成はやや良好で，色調は灰褐色を呈する。

２類　「∩」文を基本とする土器類で，２点（405図5，407図6）が本類に該当する。いずれも折り返し口縁で，胴部から口縁にかけ若干内彎する深鉢形を呈する。胴部文様により次のように細分される。

a類　平行沈線による「∩」状文を連結して施文するもの（407図６）

b類　連結「∩」文，円文，懸垂文よりなる文様のもの（405図５）

いずれにも，アクセサリー風に刺突文が付加される。地文はＲＬＲ，ＲＬ斜縄文，色調は灰黄褐色，にぶい黄橙色を呈する。

ＩＪ類　本類は，口頸部から胴中央部に文様帯をもち，胴下部が無文となる土器類で，１点（396図13）が該当する。５つの頂部をもつ波状口縁で，胴部が張り，口縁部が外反する深鉢形土器で，口頸部と胴部下半の３条の横位沈線文により区画された口頸部から胴中央部に２～３条の沈線による波状入組文を主体とした文様を施文，ＬＲ縄文が充填されている。焼成は良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

Ⅱ類　本類には地文のみを有するものを一括した。折り返し口縁，無文帯の有無より，Ａ～Ｃ類に分類，折り返し口縁のもの（Ａ類）については口縁部の地文の有無，口縁部が無文で胴部に地文のみを施文するもの（Ｂ類），地文のみのもの（Ｃ類）については器形の差異から細分した。

ⅡA類　本類は折り返し口縁を有し，地文のみが施文される土器類である。大部分が平口縁で，口縁部が外反し，胴部が若干張る器形のものが多い。本類については，折り返し口縁部の地文の有無により細分した。

1類　折り返し口縁部が無文のもの（396図15，402図2・9・10）

2類　折り返し口縁部上にも地文が施文されるもの（397図8・9，396図6）

A類の地文はRLかLRの斜縄文で，胴部は縦位に回転押捺されるものがほとんどで，まれに無方向のものがみられる。なお2類の折り返し口縁部の回転方向は横位である。385図15の折り返し口縁部には貼瘤，387図2にはRL縄文の圧痕文を有するが，それ以外に特徴的な文様を有しないため，本類に入れた。A類の土器の焼成はやや良好なものが多く，色調は灰黄褐色やにぶい褐色を呈するものが多い。

ⅡB類　本類は口縁部が無文で，胴部に地文のみが施文される土器類である。口縁部の無文帯は幅が広く胴部上端にまで及ぶものと，口縁部上半にかぎられるものがある。本類を器形の差異から細分し，その中で無文帯の幅についてふれることとする。

1類　口縁部が外傾または外反し，胴部が張るもの

（400図8，402図11・13～15，404図3・4，408図1～8・10，409図2）

波状口縁のものと平口縁のものがあるが，平口縁のものが圧倒的に多い。波状口縁のものは無文帯の幅が広く胴部上端にまで及ぶものが多い。平口縁のものは，ほとんどが幅の狭い無文帯であるが，広口壺に近い器形のものに幅の広い無文帯がみられる。地文にはRLR，RL，LR縄文，L結節回転文等があるが，RLかLRの縦位方向の回転押捺による斜縄文がほとんどである。焼成は大型のものにやや不良なものがみられるが，他はやや良好である。色調はにぶい褐色，にぶい赤褐色，黒褐色等を呈する。

2類　胴部中央からほぼ垂直に立ち上がり，口縁部が外反するもの

（402図18，403図15・16・18，404図6，409図1・3・4・6～8）

すべて平口縁で，無文帯は狭く，口縁部上半に限定される。地文にはRLとLR縄文があるが，ほとんどがLR縄文である。回転方向はほとんどが縦位であるが，斜方向に回転押圧するものもある。焼成はあまり良くなく，色調はにぶい黄橙色，にぶい褐色，灰褐色等を呈する。

3類　胴部中央からほぼ垂直か外傾で立ち上がるもので，口縁部が外反しないもの

（395図7・10・12，409図5・10）

すべて平口縁で，無文帯も狭く，口縁部上半に限定される。口縁部が若干内彎するもの（403図7・12，409図10）と垂直に立ち上がるもの（403図10，409図5）とがある。地文はL，RL，LR斜縄文の他，縦位の条痕文のものもある。焼成はやや不良のものが多く，色調は灰褐色，にぶい褐色等を呈する。

4類　底部から外反ぎみに外傾し，口縁部が内彎するもの（403図21）

1点が本類に該当する。平口縁で，内彎部分が無文帯となる。地文はＲＬ斜縄文で，焼成はやや不良，色調は灰褐色を呈する。

5類　胴中央部から内傾するもの（406図2，407図10）

いずれも平口縁で，口縁部上半に幅の狭い無文帯をもつ。391図2は大型土器で，地文はＲＬ縦位縄文で，焼成はやや不良，色調はにぶい黄橙色を呈する。また392図10の地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい褐色を呈する。

6類　小型の深鉢形土器（401図23・41，403図14・19，404図1）

すべて平口縁で，口縁部が外反し，胴部が張る器形のもの（401図23，404図1），胴部中央からほぼ垂直に立ち上がる器形のもの（403図14），外傾する器形のもの（403図19）等がある。口縁部の幅は狭く，口縁部上半に限定される。地文はＬ，ＲＬ，ＬＲ，ＲＬＲ縄文である。焼成は良好なものが多く，色調はにぶい黄橙色を呈するものが多い。

ⅡＣ類　本類は口縁部から胴部下半まで地文のみが施文される土器類である。器形の差異より次のように細分した。（404図2・5・7，406図5，407図4，408図9，409図9）

本類には波状口縁のものもあるが，平口縁のものが多い。胴部の張りが大きく，口径を上回るものもある。地文にはＬＲ斜縄文とＬＲ結節回転文のものがある。焼成は大型のものにやや不良のものが多くみられる。色調は黒褐色，にぶい黄橙色，明黄褐色等を呈する。

2類　胴部中央よりほぼ垂直に立ち上がるもの（403図5・8，407図12）

本類はすべて平口縁で，口径・器高差があまりなく，鉢形に近い器形を呈する。地文にはＬ，ＬＲ，ＲＬ斜縄文がある。焼成はやや良好で，色調は黒褐色，褐色，灰黄褐色を呈する。

3類　口縁部が内傾または内彎するもの（403図11，406図3，407図11，409図11）

本類はすべて平口縁で，胴部上半から口縁部にかけ若干内彎するものと，底部から直線的に外傾し，口縁部で内傾するものとがある。地文にはＲＬ，ＬＲ斜縄文があるが，ＲＬ斜縄文のものの方が多い。焼成は大型のものにやや不良のものがみられ，色調は灰褐色，灰黄褐色等を呈する。

Ⅲ類　本類は無文の土器類であり，4点が該当する。いずれも平口縁のミニチュア，小型土器で，口縁部が若干内彎するもの（401図5，403図9），胴部中央からほぼ垂直に立ち上がり，口縁部上半で外傾するもの（403図20），胴部中央から外傾するもの（401図3）がある。焼成は良好で，色調は灰白色，にぶい褐色，灰黄褐色，黒褐色を呈する。

鉢形土器

鉢形土器については，文様帯，地文の有無及びその位置より次のように分類した。

Ⅰ類　本類は文様帯を有するもので，2点（396図1，401図13）が該当する。文様及び施文技法

により，次のように細分した。

ＩＡ類　無文地に沈線による「∩」文を施文する土器（401図13）で，ミニチュア土器である。焼成は良好で，色調はにぶい橙色を呈する。

ＩＢ類　磨消縄文による「∩」状文を有する土器（396図1）で，平口縁で，口縁部が外反，胴部が若干張る小型鉢形を呈する。口頸部から胴部上半に「∩」状文を施文，区画文外を磨消している。地文はＬＲ斜縄文，焼成は良好で，色調はにぶい橙色を呈する。

Ⅱ類　本類は口縁部が無文で，胴部に地文のみを施文する土器類（401図21・32，402図16，403図2～4，6，13，17）である。平口縁のものが多く，胴部が張り，口縁部の外反する広口壺に近い鉢形と頸部を有せず胴部からほぼ垂直に立ち上がるか，若干内彎する口縁をもつ鉢形とがある。無文帯は地文の施文後，横位のナデにより磨消されるものが多く，前者の方が無文帯の幅が広い傾向がみられる。地文はＬＲとＲＬ斜縄文のものがあるが，ＬＲ斜縄文のものが，圧倒的に多い。色調は黒褐色，にぶい褐色，にぶい黄褐色，にぶい赤褐色等を呈する。

Ⅲ類　本類は器面全体に地文のみを施文する土器類で，2点(401図16，403図1）が該当する。いずれも口縁部が内彎する鉢形を呈し，器面全体にＲＬまたはＬＲ斜縄文が施文される。色調は褐灰色，黄橙色を呈する。

Ⅳ類　本類は無文の小型またはミニチュア土器（401図１・４・６・９・11）である。丸底で，口縁部が内傾するもの，平底の底部より内傾・外傾するもの，丸みのある胴部からほぼ垂直に立ち上がるものがある。焼成は良好なものが多く，色調はにぶい橙色，にぶい褐色を呈する。

浅鉢形土器

口径に対し器高が80％未満のものを浅鉢とした。文様帯，地文の有無及びその位置より，次のように分類した。

Ⅰ類　本類は文様帯を有するもので，１点（401図25）が該当する。口縁が内彎する浅鉢で，口縁部から胴部上半にかけ，平行沈線による波状文が施文される。地文はＬＲの斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい橙色を呈する。

Ⅱ類　本類は口縁部が無文で，胴部に地文のみを施文するもので，１点（401図38）が本類に該当する。38は有孔突起状に口唇部に把手がつけられた土器で，口縁部が内彎する浅鉢形を呈する。口縁部上半及び把手部が無文で，地文にはＬＲ斜縄文が施文されている。焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

Ⅲ類　本類は器面全体に地文のみを有するもので，２点（401図17・18）が本類に該当する。いずれも口径が６～７cm程度の小型の土器で，17は波状口縁で，丸みを帯びた胴部から口縁部がほぼ垂直に立ち上がり，18は平口縁で，底部から口縁部まで直線的に外傾する。器面全体にはＬＲ，ＲＬ斜縄文が施文される。焼成はいずれも良く，色調はそれぞれ明黄褐色，浅黄橙色を

呈する。

Ⅳ類　本類は無文の土器で，２点（401図10･12）が該当する。いずれもミニチュア土器で，丸底のものと，平底で胴部が丸みを帯び，口縁部が内彎するものとがある。後者の口縁部上半には円形の貫通文が一巡する。両者とも焼成は良好で，色調はにぶい橙色，明黄橙色を呈する。

壺形土器

壺形土器としたものには，厳密には壺形に入らず，口頸部の屈折する鉢形に近似するもの，従来の器形になく，新しく名称を付しなければならないものもある。ここでは，胴部が張り，口頸部が大きく屈折する土器で，口径が胴部最大径より小さいものをすべて壺形土器として扱う。器形及び大きさより，次のように分類した。

Ⅰ類　把手付壺形土器

Ⅱ類　広口壺形土器

Ⅲ類　小型壺形土器

Ⅰ類　本類は把手を有する壺形土器で，把手の位置，形態及び方向よりＡ～Ｄ類に細分される。

ＩＡ類　胴部上端に縦位の橋状把手を有するもので，１点（401図36）が本類に該当する。胴部が強く張り，口縁部が内傾する小型の土器で，胴部上端に等間隔の４個の縦位の橋状把手がつき，それらの間には平行隆線文が施文される。胴部には沈線による波形文が施文され，その内部にＲＬ縄文が充填される。なお器面内外に朱が塗られている。

ＩＢ類　胴部上端に縦位の変形橋状把手を有するもので，１点（400図10）が本類に該当する。胴部上端より内彎・内傾する大型の土器で，胴部上端に等間隔に４個の把手を有する。口縁部は無文で，胴部にはＲＬ斜縄文が施文される。焼成は不良で，色調は明赤褐色を呈する。

ＩＣ類　胴部上端に横位の橋状把手を有するもので，本類には２点（396図６･12）が該当する。６の把手には横位方向にも孔をあけている。胴上半部には磨消縄文による「Ｌ」字状文が施文される。12は橋状把手下に沈線による縦位楕円文，その両側に「Ｃ」字状と思われる区画文を施文，その内部にＬＲ縄文が充填される。なおいずれも焼成は良好で，器面に部分的に朱塗りの痕跡を残している。

ＩＤ類　頸部と胴部中央の横位橋状把手が調整隆線により縦位に連結された把手１対を有するもので，本類には２点（396図3･9）が該当する。３は長頸壺形を呈し，口頸部から胴部中央に磨消縄文による横位方向の「Ｕ」字状連結文が施文される。地文はＬＲ斜縄文，焼成は良好で，色調はにぶい橙色を呈する。９は胴部が大きく張り出す壺形を呈し，胴部上半に稜線による円文，楕円文，変形楕円文，「の」字状文等が施文される。地文はＲＬ斜縄文で，円文，楕円文及び区画文外が磨り消され，内面と外面の区画文外の無文部に朱が塗られている。

Ⅱ類　本類には小型及びミニチュアを除く広口壺形土器を一括した。壺形土器としたもののうち最も量的に多い。器形的に頸部の屈折する深鉢と類似するものもあるが，口径部が胴部最大径とほぼ同じか小さく，頸部が大きく屈折するものを本類とした。

文様帯の有無より2類に分類，文様帯の有するもの（A類）については文様帯の位置，文様，施文技法により，無文帯と地文のもの（B類）については，その境界文の有無により細分した。

ⅡA類　本類は文様帯と地文よりなる土器類で，文様帯の位置より3類に分類した。

1類　口縁部上半部が無文で，その下部から胴部下半まで文様帯をもつもので，文様及び施文技法により細分した。

a類　隆沈文による縦位渦巻楕円文，「∩」文等を施文する土器類で，1点（394図12）が本類に該当する。2つの頂部をもつ大波状口縁の広口壺で，渦巻楕円文，「∩」文が縦横に連結した文様が，口縁部上位の横位隆沈文下の器面全体に展開する。地文はLR斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

b類　磨消縄文による縦位楕円文，「∩」文を施文する土器で，1点（395図15）が本類に該当する。口縁部を欠いているが，「∩」文と縦位楕円文＋「∩」文を交互に並列配置した文様と考えられる。LR斜縄文上に幅の広い沈線により区画文を施文，区画文外を磨り消している。焼成は良好で，色調は暗赤褐色を呈する。

c類　平行沈線文とその間の連続刺突文により，胴部に波状文を施文する土器類で，1点（396図2）が本類に該当する。この波状文より上は無文化され，口頸部にも平行沈線と刺突文による横位文様が施文される。地文はLR斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄褐色を呈する。

2類　口縁部が無文で，胴部上半に文様帯をもつもの（396図7・8・10）で，磨消縄文による区画文を有する土器類である。8，10は連結楕円文を主文様とする。地文は3点ともRL斜縄文で，焼成はやや良好，色調はにぶい橙色，にぶい褐色，灰黄褐色を呈する。

3類　口縁部が無文で，胴部に文様帯をもつもので，渦巻文を主体とするもの（a類）と懸垂文，懸垂状化された区画文を施文するもの（b類）に分類した。

a類　渦巻文を主体とする文様の土器類で，施文技法の相違により細分した。

a_1類　3条の平行沈線による渦巻文を主体とした文様のもの（398図1）

頸部の横位沈線文，連続刺突文により文様帯を区画，胴部3ヵ所に平行沈線による渦巻文を主体とした文様が施文される。3ヵ所の文様は類似し，渦巻文の上部は口頸部の平行沈線文に接し，下部2ヵ所からは懸垂文が底部まで延びる。また右側の懸垂文の渦巻文との接点部は棘状となる。これらの文様間2ヵ所には波状懸垂文を有する。地文はLR斜縄文，焼成は良好で色調は黒褐色を呈する。

a_2類　隆沈文による渦巻文を主体とした文様のもの（394図11）

主体となる胴部中央3ヵ所の大渦巻文，それに接する楕円形文，大渦巻文を連結する曲線文，小渦巻文等が縦横に延び，文様は胴部全体に展開する。一部の渦巻文には棘が付加される。地文はＬＲ斜縄文，焼成は良好で，色調はにぶい黄褐色を呈する。

b類　懸垂文，「∩」文が施文される土器類で，文様，施文技法の相違により細分した。

b_1類　沈線による懸垂文を主体文様とする土器類で，胴部上端には2条の横位連続刺突文を有する。胴部文様には，

「∩」状懸垂文を並列配置するもの（394図16）

「⋒」状懸垂文を並列配置するもの（394図14・15，399図10，402図6・8）

4ヵ所の懸垂文がアクセサリー風の文様に置き変えられるもの（402図5）

懸垂状区画文を並列配置するもの（399図9）

等がある，口縁は平口縁のものと3つの頂部をもつ波状口縁のものとがある。地文はＲＬまたはＬＲ斜縄文で，ＲＬ斜縄文のものが多い。焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色，にぶい黄褐色を呈するものが多い。

b_2類　沈線による「∩」文を主体文様とする土器類で，胴部上端には1条の横位連続刺突文を有する。398図3は口縁部を欠いているため不明であるが，他のものはすべて3つの頂部をもつ波状口縁である。胴部文様には

「∩」文を並列配置するもの（398図3）

「∩」文間に懸垂文を施文するもの（399図8）

「∩」文間に刺突文を垂下させるもの（399図7）

波状口縁頂部下の「∩」文がアクセサリー風の文様に置き変えられるもの（394図13）

等がある。地文はすべてＲＬ斜縄文で，焼成はやや良好，色調はにぶい黄色，にぶい赤褐色，黒褐色等を呈する。

b_3類　磨消縄文による「∩」文を主体文様とする土器類で，本類には2点（395図11・13）が該当する。口縁形態は，13は2つの頂部をもつ波状口縁，11は欠損しており，不明である。いずれも胴部上端には2条の横位連続刺突文を有する。11は「∩」文間のみを磨り消し，その上端に刺突文を施文している。地文は11がＲＬ，13がＬＲ斜縄文で，焼成はいずれも良好である。色調はそれぞれ灰褐色，にぶい黄橙色を呈する。

ⅡＢ類　本類は口縁部が無文で，胴部に地文のみが施文される土器類で，境界文の有無により細分した。

1類　境界文を有するもの（398図5，407図3）で，胴部上端に横位平行沈線とその間の連続刺突文が一巡する。刺突の方向は斜位で，上方向への斜位刺突のものと横方向への斜位刺突のも

のとがある。地文はＬＲ，ＲＬ斜縄文，焼成はいずれも良好で，色調はそれぞれ，黒褐色，にぶい褐色を呈する。

２類　胴部上端に境界文を有しないもので，２点（402図12･17）が本類に該当する。12はＲＬ斜縄文で，焼成はやや良好，色調はにぶい褐色を呈する。また17はＬＲ斜縄文で焼成はやや不良，色調は黒褐色を呈する。

Ⅲ類　本類には小型土器類を一括した。本類の中には厳密には器形的に壺形土器に含まれないものもある。また小型土器というよりミニチュア土器と呼ぶべきものもある。しかし，その分類基準を明確にし得ない資料が多いため，ここでは最大胴部径が８cm以下で，口頸部に比して胴部が大きく張り出すものをすべて小型壺として扱う。器形の相違により次のように４類に分類した。

ⅢＡ類　本類は底部付近に最大径をもつフラスコ状の器形の土器類（401図27･30･31･39･40）である。いずれも口縁部を欠いているため，口縁部形態は不明であるが，口頸部は長く，ほぼ垂直に立ち上がる。文様帯，境界文の有無により次のように細分した。

１類　胴部に文様帯を有するもので，１点（30）が本類に該当する。横位沈線により区画された胴部に沈線による「∩」文，横位楕円文を交互に施文している。地文はＬＲ斜縄文で，焼成はやや良好，色調は浅黄橙色を呈する。

２類　横位連続刺突文を境界に口縁部が無文，胴部に地文のみを施文する土器類で，１点(31)が本類に該当する。地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調は橙色を呈する。

３類　頸・胴部の境界に横位沈線を施文するもので，１点（40）が本類に該当する。地文はＲＬ斜縄文，焼成はやや良好で，色調は橙色を呈する。

４類　地文のみを施文するもので，２点（27・39）が本類に該当する。地文はＬＲ縄文，斜縄文，焼成は良好で，色調は淡黄色を呈する。

ⅢＢ類　本類は胴部中央より若干底部寄りに最大径をもつもの（394図6・,401図７・８･24･26・28）で，文様帯の有無及び文様により，さらに４類に細分した。

１類　刺突による渦巻文を施文するもので，１点（401図26）が本類に該当する。無方向のＬＲ縄文地に刺突による渦巻文を施文，焼成は良好，色調はにぶい黄橙色を呈する。

２類　３～４条の平行沈線文を施文するもので，１点（394図6）が本類に該当する。上半部を欠いているため，詳細は不明であるが，４条の平行沈線による曲線文と３条の平行沈線による懸垂文を有する。地文はＬＲ斜縄文，焼成はやや良好で，色調はにぶい黄橙色を呈する。

３類　地文のみを施文するもので，２点（401図24･28）が本類に該当する。28は口縁部を欠いているが，24と同様口縁部から胴部まで斜縄文が施文されていると考えられる。

24はＬＲ，28はＲＬ斜縄文で，いずれも焼成は良好，色調はにぶい橙色を呈する。

4類　無文のもので，2点（401図7・8）が本類に該当する。いずれもミニチュア土器で，焼成は良好，色調はそれぞれ橙色，にぶい褐色を呈する。

ⅢC類　本類は胴中央部に最大径をもつもの（401図33）で，33は口縁部が無文で，胴部にはLR斜縄文が施文されている。焼成はやや良好で，色調はにぶい赤褐色を呈する。

ⅢD類　本類は口頸部が長く，かつ外傾し，口径が胴部径を若干上回るもの（401図29）である。器面全体にRL斜縄文が施文され，焼成は良好，色調は浅黄橙色を呈する。

台付土器

台付土器の全体に占める比率は小さく完形及び復元された土器は5点を数えるのみである。これらの土器を文様帯の有無より分類，文様帯を有するものについては，文様帯の位置により細分した。

Ⅰ類　本類は文様帯をもつもので，次の2類に細分される。

ⅠA類　口唇部から胴部下半まで文様帯をもつもので，1点（394図9）が本類に該当する。頸部が若干屈折した深鉢形土器で，波状口縁の口唇部には簡略化した横位渦巻文，口縁部から胴部下半まで渦巻文を主体とした文様が施文される。文様技法は1条の沈線文であるが，それを区画文状に施文，結果として平行沈線による弧状文，渦巻文，懸垂文の連結文の効果を得ている。地文はRL斜縄文で，焼成はやや良好，色調は上半が黒褐色，下半がにぶい褐色を呈する。

ⅠB類　口縁部が無文で，胴部に文様帯をもつもので，2点（395図9・10）が本類に該当する。いずれも広口壺に台部を付したような器形で，胴部上端に横位連続刺突文，胴部に沈線による懸垂文を施文する。胴部文様より

1類　「⋒」状懸垂文を並列に配置するもの（9）

2類　口頸部に等間隔に施文された4つの円文下の懸垂文が，アクセサリー風の文様に置きかえられるもの（10）

に細分される。いずれも地文はLR斜縄文で，焼成はやや不良，色調はそれぞれ灰褐色，灰黄色を呈する。

Ⅱ類　本類は地文のみのもので，ミニチュア土器2点（401図14・15）が該当する。15は上半を欠いているが，14と同様台付鉢形を呈すると考えられる。いずれも口縁部から台部中位までLR斜縄文が施文され，焼成はやや良好，色調はにぶい橙色，にぶい黄色を呈する。

注口土器

注口土器は40号住居跡より1点（401図35）が出土したのみである。広口壺に近い鉢形土器の口頸部に注口部を付したような器形で，口径 9.8cm，底径 4.5cm，器高 8.8cmの小型の土器で

ある。口縁部，注口部は無文で，胴部にはＬＲ縄文が施文されている。焼成はやや良好で，色調は浅黄橙色を呈する。

b)　文様の類似性

a）において出土土器を器形，文様体の有無，文様，施文技法等により細分，観察した。各類を主体文様，施文技法の上から比較，共通するものをまとめると次のようになる。

○口唇部に斜位刻み目文，撚紐圧痕文を有する土器類

深鉢ⅠA1類・ⅠB3類・ⅠB4類・ⅠD1類

○口唇部に横位渦巻文，凹線文を有する土器類

深鉢ⅠA3類・ⅠB5類・ⅠD2a類

○沈線による懸垂文を主体文様とする土器類

深鉢ⅠH1d類，壺ⅡA3b$_1$類，台付ⅠB1～2類

○１～２条の沈線による「∩」文を主体文様とする土器類

深鉢ⅠH3a$_1$類・ⅠH1e類・ⅠH2a類，壺ⅡA3b$_2$類

○平行沈線による「∩」連結文を主体文様とする土器類

深鉢ⅠH2b類・ⅠH3a$_2$類・ⅠI2a類

○「∩」連結文

深鉢ⅠH2c類・ⅠI2b類

○磨消縄文による「∩」文や縦位楕円文と「∩」文の組み合わせ文を主体文様とする土器類

深鉢ⅠH3c$_1$～c$_3$類，壺ⅡA1b類，壺ⅡA3b$_3$類

○磨消縄文（区画文内）による「∩」文や縦位楕円文と「∩」文の組み合わせを主体文様とする土器類

深鉢ⅠH3b$_1$～b$_2$類

○磨消縄文による横位連結「Ｌ」,「∪」,「Ｄ」状文，横位連結楕円文を主体文様とする土器類

深鉢ⅠC3b類，壺ⅡA2類

○口縁部が無文で，他は地文のみの土器類

深鉢ⅡA1類・ⅡB1～ⅡB6類，鉢Ⅱ類，浅鉢Ⅱ類，壺ⅡB2・ⅢC類，注口

○口縁部が無文，胴部に地文を施文し，境界文（平行沈線文と横位連続刺突文，刺突文）を有する土器類

壺ⅡB1類・ⅢA2類

○地文のみが施文される土器類

深鉢ⅡA2類・ⅡC1～ⅡC3類，鉢Ⅲ類，浅鉢Ⅲ類，台付Ⅱ類，壺ⅢA4類・ⅢB3類・ⅢD類

○無文の土器類

深鉢Ⅲ類，鉢Ⅳ類，浅鉢Ⅳ類，壺ⅢB4類

c） 住居跡における土器の出土状況

先に述べたように本遺跡の住居跡はそのほとんどがA_1区に集中し，多数の重複関係にある。このため重複関係による住居跡の時期推定には有利であるが，反面，その重複により，共伴関係となり得る資料を消失していると考えられる住居跡も少なくない。このような住居跡を除くと，住居跡内の出土遺物は比較的多く，床面，床直上より数個体の完形，復元可能土器を出土した住居跡も多い。

住居構築から廃絶，埋まりきるまでにはある程度の時間がある。土器片囲炉，土器埋設炉等に使用されている土器は住居構築時または使用時，炉内，床面からの出土土器は住居使用時または廃絶後間もない時期のものである。また，住居跡覆土中から出土する土器は，住居が埋まり始めてから埋まりきるまでの間に流入したり，廃棄されたものである。住居構築から廃絶までの時間は，土器型式が変わるほどの長期間ではなく，住居内施設を構成する土器，諸施設内出土土器，床面出土土器等は共伴関係にあると考えられる。

住居廃棄から埋まりきるまでの時間もそう長くないと考えられるが，本遺跡では，覆土中からの出土土器が数型式にわたる住居跡も少なくない。これは台地先端部（A_1区）という一定範囲内に，数期にわたり重複して集落が営まれたことによると考えられる。床面の出土土器と覆土中の土器の型式が逆転する事由も，数型式前の土器が重複する位置への住居構築により掘り出され，まだ埋まりきっていない住居跡へ流入，または廃棄されたと考えることにより説明される。

共伴関係を検討できる2個体以上の完形或いは復元可能土器を出土した住居跡，及びそれらの土器（出土地点，土器分類）をまとめたのが第12表である。なお表中，第85号住居跡以降の資料が少ないが，これは調査期間の関係で，調査方法を全遺構の検出に注ぐこととし，第85・89・90・93・94・98～101・103・105・106・109・110・113・114・116～123号住居跡の遺物分布図を省略したことによる。

第12表　完形・復元可能土器出土状況

住居跡	出土土器・出土地点・土器分類
S I 9	404図10（床面・　　）－400図7（床直・深鉢ⅠC3b）
S I 13	396図8（床面・壺ⅡA2）－408図6（床面・深鉢ⅡB1）－409図11（床直・深鉢ⅡC3）
S I 14	401図31（床直・壺ⅢA2）－409図7（床直・深鉢ⅡB2）
S I 16	401図30（床面・壺ⅢA1）－404図1（床直・深鉢ⅡB6）
S I 25	396図7（床面・壺ⅡA2）－403図11（床面・深鉢ⅡC3）－396図6（床直・壺ⅠC）
S I 27	408図3（炉埋設・深鉢ⅡB1）－404図4（床面・深鉢ⅡB1）
S I 29 A	400図2（炉・深鉢ⅠH2b）－406図5（炉埋設・深鉢ⅡC1）
S I 34	400図9（床面・深鉢ⅠC3b）－401図28（床面・壺ⅢB3）－402図13・408図7（床面・深鉢ⅡB1）－402図18（床面・深鉢ⅡB2）－409図（床面・深鉢ⅡB3）－403図21（床面・深鉢ⅡB4）
S I 45	399図5（ピット内・深鉢ⅠH1b）－406図2（床面・深鉢ⅡB5）
S I 55	407図9（床面・深鉢ⅡA2）－408図2（床面・深鉢ⅡB1）－409図3（床面・深鉢ⅡB2）
S I 58	401図2（床直・鉢Ⅳ）－401図7（床直・壺ⅢB4）
S I 60	396図4（床面・深鉢ⅠC3a）－402図12（床面・壺ⅡB2）－401図27（床面・壺ⅢA4）
S I 62 A B	395図13（炉・壺ⅡA3b$_a$）－401図10（床面・浅鉢Ⅳ）
S I 71 A	396図2（炉・壺ⅡA1c）－403図15（炉埋設・深鉢ⅡB2）
S I 87	397図3（ピット内・深鉢ⅠB4）－403図4（床面・鉢Ⅱ）－403図14（床面・深鉢ⅡB6）－394図4（床直・深鉢ⅠC1b）－395図11（床直・壺ⅡA3b$_a$）－404図6（床直・深鉢ⅡB6）
S I 104	401図20（床面・　　）－408図4（床面・深針ⅡB1）－403図7（床直・深鉢ⅡB3）
S I 108	395図1（床直・深鉢ⅠH1C）－396図15（床直・深鉢ⅡA1）－404図3（床直・深鉢ⅡB1）－406図3（床直・深鉢ⅡC3）
S I 115	400図8（床面・深鉢ⅡB1）－409図9（床面・深鉢ⅡC1）

d）　天戸森遺跡出土土器の時期

天戸森遺跡から出土した縄文土器は，ダンボール箱で180箱にも及ぶが，そのほとんどは中期中葉から末葉にかけての土器である。ここでは a）において分類・観察した土器を文様の類似性，共伴関係により集約し，それぞれの時期を推察したい。

ⅠA群〔深鉢ⅠE$_1$類（394図1）〕

胴部文様が，無調整の隆線により施文される土器群で，1点が本類に該当する。394図1は胴部上半を欠いているが，残存部の形態より，キャリパー形土器と考えられる。RLR斜縄文の施文後，胴部に粘土紐貼付けによる波状懸垂文を施文したもので，大木8a式土器と考えら

れる。

ＩＢ群〔深鉢ＩA1類(402図1)，ＩA2類(407図2)，ＩB1類(397図1)，ＩB2類(397図2)，ＩB3類(399図2)，ＩB4類(394図3, 397図3)，ＩC1a類(399図1)，ＩC1b類(394図4)，ＩD1類(394図2)〕

本群は口唇部に撚紐斜位圧痕文，斜位刻み目文，連続刺突文等を有し，口縁部から胴部上半に沈線による変形胸骨文，弧状文等が施文される土器群で，中期中葉，円筒上層ｅ式に比定できる。２～４個の山形突起を有するか，２～３個の頂部をもつ波状口縁の深鉢が多く，突起部，頂部には粘土紐貼付文が施されるものが多い。本群には，口縁部や口唇部にのみ装飾文様を有し，口頸部以下には地文のみが施文されているもの（402図１，407図１）もある。

また１個の把手と３個の突起を有するもの（397図２）や平口縁のもの（397図１）は，口唇部の装飾文様が斜位圧痕文と隆線からなる文様や隆線による波状文であり，把手部や胴部上半部の文様帯のところどころに渦巻文，円形文等大木式土器の文様モチーフが付加されている。

本群の地文には，ＲＬＲ，ＲＬ，ＬＲ斜縄文が多用されている。焼成は大型のものにやや不良のものが多い。

ⅡＡ群

本群は隆沈文による渦巻文を主体文様とする土器群で，大木８ｂ式に比定できる。器形及び文様帯の位置より，次のように細分した。

１群〔深鉢ＩE2類（394図５・８，398図２，399図３）〕

本群はキャリパー形を呈する土器群で，口縁部には隆沈文による有棘横位渦巻文を主体とする文様，胴部には２～３条の平行沈線による渦巻文を伴う曲線文（394図5，399図３），曲折文（398図２），曲線文（394図８）等が施文される。口縁部文様は渦巻文がそれぞれと，または口縁部上・下端の隆沈文と結合，一部に区画部分を生じさせている。地文は口縁部がＲＬ斜縄文，口頸部以下がＲＬＲ斜縄文のものと，口頸部の回転方向が違いながらも同一原体（ＲＬＲ，ＲＬ，ＬＲ）の回転押捺文のものとがある。焼成は良好なものが多い。

２群〔深鉢ＩD2b（398図８）〕

本群は，大小３個づつの突起をもち，胴部が張り，口縁部が若干外反する深鉢形土器である。肥厚する口唇部には凹線文が施文され，突起部で横位渦巻文となる。口頸部には隆沈文による波状文，胴部上端には横位線文，懸垂文により３区画化された胴部には渦巻文を主体とする文様が施文される。胴部渦巻文の初点である胴部上端の横位線文との接点部では小渦巻を形成，渦巻文の下端からは懸垂文が垂下する。地文はＲＬ斜縄文，焼成はやや良好である。

３群〔壺ⅡA3a_2類（394図11）〕

本群は，口縁部が無文の広口壺で，口頸部の平行隆沈文下から胴下半まで，隆沈文による渦巻文を主体とする文様が施文される土器である。主体となる胴部中央３カ所の大渦巻文，それ

に接する楕円形文，大渦巻文を連結する曲線文，小渦巻文等が縦・横に延び，文様は胴部全体に展開する。一部の渦巻文には棘が付加される。地文はＬＲ斜縄文，焼成は良好である。

ⅡＢ群

本部は口唇部の凹線文，胴部の沈線による曲線文を特徴とする土器群で，大木８ｂ式に併行する土器群である。文様の相違より，次のように細分される。

１群〔深鉢ⅠA3類(396図14,405図3,407図１)，ⅠB5類(397図４,405図１)，ⅠD2a類(398図7,399図4)〕

本群は口唇部に凹線文，口縁部から胴部上半に弧状文を有する土器群である。胴部が張り，口縁部が外反する深鉢と若干頸部がくびれるもののほぼ胴部中央から口縁部まで外傾する深鉢がある。大型のものが多く，３～５個の山形突起を有するものがほとんどである。肥厚した口唇部には凹線文が施文され，この凹線文が突起部まで延び渦巻文となるものや，突起部に「∞」状文，円文（凹線文）を施文するもの等がある。平口縁のもの(396図14)は３カ所で切れる凹線文の初点，終点が円文（凹文）となる。

本群には，この口唇部文様だけを有し，他は地文のもの（深鉢ⅠA3類），口縁部から胴部上半に弧状連結懸垂文と菱形状文からなる文様や弧状文が施文されるもの（深鉢ⅠB5類），さらに胴部上半の弧状文から「Ｙ」状の懸垂文が懸下するもの（深鉢2a類）等がある。

地文は，胴上半までＲＬＲ，ＲＬ斜縄文で，胴下半にＬ斜縄文を施文するものと，同一原体（ＲＬ，ＬＲ）を器面全体に施文するものがある。

本群は，口唇部及び胴上半部の文様より，榎林Ⅰ式に比定できる。

２群〔深鉢ⅠH1a類(394図6-7)，ⅠI1類(394図10)，壺ⅡA3a_1類(398図1)〕

本群は口頸部の横位沈線文や連続刺突文下から胴下半まで，沈線による渦巻文や円形文などを主体とした文様を施文する土器群で，口縁部が無文となるものもある。器形は胴部が張り，口縁部が外反する深鉢か広口壺で，３個の頂部をもつ低い波状口縁か平口縁である。

胴部文様には，３条の平行沈線による曲線文，懸垂文が展開するもの（ⅠH1a類），円形文と懸垂文からなる文様が流れるような曲線文で連結された文様（ⅠI1類），渦巻文と懸垂文からなる文様（壺ⅡA3a_1類）等がある。地文はＲＬ，ＬＲ斜縄文が多用される。

本群は，胴部文様より，榎林Ⅱ式に比定できる。

３群〔壺ⅢB1類(401図26)〕

本群は，刺突による渦巻文を施文するもので，小型壺１点(401図26)が該当する。無方向のＬＲ縄文施文後，胴部中央に刺突により渦巻文を施文したもので，焼成は良好である。類例をみないが，施文技法，文様モチーフより，榎林Ⅱ式に位置づけられると思う。

ⅢＡ群

本群は隆沈文，磨消縄文による縦位渦巻楕円文，縦位楕円文，「∩」文を施文する土器であ

り，大木９式に比定できる。文様により次のように細分した。

１群〔壺ⅡA1a類（394図12)〕

隆沈文による縦位渦巻楕円文，「∩」文等を施文する土器群である。394図12は２つの大波状口縁の広口壺で，渦巻楕円文，「∩」文が縦横に連結した文様が，口縁部上位の横位隆沈文下の器面全体に展開する。大木９（古）式に位置づけられる。

２群〔深鉢IH3C$_1$(395図16,17)，IH3C$_2$(395図14)，IH3C$_3$(400図5)，壺ⅡA1b類(395図15)，壺ⅡA3b$_3$(395図11・13)〕

本群は磨消縄文による「∩」文や縦位楕円文と「∩」文の組み合わせ文を主体文様とする土器群である。口縁部が内彎する深鉢，胴部が若干張り，口縁部が外反する深鉢，広口壺等の器形のものがある。広口壺のものは，口縁部に幅の広い無文帯を有し，文様は胴部に施文される。胴部上端に２条の横位連結刺突文を有し，胴部には沈線により「∩」文を並列に配置，区画文外を磨消している。深鉢のものは，口縁部下半から胴部下半にかけ，縦位楕円文と「∩」文の組合せ文が施文される。本群の地文にはＲＬ，ＬＲ斜縄文が多用される。大木９（新）式に位置づけられる土器群である。

３群〔深鉢IH3b$_1$類（395図12)，IH3b$_2$類（395図)〕

本群は２群と文様モチーフは同じであるが，磨消し部分が反転し，区画文内を磨消している。いずれも３～４の頂部をもつ波状口縁で，口縁部が外反し，胴部が張る深鉢形の土器で，文様は細い沈線で施文され，区画文内の磨消しは雑である。なお地文はＬＲ斜縄文，焼成は良くない。大木９（新）式と考えられる。

４群〔深鉢IF1類（400図６)〕

口縁部から胴上部に平行沈線による波状文を施文，その上部に「∩」状文と「∪」状文が縦位方向に対となった文様，下部には１～２条の平行沈線による縦位楕円文，「∩」文が施文される土器群で，区画文内にはＬＲ縄文が充填される。なお器形は広口壺に近い深鉢である。大木９（新）式と考えられる。

ⅢＢ群

本群は懸垂文，「∩」文（懸垂状化した区画文）を主体文様とする土器群で，地文である斜縄文を施こした後に１～２条の沈線により，これらの文様が施文される。大木９式に併行する土器群である。文様の相違より，次のように細分した。

１群〔台付ＩＡ類（394図９)〕

波状口縁の口唇部に簡略化した横位渦巻文，口縁部から胴部下半まで渦巻文を主体とした文様が施文されるが，その施文技法が，１条の沈線文を区画文状に施文，結果として平行沈線による弧状文，渦巻文，懸垂文を連結した文様を描き出している。施文技法，口唇部文様の衰退，胴部文様の区画文化より，中の平Ⅱ式に位置づけられる。

2群〔深鉢IG類（399図6）〕

1対の縦位渦巻文を付加した懸垂文を内存する「∪」文と「∩」文か「⋒」文の縦位連結文を，波状口縁の頂部間に配置した土器で，これらの文様は地文であるL斜縄文上に1～2条の沈線により施文される。大木9（古）式に併行すると考えられる。

3群〔深鉢IH1d類（395図2），壺ⅡA3b_1類（394図14～16，399図9・10，402図5・6・8），台付IB$_1$～IB$_2$類（395図9・10，401図14・15・35）〕

本群は沈線による懸垂文を施文する土器群で，「∩」または「⋒」状懸垂文が多用される。口縁部が若干内彎する小型の深鉢，広口壺，台付広口壺等の器形のものがある。

台付，広口壺とも口縁部に無文帯を有し，胴部の地文上に懸垂文，懸垂状区画文が並列に配置される。また胴部上端には，2条の横位連続刺突文が刺文される。胴部の文様は同一の懸垂文が並列配置されるものの他，4カ所の懸垂文がアクセサリー風の文様に置き換えられるもの（395図10，402図5）がある。地文はRLかLR斜縄文で，広口壺はRL，台付はLR斜縄文のものが多い。小型の深鉢も口縁部に無文帯を有するが，口縁部形状の相違からか，無文帯の幅は狭い。口縁部の無文帯に横位刺突文，胴部上端に横位沈線文，胴部の地文（LR斜縄文）上に懸垂文が施文されている。

4群〔深鉢IH1e類（395図4）・IH3a_1類（395図4）・IH2a類（394図17，400図3），壺ⅡA3b_2類（394図13，398図3，399図7・8）〕

本群は1～2条の沈線による「∩」文を主体文様とする土器群である。深鉢，広口壺等の器形のものがあり，深鉢形土器は小型のものが多い。いずれも口縁部には無文帯を有し，深鉢形のものはその幅が狭い。

広口壺は胴部上端に1条の横位連続刺突文を施こし，胴部には1条の沈線による「∩」文の並列配置を主体とする文様が施文される。この「∩」文間に懸垂文を施文するもの（399図8），刺突文を垂下させるもの（399図7），波状口縁頂部下の「∩」文がアクセサリー風の文様に置き換えられるもの（394図13）等がある。深鉢のものは，無文の折り返し口縁直下から胴部下半に2条の沈線による「∩」文を施文するもの（394図17，400図3），口縁部下半に円形文と横位沈線文を施こし，胴部に1条の沈線による「∩」文を施文するもの（395図5），口縁部下半から胴部下半に「∩」文を施文するだけのもの（395図4）等がある。地文はRLかLR斜縄文で，広口壺はRL斜縄文のものが多い。

5群〔深鉢IH2b類（400図2・4，407図5）・IH3a_2類（400図1）・II2a類（407図6）〕

本群は，口頸部から胴部下半に2条の沈線による「∩」状文を横位方向に連結，連続施文する土器群である。いずれも胴部が若干張り，口縁部が外傾または直立する深鉢で，折り返し口縁のものが多い。折り返し口縁のものはその直下から，他のものは口縁部上半に無文帯をもち，

口縁部下半から胴部下半まで横位連結「∩」文が施文される。地文はＲＬかＬＲ斜縄文で，刺突文をアクセサリー風に付加するものもある。

6群〔深鉢ⅠH2C類（405図4）・ⅠI2b類（405図5）〕

本群は，2つの「∩」文を連結した「H」状文を主体文様とする土器群である。いずれも胴部が若干張り，口縁部が外傾または直立する深鉢で，折り返し口縁下から胴部下半に文様が施文される。これらの文様にはアクセサリー風に縦位の連続刺突文が付加される。地文はいずれもＲＬ斜縄文である。

7群〔深鉢ⅠH1C類（395図1）・ⅠH1b類（399図5）〕

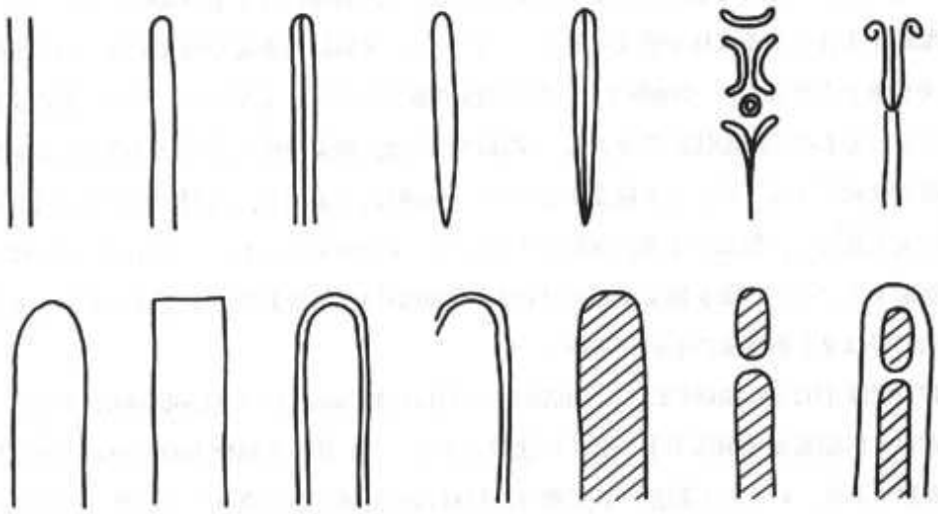
本群は，口頸部に平行沈線による弧状連結文，または波状文から胴部下半に懸垂文が垂下する土器群で，いずれも胴部が張り，口縁部が外反する深鉢形土器である。口縁部上半は無文，口頸部には横位連続刺突文か横位沈線文が施文される。地文はＲＬ斜縄文である。

8群〔深鉢ⅠC2類（407図7），浅鉢Ⅰ類（401図25）〕

本群は，口縁部から胴部上半に横位連結「∩」文，平行沈線による波状文を施文する土器群である。407図7は胴部が若干張り，口縁部が外傾する深鉢で，「∩」の下端どうしが連結，横位方向に展開する文様で，連結部分に1条の懸垂文が付加される。401図25は小型の浅鉢で，平行沈線による波状文が施文されている。地文はそれぞれＲＬ，ＬＲ斜縄文である。

9群〔壺ⅢA1類（401図30）〕

本群は地文上に沈線により，「∩」文，横位楕円文を施文する土器群である。401図30は，底部付近に最大径をもつフラスコ状の小型壺で，横位沈線により区画された胴部に沈線による「∩」文，横位楕円文が交互に配置されている。



第393図　懸垂文・区画文模式図

3～6群は中の平Ⅲ式であり，7～9群も文様，施文技法から同式に位置づけられるものと思われる。

Ⅳ群

本群は磨消縄文，充填縄文技法による横位方向に展開する区画文を特徴とする。大木10式に併行する土器群である。文様及び施文技法により次のように分類した。

1群〔鉢ⅠB類(396図1)，壺ⅠC類(396図12)・ⅠD類(396図9)・ⅠA類(401図36)〕

本群は「∩」，「C」，「の」字状文，変形楕円文，波状文等を横方向に施文する土器群である。文様は稜線（396図9）や，沈線で施文され，区画文外を磨消すものと，区画文内に縄文を充填するものがある。器形は，橋状把手を有する壺形土器と鉢形土器である。

2群〔深鉢ⅠC3a類(396図4，398図4)・ⅠF2類(401図37)，壺ⅡA1c類(396図12)〕

本群は，胴部上半の横位方向の波状文を主体文様とする土器群で，波状文だけのもの（398図4），波状区画文頂部に「L」字状区画文が接続されるもの（396図4），胴部上半に波状文，下半に「∩」状文を施文するもの（401図37）などがある。これらの区画文内には，縄文が充填される。また396図2は，平行沈線とその間の連続刺突文により胴部に波状文を施文，この波状文より上は無文化され，口頸部にも平行沈線と刺突文により横位文様が施文される土器で，前者とは若干文様を異にする。

3群〔深鉢ⅠC3b(396図5，400図7·9)・ⅠC3C(396図11)，壺ⅡA2(396図7·8·10)・ⅠC(396図6)・ⅠD(396図3)〕

本群は地文と区画文が置換され，無文帯を主文様とする土器群である。「L」，「J」字状無文帯を横位方向に並列配置するもの（396図5・6），連結楕円文（396図8・10)，「∪」字状と楕円文の連結文（400図7），「D」楕円文，「∪」字文と楕円文，「D」，「∪」字状文を横位方向に連結するもの等がある。これらの文様は稜線か幅の広い沈線で施文され，区画文内が磨消され，連結文のものは胴部上半に文様帯が限定される。本類には深鉢，広口壺，把手付壺等の器形のものがある。

これら3群のうち，1群は大木10式でも古手に入り，2群は1群の前後と考えられる。また3群は，大木10式のほぼ中間期に比定できると考えられる。

Ⅴ群

本群には，文様帯を有しない土器類を一括した。地文の有無，無文帯の有無より次のように分類した。

1群〔深鉢（ⅡA1，ⅡB1～6類)，鉢（Ⅱ類)，浅鉢（Ⅱ類)，壺（ⅡB2，ⅢC類)，注口〕

本群は口縁部が無文で，胴部に地文が施文される土器群で，器形には深鉢，鉢，浅鉢，広口壺，注口土器等がある。折り返し口縁のもの(深鉢ⅡA1類)は折り返し口縁部がすべて無文となり，

胴部が張り，口縁部が外反する深鉢や広口壺のものに幅の広い無文帯がみられる。地文には，ＲＬＲ，ＲＬ，ＬＲ，Ｌ縄文，Ｌ結節回転文，条痕文等があるが，ＲＬ，ＬＲ斜縄文が多用される。

２群〔壺（ⅡＢ１，ⅢＡ２，ⅢＡ３類）〕

本群は口頸部に横位沈線文や連続刺突文による境界文を有する土器群で，この境界文より上が無文帯となるもの（壺ⅡＢ1，ⅡＡ2類）とならないもの（ⅢＡ3類）とがある。本群の土器は広口壺か小型壺で，地文はＲＬまたはＬＲ斜縄文である。

３類〔深鉢（ⅡＣ1～3類），鉢（Ⅲ類），浅鉢（Ⅲ類），台付（Ⅱ類），壺（ⅢＡ4，ⅢＢ3，ⅢＤ類）〕

本群は器面全体に地文が施文される土器群で，器形には，深鉢，鉢，浅鉢，台付，壺等があり，浅鉢，台付及び壺はいずれもミニチュアまたは小型土器である。地文にはＲＬ，ＬＲ縄文，ＬＲ結節回転文等があるが，ＲＬ，ＬＲ斜縄文が多用される。

４群〔深鉢（Ⅲ類），鉢（Ⅳ類），浅鉢（Ⅳ類），壺（ⅢＢ4類）〕

本群は無文の土器群で，器形には深鉢，鉢，浅鉢，壺があるが，いずれもミニチュアまたは小型土器である。焼成は良好なものが多い。

これらＶ群の土器の時期推定は文様帯を有しないことから困難である。土器の共伴関係及び住居跡の新旧関係より，Ｖ１・３群土器は中期後葉から末葉，Ｖ２群土器は中期後葉（大木９新併行），Ｖ４群は中期後葉（大木９式併行）から末葉と考えられる。

Ⅵ群（396図13）

本群には後期の土器を一括した。復元できたものは，Ａ区Ⅱ－20グリッド・Ⅲ層より出土した１点（396図13）のみである。口頸部から胴部中央に２～３条の沈線による波状入組文を主体とした文様を有する深鉢形土器である。後期前葉に位置づけられる。

この他に，後期に位置づけられるものとして，第25・29Ｂ・42Ａ・42Ｂ号住居跡覆土上位や遺構外より，網目状撚糸文，沈線文，磨消縄文等の土器片が出土している。

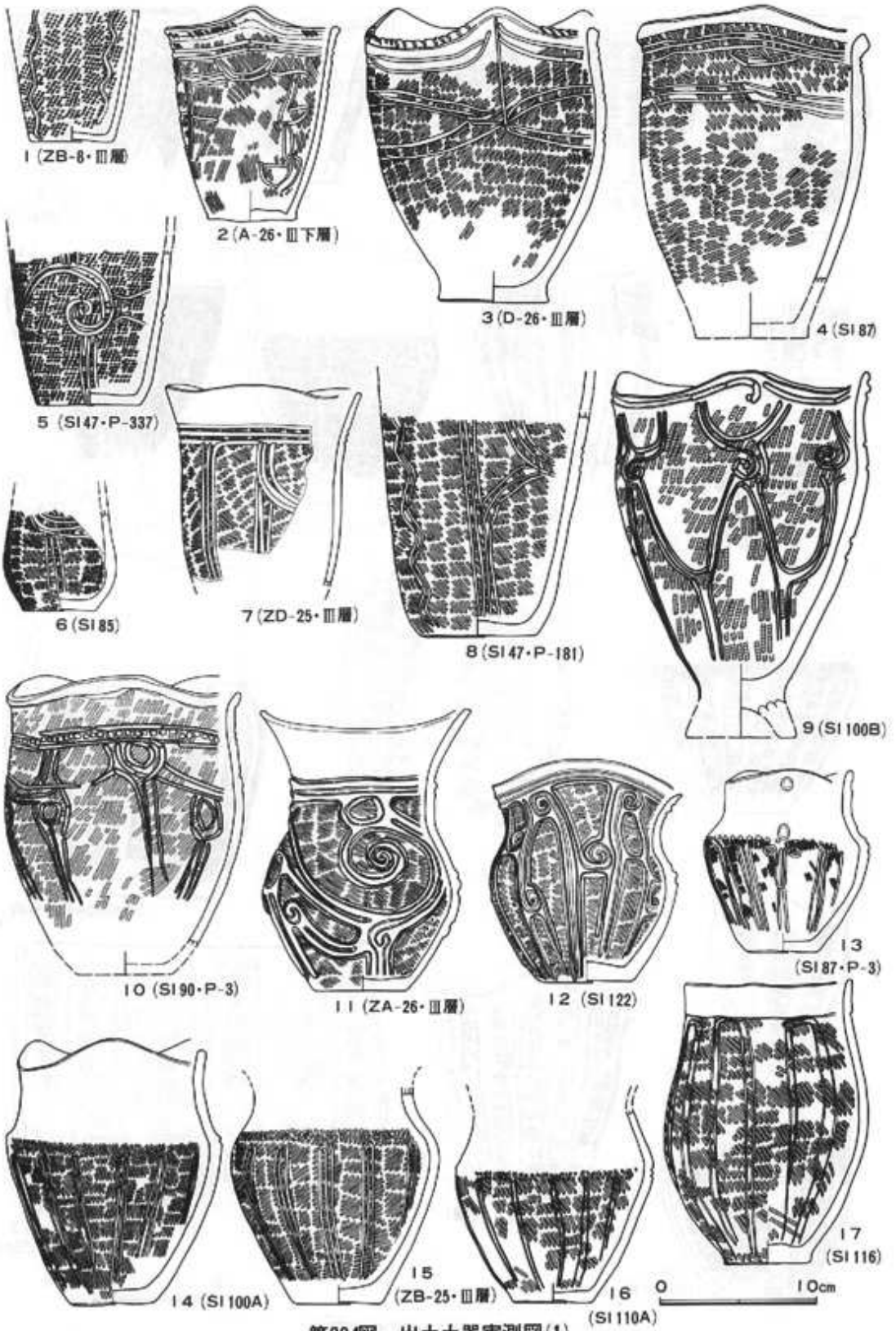
（秋元　信夫）

5）　石　器

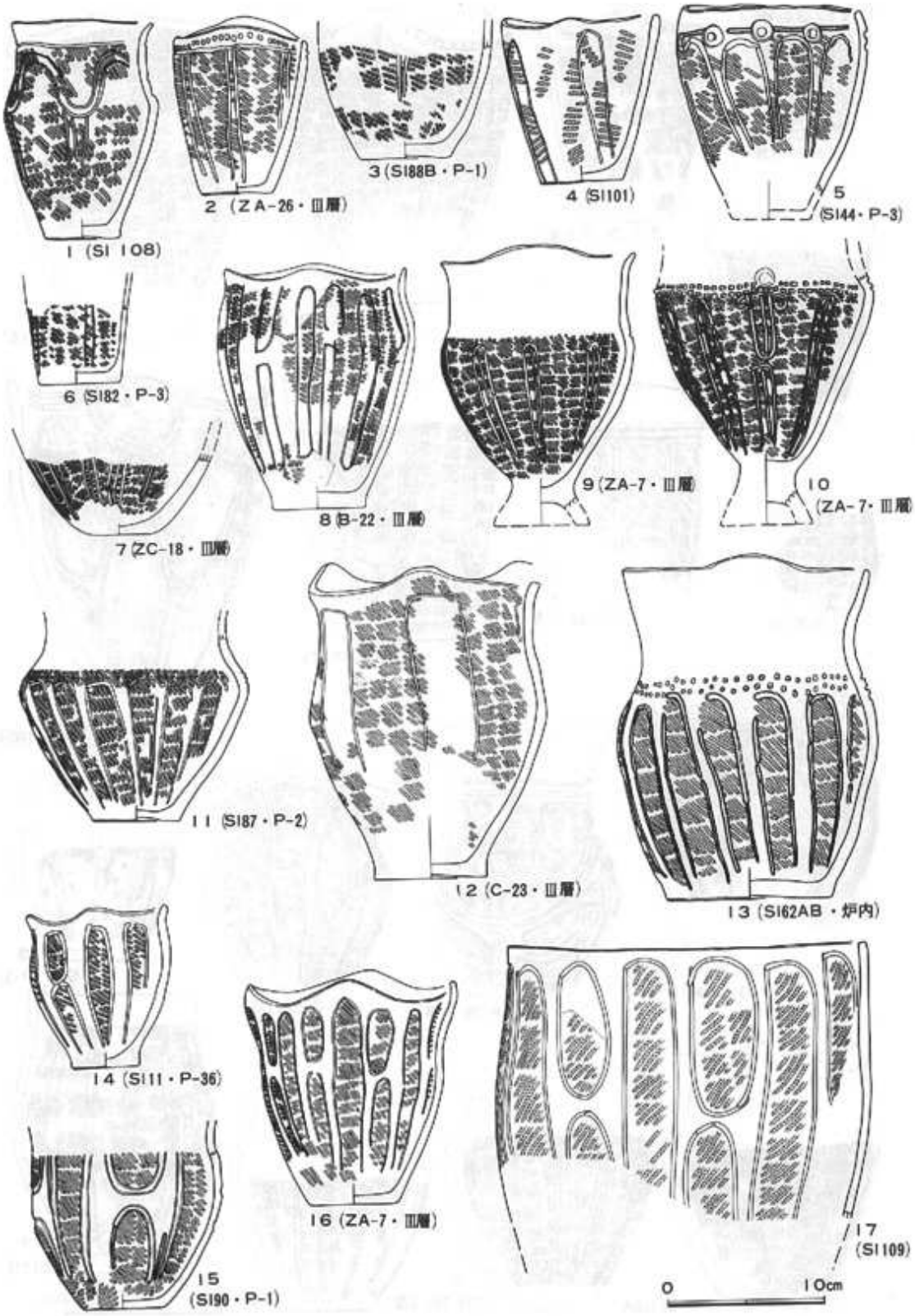
本遺跡より出土した石器は多種多様にわたっている。その内訳は，石鏃，石槍，石錐，石匙，箆状石器，掻器，打製石斧，三脚石器の剥片石器のほか，磨製石斧，摩石，凹石，石皿，石棒，砥石の礫石器であり計14種類で，その総数は1417点にもおよぶ。以下，各々の石器について述べていくが形態的な面を主として分類し，気付いた点を述べる。

石　鏃　（第411図１～34）　（ＰＬ21－１～20）

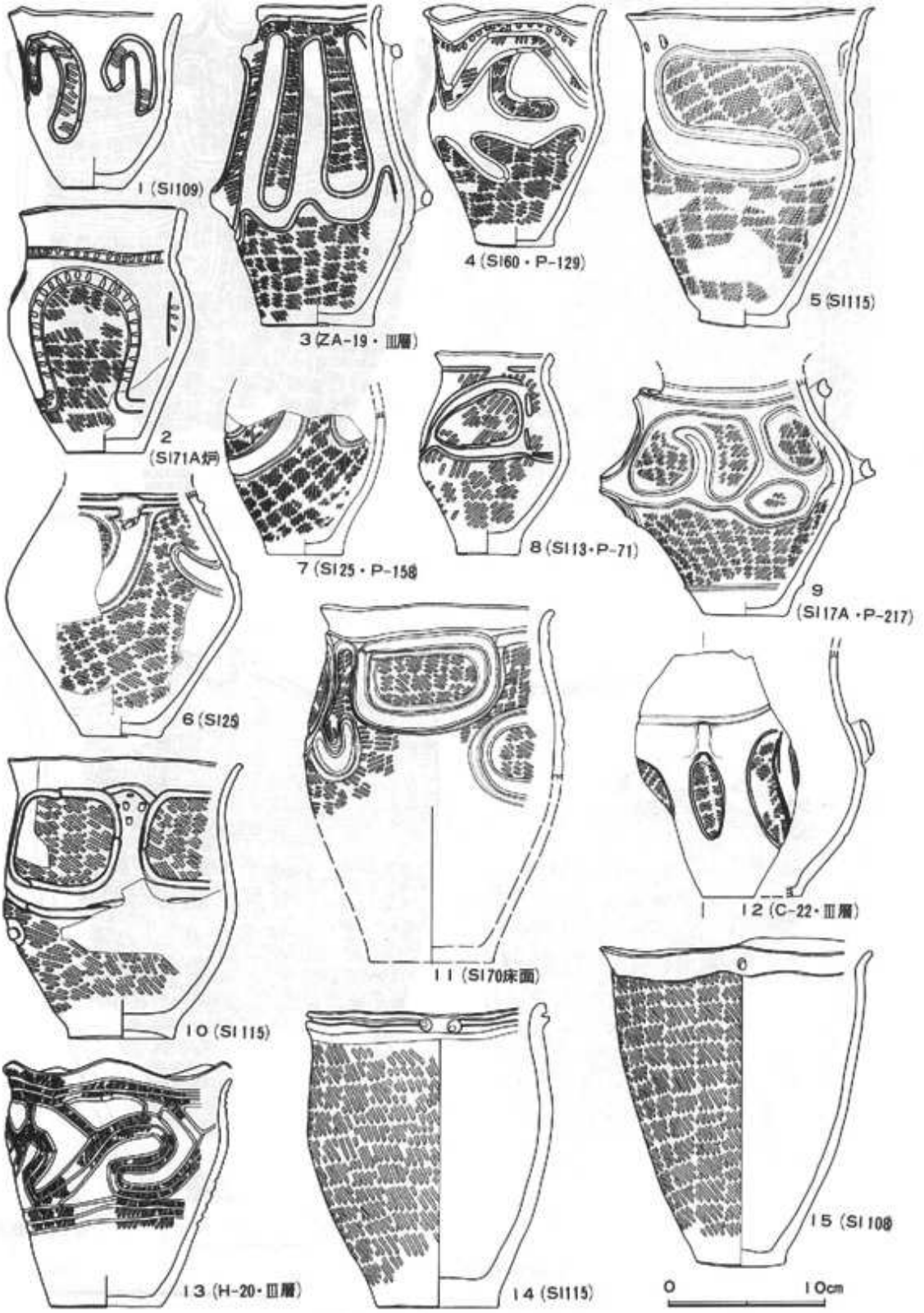
154点出土した。出土地点の内訳は，住居跡90点，配石遺構および土壙各１点，各グリッド62点である。茎の有無によって２つに大別でき，更に基部の形態によってそれぞれいくつかの



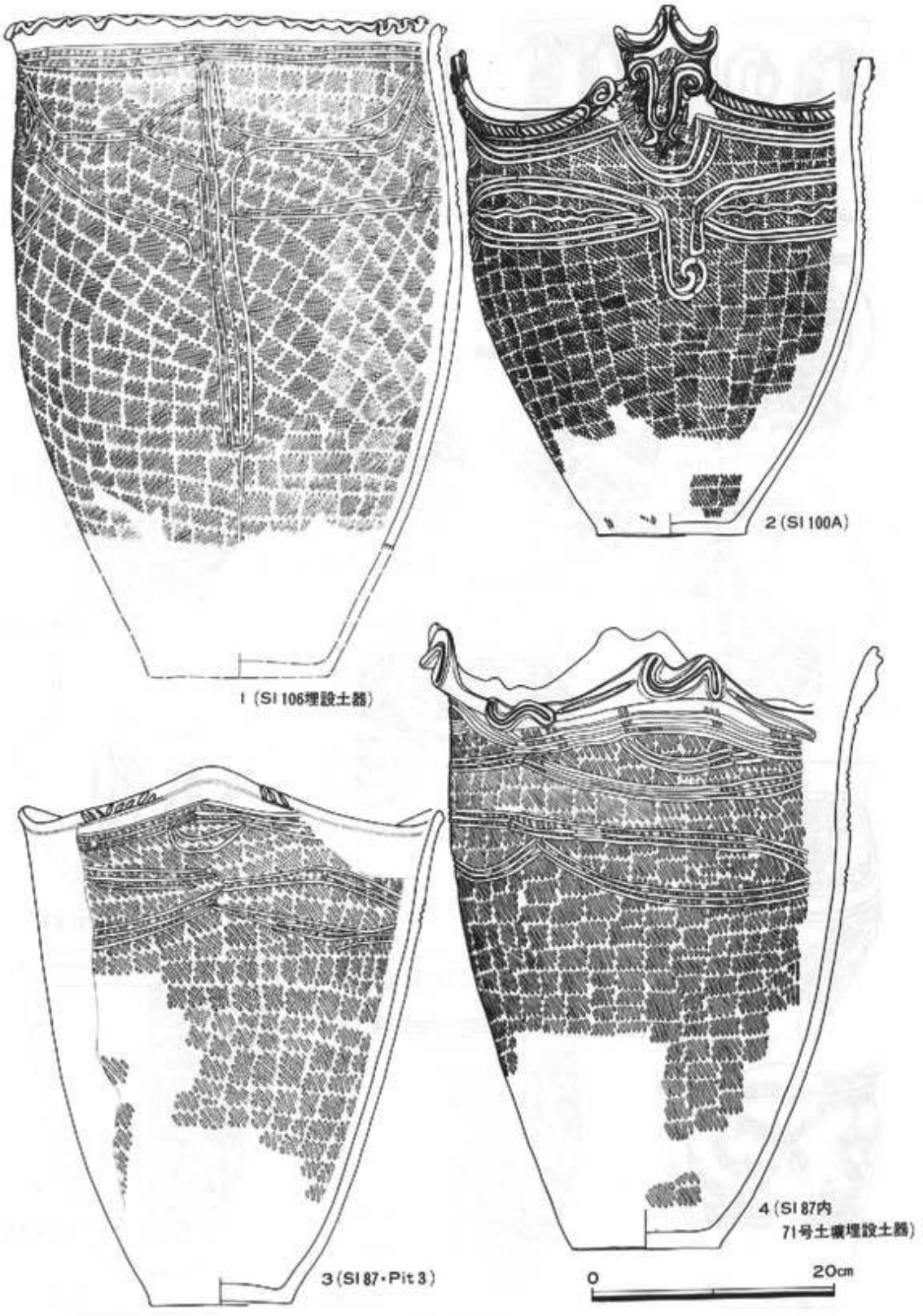
第394図　出土土器実測図(1)



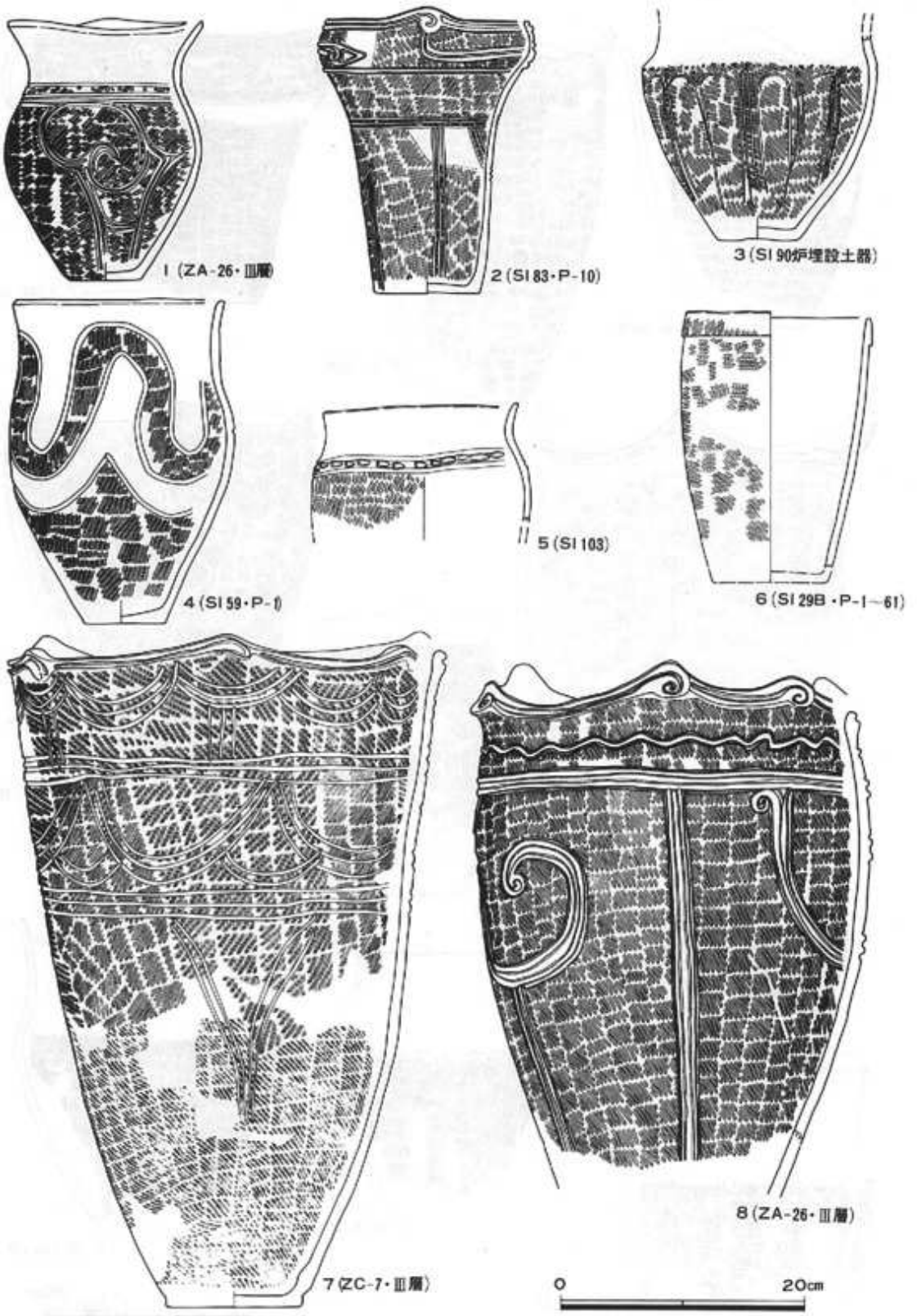
第395図　出土土器実測図(2)



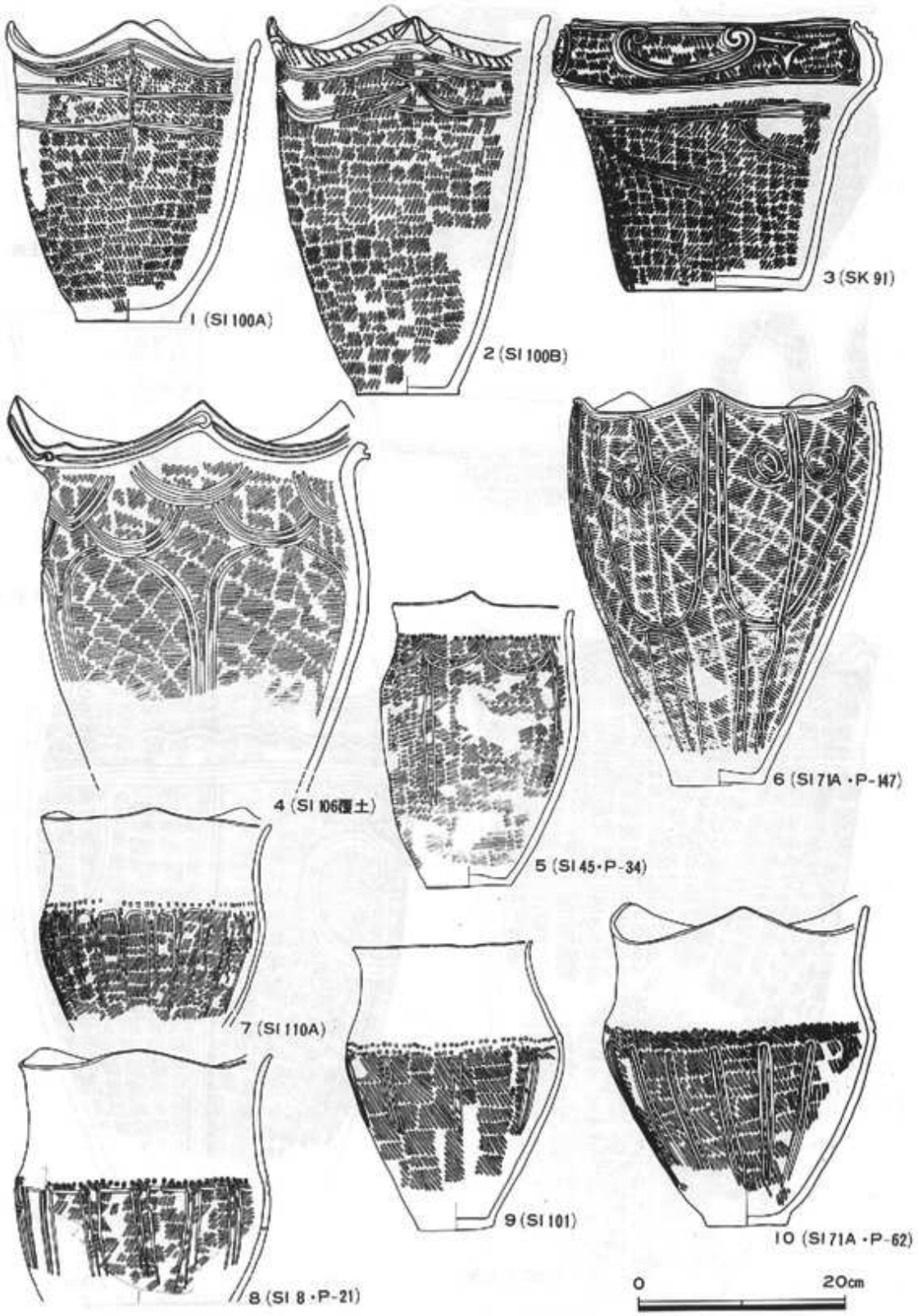
第396図　出土土器実測図(3)



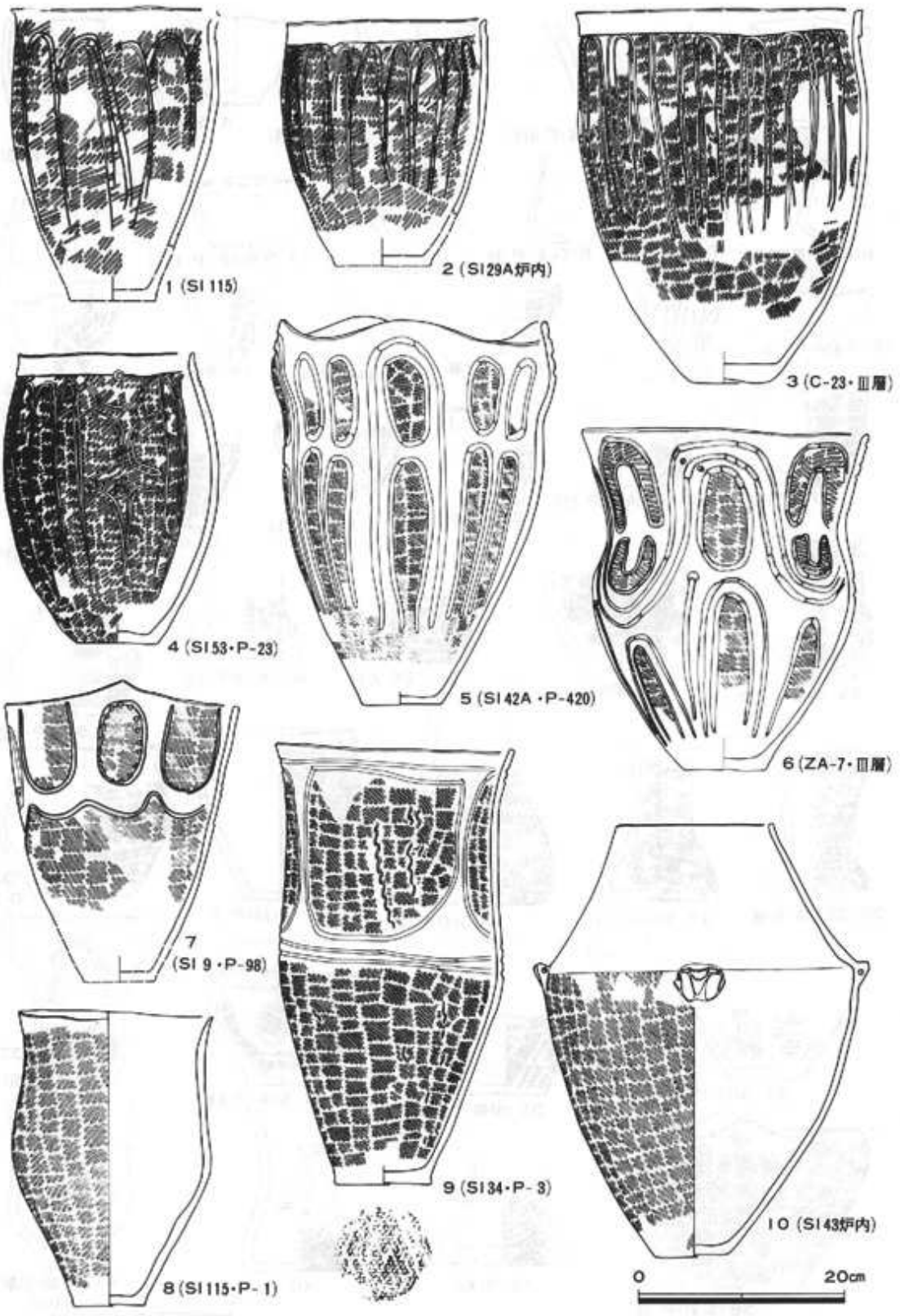
第397図　出土土器実測図(4)



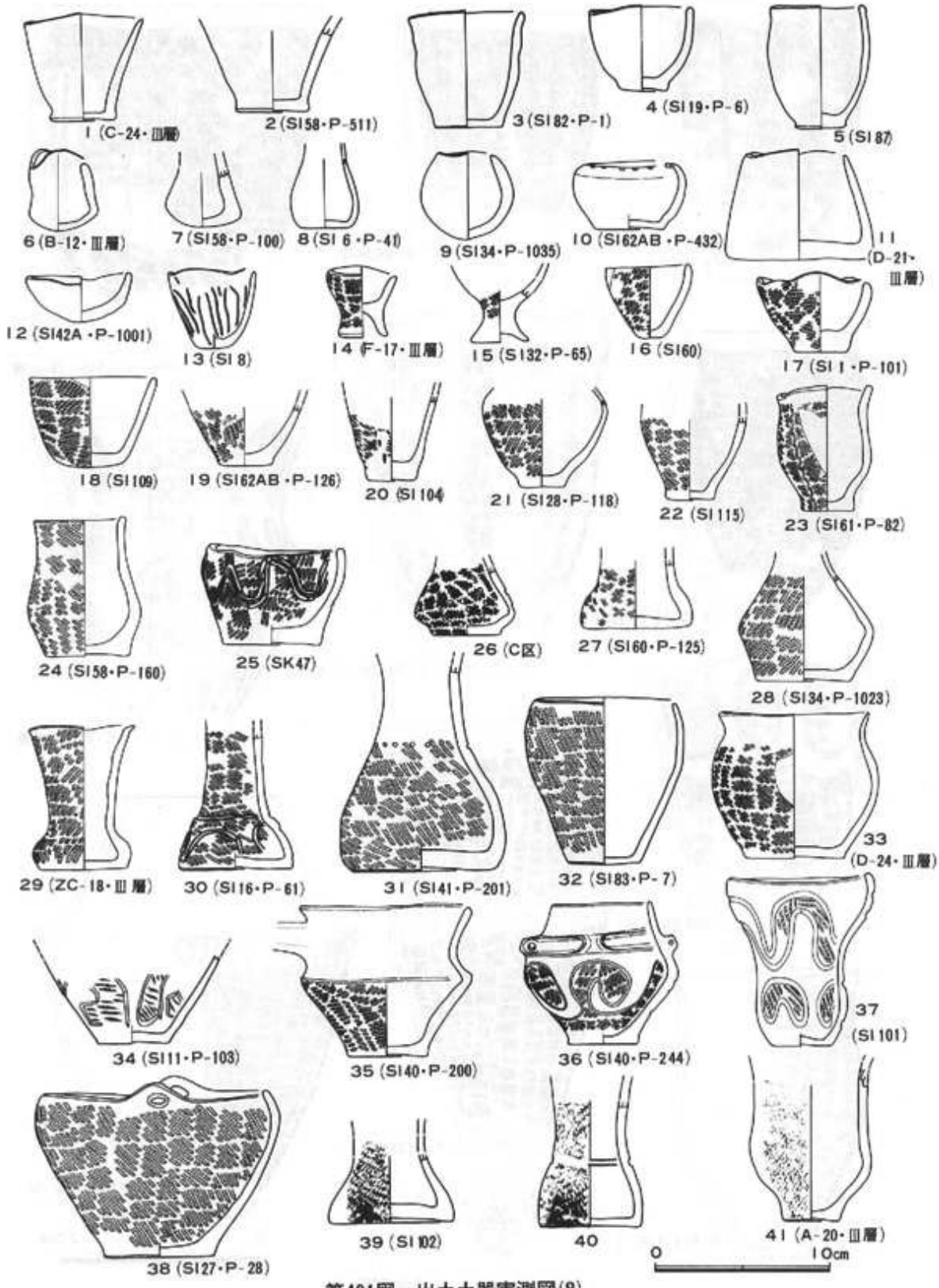
第398図　出土土器実測図(5)



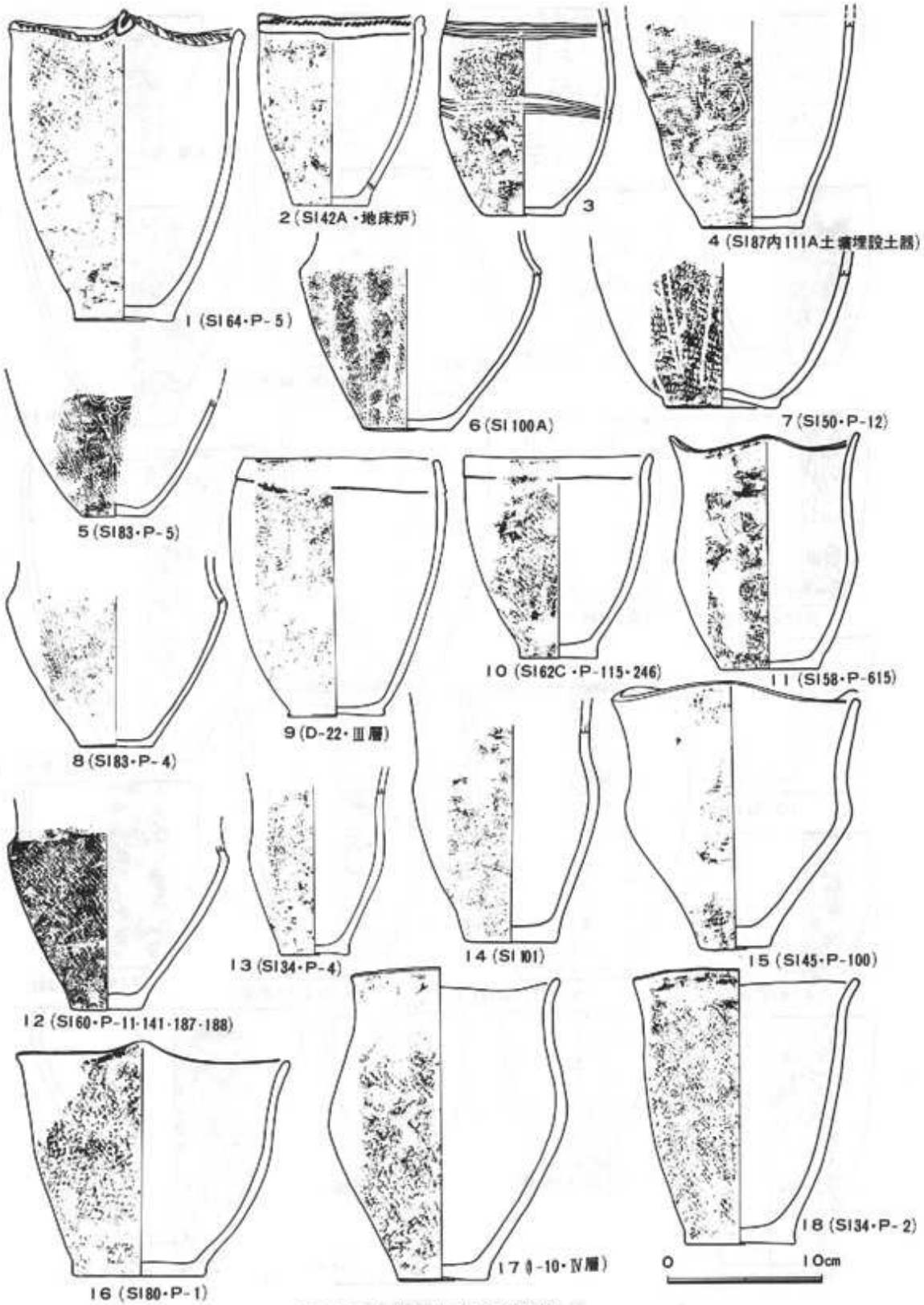
第399図　出土土器実測図(6)



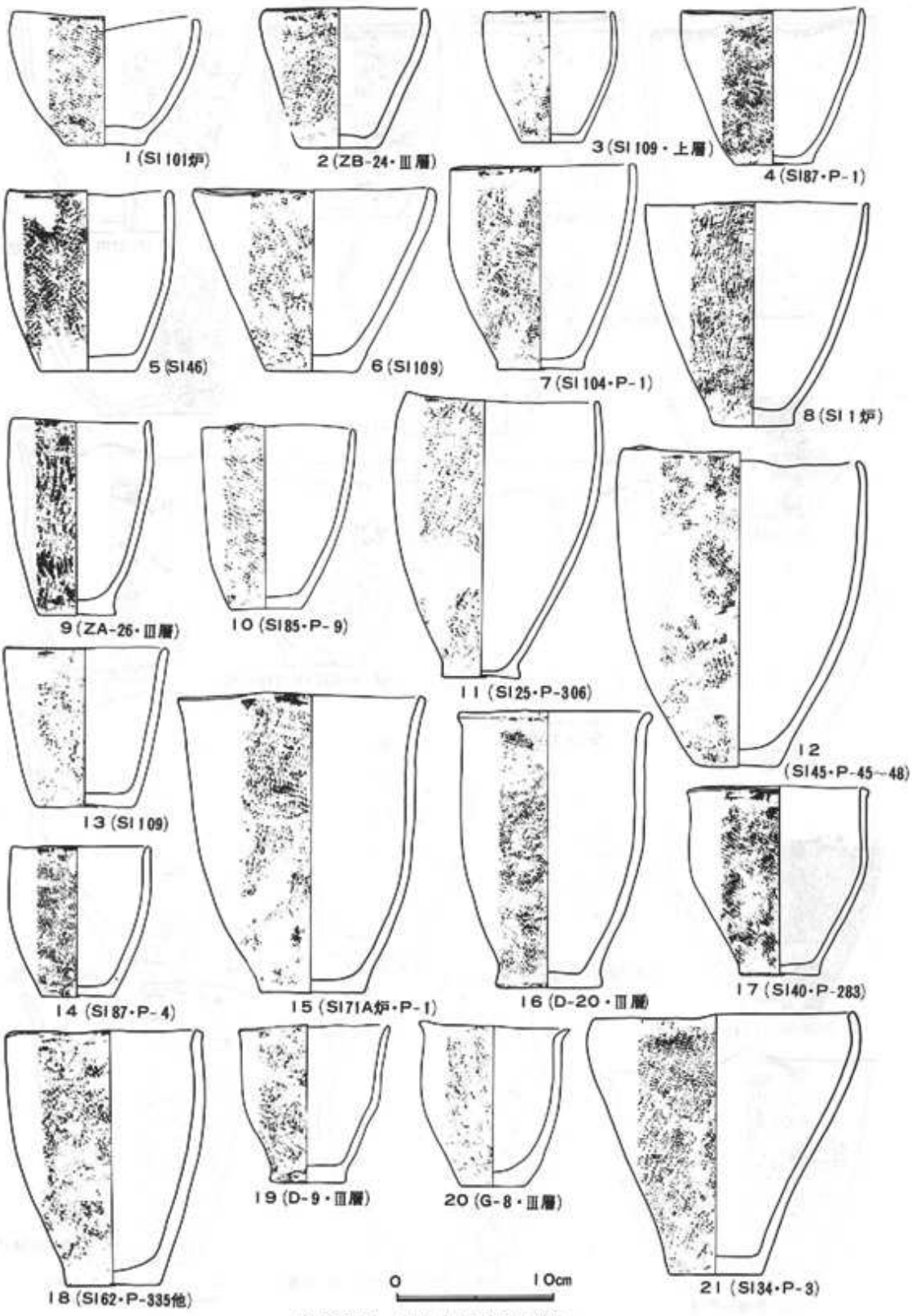
第400図　出土土器実測図(7)



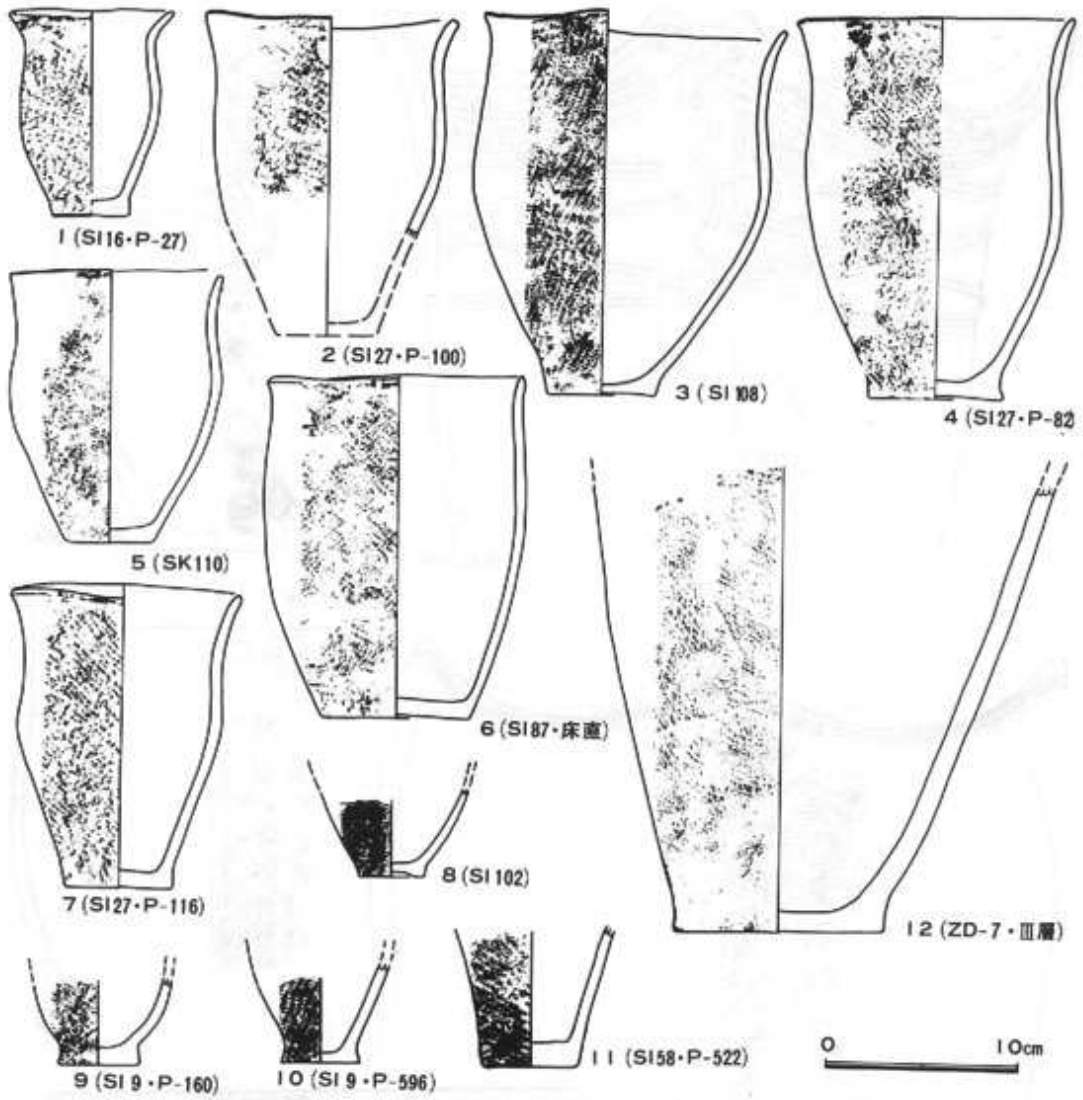
第401図　出土土器実測図(8)



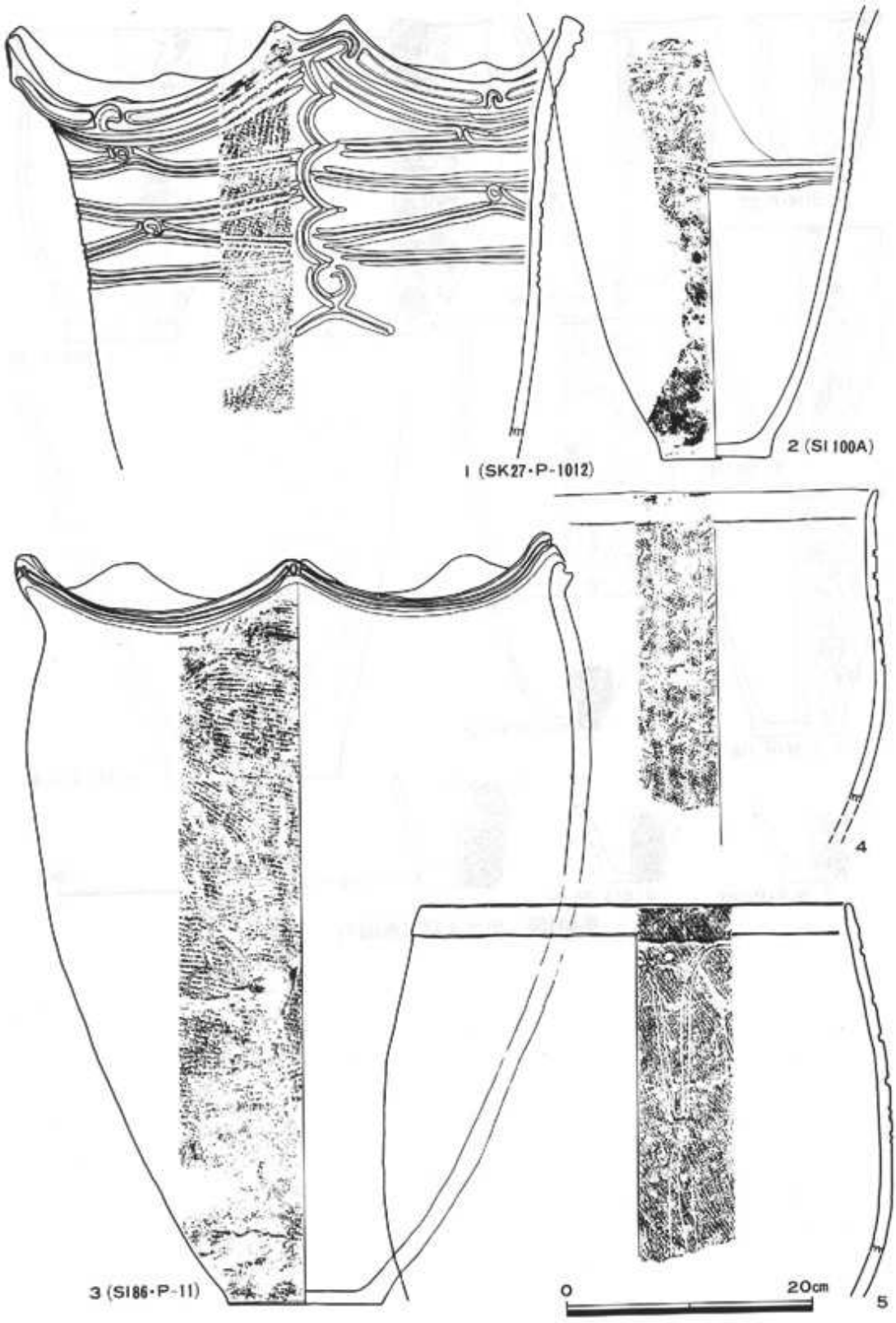
第402図　出土土器実測図(9)



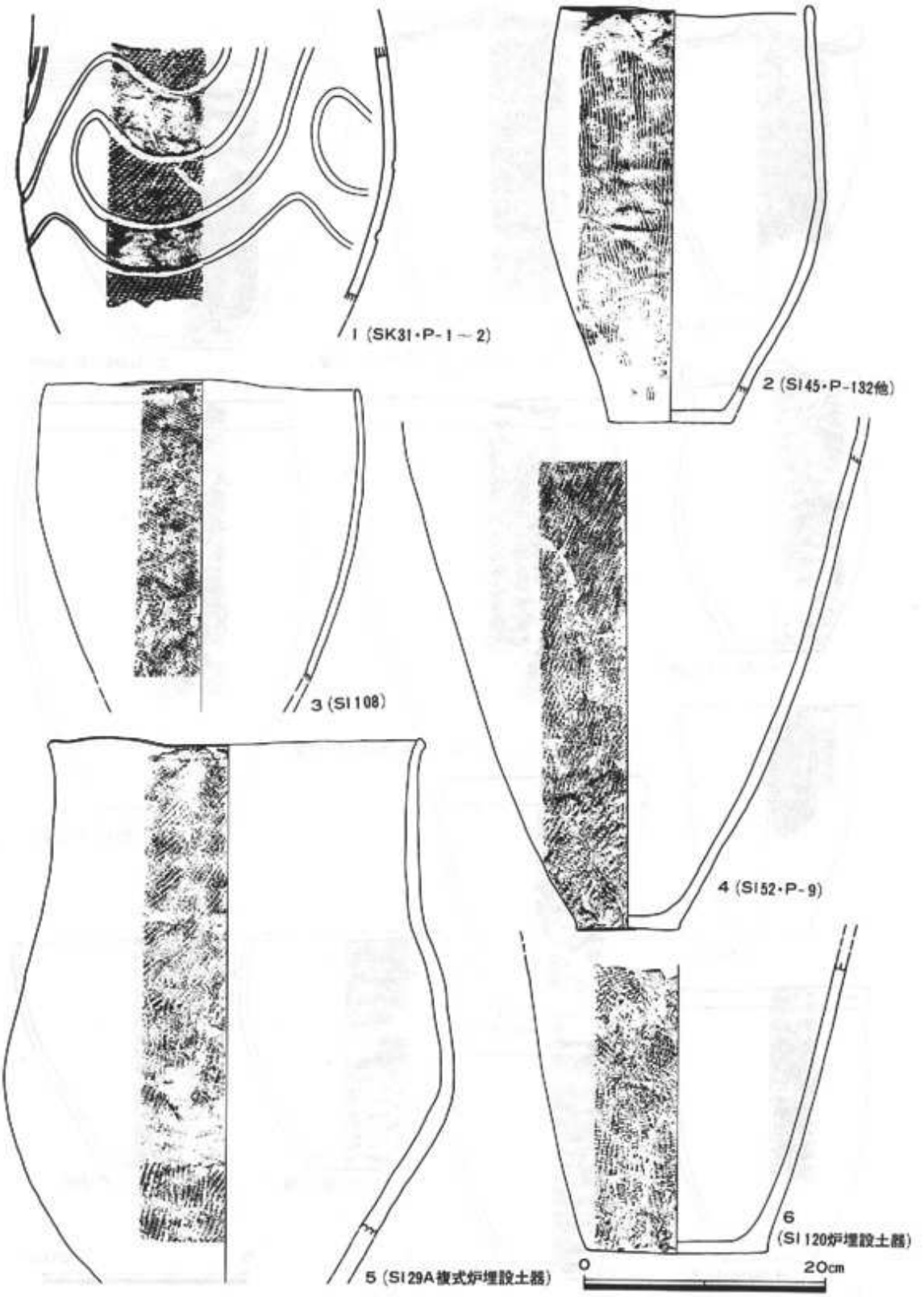
第403図　出土土器実測図(10)



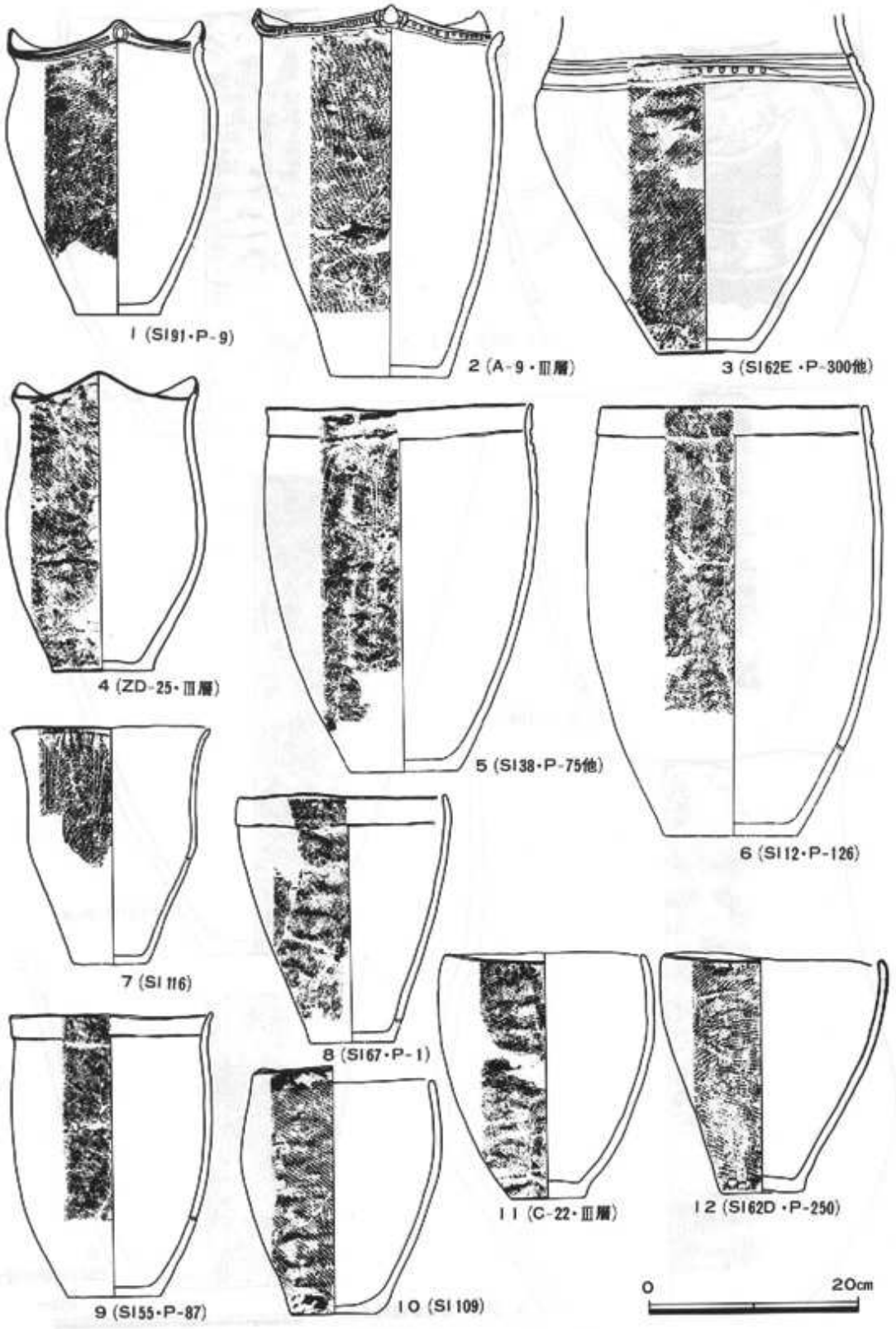
第404図　出土土器実測図(11)



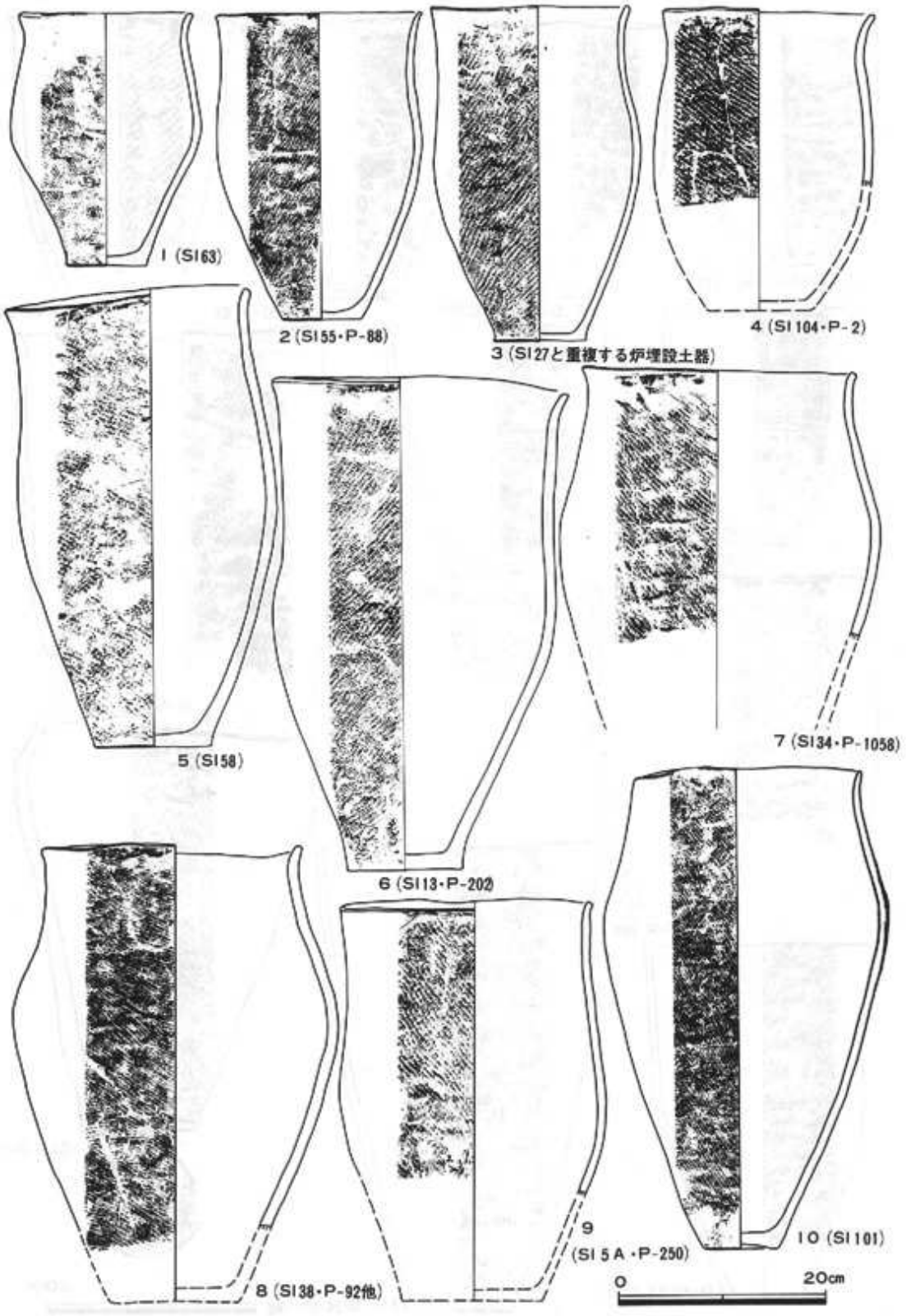
第405図　出土土器実測図(12)



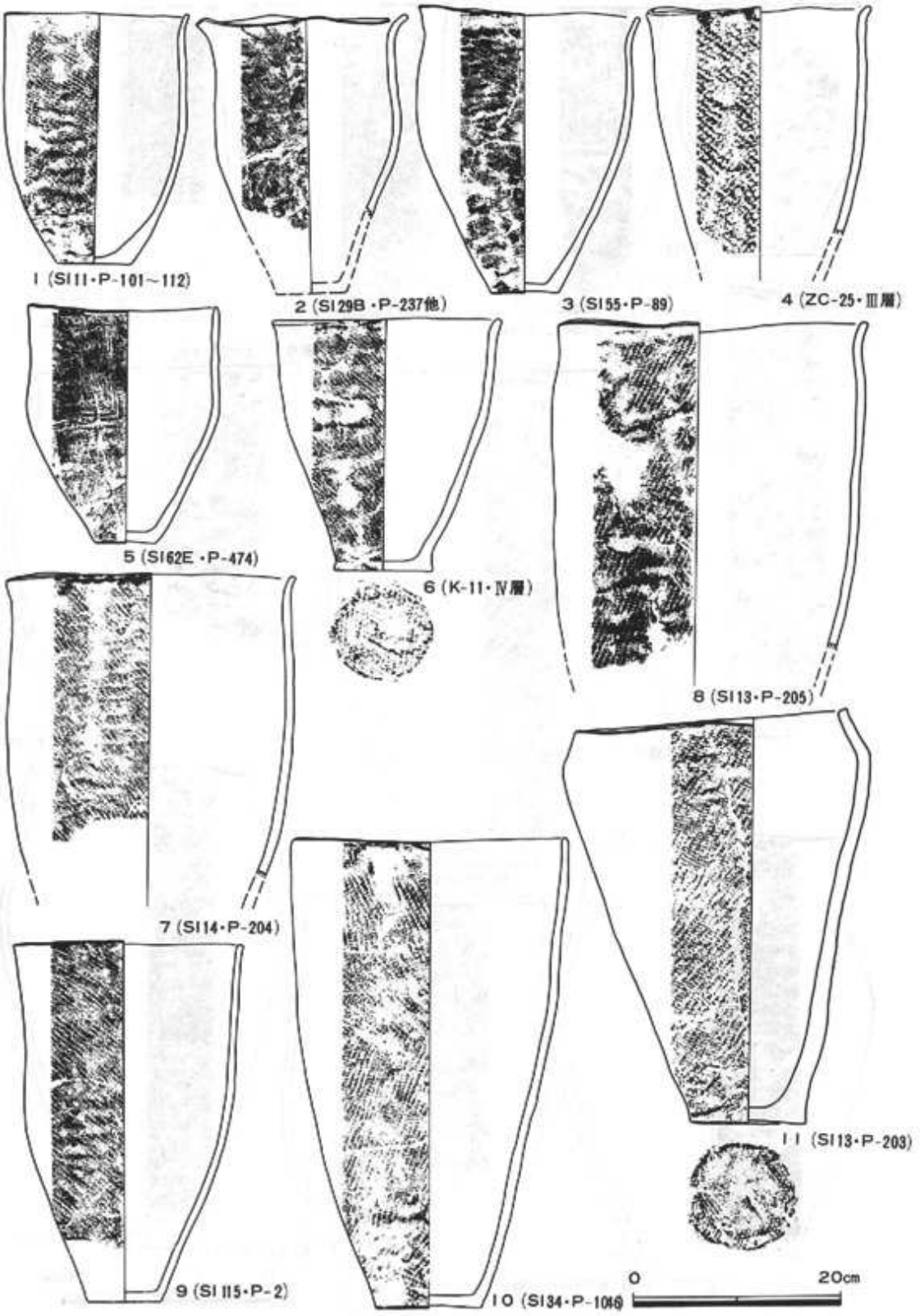
第406図　出土土器実測図(13)



第407図　出土土器実測図(14)



第408図　出土土器実測図(15)



第409図　出土土器実測図(16)

亜式に細別できた。

Ⅰ類 ― 無茎のもので，基部の形態から４つに細別された。（第411図１～24）

Ⅰａ　基部が直線的なもので，いわゆる平基無茎鏃のものである。13点出土している。最大長は1.9～3.8㎝，重さ２～６ｇを測る。規格性に乏しい。なお１例のみ五角形を呈すものが存在するが基部形態が直線的なものであるため本類に入れた。

Ⅰｂ　基部が丸みをおびるもので，いわゆる円基無茎鏃である。13点出土している。最大長は2.3～4.5㎝，重さ２～５ｇを測る。規格性に乏しい。

Ⅰｃ　基部が尖るもので，いわゆる尖基鏃，柳葉形鏃のものである。18点出土した。最大長は2.1～4.8㎝，重さ1.6～９ｇを測る。規格性に乏しいが，大形のものが多い。基部にアスファルトが付着するものが３例ある。

Ⅰｄ　基部に抉入のあるもので，いわゆる凹基無茎鏃である。35点出土した。最大長は1.6～3.5㎝，重さ0.5～2.5ｇを測る。比較的小さいものが多く，最大長２㎝前後，重さ0.8ｇの範囲に集中し，規格性の存在がうかがえる。側縁は直線的でスマートなものと，ふくらんだものが存在する。Ⅰ類のなかでも本類はていねいな調整剝離をもちいている。基部にアスファルトを付着した例が８例存在する。

Ⅱ類 ― 有茎のもので，基部の形態から２つに細別された。（第411図25～34）

Ⅱａ　基部が直線的なもので，茎のつくりだされる，いわゆる平基有茎鏃である。３点出土した。最大長は４～5.4㎝，重さ2.6～12ｇを測る。規格性は乏しい。

Ⅱｂ　基部が突出するもので，いわゆる凸基有茎鏃である。本類のものが最も多く出土し，52点である。最大長は2.1～5.2㎝，重さ１～９ｇを測る。最大長３㎝以上の大形のものが比較的多く規格性が存在する。本類はていねいな押圧剝離をもちい調整している。基部および茎にアスファルトが付着しているものが13例認められた。

以上のように分類された。石鏃の石材は珪(硬)質頁岩が多数を占めるが，チャート・粘板岩のものも数点存在する。石鏃は石器の中でも２番目に多く154点出土した。この様に多量に出土していることは獲物に向って放たれるという性格上，消耗することが多く盛んに製作されたことを示している。

石　槍　（第412図１～９）　（ＰＬ21－21～25）

21点出土した。その内訳は住居跡13点，各グリッド８点で，配石遺構，土壙からの出土はなかった。石鏃と同様，基部形態によって，３分類できた。なお分類のできないものが４点ある。

Ⅰ類 ― 左右対称の側縁をもつもので，形態は柳葉形を示す。いわゆる尖基式のものである。12点出土した。大きさは，最大長７～11㎝，重さ20～50ｇを測る。また１例の

み基部に両端から抉りを入れ，石匙のつまみ部をつくり出したようなものも存在する。

Ⅱ類 — 基部が丸みをおびたもの，または平坦なもので，いわゆる円基，平基式のものである。3点出土した。大きさは最大長5.5～6.5㎝，重さ15～20ｇを測る。

Ⅲ類 — 基部に茎を作り出したもので，有舌尖頭器と呼ばれるものである。2点出土した。完形品は1点で大きさは6.2㎝，重さは15ｇを測る。

以上のように分類された。石槍は石鏃と同様に狩猟の道具として考えられているが，石鏃の量に比べて，極めて少ない。これは石鏃の出現，すなわち弓矢による狩猟法の変化によるものと考えられる。石材は珪(硬)質頁岩，流紋岩である。

石　錐　(第412図10～21)　(ＰＬ22－1～8)

54点出土した。出土地点の内訳は住居跡36点，配石遺構1点，各グリッド17点で土壙からの出土はなかった。つまみの有無で分類され各類ごとに細分された。

Ⅰ類 — つまみ部と錐部からなるもので，その区画は明瞭に判断できるものである。さらにつまみの調整によって2分類された。

Ⅰａ　つまみ部と錐部からなるもので，精巧な剝離調整によってつくり出される。錐部は棒状に長いものが大半で断面形は方形またはひし形を示す。8点出土した。

Ⅰｂ　つまみ部と錐部からなる。錐部は精巧な剝離調整でつくり出され，棒状または逆三角形を示すもので断面形は方形，ひし形を示す。つまみ部はⅠａ類と比べ大きくその中央に一次剝離面を大きく残す。17点出土した。

Ⅱ類 — つまみ部と錐部の区画が明瞭でないもので，形態から2分類された。

Ⅱａ　形態は逆二等辺三角形，または不整形を呈すもので，先頭部または突出した部分の側縁部に剝離調整を施し，錐部をつくり出すものである。錐部断面は，三角形または，ひし形を呈す大形のものが多く，27点出土した。

Ⅱｂ　形態は柳葉形を示す。一見，柳葉形鏃と見まちがうおそれがあるが，先端が丸みをおび，トロトロしているものを本類とした。

石器の石材は珪質頁岩，チャートである。

石　匙　(第413図1～23)　(ＰＬ22－9～20)

94点出土した。出土地点の内訳は住居跡53点，土壙1点，各グリッド40点で，配石遺構からの出土はなかった。石匙は縦型，横型に2分類され，さらに分類された。

Ⅰ類 — 石匙本体の中軸線方向と平行につまみ部がつくり出されているもので，いわゆる縦型石匙と呼ばれるものである。つまみ部の位置によってさらに3分類された。

（第413図１～14）

Ⅰａ　つまみ部が石匙本体の中軸線から右側につくられているもので，左側縁は右側縁に比べ大きくふくらみこの部分に剥離調整を施し刃部をつくり出す。12点出土した。

Ⅰｂ　つまみ部が石匙の中軸線上につくり出されているもので，左側縁が大きくふくらむものと，左右側縁が対照なものがみられる。24点出土した。

Ⅰｃ　つまみ部が石匙の中軸線から左側につくり出されているもので，右側縁は左側縁に比べて大きくふくらみ，右側縁に剥離調整を施し主要刃部をつくり出す。14点出土した。本類には，一次剥離によって得た剥片につまみ部のみをつくり出した粗製のものがみられる。

Ⅱ類 ― 石匙本体の中軸線方向または片側縁と直角につまみ部をつくり出しているもので，いわゆる横型石匙と呼ばれているものである。つまみの位置によってさらに３分類された。（第403図15～23）

Ⅱａ　つまみ部が石匙本体中央より右側につくり出されているものである。14点出土した。本類においても粗製のものが多くみうけられた。

Ⅱｂ　つまみ部が石匙本体のほぼ中央につくり出されるもので20点出土した。

Ⅱｃ　つまみ部が石匙本体の中央より左側につくり出されるもので８点出土した。

石材はすべて珪質頁岩を用いている。本遺跡より出土した石匙のつまみ部にはアスファルトが付着しているものが多くみうけられる。特に17号住居跡出土の石匙にはアスファルトが付着されたことによって，紐の巻き付いた痕跡が認められた。

篦状石器　（第414図１～16）（ＰＬ23－１～10）

石篦とも呼ばれるもので，49点出土した。その内訳は住居跡25点，配石遺構１点，土壙２点，各グリッド21点である。３分類された。

Ⅰ類 ― 背面加工のもので，主要剥離面にはそれほど剥離調整が施されていない。形態は基部と刃部の幅がほぼ同じで，寸胴状を呈し横断面はカマボコ状を呈する。３点出土した。完形のものは１点で最大長7.3㎝，重さ60ｇを測る。

Ⅱ類 ― 両面加工のものである。形態はⅠ類と同様な寸胴状のもののほか，基部に向ってやや狭くなるものが存在する。横断面は凸レンズ状を呈す。大きさは最大長３～８㎝，重さ５～70ｇを測る。本類には長さ３㎝余り，重さ５ｇほどのミニチュア的なものが存在する。

Ⅲ類 ― 刃部とつまみ部からなる点では形態的に石匙のⅠｂ，Ⅱｂ類に類似しているのであるが，刃部およびつまみ部の形態が若干の違いがみられるため一応篦状石器のⅢ

類として処理した。刃部は円形または楕円形を呈し，横断面は半円状を呈する。つまみ部は片面からの加工のものと，両面からの加工のものとに分けられる。

石材は頁岩，チャートである。なおⅢ類においてはこれまで縄文時代の遺跡から出土する篦状石器と形態を異にするものである。この例は猿ケ平Ⅱ遺跡において報告例があり，石匙として紹介されている。

掻　器　（第415図1～24・第416図1～10）　（PL.23—11～25・PL.24—1～19）

本遺跡で出土した石器のなかで最も多量に出土したもので，707点出土した。出土地点の内訳は，住居跡533点，配石遺構2点，土壙13点，各グリッド159点である。掻器としたのは剝片の一部に調整剝離を施したものの他，使用痕，刃こぼれのあるものも一括した。分類においては剝片の打面を上にし，刃部のつくり出される位置によって分類した。なお分類にあたっては完形品259点をもとに分類した。

Ⅰ類 — 左・右側縁および下側縁のいずれかに剝離調整を施し刃部をつくり出すものである。

Ⅰa　刃部が左側縁に存在するもの。39点出土した。大きさは最大長4～9cm，重さ5～68gを測る。そのなかで最大長4.5cm，重さ10～30gのものが多くつくられている。

Ⅰb　刃部が右側縁に存在するもの。35点出土した。大きさは最大長4～9cm，重さ7～53gを測る。7cm以下，20g以下のものが主流を占める。

Ⅰc　刃部が下側縁に存在するもの。54点出土した。大きさは最大長3～9cm，重さ3～70g以上を測る。しかしその多くは最大長6cm，重さ15g以下のものが主流を占める。

Ⅱ類 — 左側縁と下側縁に，または右側縁と下側縁の二側縁に剝離調整を施し刃部をつくるものである。

Ⅱa　刃部が左側縁と下側縁につくり出されるもので17点出土した。大きさは，最大長3.5～7.5cm，重さ9～58gを測る。

Ⅱb　刃部が右側縁と下側縁につくり出されるもので15点出土した。大きさは，最大長3～8.5cm，重さ10～59gを測る。

Ⅲ類 — 両側縁に刃部がつくり出されるものを基準とし，これらに下側縁の刃部または，上・下側縁の刃部が付随するものである。

Ⅲa　両側縁に刃部がつくり出されるもので17点出土した。大きさは最大長5～10.5cm，重さ10～70g以上を測る。

Ⅲb　両側縁と下側縁に刃部がつくり出されるもので77点出土し分類したものの中で最も多い。大きさは最大長3.5～10cm，重さ3～70gを測る。特に最大長4～6cm，

重さ6～20ｇの範囲に全体の約6割が集中する。

Ⅲｃ　すべての側縁に刃部がつくり出されるもので出土量は少なく5点である。大きさは最大長3～7.5㎝，重さ6～62ｇを測る。大きさ，重さとも両極端である。

掻器の平面形は大きく概して，円形，楕円形，長方形（方形を含む），三角形などがみられる。石材は硬質頁岩が9割以上を占めており他にはチャートがある。

打製石斧　（第416図11，12）

3点出土した。出土地点は住居跡1点，各グリッド2点で配石遺構，土壙からの出土はみられない。いずれも両面加工された篦状石器に近似するが大型であり石斧とした。形態は楕形，基部のやや狭くなる形を呈する。横断面は凸レンズ状を呈す。法量は最大長7.7～11.5㎝，重さ66～186ｇを測る。石材は頁岩，粘板岩，蛇紋岩がある。

三脚石器　（第416図13，14）　（ＰＬ24－20）

2点出土した。一辺が7.5～15㎝の正三角形状を呈するもので，断面形は台形状を呈する。裏面にはほとんど剝離調整は施さない。石材は頁岩である。

磨製石斧　（第417図1～8）　（ＰＬ24－21～27）

52点出土した。出土地点の内訳は住居跡35点，土壙1点，各グリッド16点で配石遺構からは出土しなかった。想定される製作技法によって分類した。

Ⅰ類 ― 乳棒状磨製石斧である。形態は基部の細い棒状である。斧身は厚く，横断面は楕円形である。42号住居跡出土のものは刃部形態の知れるもので丸刃で，両凸刃のものである。4点出土した。

Ⅱ類 ― 擦切，定角型磨製石斧である。形態は刃部から基部にかけて次第に細くなるものと，寸胴のものもみうけられる。刃部形態は平刃，丸刃の二者が多いが，数点偏刃のものも存在する。48点出土した。

磨製石斧52点中，法量は最大長3.3～5.7㎝，重さ3～20ｇのミニチュアのものが9点含まれている。このミニチュア磨製石斧はⅡ類の擦切，定角形磨製石斧であり小さいながらも精巧にできている。この他，Ⅱ類の中には基部に孔をあけたもの，またはその途中のものが2点存在し，とても実用品とは考えられない。石材は石英安山岩，凝灰岩，頁岩，斑糲岩である。

磨　石　（第418図5～7）　（ＰＬ25－1～5）

124点出土した。出土地点の内訳は住居跡64点，土壙3点，各グリッド57点出土した。形態

によって分類された。

Ⅰ類 — 円形，楕円形の自然石を使用するもの113点出土した。法量は最大長6～19cm，重さ90～1900gである。片手で持てるくらいの大きさ，重さの自然石を使用しており，最大長7～14cm，重さ500～700gの範囲にわずかに集中する。

Ⅱ類 — 隅丸長方形，樽形またはカマボコ状に形を整えているもの。11点出土した。法量は最大長11.1～19.2cm，重さ380～1150gを測る。磨面は4～6面使用されている。

Ⅰ，Ⅱ類とも凹石に転用されているものが存在する。そのほか数例であるが側縁に小さな剝離痕を認めることから敲石として転用されたものもある。石材は安山岩，凝灰岩である。

凹　石　（第418図8～10）　（PL25－6・7）

110点出土した。出土地点の内訳は住居跡60点，土壙4点，各グリッド46点である。自然石の比較的平坦な面に凹部をもつものである。凹部は1ないし数個からなるもので，片面のみと両面に穿つものなどがある。法量は最大長6～25cm，重さ180～1540gを測る。石材は安山岩である。この凹石110点の中には磨石，石皿の破片を転用したものが存在する。また32号住居跡では，炉跡を構築するためその材料として使用されたものもある。石材は石英安山岩，砂質凝灰岩である。

石　皿　（第418図1～4）　（PL－17～20）

40点出土した。出土地点の内訳は，住居跡34点，配石遺構1点，各グリッド5点である。形態によって分類した。

Ⅰ類 — 扁平な河原石を使用したもので，縁をもたず磨面から辺縁までの変化が乏しいものである。16点出土した。

Ⅱ類 — 加工しやすい石を使用しており，磨面と縁が明瞭に区画されているもの，脚の有無で2分類される。

Ⅱa　磨面と縁が明瞭に区画されているが，脚をもたないもの。14点出土した。29A号住居跡出土のものは，炉面側に設置されていた様な状態で，さらに13号配石遺構では伏せられて出土した。

Ⅱb　磨面と縁が明瞭に区画されており，脚を有するものである。この脚は，整形の際ただ突出させたもの，突出させ更に手を加えているものの2例がある。この中には58号住居跡出土の様な小型のものが存在する。20点出土した。

石皿の破片が凹石として転用されているものが1例存在する。石材は火山礫凝灰岩，凝灰岩，安山岩，玄武岩である。

石　錘　（第417図９～11）　（ＰＬ25－８～10）

５点出土した。出土地点の内訳は，住居跡１点，各グリッド４点である。いずれもコブシ大の扁平な河原石の長軸方向の両端を打ち欠いて抉りをつくり出しているものである。法量は最大長4.9～9.5㎝，重さ36～111ｇを測る。石材は軽石，砂質凝灰岩である。

砥　石　（第417図12）　（ＰＬ25—11・12）

２点出土した。出土地点の内訳は，土壙１点，各グリッド１点である。15号土壙出土のものは多量の土器と石棒２点とともに出土している。形態は立方体をなし，その内の５面が砥石として使用され，擦痕が観察された。石材は凝灰岩，安山岩である。

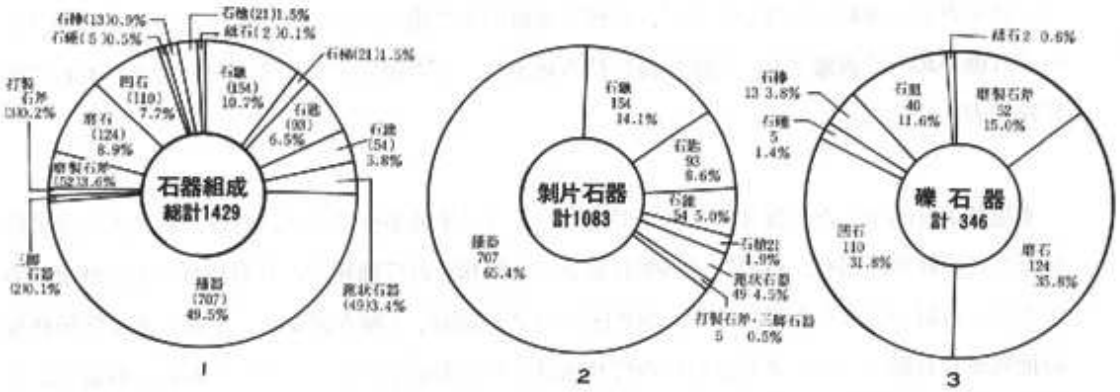
フレーク　（接合資料について）　（第419・420図１～４）

前述した多量の石器のほか，石器の素材として意識的につくり出した剥片や石器をつくる際に生じた石屑などいわゆるフレークと呼ばれるものがコンテナ５箱ほど出土している。出土する地点，地域を概観すると住居跡埋土中とこの住居跡を覆う基本層位第Ⅲ層から多く出土している。この様な地点，地域からの出土のほか，58号，65号住居跡の様に住居跡・北西部床面の一定の個所からまるで保管・管理されていたかのように78～197点にもおよぶフレークが出土する所も存在する。これら２棟の住居跡のフレークをすべて持ち帰りそれらの接合を試みたが，複数からなる母岩から剥奪されたものであり，接合するものは極めて少なく，第419図１・２は58号住居跡の第419図３・４，第420図１～４は65号住居跡の接合例である。この８例は，同一打面から加撃が加えられ，剥離されたもので縦長の剥片である。しかしこれらの接合資料のほかに剥離技術を理解するためには石核が必要であるが石核の出土は皆無であったため，技術を理解するにはいたらなかった。この２棟について考えてみると住居跡内から出土するフレークはまだ加工されていないもので，石核が遺跡内より出土していないことからこれらのフレークは他の場所で剥離され，当住居跡に持ち込まれ，その後加工されるものと考えられ石器製作跡と考えられる。

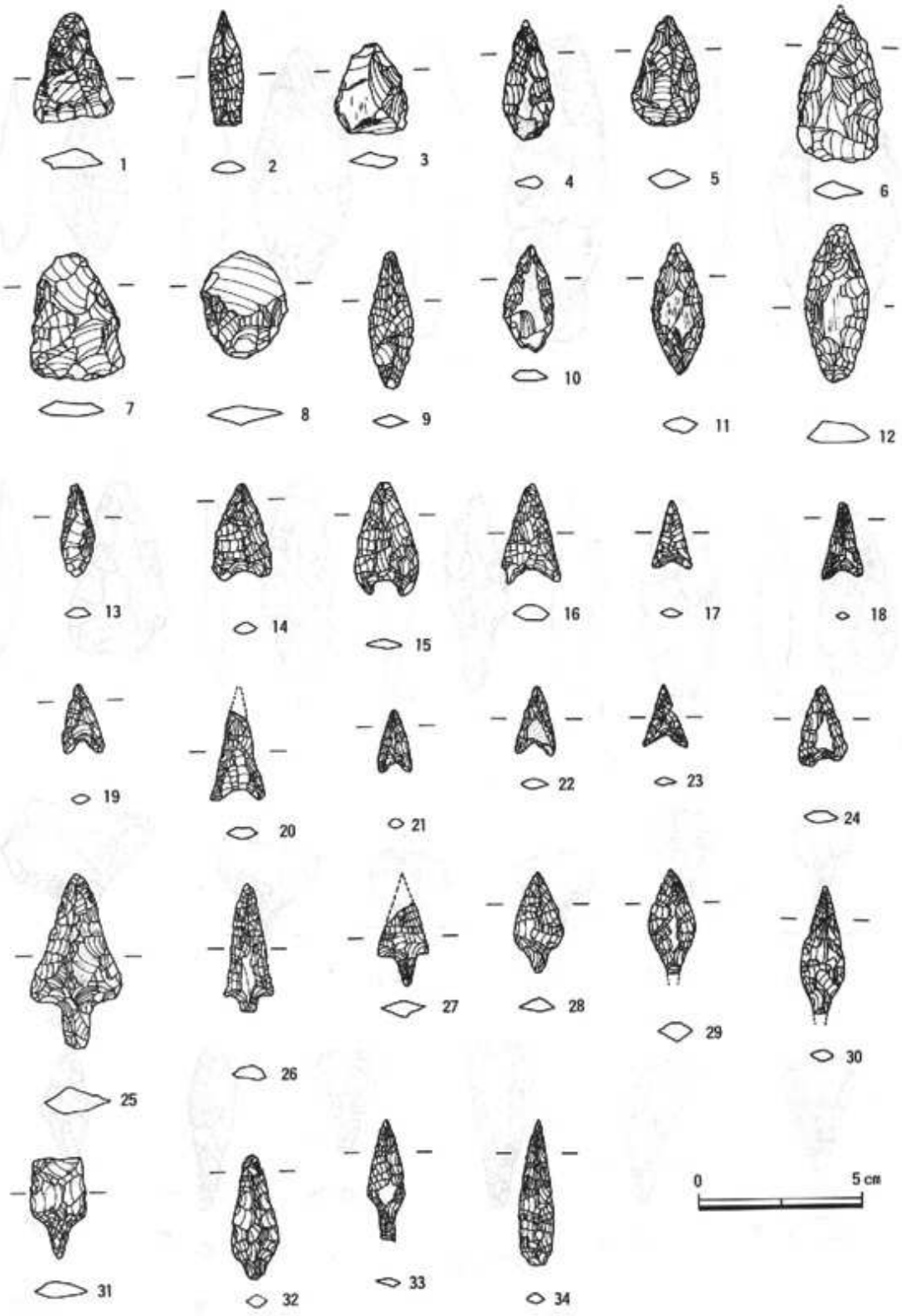
本遺跡より出土した石器は，これまで述べたように多種多様であり，石鏃，石匙などの剥片石器では８種類，凹石，石皿などの礫石器では７種類の計15種類で，石器総数は1,429点におよんだ。石器の分布をみていくと，調査区A_1区の住居跡，土壙が密集し，重複しあう住居跡群の地域から石器（フレークも含む）の約９割以上が出土している。さらにこれらの石器の出土地点を細かく観察すると遺構内より988点，遺構外より441点が出土している。しかし遺構内のものにおいては廃棄後の埋め戻しや，自然堆積時に土砂とともに遺構内に流れ込んだものや

投げ込まれたものなどが多数あるものと考えられ，遺構外の出土として取り扱ってもよいと考えられる。なお遺構外出土の石器は，遺物包含層である基本層位第Ⅲ層出土のものが多い。また遺構の床面（底面）から出土しているものは極めて少ない。しかし，第34号住居跡のように住居跡北西部の床面より石錐１点，石匙１点，掻器７点，磨斧４点の計13点を一ケ所より出土するものや，第58，65号住居跡のように住居跡北西部床面の一ケ所よりフレークを98～197点と多量に出土するものがある。これは石器，フレークの保管場所とも関連するものと考えられる。特に第34号住居跡出土のものについては石器のセットを考えるうえで重要な資料であろう。第58，65号住居跡のフレーク群はその出土状況がいかにも保管されているかのごときであり，石器製作跡として想定できるものである。第410図は石器全体の剝片，礫石器の種類別の出土割合（石器組成）を表わしたものである。今回調査し，出土した石器のみで本遺跡の石器組成の全容を把握できるはずはないが，およその概略を知ることができるであろう。特徴的なことは剝片石器が全体の約８割近くを占めることであり，とりわけ掻器，石鏃，石匙が多い。礫石器は約２割強を占め，磨石，凹石が多いことである。特に剝片石器では前述したように掻器，石鏃，石匙が多い。石鏃は獲物に放たれる性格上消耗することが多く，盛んに製作されたことを数値からも示しており，この石鏃によって獲得された獲物を解体，調理する道具である石匙，掻器が多いということは，石鏃の量からも推定できる。また礫石器では磨石，凹石，石皿が多く出土している。石皿と磨石はセットをなすものと考えられており，本遺跡でも花粉分析を行った結果クリ，クルミなどの堅果類が出土しており，これらを敲き，押し，潰し，磨いたものであると考えられる。以上のように本遺跡から出土した石器のなかには，獲物を獲得し，それを解体，調理する道具，さらに植物を採取し加工する加工具が多いことは，狩猟採取を中心として生活を営んだことがうかがわえる。

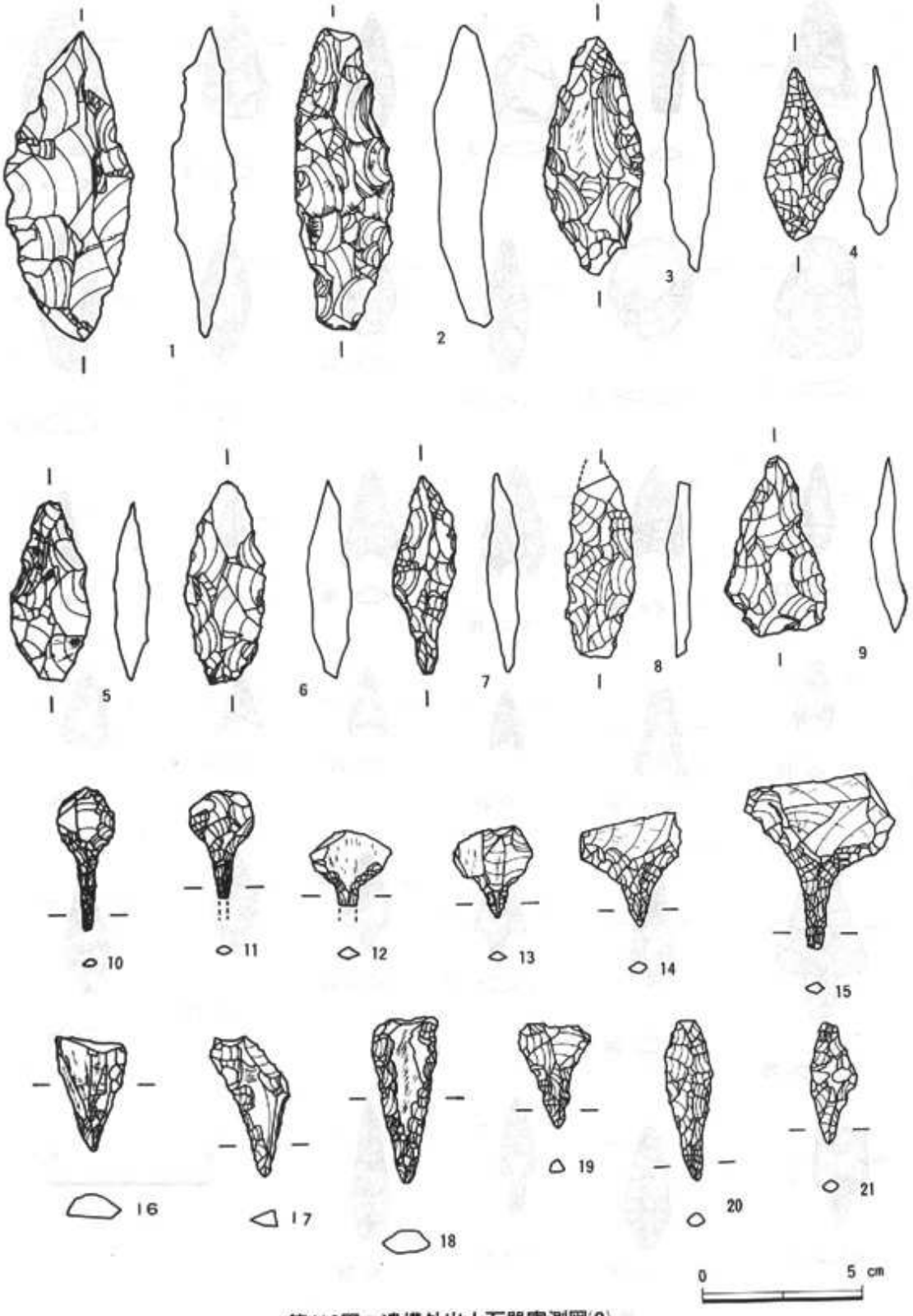
（藤井　安正）



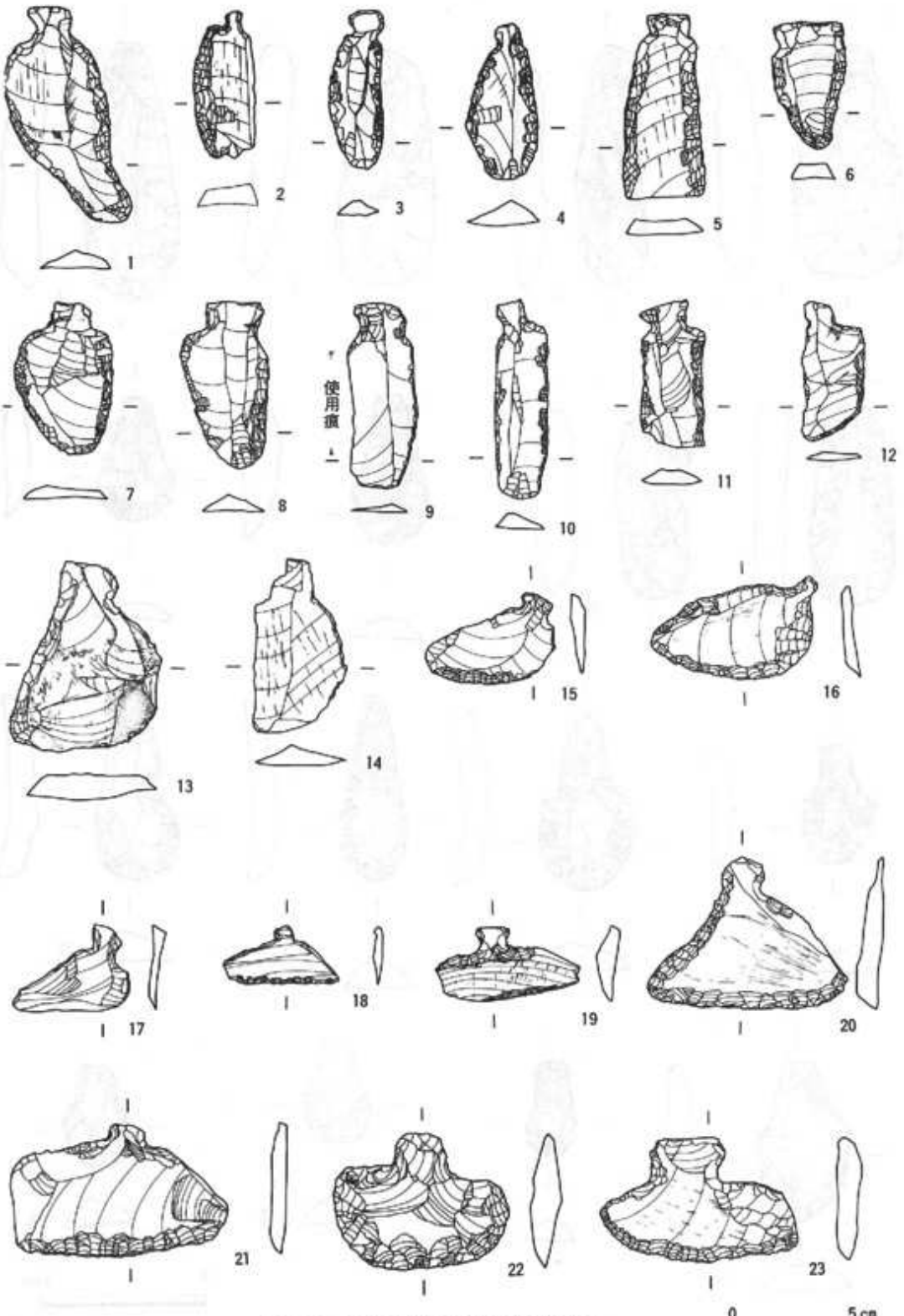
第410図　石器組成図



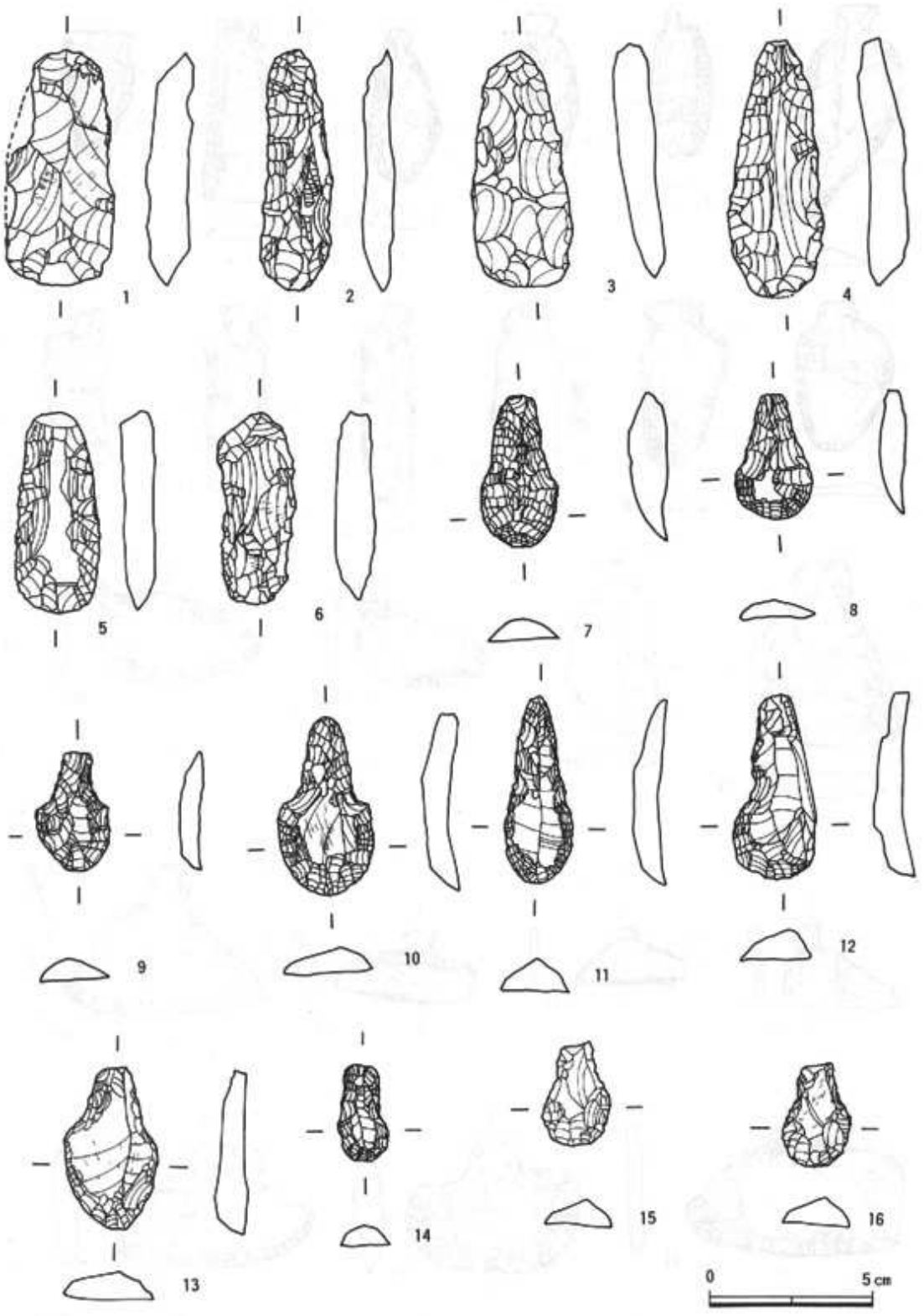
第411図　遺構外出土石器実測図(1)



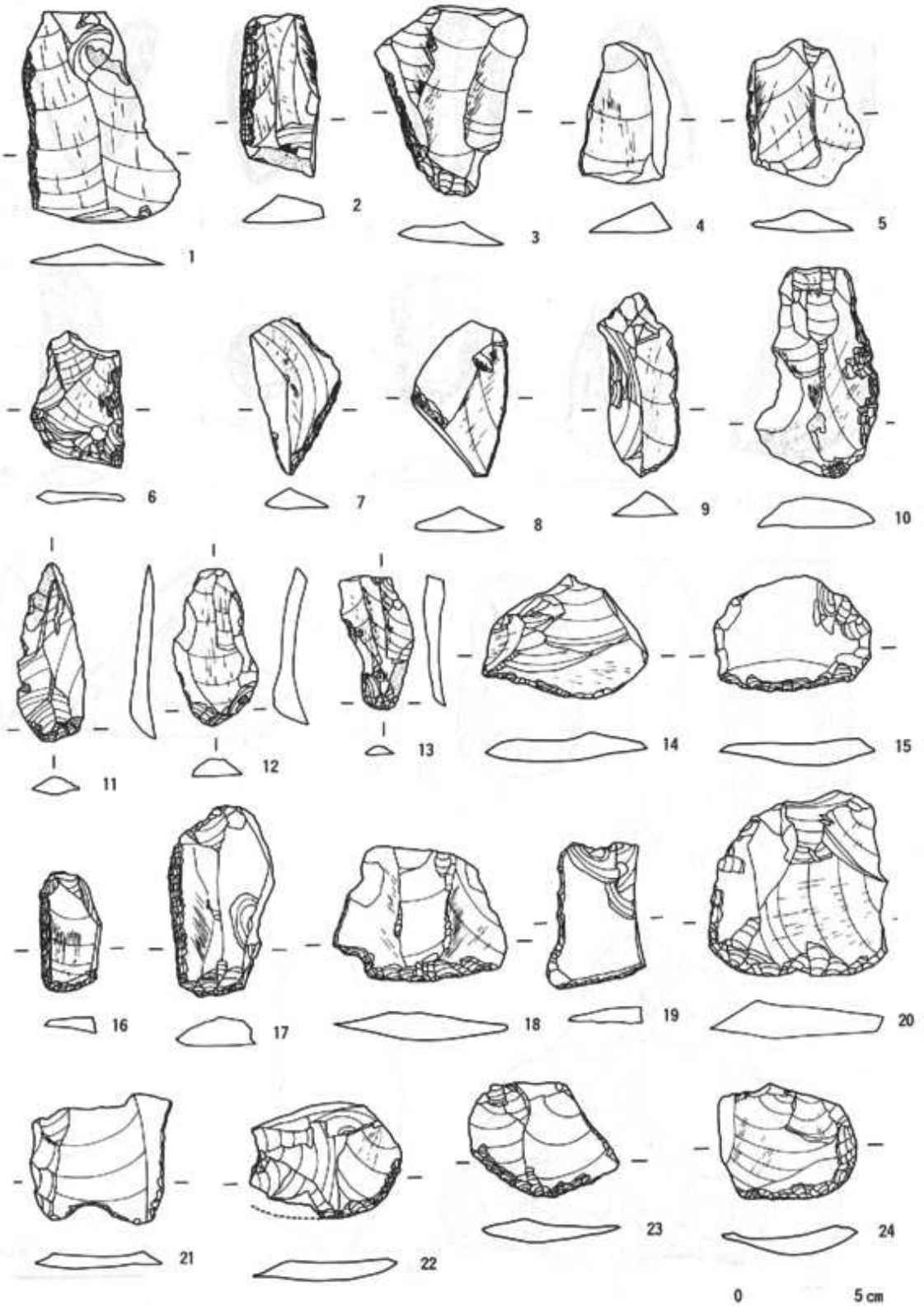
第412図　遺構外出土石器実測図(2)



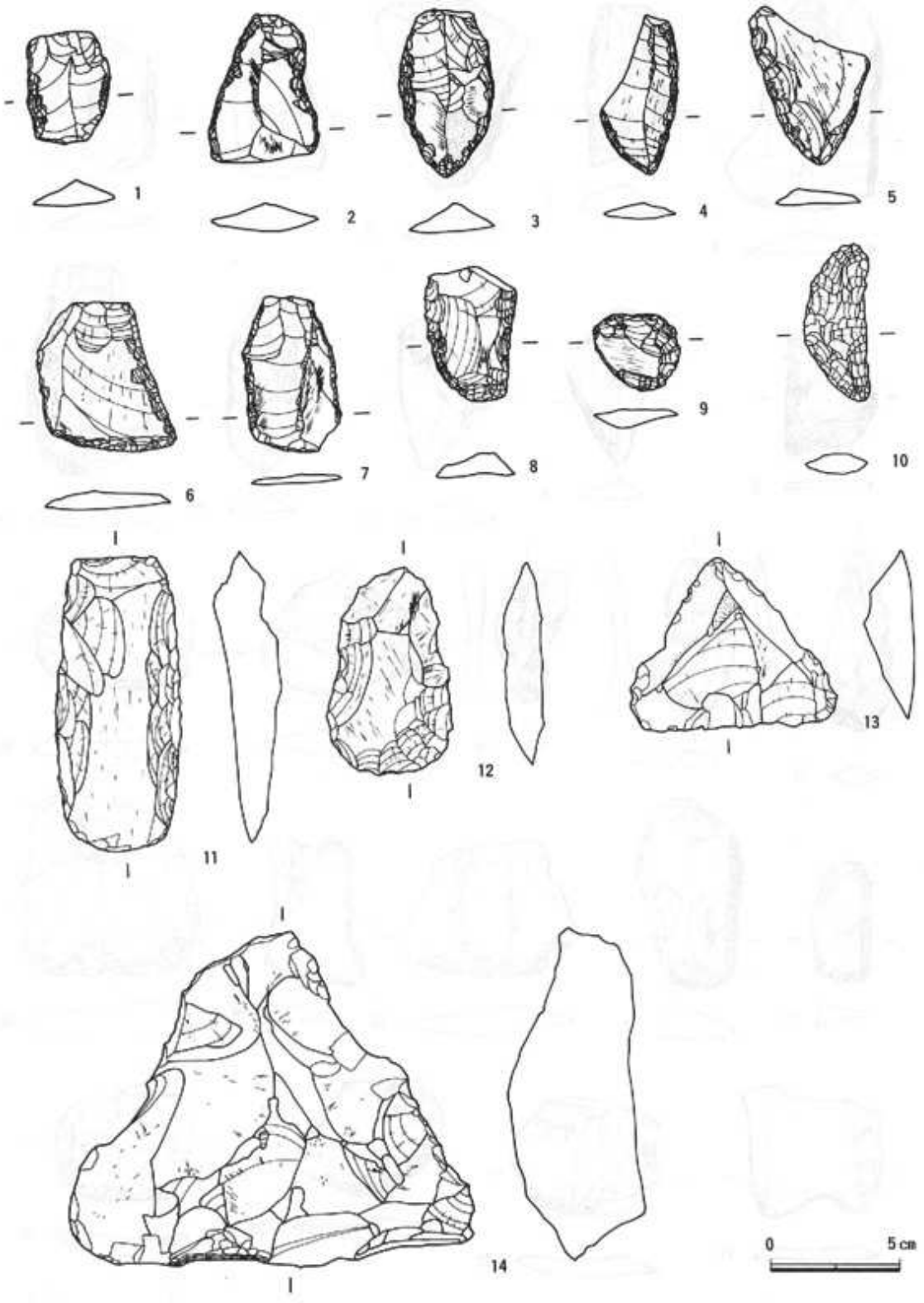
第413図　遺構外出土石器実測図(3)



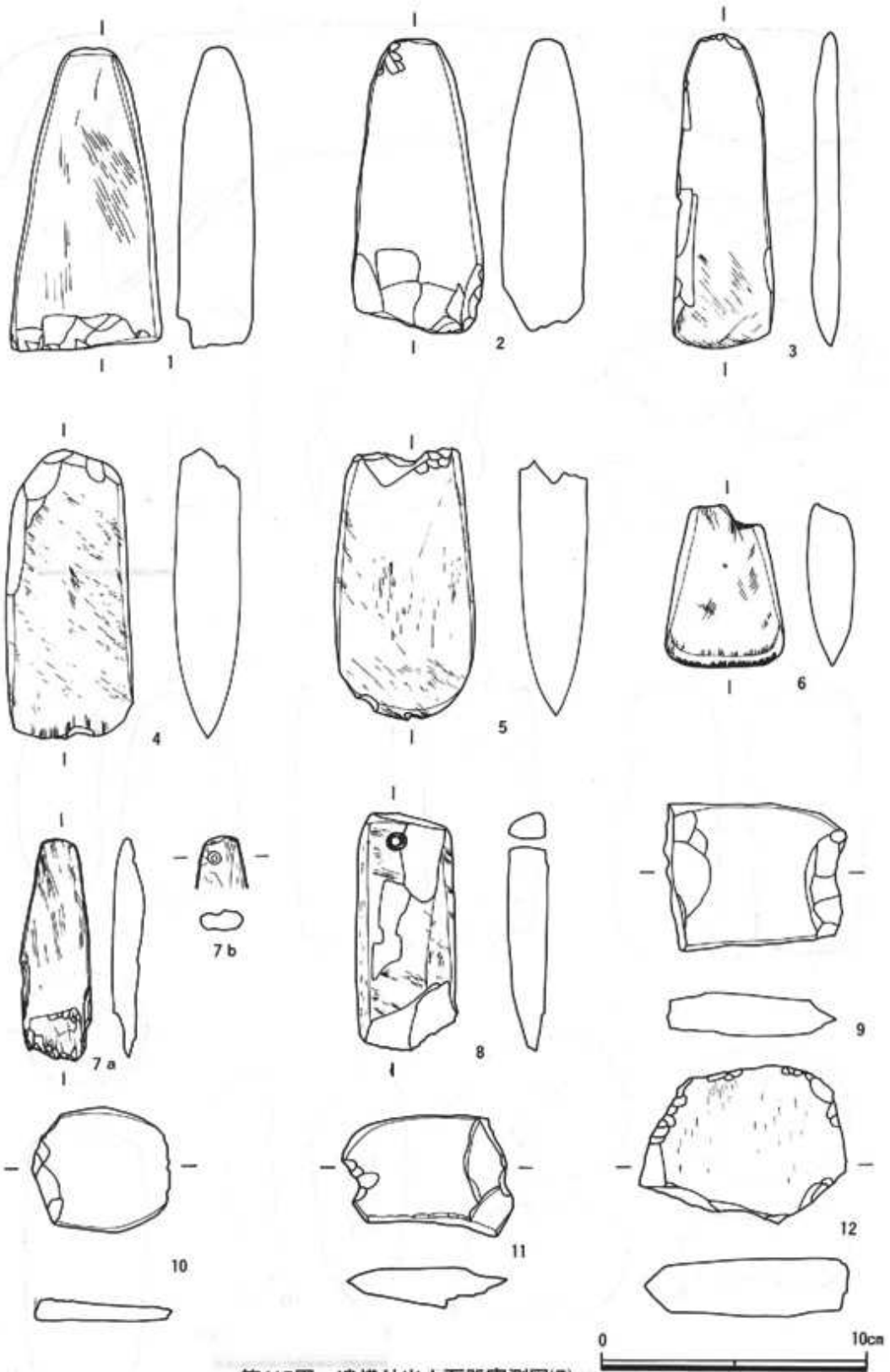
第414図　遺構外出土石器実測図(4)



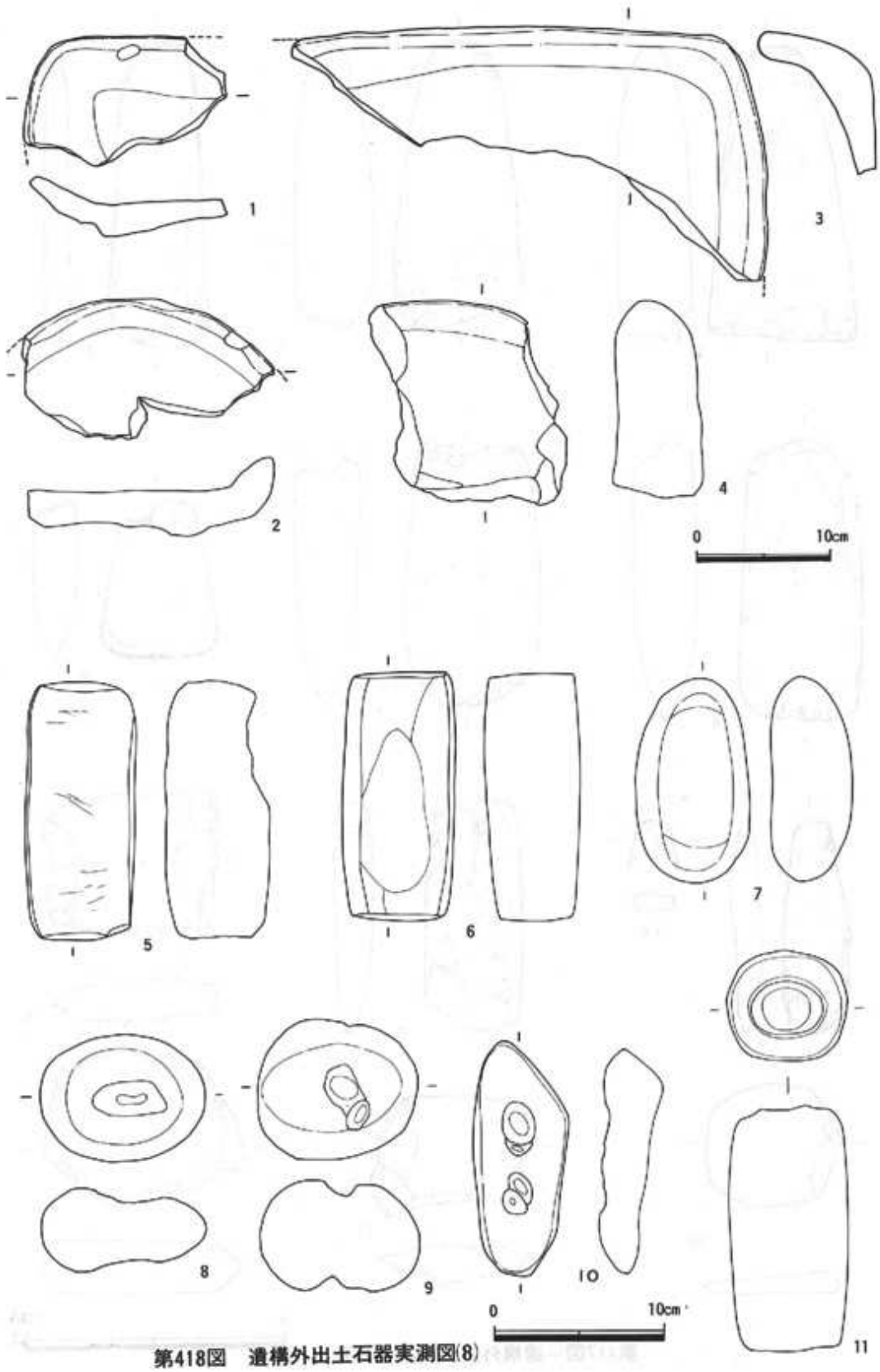
第415図　遺構外出土石器実測図(5)



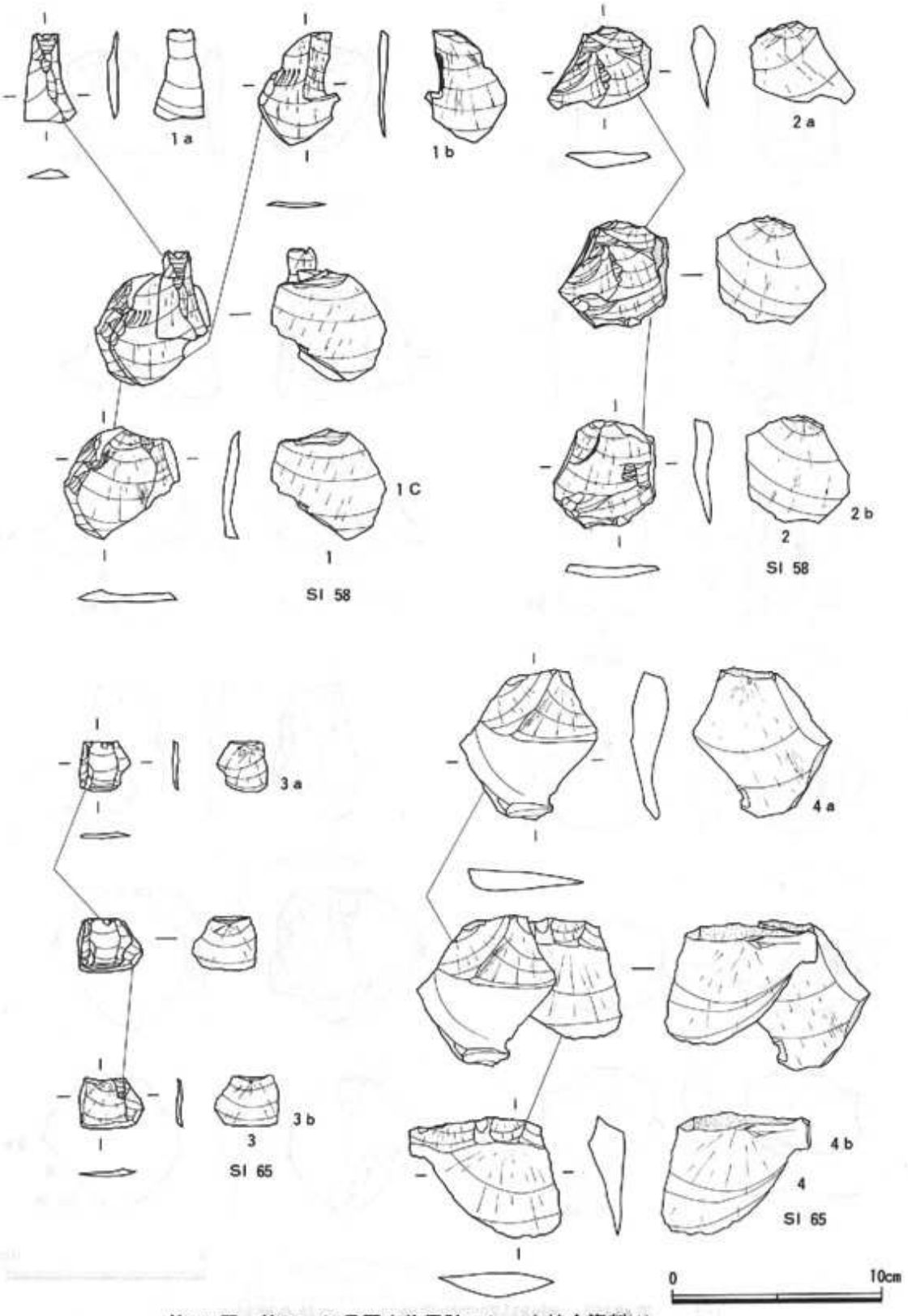
第416図　遺構外出土石器実測図(6)



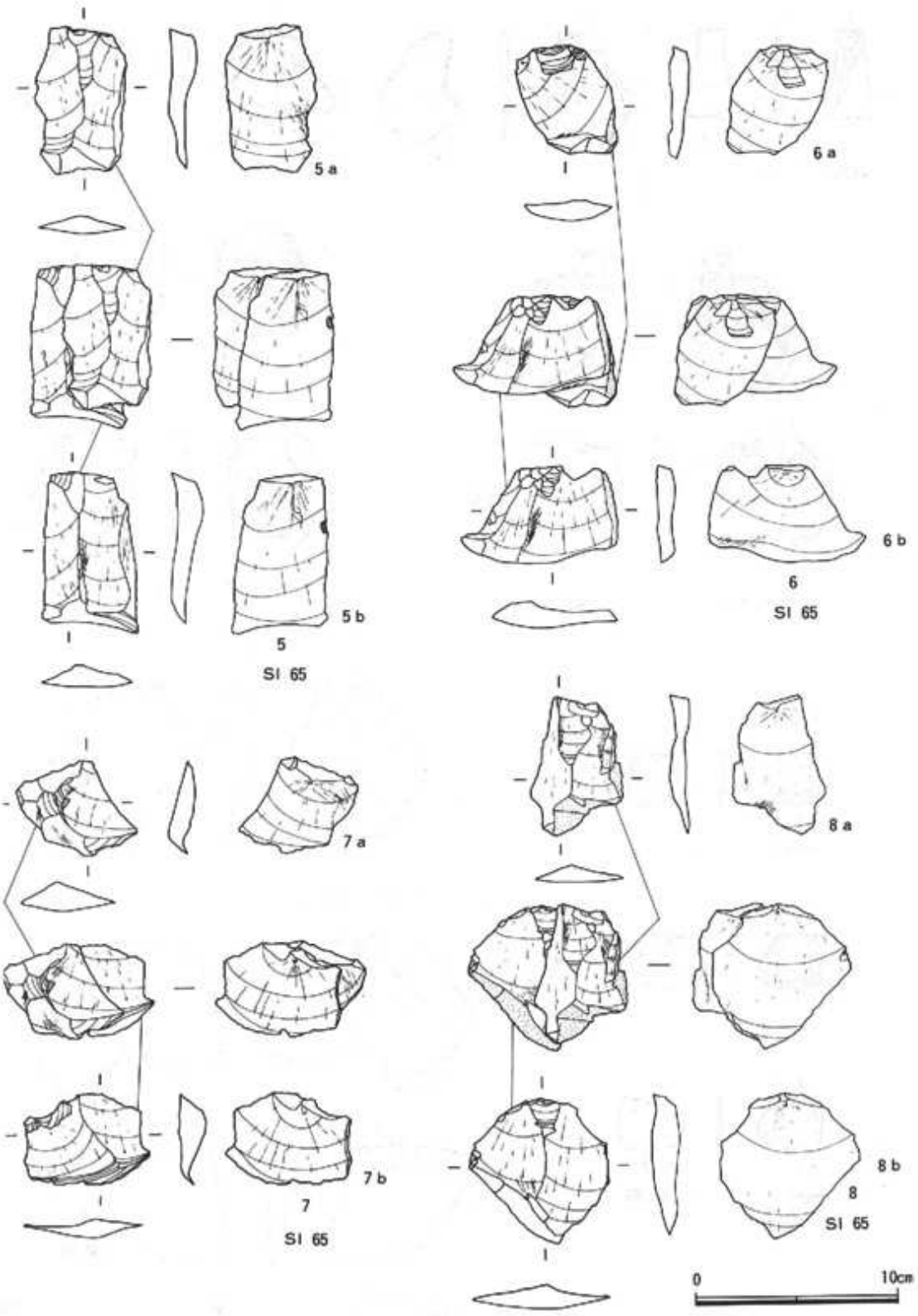
第417図　遺構外出土石器実測図(7)



第418図　遺構外出土石器実測図(8)



第419図　第58・65号竪穴住居跡フレーク接合資料(1)



第420図　第65号竪穴住居跡フレーク接合資料(2)

6） 土製品・石製品

土製品

本遺跡より多量の土製品が出土している。出土地点の内訳は，住居跡45点，土壙１点，各グリッド35点の計81点である。出土地域は調査区A_1区の農道東側の住居跡の密集する地域から多く出土している。住居跡からの出土は多く，特に９号住居跡は17点と極めて多い。以下，各々について述べていく。出土地点および法量は第13表の通りである。

土　偶　（第421図１・２）（ＰＬ26－１・２）

１は，左腕と胴部下半を欠損するものである。頭部両端には紐を通すための孔があけられるほか，脇の下から肩まで貫通する孔がある。顔面は写実的につくり出している。胸部，背中ともＬＲ縄文施文後，沈線により文様を描き出す。胸部はこの後，乳房が貼り付けられる。

２は，胴部上半（胸部）のものでＬＲ縄文施文後，沈線によって文様を描き出す。

呼鐘状土製品　（第421図３）（ＰＬ26－３）

呼鐘状を呈するものである。柄の輪郭にそって刺突が施され，鐘部は８個の孔が巡らされている。

耳　飾　り　（第421図４～７）（ＰＬ26－４～７）

ダルマ状，または鉄アレー状の形態を呈す。両端の平坦面または凸面に環状にまたは不規側に刺突を加え文様を描き出すもので，７の様に隆帯が貼り付けられるものもある。

斧状土製品　（第421図８・９）（ＰＬ26－８・９）

棒状の表裏面にＲＬ縄文・Ｌ縄文を施すもので，側縁は磨り消しされている。９は孔が穿たれる。

三角形土製品　（第421図10・11）（ＰＬ26－10・11）

10は石鏃の平基有茎式の形態に酷似する。表には２条の沈線によって矢印状に文様が描かれる。11は両面，側面とも磨かれ各角に孔があけられる。

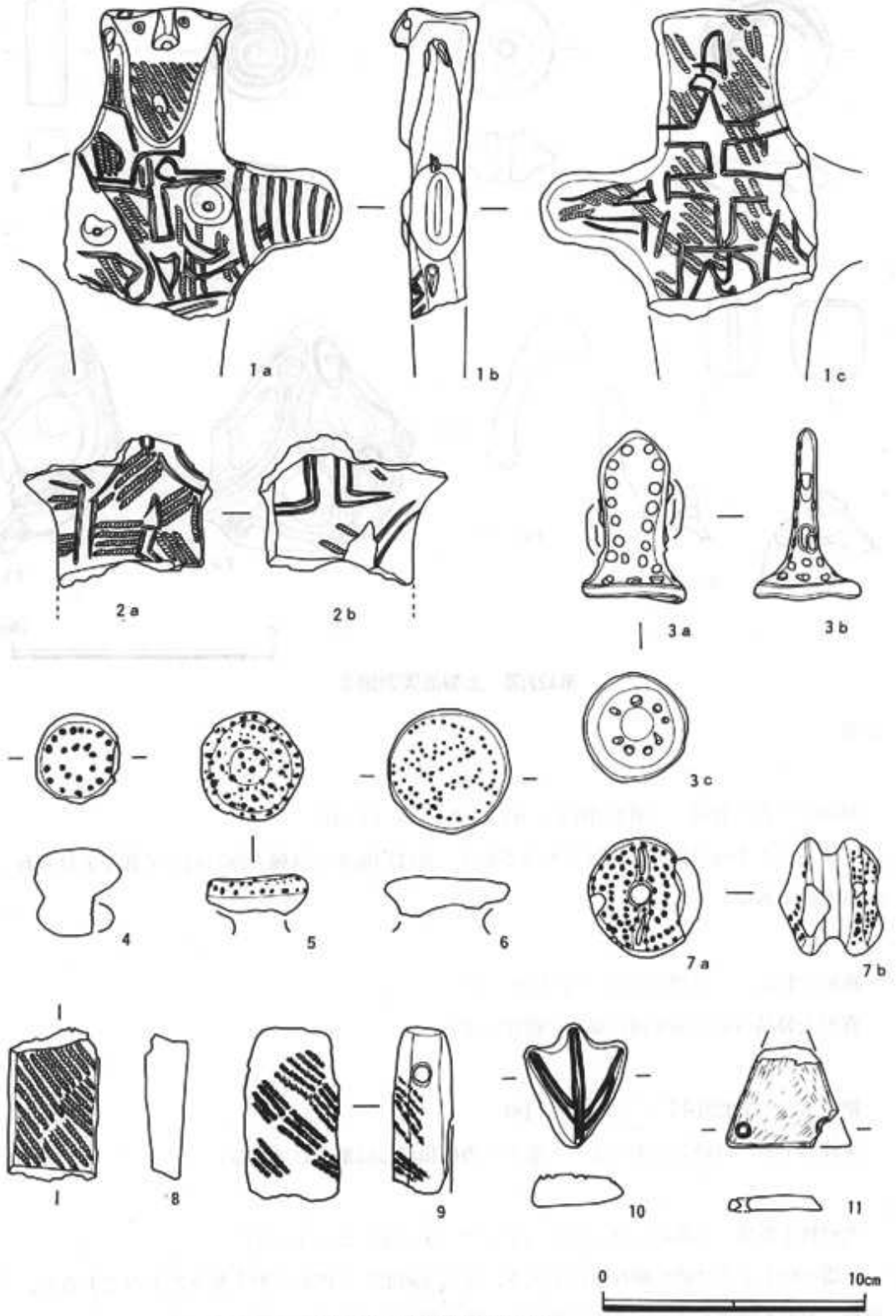
環状・円形土製品　（第422図１～３）（ＰＬ26－12～14）

１は環状を呈すもので，上面には２重に巡らされた沈線の内外部に刺突が施されるものである。２はソロバン状を呈すもので中央に孔が通る。３は円形を呈し上面に渦巻状の沈線が施さ

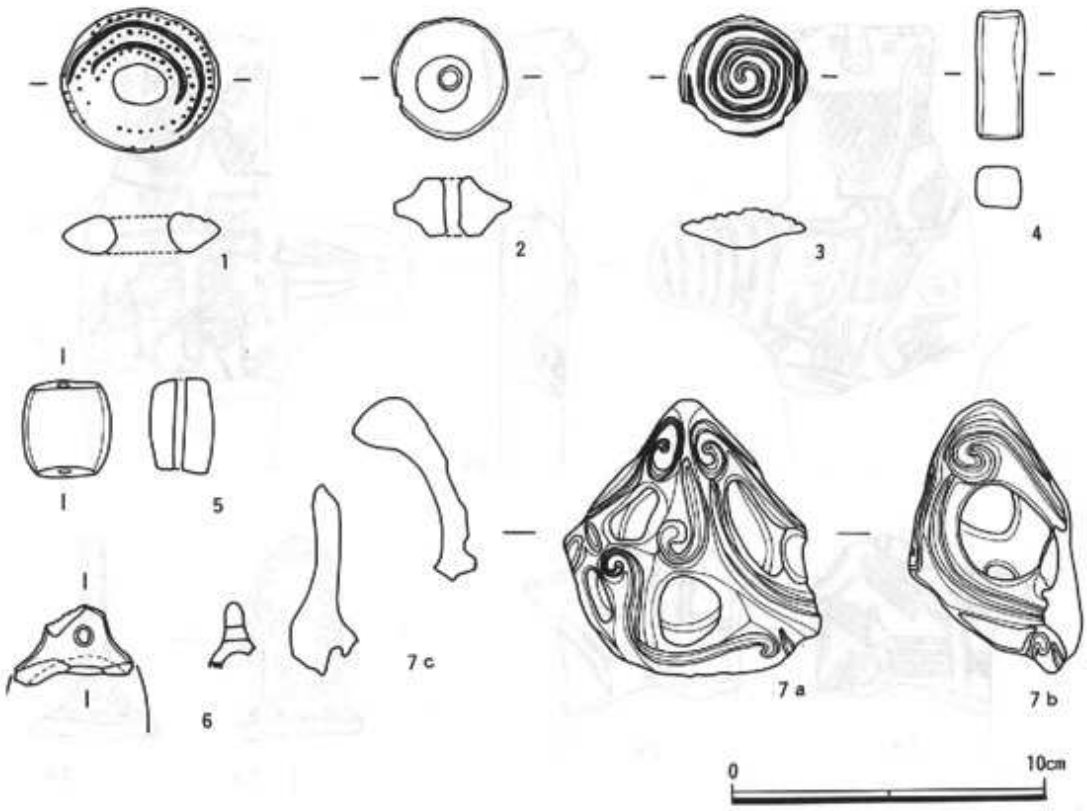
図No.	PL No.	名称	出土地点	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
421図-1	PL25-1	土偶	B－36	11.9	10.5	2.4	欠損品
2	2	土偶	87住	5.8	7.2	2.9	〃
3	3	スタンプ状	9住	6.6	4.0	1.0	〃
4	4	〃	9住P113	3.5	3.2	3.4	
5	5	〃	9住P415	3.9	4.0	1.3	欠損品
6	6	〃	101住	4.7	4.8	1.5	〃
7	7	〃	C－19	4.5	4.3	4.0	〃
8	8	棒状土製品	42住P355	5.9	3.4	1.6	〃
9	9	〃	ZA－23	6.7	3.7	2.2	〃
10	10	ペンダント	58住P161	4.8	4.0	1.3	完形品
11	11	〃	85住	3.9	4.3	0.5	欠損品
422図-1	12	〃	41住	5.0	4.6	1.2	完形品
2	13	〃	71住P70	3.7	3.9	1.9	〃
3	14	〃	C－9	3.9	4.0	1.3	〃
4	15	棒状土製品	ZB－22	4.1	1.5	1.3	〃
5	16	有孔土製品	71住P70	3.2	2.8	2.0	〃
6	17	錘形土製品	78住	2.5	3.7	－	欠損品
7	18	把手	42住P408	－	－	－	転用品
423図-1	PL27-1	円盤状土製品	9住P684	4.3	4.6	0.8	完形品
2	2	〃	9住一括	4.3	4.7	0.8	〃
3	3	〃	9住P676	4.4	4.6	1.2	〃
4	4	〃	9住P111	4.7	4.4	0.8	〃
5	5	〃	9住P679	4.1	4.0	0.7	〃
6	6	〃	9住P109	5.0	5.5	1.2	〃
7	7	〃	9住一括	4.8	4.4	0.8	〃
8	8	〃	9住P783	5.2	5.5	0.9	有孔
9	9	〃	9住一括	4.0	3.9	0.9	完形品
10	10	〃	〃	4.2	4.6	0.6	〃
11	11	〃	〃	3.4	3.6	0.7	〃
12	12	〃	〃	3.9	3.9	0.7	〃
13	13	〃	〃	3.6	3.5	0.8	〃
14	14	〃	〃	3.8	3.3	0.6	〃
15	15	〃	10住一括	2.8	2.6	0.7	〃
16	16	〃	14住一括	3.6	3.6	0.7	〃
17	17	〃	28住一括	3.1	2.7	0.8	〃
18	18	〃	27住一括	6.0	5.0	1.0	〃
19	19	〃	34住一括	4.6	4.2	1.2	〃
20	20	〃	42住一括	3.6	4.0	1.1	三角形を呈す
21	21	〃	〃	4.0	3.8	1.0	
22	22	〃	45住一括	4.5	4.5	1.0	来付着
23	23	〃	58住一括	3.7	3.5	1.0	

図No.	PL No.	名称	出土地点	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備考
図-24	24	円盤状土製品	65住一括	4.7	4.4	1.0	完形品
25	25	〃	68住一括	2.8	2.8	0.8	〃
424図-1	26	〃	84住一括	4.5	4.0	0.9	〃
2	27	〃	86住一括	5.0	4.7	1.2	底部使用
3	28	〃	100A住	5.7	5.5	1.1	完形品
4	29	〃	100B住	3.5	3.2	1.0	〃
5	30	〃	101住	3.8	3.5	0.6	来付着
6	PL28-1	〃	108住一括	4.5	4.5	0.8	完形品
7	2	〃	〃	5.3	5.0	1.3	〃
8	3	〃	109住一括	3.3	3.0	0.8	来付着
9	4	〃	44土壙	5.0	4.3	1.1	〃
10	5	〃	一溝	3.8	3.6	0.7	方形を呈す
11	6	〃	〃	4.7	4.5	0.9	完形品
12	7	〃	A－26	5.4	5.0	1.3	〃
13	8	〃	A－18	4.3	3.5	0.6	〃
14	9	〃	〃	4.6	4.1	0.7	〃
15	10	円盤状土製品	A－25	3.5	3.5	1.3	底部使用
16	11	〃	A－25	6.5	6.3	1.2	〃
17	12	〃	A－19	5.3	5.1	1.0	〃
18	13	〃	A－18	3.7	3.2	0.7	〃
19	14	〃	B－26	3.2	3.2	0.7	〃
20	15	〃	B－25	4.0	3.8	0.9	〃
21	16	〃	B－22	3.7	3.5	1.0	〃
22	17	〃	〃	4.3	3.9	1.0	底部使用
23	18	〃	C－24	3.8	3.5	0.9	完形品
24	19	〃	C－23	4.4	3.8	1.0	〃
25	20	〃	C－24	3.8	3.5	0.8	〃
425図-1	21	〃	E－17	5.0	4.6	1.0	〃
2	22	〃	G－13	4.0	4.0	1.0	〃
3	23	〃	H－19	4.1	4.0	0.9	〃
4	24	〃	H－18	5.0	5.0	1.3	〃
5	25	円盤状土製品	H－12	3.7	3.3	0.8	〃
6	26	〃	ZA－23	3.9	3.6	1.1	〃
7	27	〃	H－11	3.6	3.4	0.8	〃
8	28	〃	ZB－15	3.7	3.5	1.0	〃
9	29	〃	ZB－21	4.2	4.0	1.0	〃
10	30	〃	ZB－21	4.5	4.1	1.0	〃
11	31	〃	ZF－18	5.6	－	0.9	欠損品
12	32	〃	表採	3.2	3.1	0.7	完形品
13	33	〃	C－20	3.6	2.9	0.8	〃

第13表　土製品計測一覧表



第421図　土製品実測図(1)



第422図　土製品実測図(2)

れる。

棒状・有孔土製品　(第422図4・5)　(PL26−15・16)

4は長さ4.1cmの長方形を呈するものである。5は円筒形で長軸方向に向けて孔があけられているものである。

鐸形土製品　(第422図6)　(PL26−17)

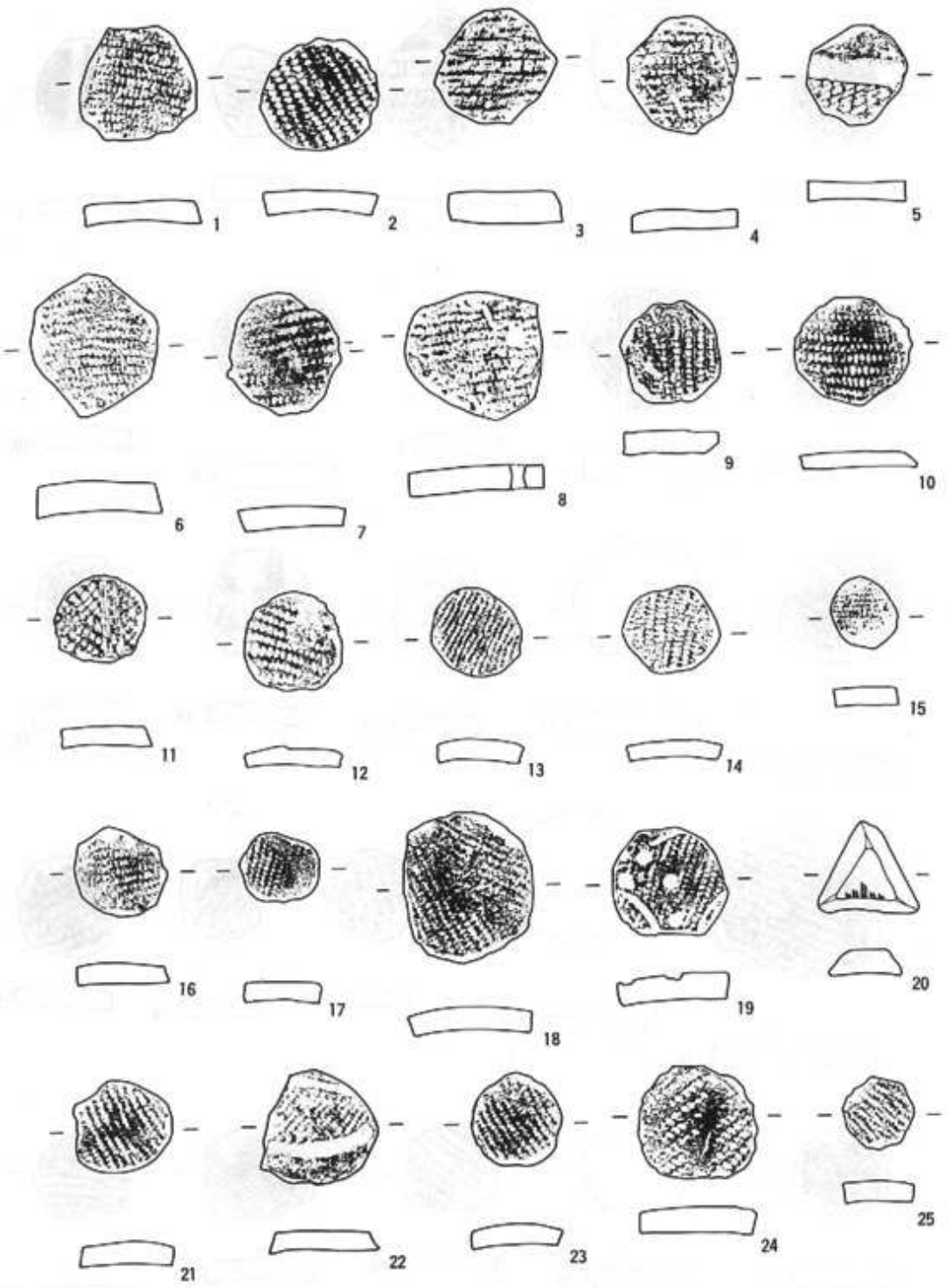
鐸形土製品の糸を通す紐の部分の破片である。

把　手　(第422図7)　(PL26−18)

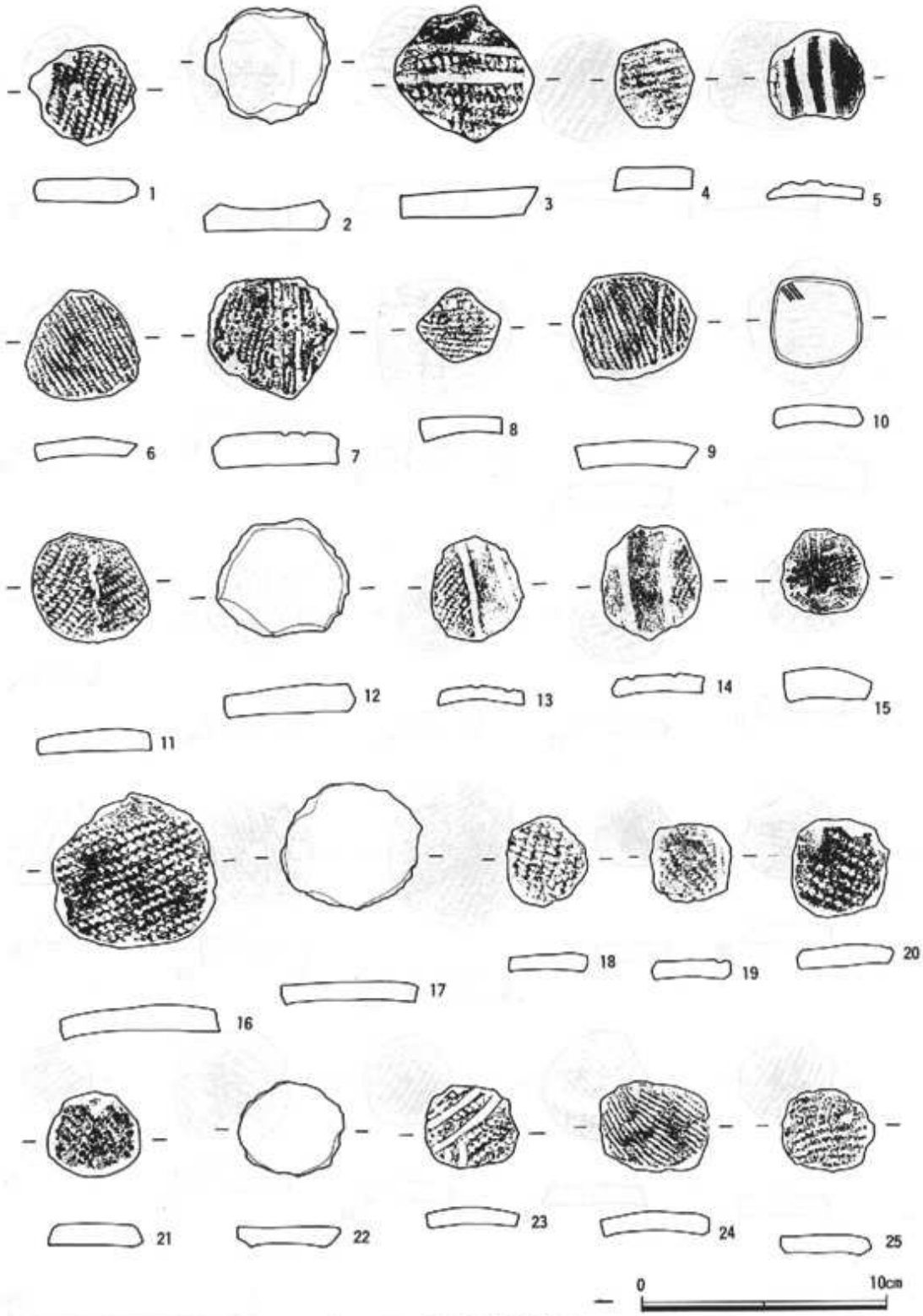
深鉢形土器の口縁部把手である。器からの破損部は研磨されている。

円盤状土製品　(第423〜425図)　(PL27−1〜30，28−1〜33)

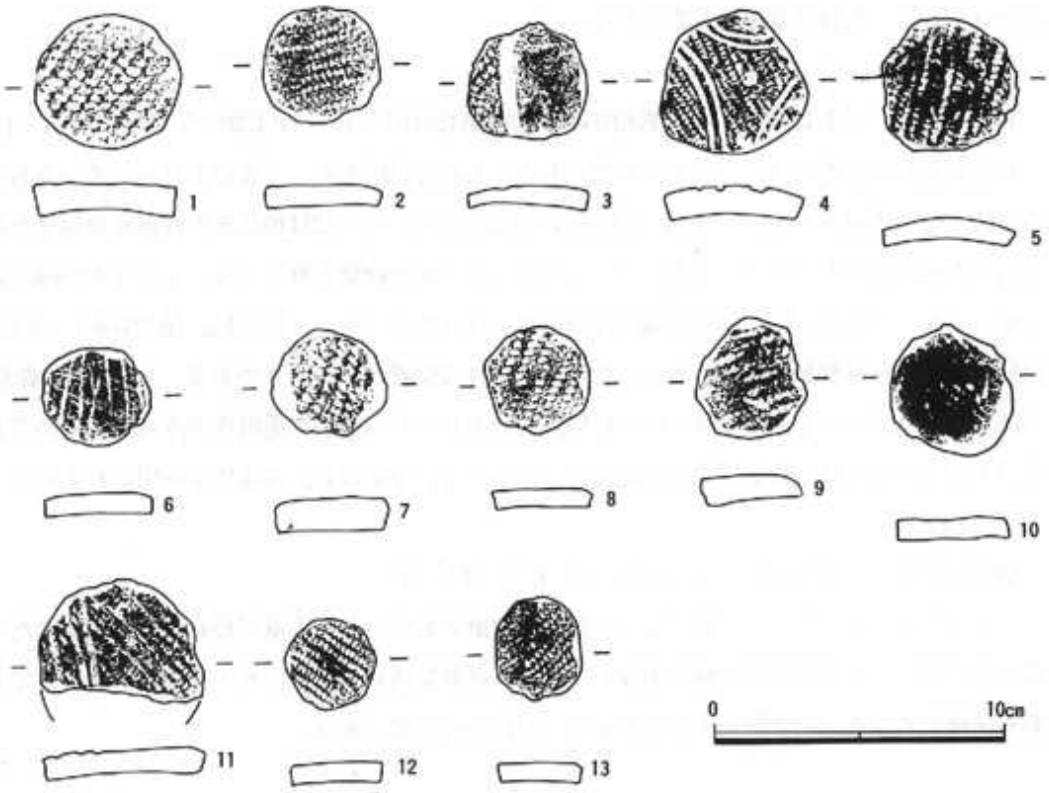
土器の胴部または底部破片を打ち欠き，または研磨して円形に形を整えたものであるが，三角形，方形を呈するものもある。そのほか，朱の塗られるものが3例存在する。



第423図　土製品実測図(3)



第424図　土製品実測図(4)



第425図　土製品実測図（5）

石製品

本遺跡においては多量の石製品が出土しており52点にもおよぶ。これらの出土する地点，地域は調査区A_1区で，特に住居跡の密集する地域から多い。以下各々のものについて述べて行く。出土地点および法量は第14表の通りである。

岩　板　（第426図1・2）（PL29－1・2）

1は，楕円形を呈すもので，両面に変形渦巻文を主体に描くものである。2は，細破片であり，その全容はつかめなかった。1・2とも石材は軽石である。

滑車状耳飾り　（第426図3）（PL29－3）

リング状を呈すもので（半分欠損している）径は2.4㎝，厚さ0.8㎝を測る。表裏および側面に溝を巡らせたものである。石材は軽石である。

男根状石製品　（第426図4）（PL29－4）

棒状の自然石を用い，写実的につくり出している。側面に溝をもち両端には斜め方向への孔

があけられる。石材は凝灰質泥岩である。

有孔石製品　(第426図5～19，第427図1～17，第428図1～4)　(PL29－5～25，30－1～11)

有孔石製品としたのは，ペンダント状のもの，または目的をもって孔のあけられているものの総称として使用したがいくつかに分類することができる。5～12は棒状または縦長の扁平な自然石の両端に孔をもつものである。5～7はすべての面が研磨されている。7は片方の端に溝を巡らすものである。11・12も両端に孔のあけられるものである。13～19，第427図1～8は，円形，楕円形，不整形のものである。孔のあけられる位置はさまざまである。6は硬玉(翡翠)大珠と思われるものである。9～12は形態，孔のあけられる位置に規則性のみられるものである。13·14は未完形品である。石材は凝灰岩，チャート，硬質頁岩，流紋岩が使用されている。

磨製石製品　(第428図5～7・12)　(PL30－12～14)

5はゴルフクラブのヘッド状を呈し，側面は研磨されている。青竜刃形石器の未完形または破損品と考えられるが推定の域を出ない。石材は砂質凝灰岩である。6・7は棒状のもので全面を研磨している。12は剣刃の形態を示す。石材は凝灰岩である。

石　剣　(第428図8)　(PL30－15)

全長25cmを測り，装飾など全く施されないものである。石材は粘板岩で，火熱を受けており非常にもろい。

碗状石製品　(第428図9～11)　(PL30－16～18)

9～11は碗状を示す。9・11は凹内を磨いた形跡を示し11にはスス，またはアスファルトが付着している。石材は凝灰質泥岩である。

石　棒　(第418図7)　(PL25－13～16)

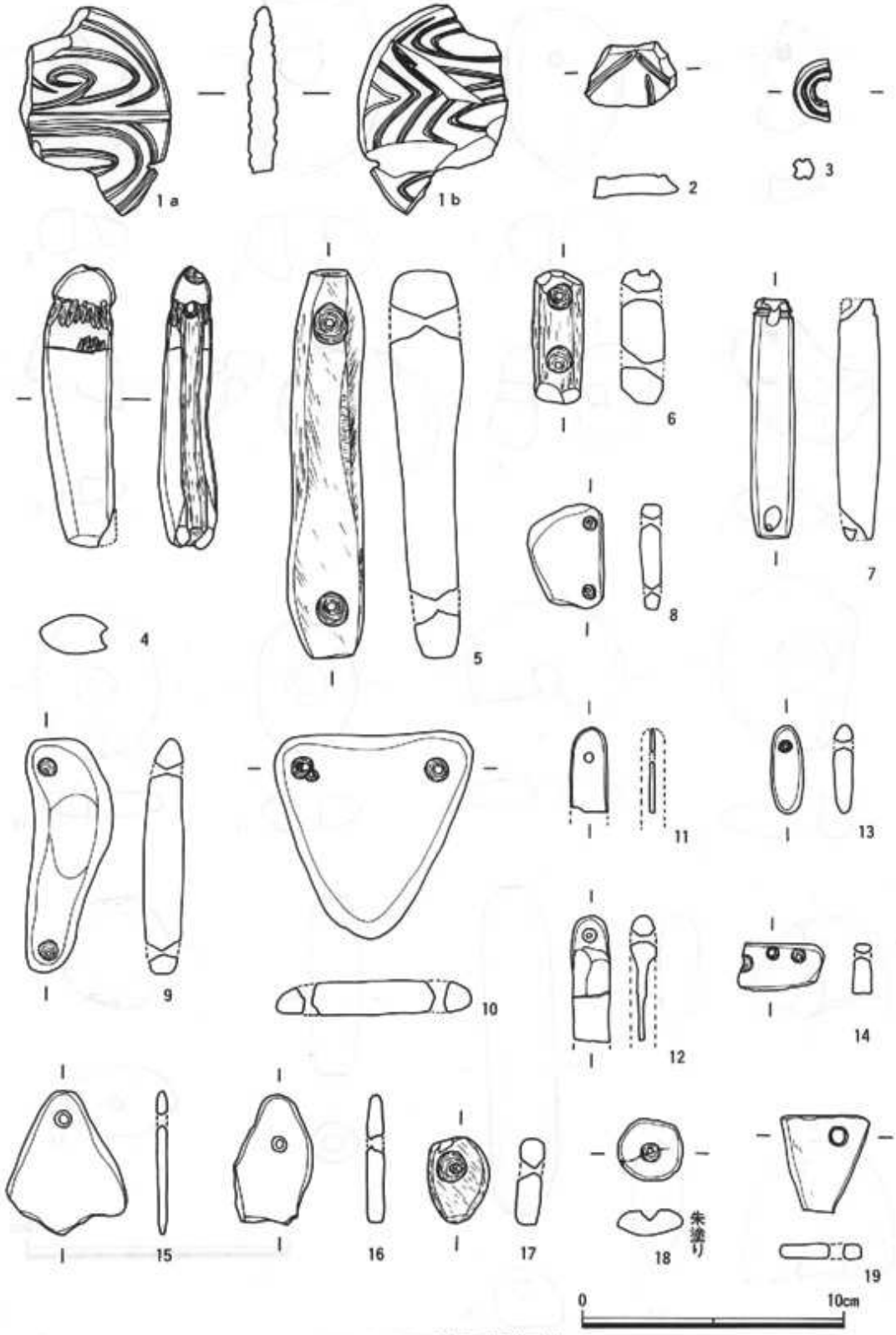
13点出土した。出土地点の内訳は住居跡8点，土壙3点，各グリッド2点である。次の様に分類された。

Ⅰ類 ― 有頭石棒である。3点出土した。

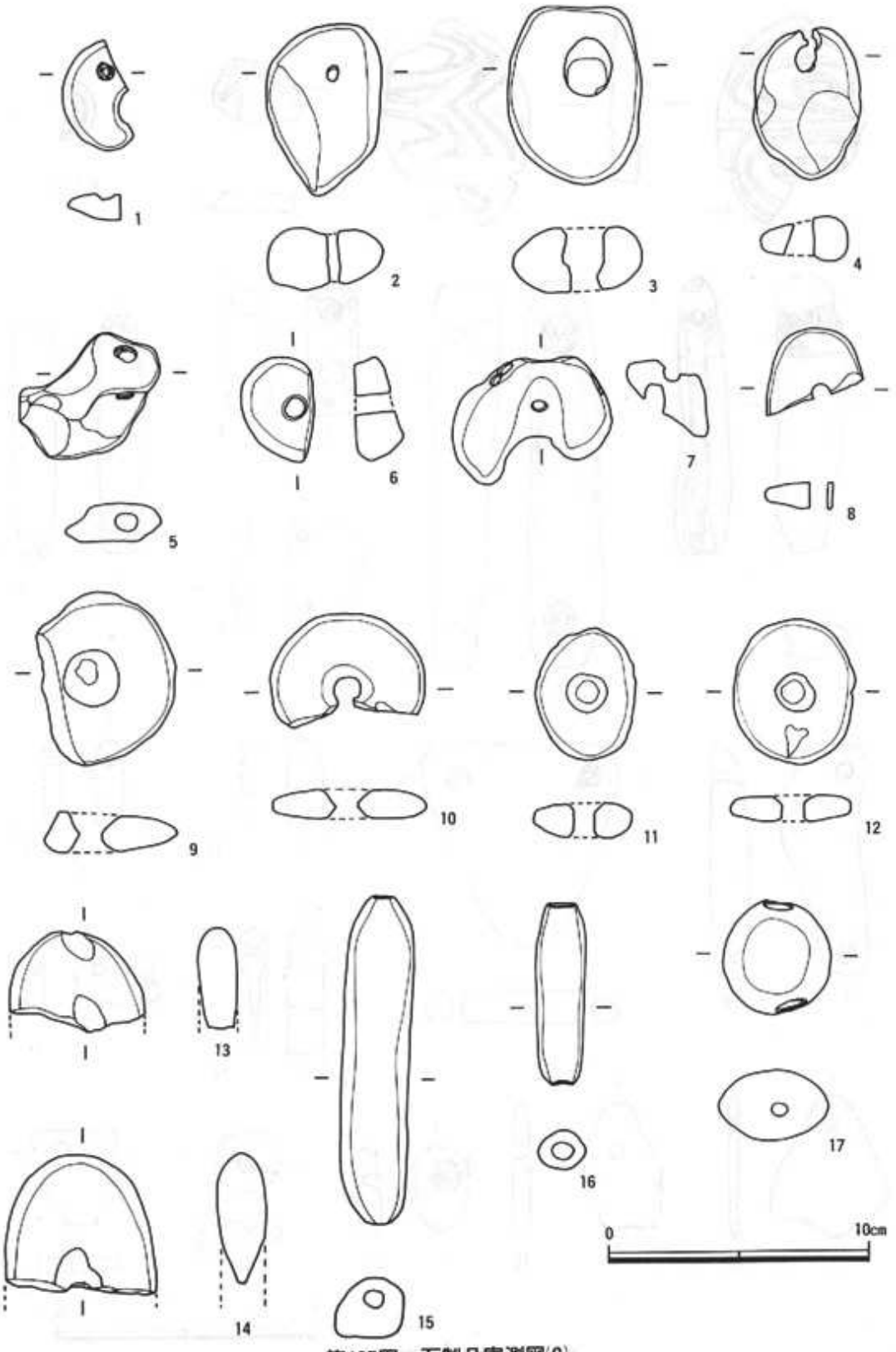
Ⅱ類 ― 無頭石棒である。10点出土した。これらは更に細分された。

Ⅱa　棒状を呈するもので7点出土した。77号住居跡出土のものはこの類に属するもので住居跡北端において直立した形で確認した。

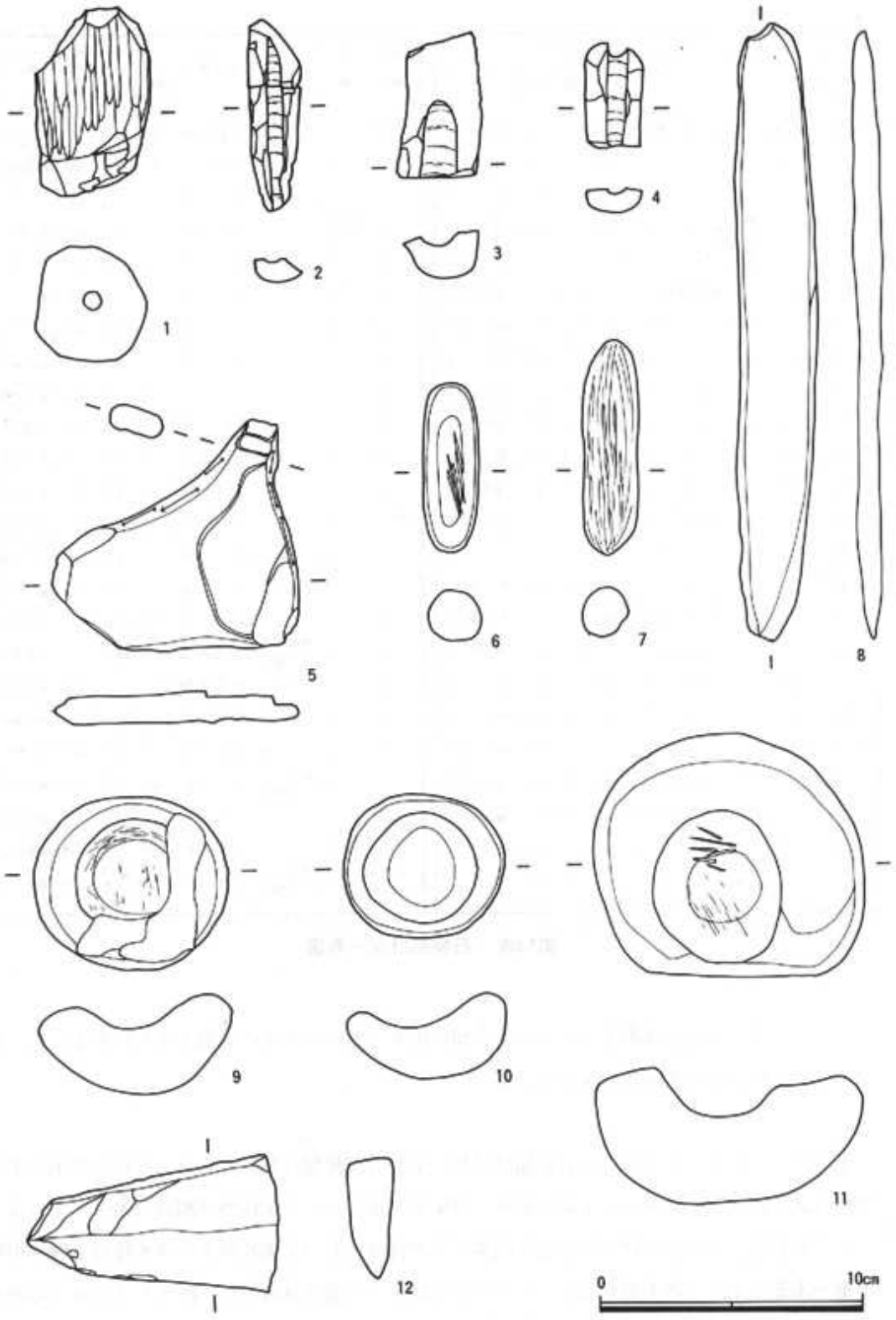
Ⅱb　棒状を呈するもので3点出土した。頭部面に2～3条の隆帯がみられるものであ



第426図　石製品実測図(1)



第427図　石製品実測図(2)



第428図　石製品実測図(3)

図No.	PLNo.	名称	出土地点	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
426図−1	PL29−1	岩偶	6号配石	8.0	5.7	1.1	軽石
2	2	〃	C − 23	2.4	3.4	0.8	軽石
3	3	目飾り	D − 8	2.3	−	0.7	軽石
4	4	男根状石製品	A − 22	10.8	2.6	2.1	凝灰質泥岩
5	5	有孔石製品	62住	14.9	3.0	2.7	凝灰質泥岩
6	6	〃	14住S−52	5.1	1.9	1.2	凝灰質泥岩
7	7	〃	43住S19	9.2	1.7	1.6	凝灰質泥岩
8	8	〃	32住	4.0	2.9	0.7	泥岩
9	9	〃	11住S11	9.1	3.3	1.5	凝灰質泥岩
10	10	〃	E − 27	7.8	7.6	1.7	凝灰質泥岩
11	11	〃	34住S5	3.2	1.4	0.2	硬質頁岩
12	12	〃	34住S4	4.9	1.5	1.0	硬質頁岩
13	13	〃	100住	3.4	1.3	0.7	凝灰質泥岩
14	14	〃	D − 24	3.2	1.9	0.7	軽石
15	15	〃	86住	5.5	4.6	0.4	粘板岩
16	16	〃	1住S101	5.0	3.0	0.7	粘板岩
17	17	〃	71住S34	3.3	2.3	1.0	凝灰質泥岩
18	18	〃	100住	2.4	2.4	1.0	泥岩
19	19	〃	86住	3.7	3.4	0.6	軽石
427図−1	20	〃	9住	4.3	2.6	1.0	凝灰質泥岩
2	21	〃	25住S5	6.5	4.4	2.4	凝灰質泥岩
3	−	〃	42住S54	6.8	5.2	2.5	凝灰岩
4	22	〃	12住S38	5.8	4.2	1.8	軽石
5	−	〃	13住S36	4.8	5.4	1.5	頁岩

図No.	PLNo.	名称	出土地点	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	石質
427図−6	23	有孔石製品	42住S96	4.1	2.8	1.8	碧玉(チャート)
7	24	〃	58住S−2	4.9	6.2	3.0	凝灰質泥岩
8	25	〃	70住	3.4	3.7	1.0	?
9	PL30−1	〃	77住S4	6.7	4.5	1.6	凝灰岩
10	2	〃	D − 7	4.5	6.0	1.2	凝灰岩
11	3	〃	E − 33	5.1	3.7	1.4	凝灰岩
12	4	〃	ZA−26	5.6	4.6	1.0	凝灰岩
13	5	〃	表採	3.9	5.2	1.5	凝灰質泥岩
14	6	〃	〃	5.4	5.8	1.9	凝灰質泥岩
15	7	〃	108住	12.7	2.6	2.3	凝灰質泥岩
16	8	〃	19住S13	7.0	1.8	1.5	凝灰質泥岩
17	−	〃	169住	4.3	4.1	2.7	凝灰質泥岩
428図−1	9	〃	H − 23	7.2	4.4	4.4	凝灰質泥岩
2	10	〃	115住	7.3	2.0	0.9	凝灰質泥岩
3	11	〃	11住	5.5	3.2	1.7	凝灰質泥岩
4	−	〃	42住	4.1	2.2	0.9	凝灰質泥岩
5	12	磨製石製品	40住S29	8.8	9.4	1.3	砂質凝灰岩
6	13	〃	29住S39	6.5	2.2	2.0	凝灰質泥岩
7	14	〃	6住炉S18	8.3	2.2	2.0	凝灰質泥岩
8	15	石剣	34住S1024	23.0	2.9	1.1	粘板岩
9	16	硯状石製品	9住S45	5.5	6.1	3.0	凝灰質泥岩
10	18	〃	40住S14	7.3	6.7	3.5	凝灰質泥岩
11	17	〃	38住S14	9.4	10.3	5.2	凝灰質泥岩
12	19	磨製石製品	52住S5	5.3	9.6	1.8	凝灰岩

第14表　石製品計測一覧表

る。6号土壙出土の2点はこの類に属するもので多量の土器とともに出土した。石材は石英安山岩，流紋岩である。

本遺跡から出土した土製品・石製品は総数で129点17種類にもおよんだ。これらの出土する地域は調査区A_4区の住居跡・土壙が重複し密集する地域からで全体の9割ほど出土している。これらを製作し使用した時期は，縄文晩期所産の特徴をもつ第426図1～3を除いて縄文中期中葉～末葉にかけての土器を出土している住居跡および遺物包含層から出土していることからほぼ同時期のものであろう。

土製品は10種類にわたり81点出土しており円盤状土製品，ペンダント類が多くを占める。土偶は板状土偶（十字形土偶）と呼ばれているもので円筒上層式またはその直後に伴うものと酷似している。縄文と沈線文によって文様が描かれる。円盤状土製品は土製品のなかでも63点とその量は多いが，整理作業中に見落したものもあり実際にはもっと多くなるものと考えられる。これは土器の胴部または底部の破片を円形・方形・三角形に打ち欠きまたは研磨させつくり出したものである。打ち欠き整形によるものが圧倒的に多い。数例であるが朱塗土器の転用のものもある。出土地点を概観すると９号住居跡が14点と多い。しかし住居跡出土のものはそのほとんどが埋土中からのもので特定の住居跡，土壙などに片寄り，保管されているような状態のものはなかった。使用された土器片は縄文中期中葉～末葉にかけてのものである。

石製品は７種類にわたり48点出土した。出土地域は土製品と同様の範囲を示す。特徴的なものは，有孔石製品が36点ともっとも多く，形態も多様である。この中で注目されたのは石材の硬度，その目的によって穿孔技術に違いがみられることである。すなわち凝灰質泥岩，軽石などのように石材の柔かいものに対しては，石錐や枝などによる穿孔と，チャート（翡翠），頁岩などの硬い石材の穿孔においては開孔部と終孔部の径に殆ど差のないことから管錐・骨錐を使用し，穿孔しているものがみられた。その使用例としては第427図６・８がある。またこれらに使用される石材（石器に使用される石材も含んで）は多種多様で，翡翠，蛇紋岩，黒曜石は鹿角地方において産出しないものである。特に翡翠大珠は小坂町のはりま館遺跡からも出土しており流入経路を解明することが今後の課題であろう。

本遺跡においては以上の様に多量の土製品・石製品が出土しバラエティーに富んでいる。これは縄文中期において土器形態の多様化やこれに伴う装飾からくるものと考えられ生活内容の豊さを想像させるものである。（藤井　安正）

２．歴史時代

今回の調査で確認された歴史時代の遺構の数は極めて少なく，竪穴住居跡３棟，溝状遺構２条の計５遺構である。これらに伴う遺物は土師器，須恵器で出土量は極めて少量である。

以下，竪穴住居跡と出土遺物について分析し，考察していきたい。

１）　竪穴住居跡

本遺跡で確認された住居跡は前述の通り３棟である。これらの類似点，相違点を列記すると次の通りである。

類似点

㋐　平面形が方形を呈する。

㋑　住居跡南壁の中央やや西寄りにカマドが構築される。

㋒　㋐，㋑と深く係るもので，主軸方向が磁北またはこれに近い角度を指す。

相違点

㋓　壁溝の存在するものと，存在しないものがある。

㋔　柱穴の配置においては，ⓐ柱穴の確認されないもの，ⓑ各隅に存在するもの，ⓒ各隅に存在する柱穴間にもう一個の柱穴をもつものなどがある。

以上，住居跡の類似点，相違点を列記したが，特にここで注目されることは類似点の㋑「カマドの構築される位置」であろう。

本遺跡の３棟の住居跡を初めとして，鹿角市においては東北縦貫自動車道建築に伴う発掘調査や，市で行った発掘調査などで，歴史時代所産のカマドをもった住居跡が百数十棟確認，調査，報告されている。これらの住居跡は１例を除き，鹿角盆地の東側に奥羽山脈よりゆるやかに延びた舌状台地上に存在しており，そのうちの約７割の住居跡では南壁またはみかけの南壁（南東壁）にカマドが構築されている。ではなぜ鹿角市で確認された約７割の住居跡のカマドの構築される位置が南壁なのであろうか，その要因としては，盆地の東側という地形的なもの，これに伴う風向きなどの自然環境的なもののほか，桜田氏のいう「風向，広場との位置関係よりも南側壁に付設させている強い規制」[注2]が考えられる。

この「強い規制」を考えるうえで，さらに注目すべき点がある。青森・秋田・岩手の３県に存在する歴史時代の住居跡のカマドの位置を概観していくと，青森県では津軽地方に，秋田県では米代川流域を中心として，日本海沿いの秋田平野を含むやや広い範囲に，岩手県では奥羽山脈北部の二戸郡安代町付近の，いわゆる津軽地方と米代川流域の広い範囲に存在する住居跡のカマドの位置は，南壁，みかけの南壁（南東壁）に多く構築されているという特徴を示している。この地域は桜田氏の提唱する「底部に砂粒を付着させる甕形土師器の分布範囲」[注3]とほぼ同一の広がりを示しているものである。さらにその論文のなかで砂底の甕形土師器の発生を「南からの影響を受けて，変容をおこしながらも自己の地域内で独自のタイプの土器を発生させた」としており，このことからもカマドを南側に構築させる「強い規制」を考えるうえで１つの糸口[注4]になるのではないだろうか。

注１　鹿角盆地西側台地に存在する神田遺跡が，十和田高校社会科同好会によって発掘調査が実施されている。住居跡の平面形は方形を呈し，壁長は330㎝を測る。カマドは東壁に構築されている。伴出遺物は土師器の坏・甕で，坏には墨書土器が存在する。時期は12世紀以降鎌倉時代初頭と報告されているが，土師器坏は平安時代後半の特徴を示すものである。

注2　東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅵ，一本杉遺跡のまとめにおいて「規制」について注目されている。

注3　昭和57年5月の日本考古学協会第48回総会において発表している。

注4　注3に同じ。

2）　土師器・須恵器

本遺跡で出土した歴史時代の遺物は，土師器，須恵器である。その量は本遺跡の中心遺物である縄文土器と比べ，極めて少ないが，復元・図化できたものが多く，これらを基に特徴を述べていく。

a　土師器　（第383図1～10・384図1～4）

品種は2種類で，坏，甕形土器である。

ア　坏　住居跡出土の6点，各グリッド出土の4点の計10点である。

（器　形）　底部からやや内湾ぎみに立ち上がるものと，直線的に立ち上がるものの2例が存在し，前者が多い。口径を1とした場合の底部，器高の比率は，およそ1：0.45：0.36である。

（成　形）　ロクロ水挽成形のもので，底面に回転糸切り痕[注5]を残す。

（調　整）　第417図9・10が，器内面に黒色処理と縦・横方向へのヘラミガキを施こす。他は二次調整はみられない。

イ　甕形土器　すべて住居跡からの出土である。なお以下に述べる特徴は口縁部資料を中心として観察したもので，底部資料は出土しなかった。

（器　形）　ロクロ使用の有無で違いがみられる。ロクロ使用のものは胴部に最大径をもち張るものと，口縁部に最大径をもつ砲弾型のものがある。ロクロ不使用のものは大型のもので，口縁部に最大径をもつ。

（形　態）　上記のように部分的な形態を知ることのできるものは口縁部のみである。

○ロクロ成形のもので，短頸である。口縁部は胴部より一度外反し，その後口縁部上半で直立するもの。

○口縁部は胴部よりやや強く外反するものと，直角に近い角度で外反するものがみられ，頸部がやや長い。ロクロ成形，不成形のいずれにもみられる。

（成　形）　ロクロ成形のものと，不成形のものがある。

（調　整）　ロクロ成形のものは二次調整はみられない。ロクロ不成形（粘土紐巻き上げ）のものは，口縁部内，外面に横方向のユビナデを，胴部外面には底部から口縁部方向

に向けてのヘラナデ，内面には横または斜位方向への刷毛目を施す。

b　須恵器　（第383図11・12，第384図５）

器種は，坏・壺形土器の２種で，グリッドより数点出土した。

ア　坏

（器　形）　土師器坏と比べ小型のもので，底部から内彎ぎみに立ち上がる。口径を１とした場合の底径：器高の比率は１：0.47：0.42である。

（成　形）　ロクロ水挽成形のもので，底面に回転糸切り痕を残す。

（調　整）　ロクロ切り離し後の調整はみられない。

イ　壺

（器　形）　破片で出土している。プロポーションから判断して壺形と考えられる。

（成　形）　粘土紐巻き上げのものと考えられる。多軸絡状帯のタタキ目を行った後，ロクロによる成形を施こしさらにその後，タタキ目を行う。

（調　整）　二度目に行われるタタキ目が調整の役目を成すものであろう。

以上，住居跡・出土遺物（土師器・須恵器）について，その特徴を概観してきた。これらのわずかな資料を用い，構築・廃棄時期および編年を考えていきたい。

住居跡については，埋土中に存在する降下火山灰（大湯浮石）が年代決定のカギ層になるであろう。まず第１号住居跡のように埋土中に浮石が層をなしているものと，第２・３号住居跡のように埋土に混入しているものがある。これらの状態を高市向館遺跡の報告書で述べた「大湯浮石層と遺構との関連について」[注６]の分類に当てはめると，第１号住居跡は分類２に，第２，３号住居跡は分類３に当てはまる。さらに第１号住居跡は浮石層下の埋土は一時的に埋められたものである。また第３号住居跡ではカマド袖部を作る粘質土に浮石粒が混入しており，これは浮石がカマド構築以前に降下していなければならない現象である。これらのことから第１号住居跡は大湯浮石降下直前に廃棄されたものと，第２・３号住居跡は降下以降に構築されたものと想定できる。なお大湯浮石の降下年代は約1100年前後と推測されている。

出土遺物は，土師器坏・甕・須恵器坏・壺が出土している。これらの編年を考えていくうえで，比較的資料の多い土師器坏を中心とした場合，ロクロ成形，無調整のものが主体をなしており，桜井氏の設定する「第Ⅱ型式」に，氏家氏の設定する「表杉ノ入式」に相当するものである。また土師器甕は，成形にロクロを使用しているものが存在し，土師器坏と共伴して出土するものと類似し，須恵器坏はロクロ成形，無調整で，底径が口径の半分以下であることから

両氏の設定する編年の範疇に入るものと考えられる。

以上のことから本遺跡は11世紀後葉から12世紀初頭にかけて営まれたものであろう。

注5　「ロクロ水挽成形」については，水挽成形と整形（調整）が考えられるが，両者のいずれか判断しかねるのでこれらの二つを総称して使用した。

注6　筆者は高市向館遺跡において，大湯浮石の堆積状態を次のように分類し，分類1 → 2 → 3という移行を考えた。

分類1　浮石層の混入，堆積のみられないもの。

2　覆土中に浮石粒が凸レンズ状に堆積し，層をなしているもの。

3　覆土堆積土中に浮石粒が混入するもの。

（藤井　安正）

第Ⅶ章　ま　と　め

秋田県の北東部に位置する鹿角市には，特別史跡大湯環状列石を始め400ケ所を越す縄文時代から中世・近世までの遺跡が所在し，県内でも屈指の遺跡の宝庫として知られている。

鹿角市花輪字陳場に所在する天戸森遺跡は，北上する米代川の右岸段丘から北西方向に突き出した舌状台地先端に位置する。本遺跡東方には奥羽山脈へと続く広大な森林が，台地北東下には湧水がある。縄文時代の自然環境は，現在とは若干の相違があると思われるが，米代川が蛇行し，本遺跡直下にまで近接していた可能性があり，山の幸，川の幸に恵まれた格好な環境にあったと考えられる。

今回の調査は学校建築に伴う事前発掘調査であり，9,160㎡を6カ月間を費やして調査した。調査期間，面積からも，本市における初めての大規模な発掘調査であった。

調査の結果，縄文時代の竪穴住居跡140軒，屋外炉7基，埋設土器遺構2基，配石遺構21基，土壙103基，歴史時代の竪穴住居跡3軒，溝2条を検出，縄文時代前期末葉から晩期までの縄文式土器，弥生式土器，土師器，須恵器等20kg入ダンボール箱181箱の土器，7箱の石器他，多数の土製品・石製品を出土した。

縄文時代の住居跡は中期中葉から末葉に位置づけられるものであり，同時期の集落跡としては，本県で最大の遺跡である。これらの住居跡は出土遺物が多く，出土遺物，新旧関係から，各期の住居跡の形態及びその変遷を把握できた。また各期の住居跡の分布を考察した結果，円筒上層e式期の集落構成上の基本単位が大型または中型住居1軒と小型住居2軒であり，A_1区西部，北東部，南東部の3カ所に偏在し，大木8b式期には小型住居2軒を基本単位とし，数単位を包括する住居跡群が3ブロックの中心より若干西側の位置に集中し，また3ブロックが，円筒上層e式期より若干中央寄りに移動し，集落の集中化が認められた。大木9式期には，集落の規模は最大となり，A_1区東側の小沢状低地を広場とする東側に開口部をもつ馬蹄形に分布する。1軒の大型住居，2軒の中型住居，6軒の小型住居が，集落構成上の基本単位と考えられた。大木10式期には集落の規模は縮小し，前時期より若干北側に移動，小沢に向かう緩斜面の最高部に弧状に分布する。本時期においては，3軒を1単位とする傾向がみられた。

配石遺構21基は中期後葉から末葉に位置づけられるもので，後期の大湯環状列石との関連が注目された。配石のタイプにはいろいろあるが，円形に石を集めるタイプ，環状に配するタイプは，環状列石の萌芽を意味するものと考えられる。配石遺構の機能については，それを裏付ける出土遺物がなく，配石下の下部遺構の有無及びリン分析からの推測によらざるを得なかった。これらの配石遺構は，北端の緩斜面，北側の微高地及びA_1区南部の3ケ所に偏在する。北端のものは，緩斜面に馬蹄状に分布，下部遺構を有するものが多く，リン分析の結果，比較

的高い数値を示したこと等より配石墓と考えられる。集落との位置関係からも，墓域とみられる。北側微高地に位置する配石は，円形に集石したタイプが多く，時期または機能で，北端のものと一連のものとは考えられない。住居跡との重複のためか，下部遺構を検出できなかった遺構も多く，また北端の墓域と集落跡の境界に位置すること等より，祭祀的な機能をも考えてみる必要がある。

土壙は103基を数える。比較的出土遺物が少ないが，住居跡との重複関係及びその配置より中期中葉から末葉と考えられる。本報告書では，上部施設（配石等）をもたないものを全て土壙としたが，北端の墓域内に位置するものは，その近傍にたくさんの自然石の散乱があったこと等からも，配石墓の可能性がある。また集落内に位置する土壙は，ほとんどフラスコ状ピットであり，住居跡の近傍に位置することから，住居跡と密接な関係を有する機能が考えられる。

出土土器の大部分は中期中葉から末葉に位置づけられるものであり，完形及び復元可能土器は250点以上に及ぶ。前期中葉以降，東北地方北部で栄えた円筒土器文化も，中期中葉には衰退する兆候を示し，後葉には大木式土器文化と密接な関係を有する土器文化へと転換する。本遺跡出土の土器は，この円筒土器文化終末期から次の土器文化の萌芽，発展段階に位置づけられるもので，この時期の土器編年を考える上での貴重な資料となった。青森県内においては，この新たな土器文化に対し，直接的には大木式土器の系統を踏みながらもその傍統と見なして大木系土器文化と称し，榎林Ⅰ，榎林Ⅱ，中の平Ⅱ，中の平Ⅲ式に分類，編年されている。

本遺跡においても，榎林Ⅰから中の平Ⅲ式に比定できる土器が出土しているが，他方，大木8ａから大木9式に比定できる土器も多量に出土している。磨消縄文による区画文の出自は大木系土器からの派生とは考えられず，大木式土器の影響と考えられる。大木式土器文化圏に隣接する本遺跡の地理的位置関係より，中期中葉から後葉まで継続して，或いは断続的に大木式土器の影響を受けたものと考えられる。

土製品，石製品としては，土偶，有孔土製品，有孔石製品，男根状石製品，石棒等祭祀に関連すると考えられる出土遺物が多い。第83・106号住居跡内の堤状施設，第106号住居跡内の埋設土器施設等と共に，中期中葉の信仰，精神文化を探る貴重な資料と言える。

以上が今回の調査の概要である。多数の遺構の検出と膨大な量の出土遺物のため，その整理に大半の時間を費やし，十分な考察ができなかった。周辺の遺跡を含めた総合的な分析が必要であり，今後の課題としたい。東北地方北部における中期の集落跡としては最大級の遺跡であり，本書が縄文中期集落論等の研究に役立てられれば幸いである。

（秋元　信夫）

付

1．カーボン測定

自然科学分野からの天戸森遺跡の解明の1つとして，カーボン測定を行なうこととし，資料の採取に努めたところ，21点の資料を得ることができた。このうち，比較的遺存が良く，量も多い次の4点の資料の測定を，日本アイソトープ協会に依頼し，別紙のような測定結果を得た。

採取資料一覧表

コード番号	資料	採取地点，層位	採取期日
KT－01	木炭	第94号竪穴住居跡内中央部床直上	昭和57年9月3日
KT－02	木炭	第103号竪穴住居跡石囲炉付近第5層	昭和57年9月2日
KT－03	木炭	第21号竪穴住居跡内床直上	昭和57年5月27日
KT－04	木炭	第62F号竪穴住居跡炉上面	昭和57年7月29日

測定結果報告書

社団法人　日本アイソトープ協会
東京都文京区本駒込二丁目28番45号
電話　東京　03（946）7111

昭和58年2月4日に受取りましたC－14試料4個の測定結果がでましたので，ご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代
N－4676	KT－01	4350±95 y B.P.（4220±90 y B.P.）
N－4677	KT－02	4260±70 y B.P.（4140±65 y B.P.）
N－4678	KT－03	4310±85 y B.P.（4180±80 y B.P.）
N－4679	KT－04	4330±75 y B.P.（4200±75 y B.P.）

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され，西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は，放射線計数の統計誤差と，計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので，^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を2倍に拡げますと，確率は約95％となります。なお^{14}C年代は必らずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

2．リン分析

A₁区北端部の配石遺構，土壙及びA₁区の遺構内埋設土器の覆土を採取，秋田県農業試験場に土壌のリン分析を依頼し，次のような結果を得た。

土壌分析結果

（単位：P_2O_5 mg／100g 乾土）

試料番号	採取地点・層位	全リン酸	0.03N·NH_4F—0.025N·HCl 可溶性リン
1	第10号配石遺構（土壙A）第3層	205.5	0.14
2	第10号配石遺構（土壙A）第5層	250.2	0.14
3	第10号配石遺構（土壙B）第6層上位	280.8	0.14
4	第10号配石遺構（土壙B）第7層下位	11.6	0.14
5	第12号配石遺構　底直	3.8	0.04
6	第115号土壙　底直	204.4	0.09
7	第116号土壙　第4層	62.4	0.09
8	第116号土壙　第5層	108.5	0.04
9	第87号住居跡・埋設土器内覆土下位	230.4	0.18
10	第91号住居跡 埋設土器（P－9）内覆土下位	680.3	0.32
11	第106号住居跡・埋設土器	34.3	0.54

分析方法

（i）全リン酸……過塩素酸分解法

（ii）0.03N·NH_4F—0.025N·HCl 可溶性リン……ブレイNo.1法

土壌試料を0.03N·NH_4Fと0.025N·HClの混合溶液を用いて，1分間浸出した後，モリブデン—アスコルビン酸にて発色させ，比色定量した。

3．植物遺体について

(1) 花粉化石（花粉分析結果）

ZA—26グリッド，Ⅲ層より出土の完形土器内の黒土の花粉分析の結果について報告する。

花粉はスポロポレニンという，たいへん化学的に安定で強靱な物質からなる外壁を身につけていて化石に残る。地層中の花粉化石を取り出して調べると，その地層の堆積当時にどのような植物が生育していたかがわかる。また，それを定量的に調べ，それらの植物の花粉の散布量や生産量をふまえて考えると，どのような地形，気候であったかなどの古環境も推定できる。

ただし，乾燥や長い間の酸化などには弱く，火山灰の腐植土としての黒土中にはほとんど残っておらず，古植生を復元するのは困難である。

今回の分析でも古植生復元に必要な木本花粉化石250個には及ばない，53個体だけ取り出すことができた。処理の方法は次のように行った。10%水酸化カリウム溶液で脱色（80℃，15分湯せん）→塩化亜鉛溶液（比重2.0）を用いての比重分離→傾斜法による砂の分離→氷酢酸で脱水→アセトリシス液で膨潤→氷酢酸→水洗い　を行い，最後に残渣をプレパラートにして検鏡した。

検鏡の結果，木本種では，ブナ属，コナラ亜属，オニグルミ属，ハンノキ属，マツ属，クリ属，トチノキ属，草本種では，イネ科，キク亜科，ヨモギ属の花粉が見つかった。ブナ－コナラを主とする落葉広葉樹花粉の優勢で特徴づけられ，針葉樹のマツ，スギの花粉がほとんど見られなかった。この地域の森林植生を特徴づけるスギの花粉が見つからなかったことから，スギ－ブナの形成には至っていないと思われる。土壌条件にそぐわない状態，長い年月での花粉の破壊もあり得るが，スギは年間降水量1500㎜以上の多雨地域に分布する事実から，気候の湿潤化にまだ至っていないと考えられる。このことは秋田県海岸平野で得られている知見（辻，日比野1975）にほぼ一致している。また，遺跡をのせる鳥越軽石流堆積物の下位に広がる泥炭層（ウルム氷期堆積物）に見られた，トウヒ属，ツガ属，モミ属，カバノキ属などの亜高山性の植物の花粉化石（成田1983）が全く見つからなかった。

以上の結果から，当時はブナ－コナラを主とした広葉樹林が形成され，クルミ，クリ，トチノキなどが混入していたと考えられる。縄文中期，北の林Ⅱ遺跡（縦貫道遺跡No.10）第22号土壌の花粉分析によれば，「クリ属，クリカシ属を優先とした広葉樹林」（鹿角市史）とあるがブナ，コナラ林の中に，クリ，クルミなどが混入していたと考えた方が妥当である。

(2) 大型植物遺体（種子同定結果）

草本の種子，果実が大半を占め，樹木の遺体は種類，量ともに乏しい。

(i) 草本の種子，果実

6地点で採取されている。

ア）第85号竪穴住居跡（炉内）　写真②

イ）第87号竪穴住居跡（焼土内）写真②③

ウ）第87号竪穴住居跡　写真①②③

エ）第14号土壙　写真②

オ）第38号土壙　写真②

カ）第65号住居跡　写真②

写真①……長径2㎜，短径1㎜の長楕円形で，灰褐色，やや光沢がある。花序の基本になる

小穂である。2枚の包えいがあり，イネ科，カヤツリグサ科の仲間である。

写真②……1㎜の円形で腹面はふくらんでいる。黒色で光沢がある。果皮が薄く，種皮と密着していて，種子のように見えるえい果である。イネ科。

写真③……1.2㎜の円形で腹面はふくらんでいる。暗褐色で表面には細かい突起がある。殻が2つに裂ける。ドウタイグサ科のエノキグサの種子に似ている。

3種とも，荒れ地，空き地，道端やそのまわりに生育するものである。黒土への混入の様子から，自然に落ちたものと思われる。イネ科は花粉化石の径の大きさや採取された植物遺体の様子から，耕作に関連したものではないかと考えられる。

(ii) 樹木の遺体

写真④……長径15㎜ぐらいの完全に炭火したクリの堅果（第22号竪穴住居跡，A－21グリッド出土）

栽培されているクリよりも小粒で，皮が取れていて厚肉質の子葉だけが残っている。他地域の遺跡で果皮の付いているクリも発見されていることから考えると，採取された堅果すべての果皮が取れているのは，食用方法，保存方法に何らかの工夫がされていることが伺える。

また，採取層位は不明だが，オニグルミの堅果も採取されていることや，コナラ亜属，トチノキ属の花粉も検出されていることから，明らかに，ドングリ，クリ，クルミ，トチなどの堅果類の実を食用にしていたと考えられる。（成田典彦）

参考文献

1）辻誠一郎，日比野紘一郎（1975）秋田県女潟における花粉分析的研究　第四紀研究14巻

2）成田典彦（1983）小坂町の泥炭堆積物の花粉分析　秋田自然史研究16

3）沼田真，吉沢長人編集　日本原色雑草図鑑

天戸森D区（陳場）遺跡発掘調査概要

1．調査実施地　秋田県鹿角市花輪字陳場

2．調 査 目 的　花輪第１中学校建設にともない，通学路の建設のため調査を実施し，今後の埋蔵文化財保護の基礎資料とする。

3．調 査 期 日　昭和58年12月10日～12月18日

4．調 査 面 積　165 ㎡

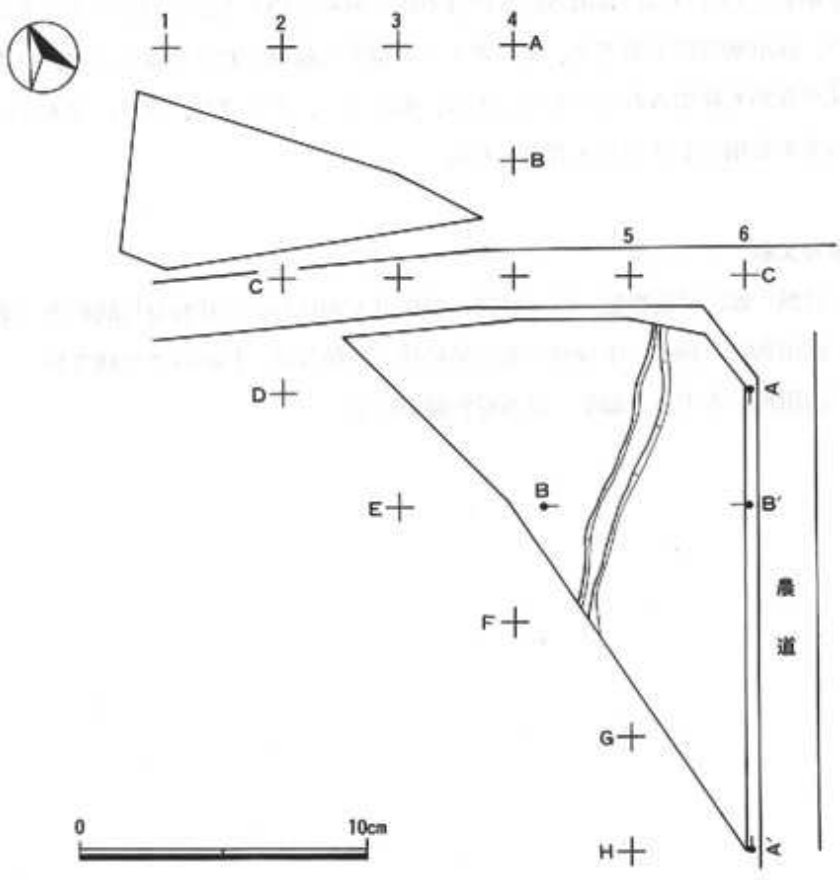
5．調査主体者　鹿角市教育委員会

6．調査担当者　秋元信夫　（鹿角市教育委員会，社会教育課）

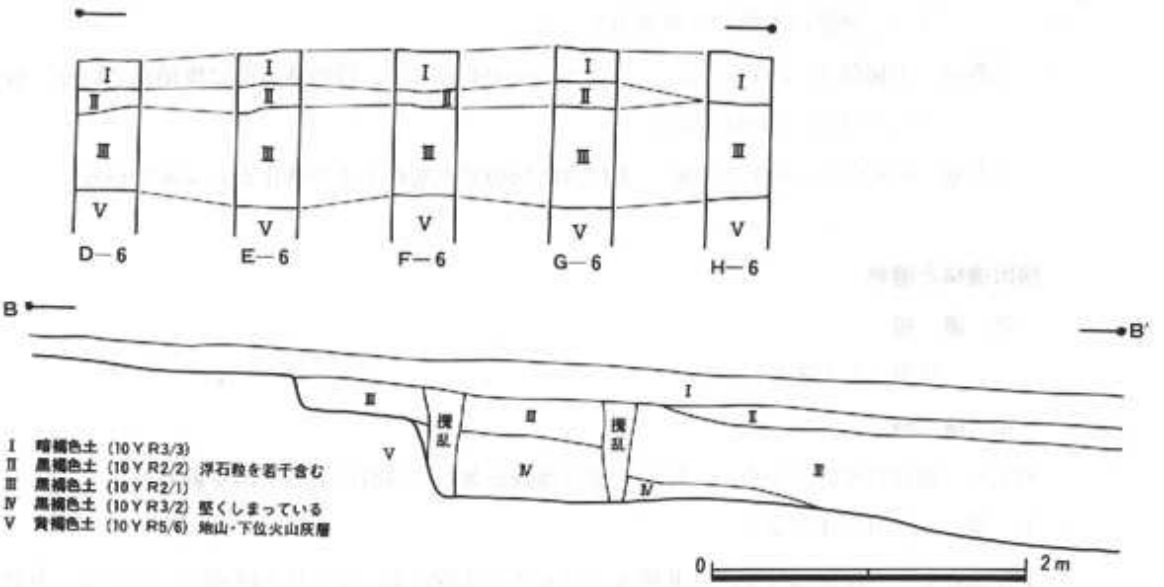
7．調査参加者　藤井安正，佐藤　樹，菊池　明，岩沢公則
三ケ田睦子，藤井富久子，ほか作業員10名

8．調 査 方 法　道路予定地区に，５×５ｍのグリッドを設定し，全面発掘を実施した。

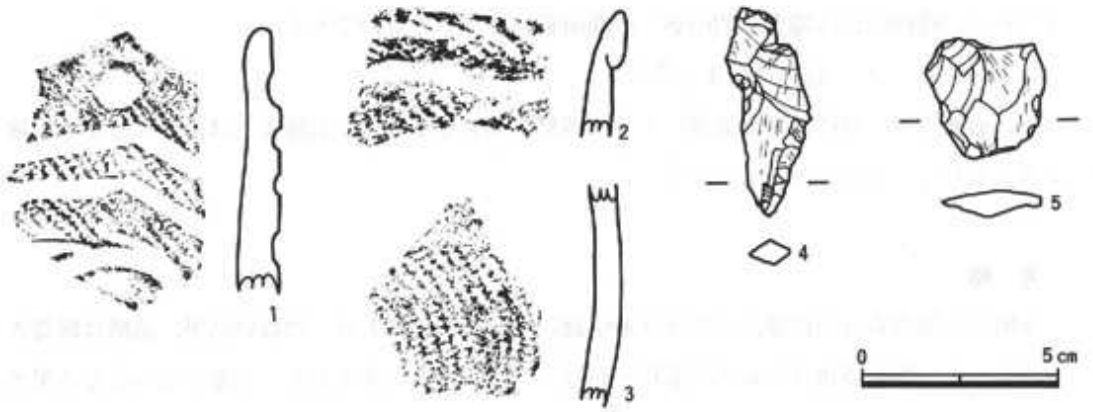
9．調 査 結 果　以下の通りである。



第429図　天戸森遺跡D区(陣場)グリッド配置図



第430図　土層柱状図



第431図　出土遺物

遺跡の層位　(第430図)

遺跡の堆積土を観察するためE－ラインと6ラインに沿って土層観察用の畦を設定し，その断面から得られた結果を総括して述べる。

第Ⅰ層　暗褐色土 (10YR 3/3)　全域に分布している。層の厚さは20～30cmとほぼ一定している。耕作土である。

第Ⅱ層　黒褐色土 (10YR 2/2)　5ライン以東は一段低くなっており，この部分に10～15cmの厚さで堆積する。

第Ⅲ層　黒褐色土 (10YR 2/1)　同じく5ライン以東に分布する。層の厚さは20～65cmを

測る。遺物は本層より少量出土した。

第Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ3/2）　5ラインを中心として，段の落ち際に堆積している。層の厚さは0～40cmを測る。

第Ⅴ層　黄褐色土（10ＹＲ5/6）　下位火山灰層で本層直上まで耕作がおよんでいる。

検出遺構と遺物

ア．遺　構

検出されなかった。

イ．遺　物

出土した遺物は極めて少ない。特に土器は摩滅が著しく特徴のあるものを載せた。

土　器　（第431図1～3）

1は深鉢形の口縁部破片で，ＬＲ縄文を地文とし沈線によって文様が区画されている。小突起部には指による押圧が加えられる。2は小型の深鉢形の折り返し口縁である。地文はＬＲ縄文が施文され口唇部には斜めの刻目が施される。3は深鉢と思われる胴部破片でＲＬ縄文が施文される。時期的には縄文中期中葉～後期前葉にかけてのものである。

石器・フレーク　（第431図4，5）

4は剥離片の一側縁に押圧剥離によって調整を加えるもので，石錐または掻器としての用途が考えられる。5はフレークである。

考　察

今回の発掘調査は学校建設に共なう通学路に係わるものである。調査の結果，遺構は確認されなかった。出土遺物は少量の土器片と石器（フレーク）が出土した。しかしこの様な結果であっても一概に遺跡ではないといえない。本遺跡は天戸森遺跡Ａ～Ｃ区と同じ台地上に位置し200ｍとはなれておらず関連深いものである。天戸森遺跡Ａ～Ｃ区の全容をより明解にするためにもＤ区周辺の発掘調査の必要性があるものと考えられる。

（藤井安正）

参考・引用文献

丹波茂　「大木式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣　1983年

中村良幸　「大形住居」『縄文文化の研究8』雄山閣　1983年

〃　「「複式炉」について」『考古風土記』第7号　1982年

〃　「立石遺跡」　岩手県大迫町教育委員会　1979年

目黒吉明　「住居の炉」『縄文文化の研究8』雄山閣　1983年

市川金丸他　「三内澤部遺跡」　青森県教育委員会　1977年

「泉山遺跡発掘調査報告書」　青森県教育委員会　1975年

高田和徳　「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」　一戸教育委員会　1983年

宮城教育委員会　「上深沢遺跡」　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ　1978年

鈴木克彦　「中の平遺跡発掘調査報告書」　青森県教育委員会　1974年

〃　「東北地方北部に於ける大木系土器文化の編年的考察」『北奥古代文化』第8号

〃　「円筒土器に後続する土器の編年」『考古風土記』第7号　1982年

梅宮茂　「複式炉文化論」『福島考古』1974年

磯村朝次郎他　「大畑台遺跡発掘調査報告書」　日本鉱業株式会社船川製油所　1979年

文化財保護委員会　「大湯町環状列石」　1953年

鎌田・米田・大里・秋元他　「鹿角市史」　鹿角市　1982年

阿部義平　「配石墓の成立」『考古学雑誌』54巻1号　1968年

〃　「配石」『縄文文化の研究9』雄山閣　1983年

大磯町教育委員会　「大磯・石神台配石遺構発掘報告書」1974年

水野正好　「環状列石墓群の意味するもの」　信濃20－4　1968年

江坂輝弥　「配石遺構と敷石遺構」「古代史発掘3」　講談社　1973年

鈴木道之助　「図録　石器の基礎知識Ⅲ　縄文」　柏書房　1981年

戸沢充則他　「道具と技術」『縄文文化の研究7』雄山閣　1983年

秋元・藤井他　「高市向館遺跡発掘調査報告書」　鹿角市教育委員会　1982年

桜田隆　「一本杉遺跡」東北縦貫自動車道発掘報告書Ⅵ　秋田県教育委員会

桑原滋郎　「ロクロ土師器坏について」『歴史』39号　1969年

小松正夫　「秋田県の土師器について」『考古風土記』第2号　1977年

岩見・永瀬他　「館下Ⅰ遺跡発掘調査報告書」　秋田県教育委員会　1979年

岩見誠夫他　「東北自動車道発掘調査報告書Ⅵ」　猿ケ平Ⅱ遺跡　秋田県教育委員会　1983年

桜田隆　「東北自動車道発掘調査報告書Ⅳ」　北の林Ⅱ遺跡　秋田県教育委員会　1983年

遠藤勝博他　「上里遺跡発掘調査報告書」　岩手県埋蔵文化財センター　1983年

児玉準　「平鹿遺跡発掘調査報告書」　秋田県教育委員会　1983年

春日信興他　「右ェ門次郎窪遺跡」　青森県教育委員会　1981年

遺跡遠景（SW▶NE）

遺跡近景（SE▶NW）

PL 1　遺跡遠景・近景

▲第5号・9号竪穴住居跡（E▶W）

第9号竪穴住居跡炉（S▶N）

第6号・13号・14号竪穴住居跡（E▶W）

第6号竪穴住居跡炉（S▶N）

第21号・24号・25号・27号・32号・36号・43号
竪穴住居跡（S▶N）

第27号竪穴住居跡遺物出土
状況　P9とP116（S▶N）

PL2　第5・6・9・13・14・21・24・25・27・32・36・43号竪穴住居跡

第27号・第32号・第33号・第36～39号
竪穴住居跡（S▶N）

上．第27号住居跡覆土中で確認した炉
下．　同　住居跡遺物出土状況

第34号竪穴住居跡（N▶S）

上・下　同住居跡遺物出土状況

第40号竪穴住居跡（E▶W）

同　住居跡遺物出土状況

PL 3　第27・32～34・36～40号竪穴住居跡

第54号竪穴住居跡（W▶E）

調　査　風　景

第61号竪穴住居跡（E▶W）

花輪第１中学校体験学習

第40号・44号・45号・48号・49号・51号・52号
54号・62A～F号竪穴住居跡（N▶S）

第62AB号竪穴住居跡炉と
出土遺物（N▶S）

第62C号竪穴住居跡出土遺物

PL 4　第40・44・45・48・49・51・52・54・62AB～F号竪穴住居跡

第71A～C号竪穴住居跡（E▶W）

第71B号住居跡炉（E▶W）

第71・77・85・114号竪穴住居跡（E▶W）

第85号住居跡炉（S▶W）

第86号竪穴住居跡（E▶W）

調　査　風　景

PL 5　第71A～C・74・77・85・86・114号竪穴住居跡

第103号・107号竪穴住居跡（N▶S）

現地説明会

第65号・106号・109号・110号竪穴住居跡（S▶N）

第101号竪穴住居炉跡（E▶W）

第113号竪穴住居跡（N▶S）

同　住居炉跡（E▶W）

PL 6　第65・103・106・107・110・113号竪穴住居跡・第101号住居炉跡

▲第１～４号配石遺構と
南側住居跡群（N▶S）

◀第１号配石遺構（N▶S）

第１号配石遺構（E▶W）▶

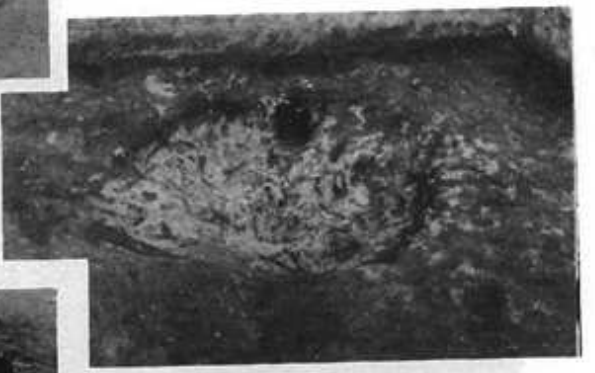
◀第１号配石遺構下の土壙

PL７　第１～４号配石遺構全景・第１号配石遺構

◀第2～4号配石遺構（E▶W）

第4号配石遺構（E▶W）▶

◀第5号配石遺構（N▶S）



第5号配石遺構下の土壙
（N▶S）▶

◀第6号配石遺構（E▶W）

PL 8　第2～6号配石遺構

◀第10号配石遺構（N▶S）

第10号配石遺構下の土壙（E▶W）▶

◀第13～15号配石遺構（N▶S）

第19号配石遺構
と下部土壙（E▶W）▶

◀第20号配石土壙（N▶S）

PL 9　第10・13・14・15・19・20号配石遺構

第6号土壙遺物出土状況(N▶S) ▶

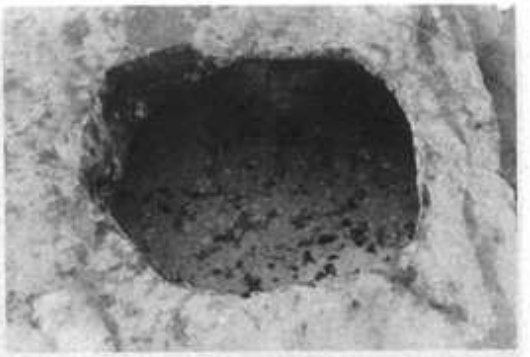
第19号土壙(S▶N) ▶

第26号土壙(N▶S) ▶

◀第3号土壙土層堆積図(E▶W)

◀第16号土壙(S▶N)

◀第25号土壙(W▶E)



PL10 第3・6・16・19・25・26号土壙

◀第27号土壙(NE▶SW)

第51・52号土壙(S▶N) ▶

◀第53号土壙(▶)

第57号土壙(S▶N) ▶

◀第101号土壙(S▶N)

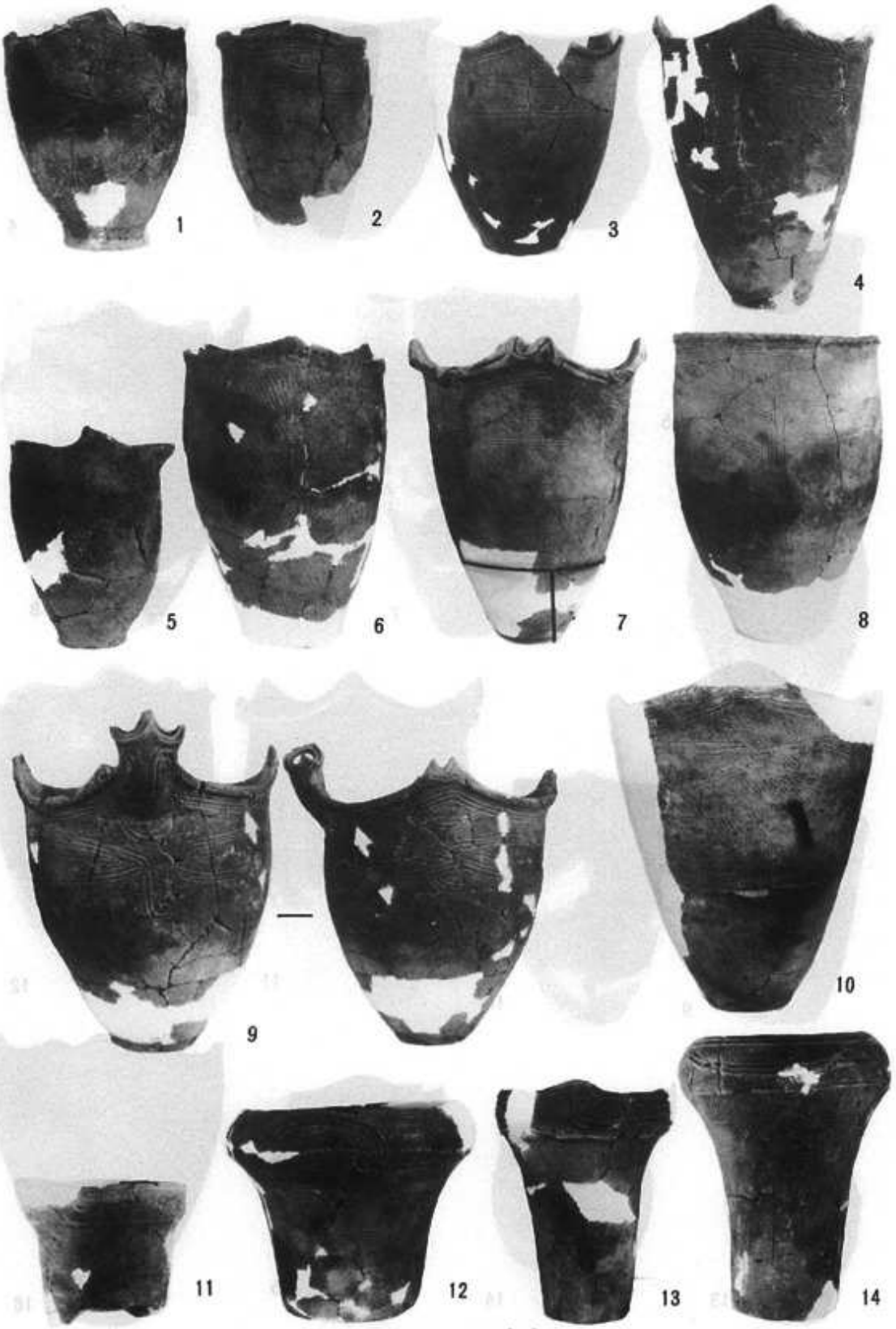
第118号土壙(N▶S) ▶

PL11　第27・51・52・53・57・101・118号土壙

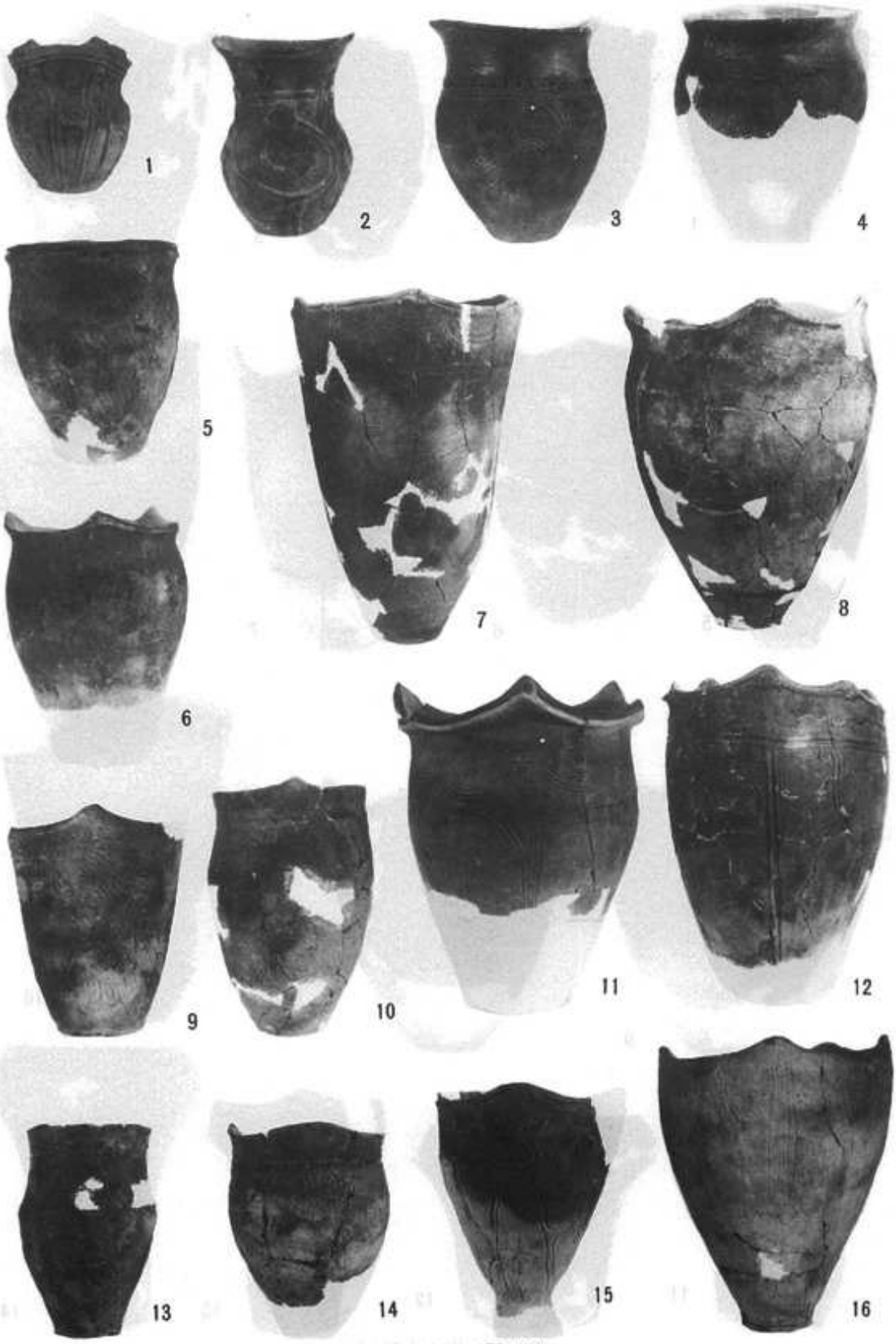
発掘区A区農道東側の調査終了後のようす（N▶S）

同　上　農道西側の調査終了後のようす（N▶S）

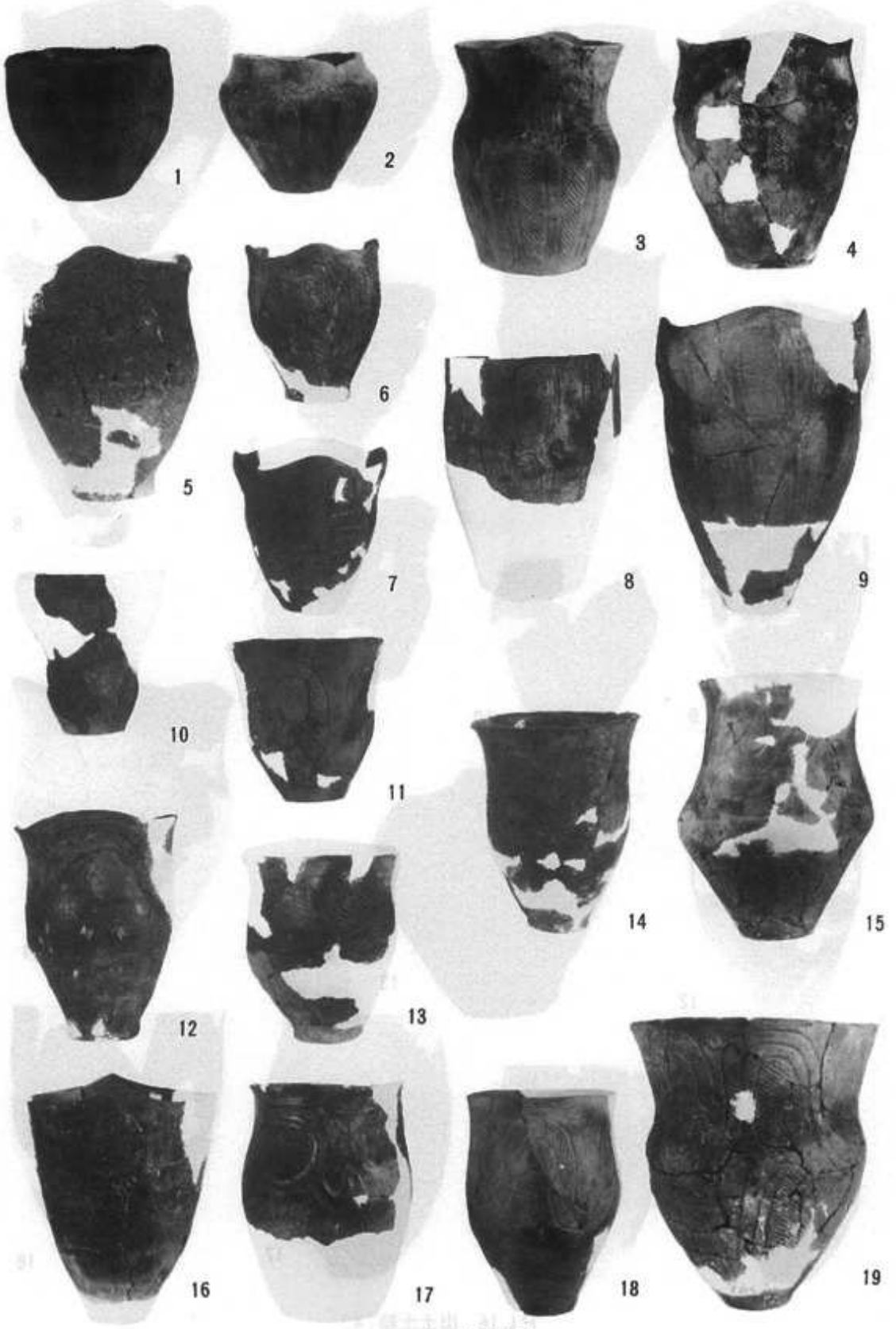
PL12　A区調査終了後全景



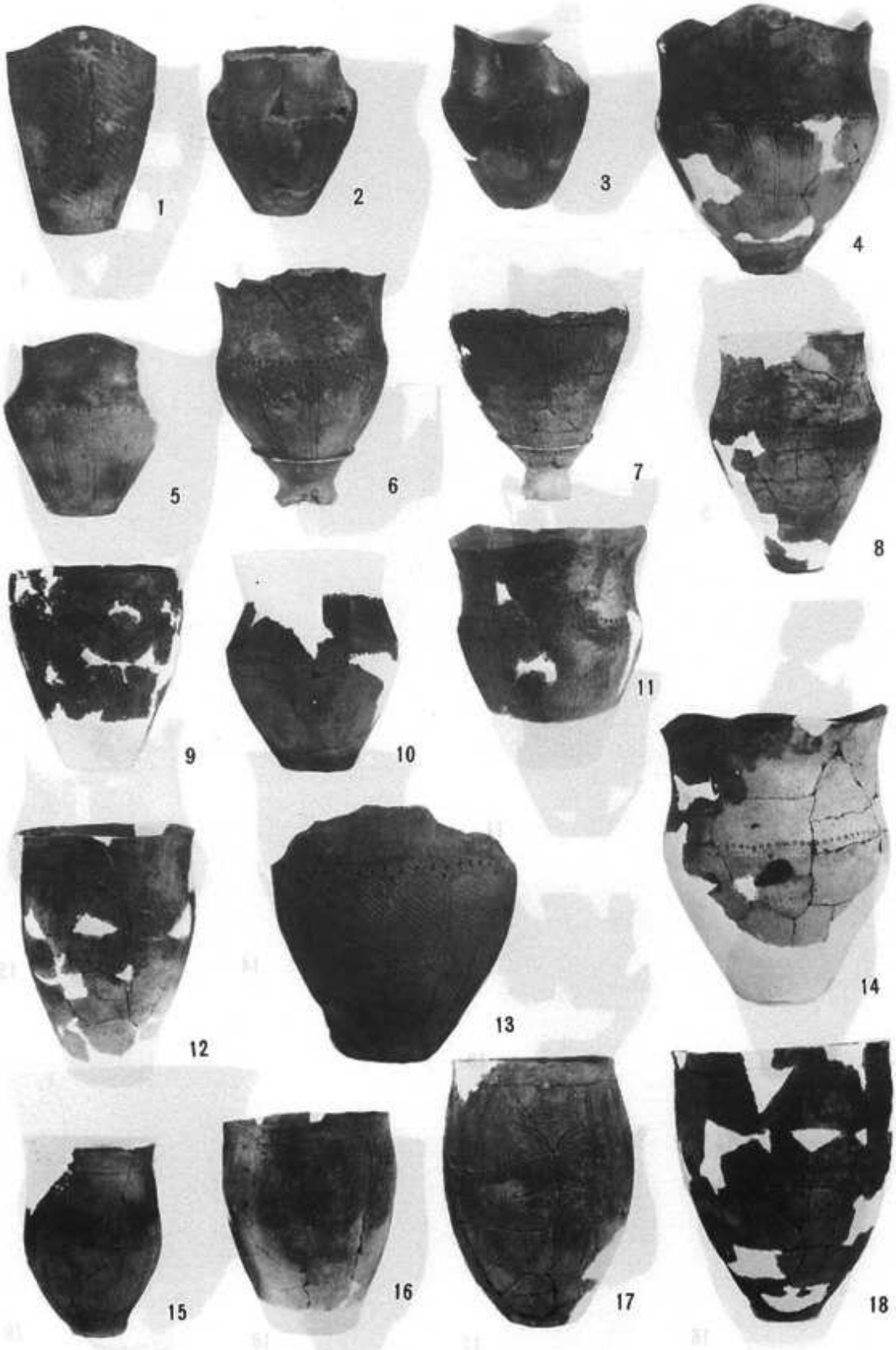
PL13 出土土器(1)



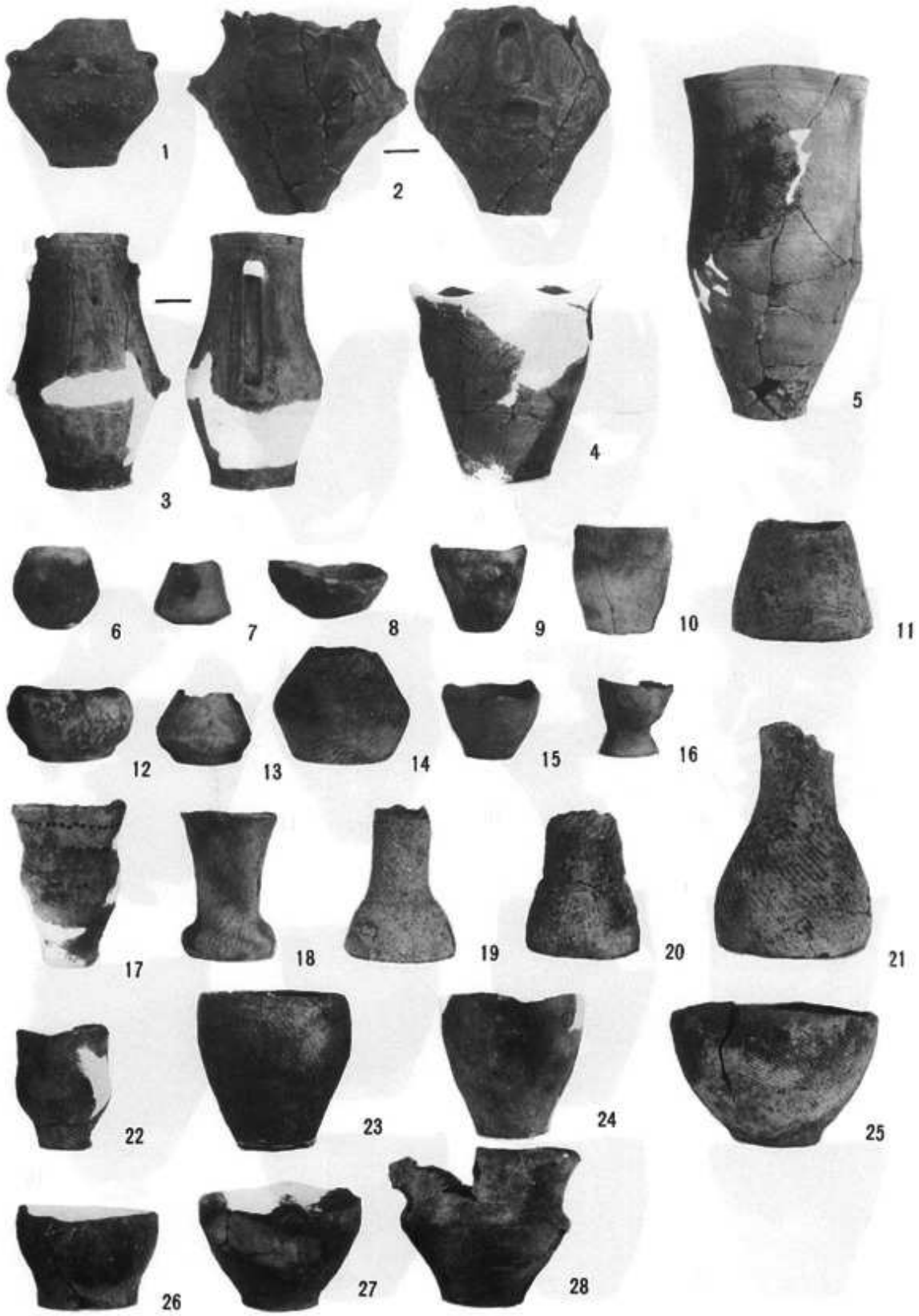
PL14 出土土器(2)



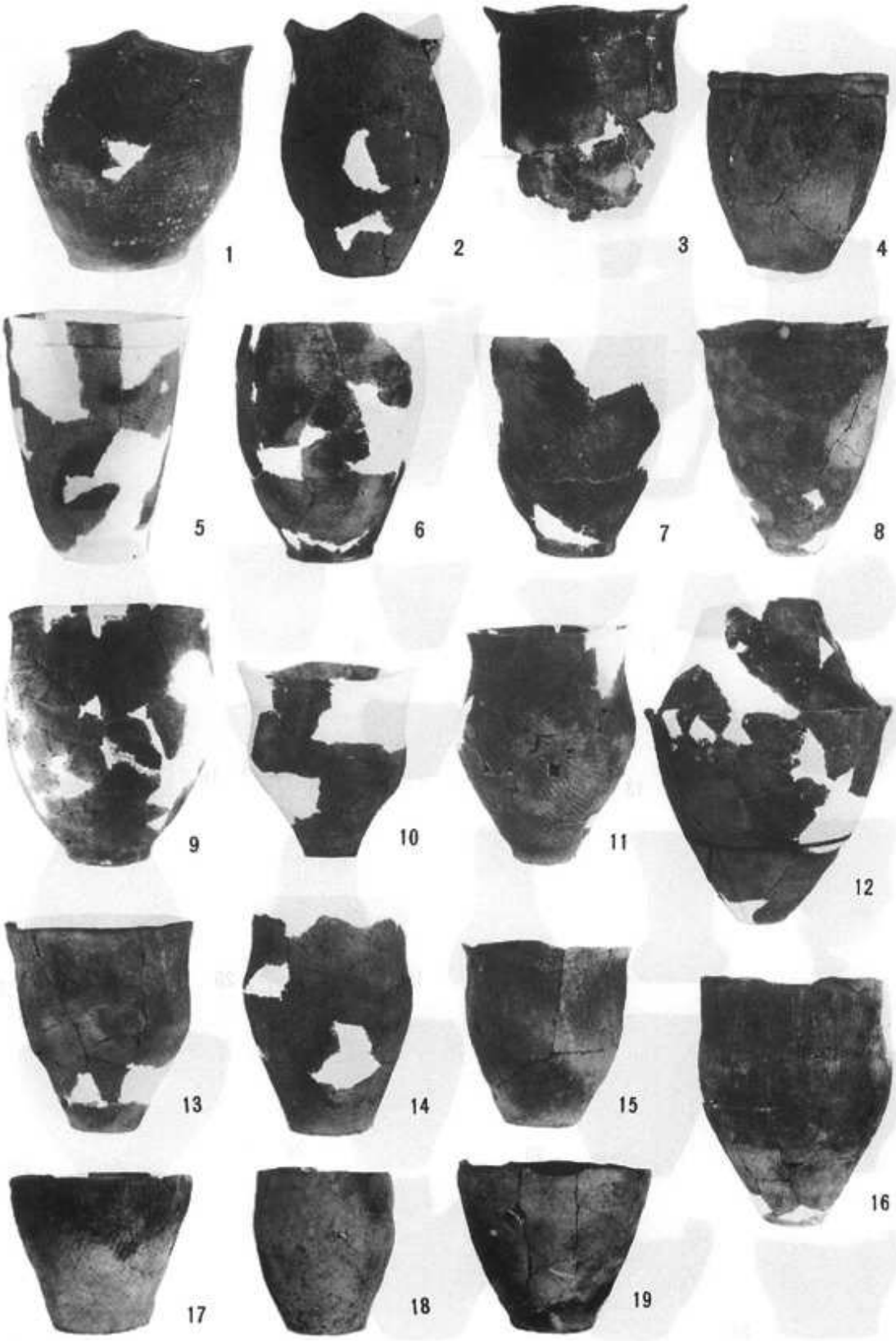
PL15 出土土器(3)



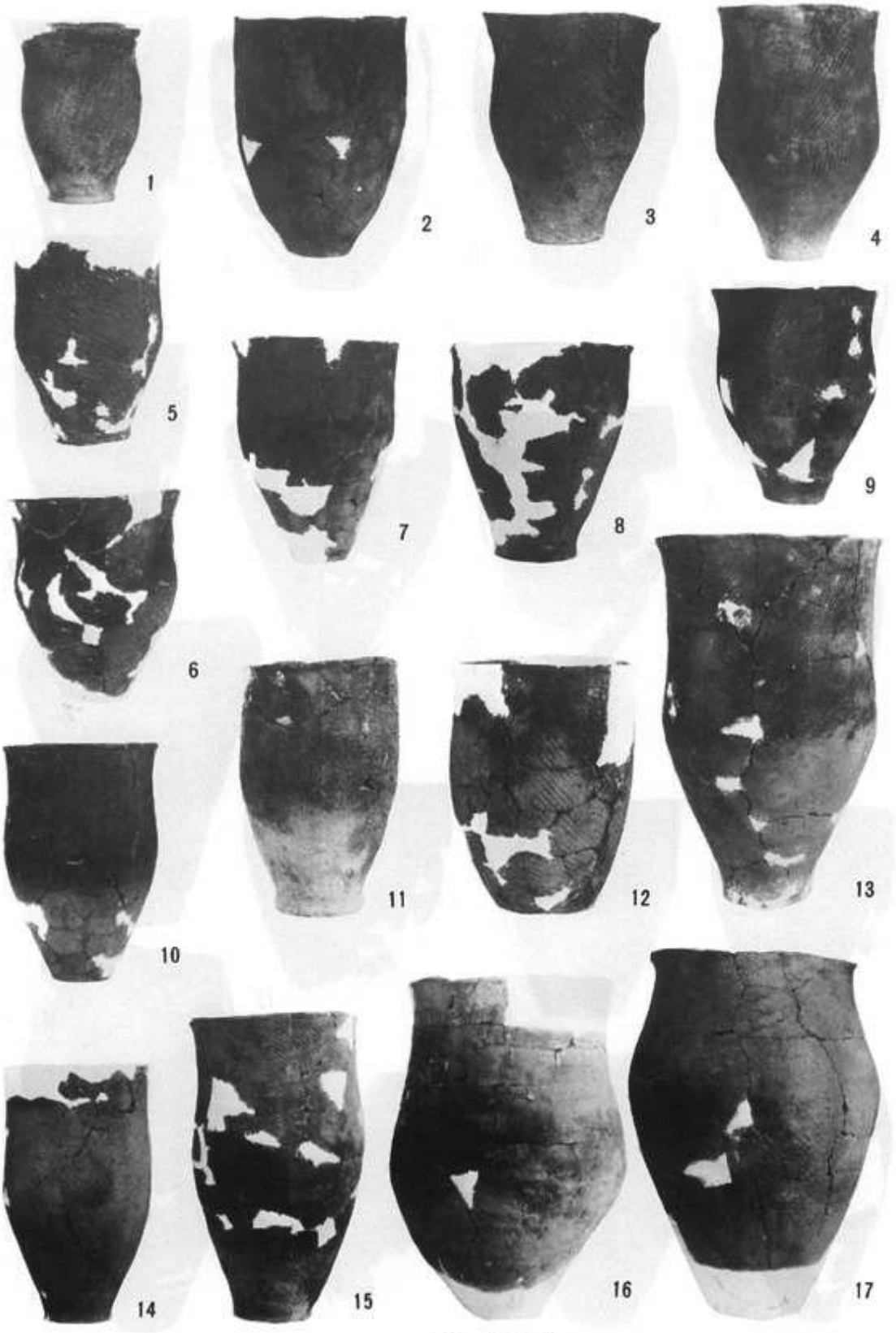
PL16 出土土器(4)



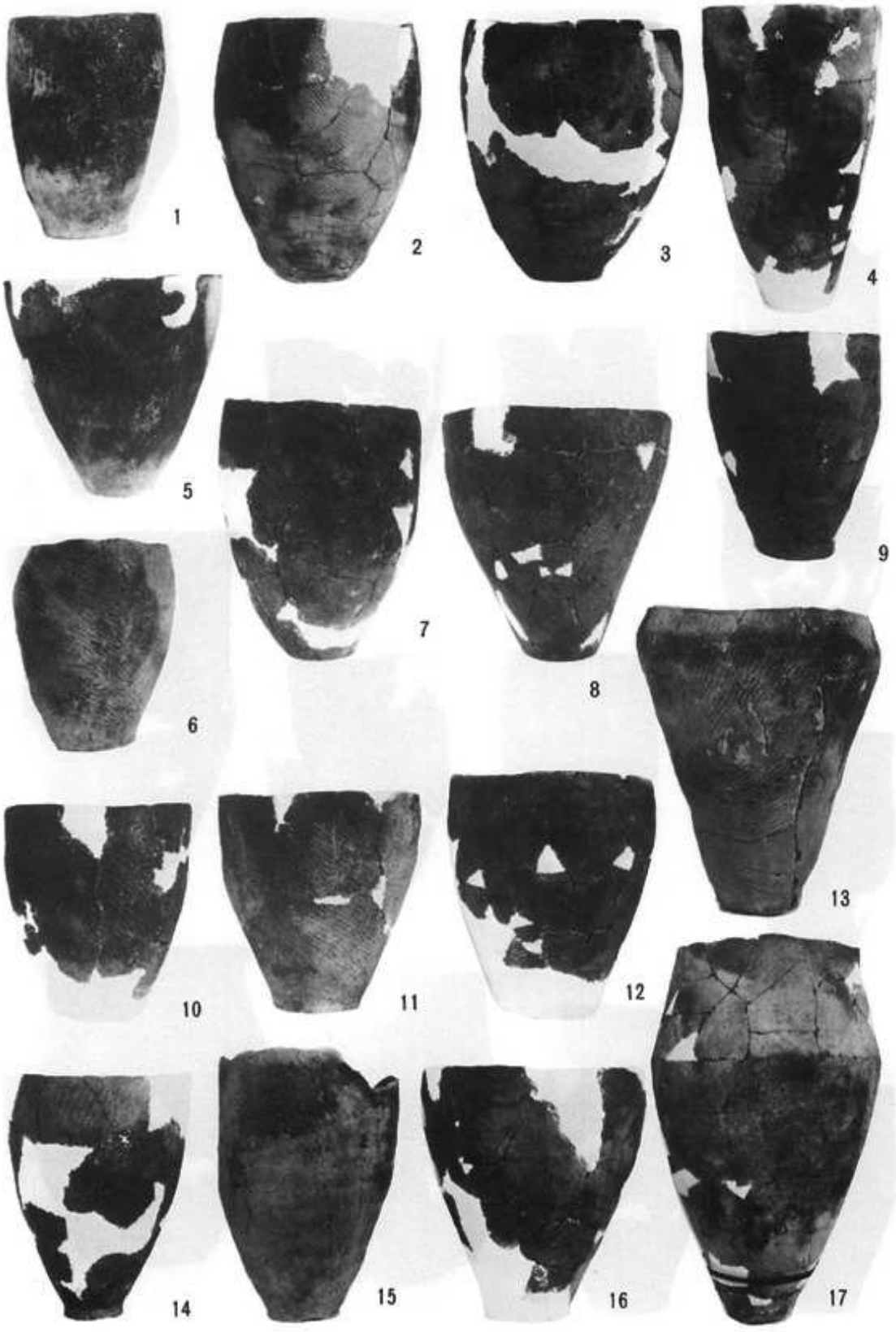
PL17 出土土器(5)



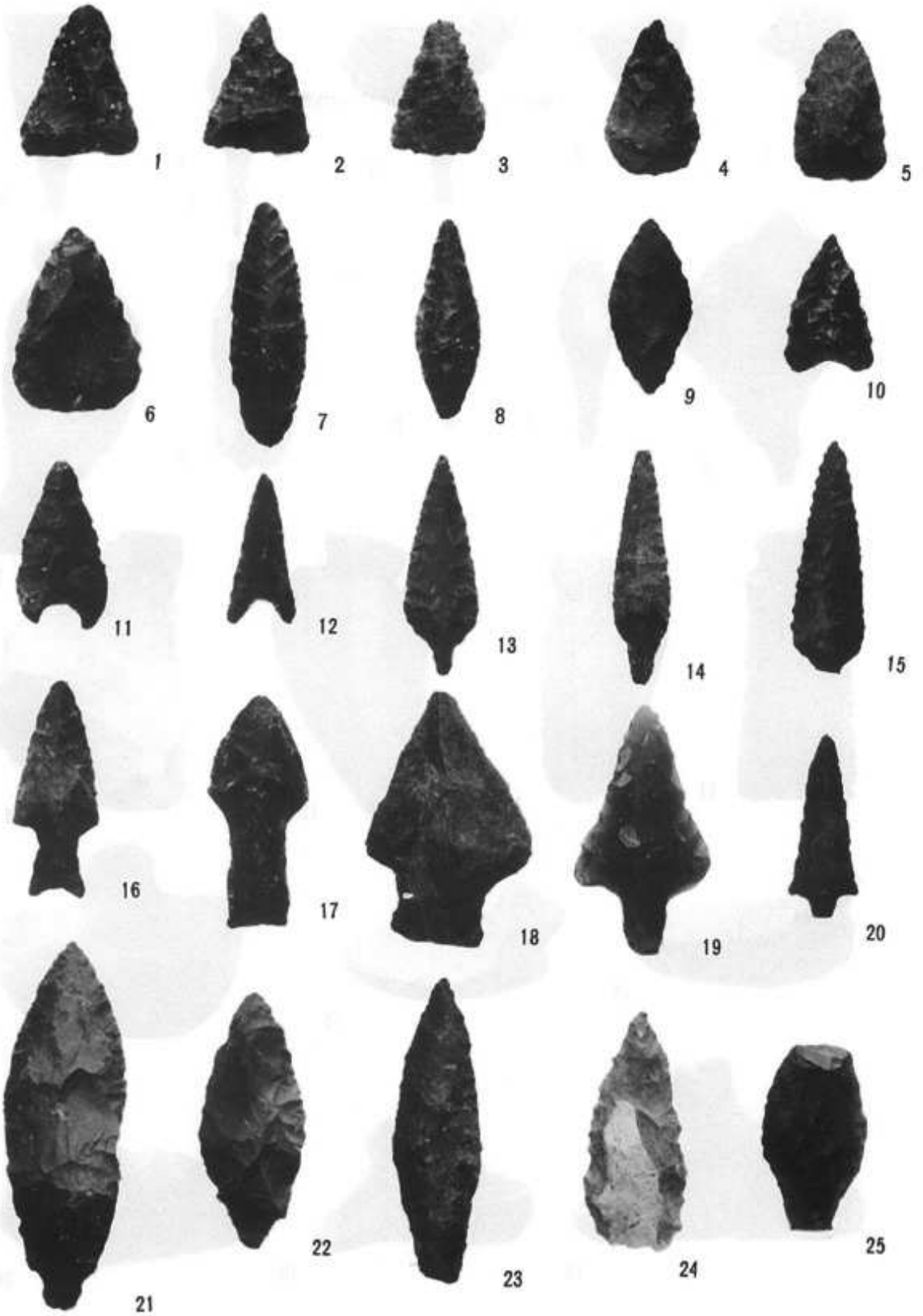
PL18　出土土器(6)



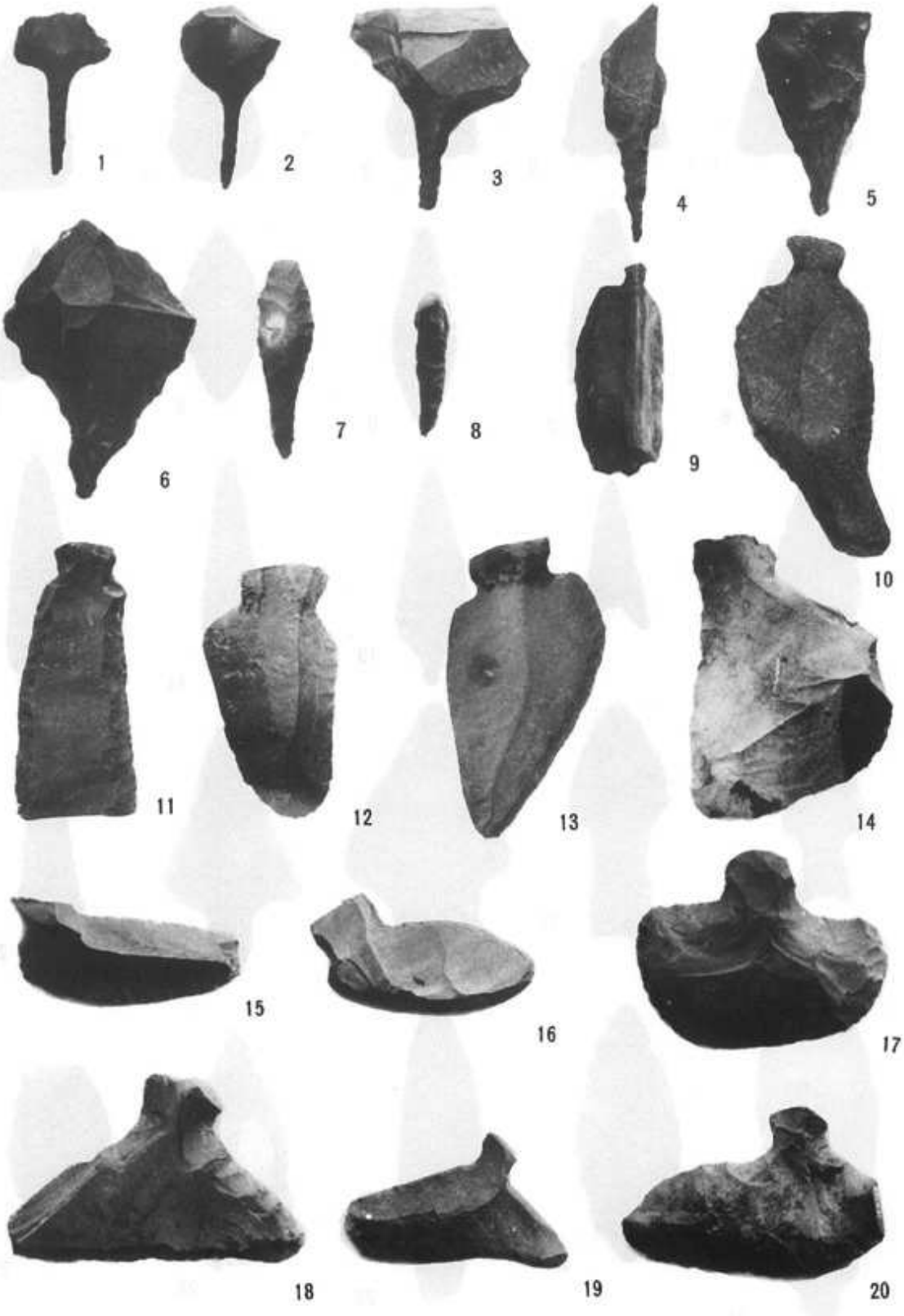
PL19　出土土器(7)



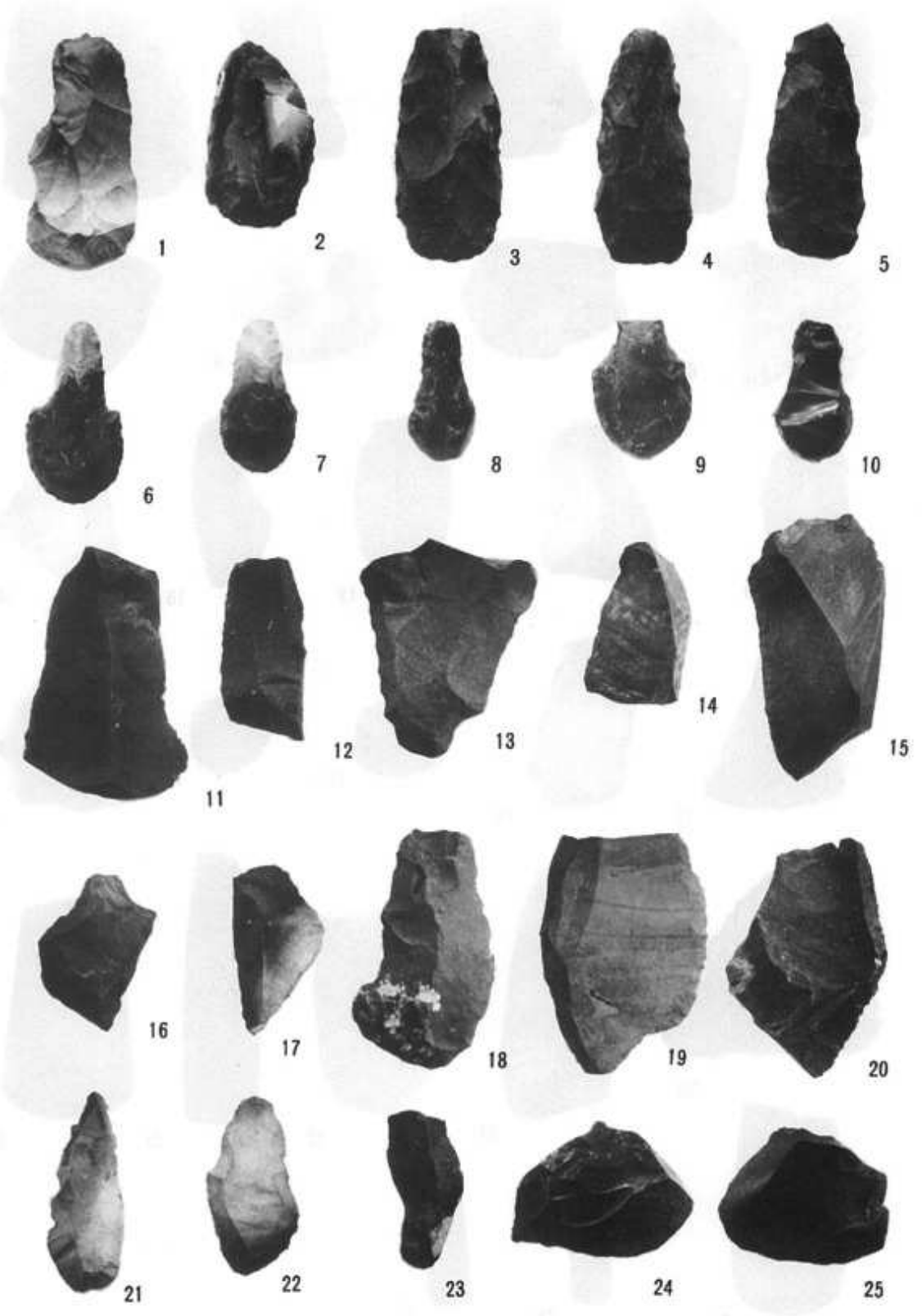
PL20　出土土器(8)



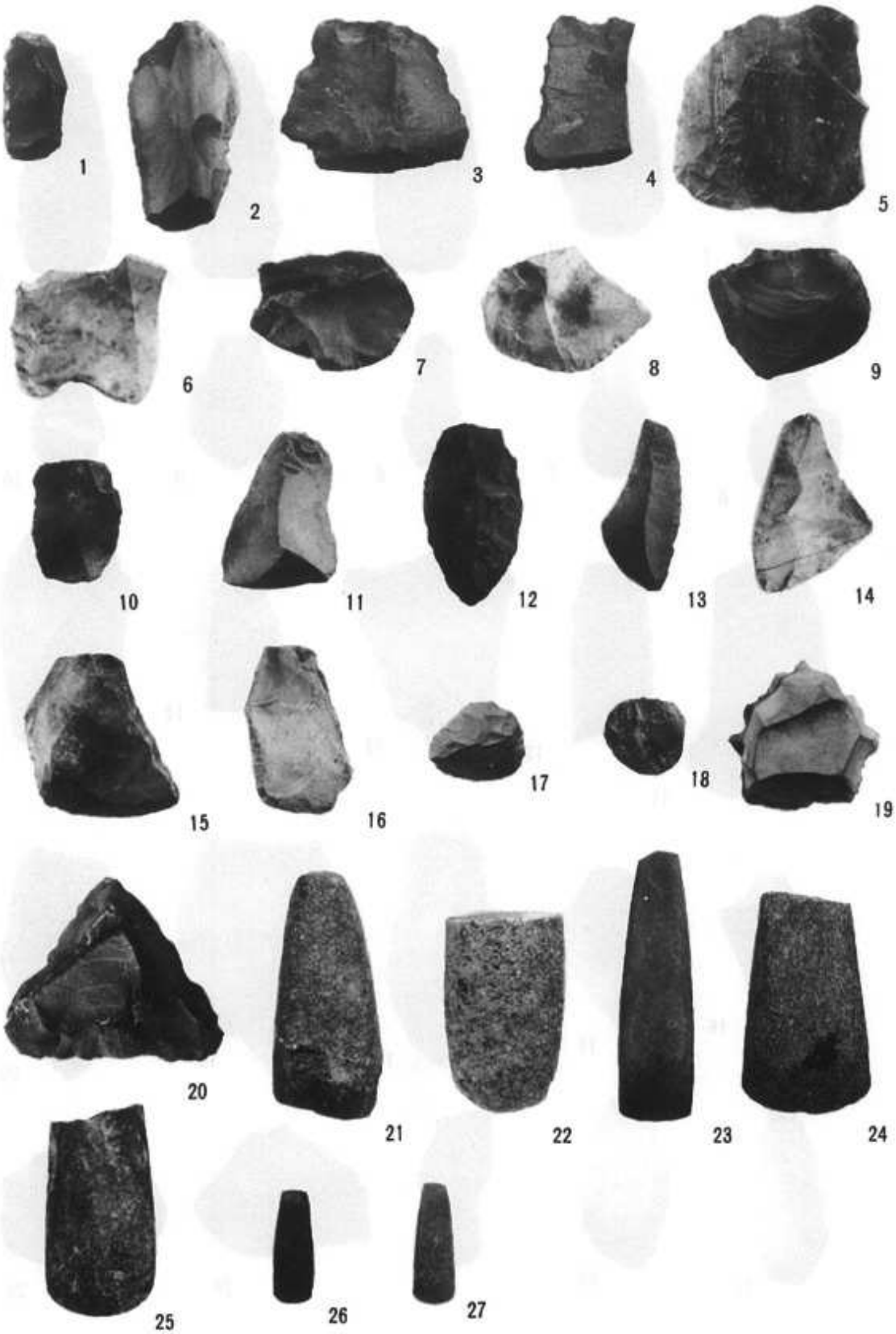
PL21　出土石器(1)



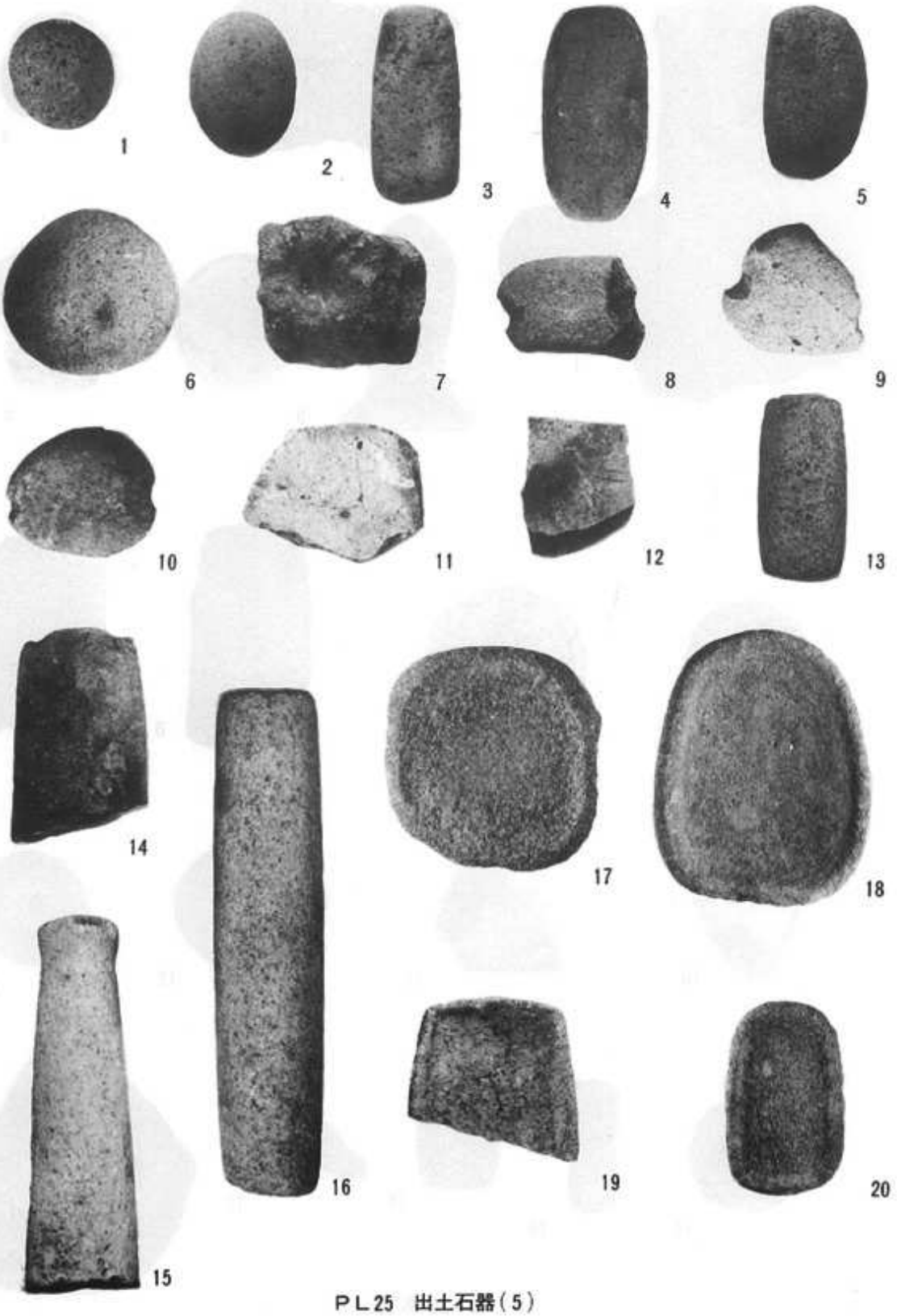
PL22　出土石器(2)



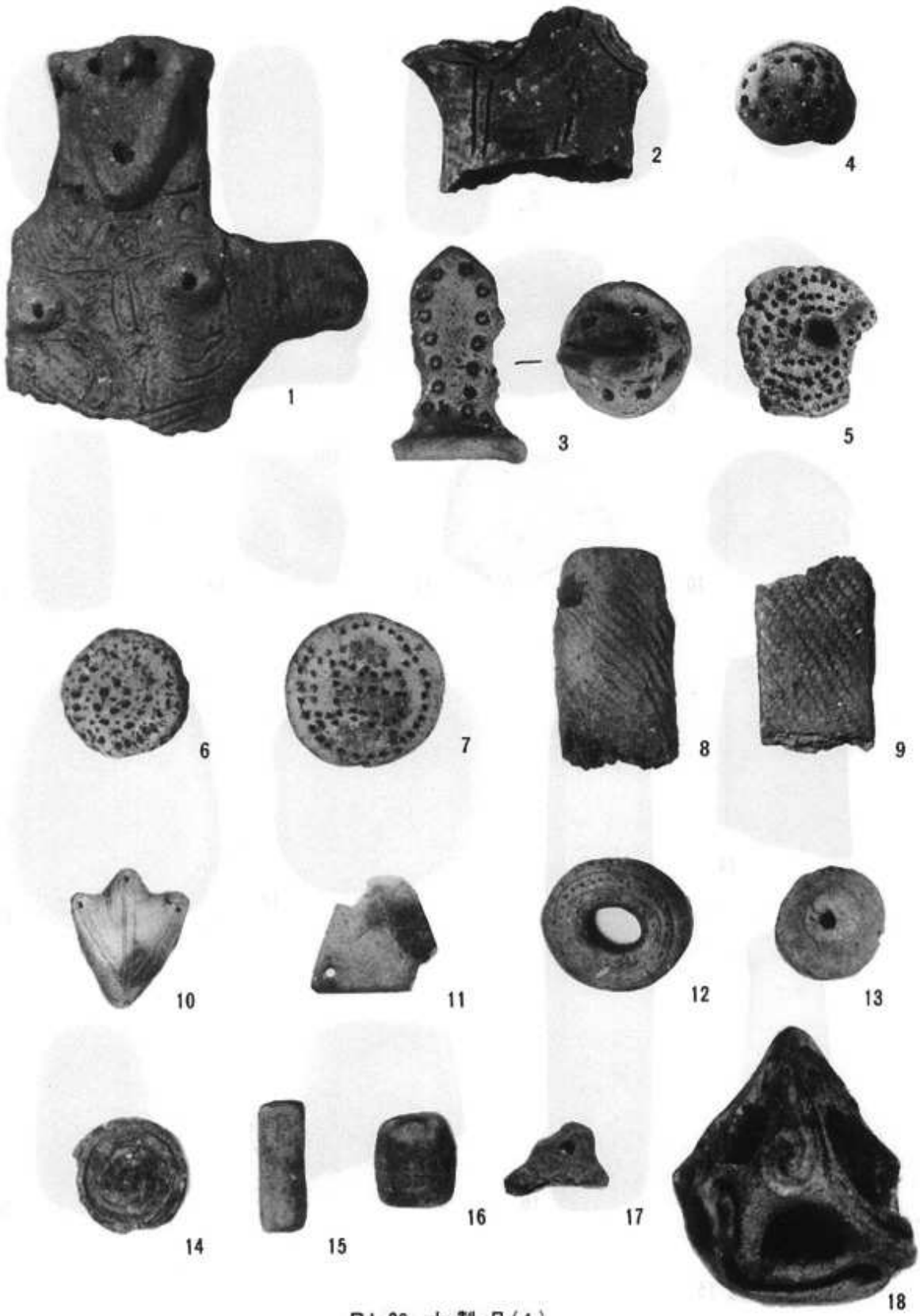
PL23　出土石器(3)



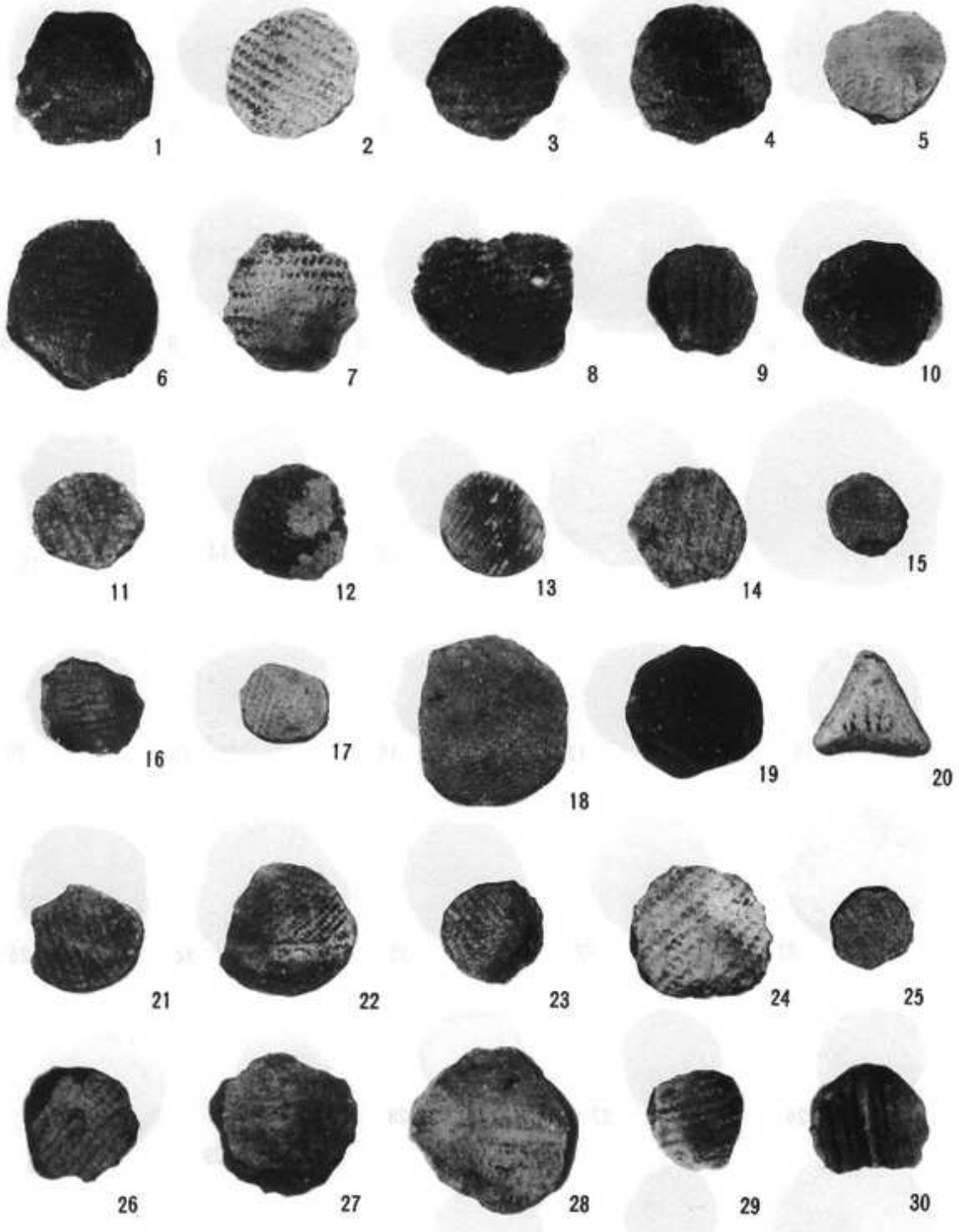
PL24　出土石器(4)



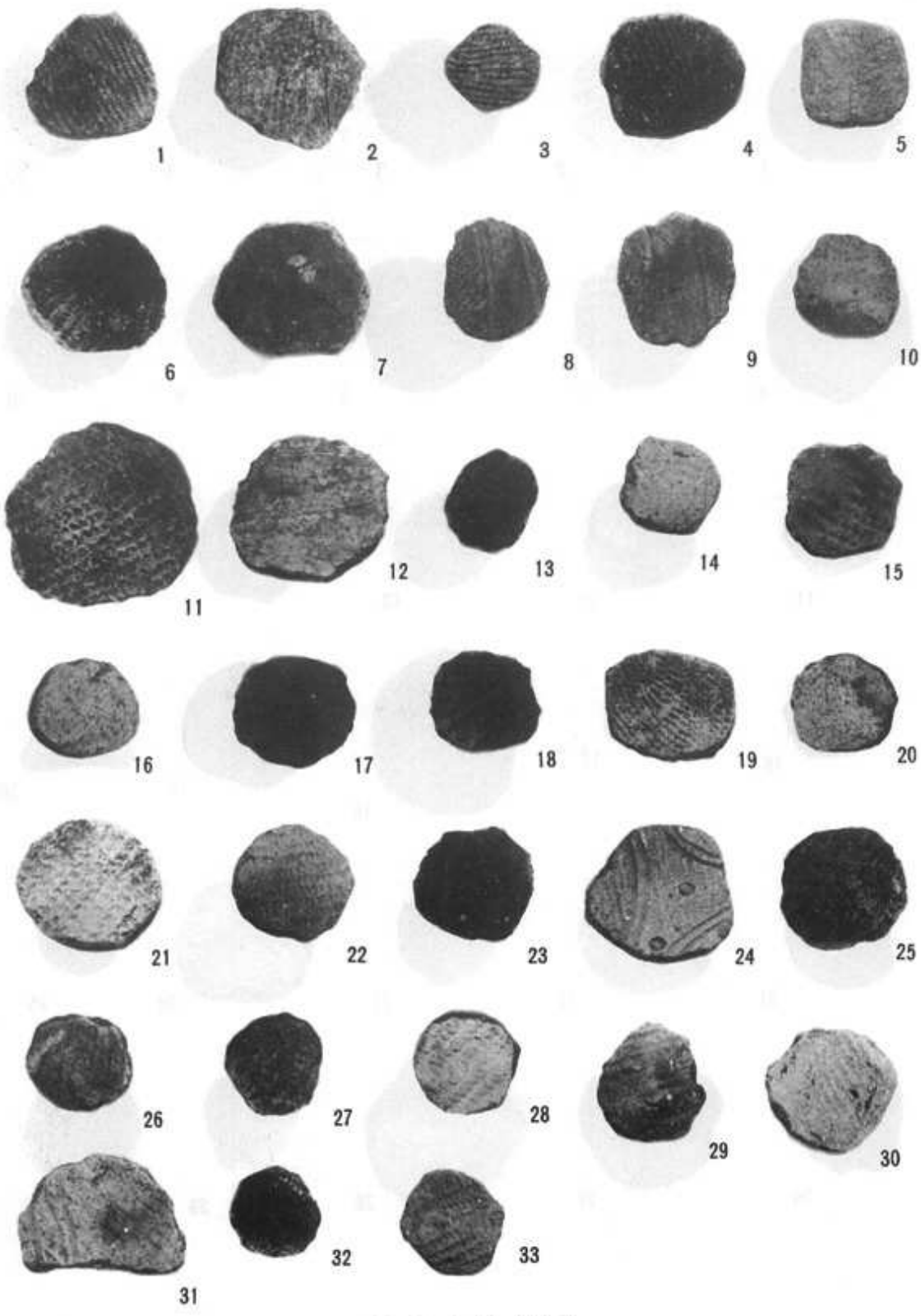
PL25　出土石器(5)



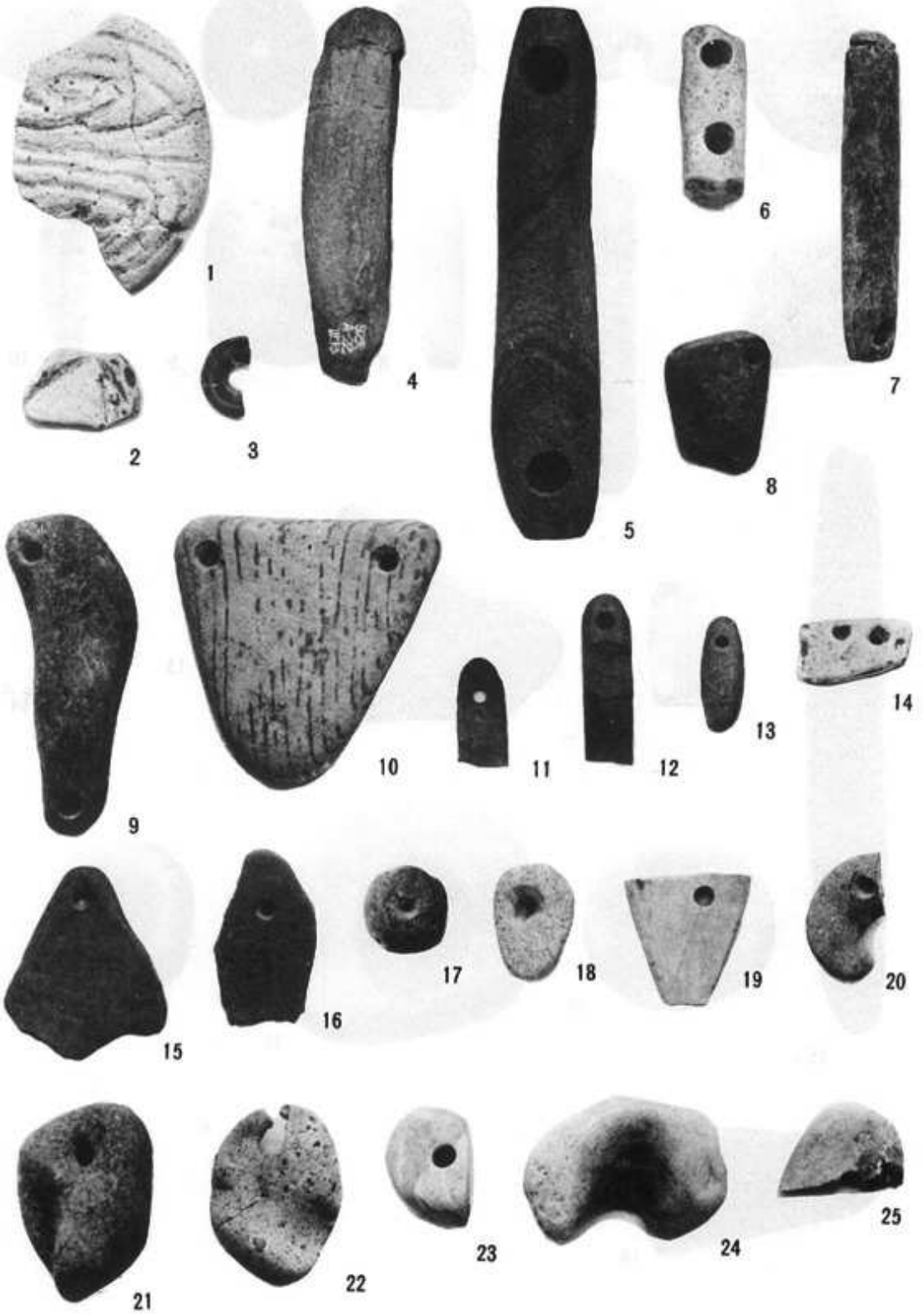
PL26 土製品(1)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

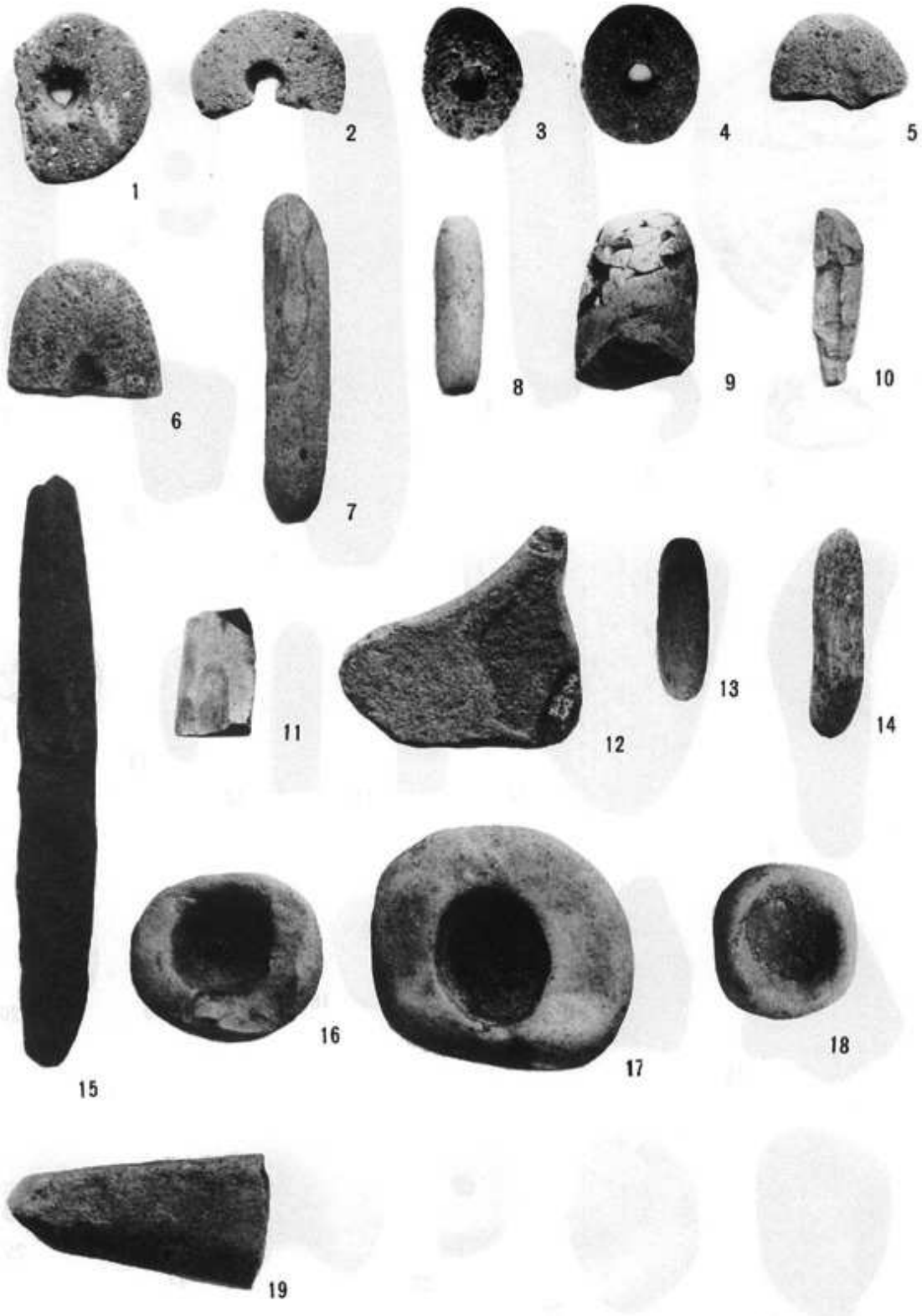
PL27 土製品(2)


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33

PL28 土製品(3)



PL29 石製品(1)

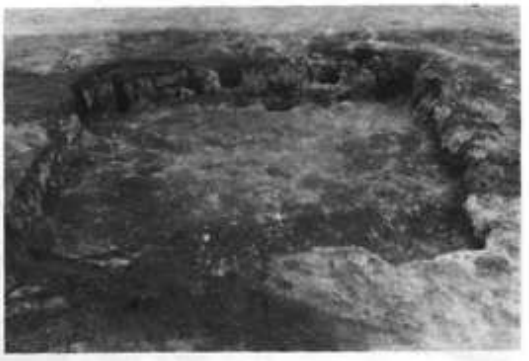


PL30 石製品(2)

◀第1号竪穴住居跡(N▶S)

同　カマド(N▶S)▶

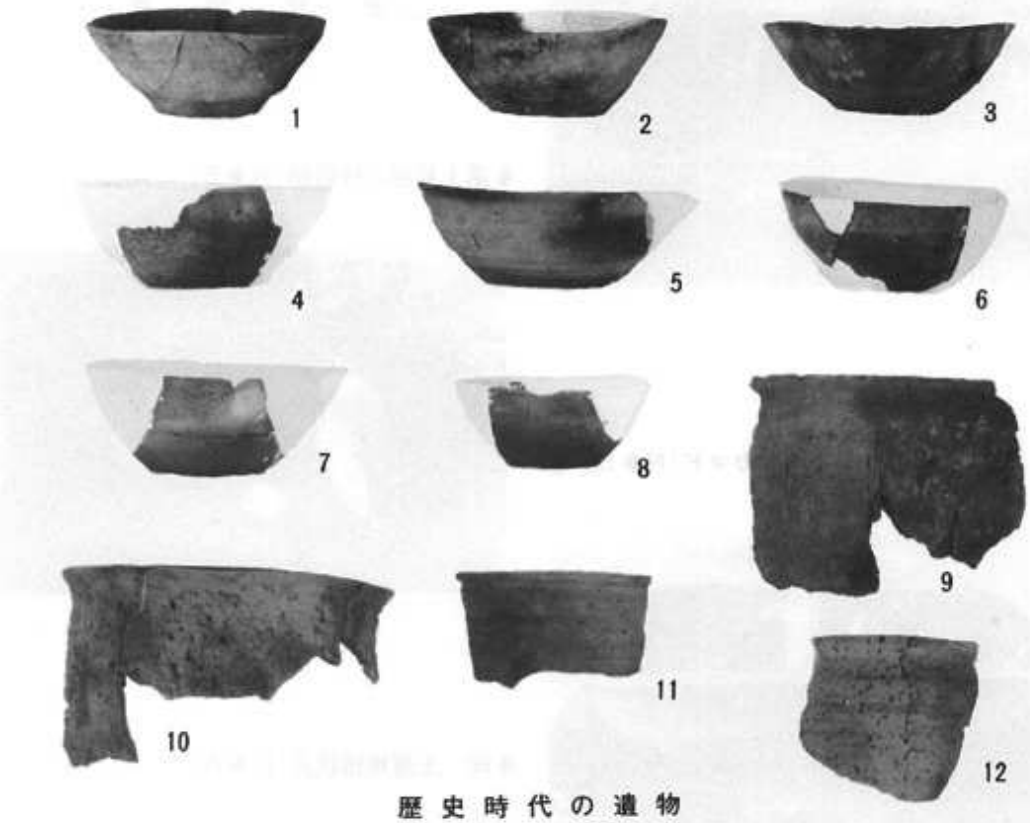
◀同　土層堆積状況(E▶W)



第2号竪穴住居跡(N▶S)▶

◀第3号竪穴住居跡(E▶W)

PL31　歴史時代　第1・2・3号竪穴住居跡



歴史時代の遺物

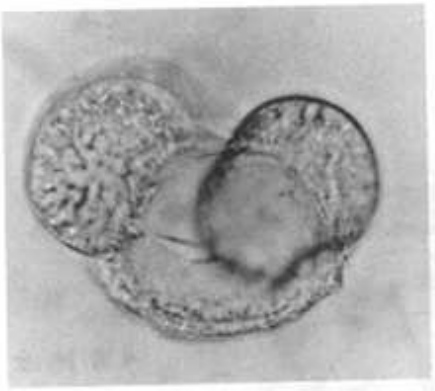
PL32　発掘調査参加者

◀遺跡全景

◀Eライン土層図

◀作業風景

PL33　天戸森遺跡D区

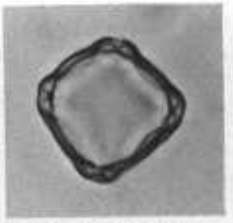


マ ツ 属

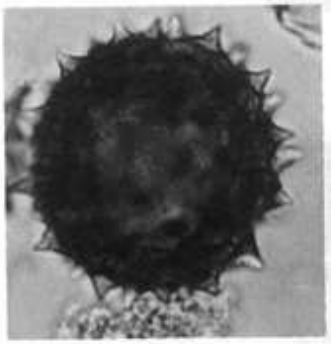
ブ ナ 属

コナラ亜属

オニグルミ属



ハンノキ属



キク亜科

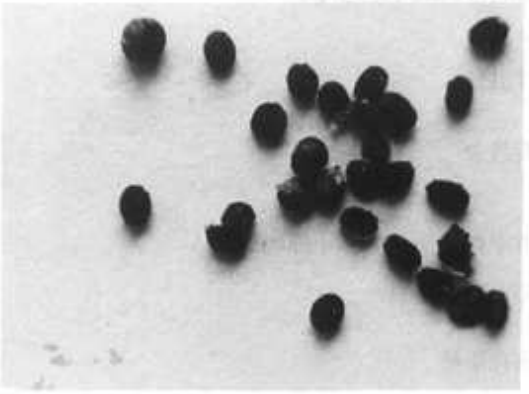
イ ネ 科

ヨモギ属

PL34 花粉化石

▲1

▲2



▲3

▲4　炭化したクリの堅果

0　2cm

▲5　拡大したクリの堅実

0　2cm

PL35　大型植物遺体

鹿角市文化財調査資料　26

天戸森遺跡発掘調査報告書

発行年月日　　昭和59年３月31日

発　行　者　　鹿角市教育委員会
〒 018－53
秋田県鹿角市十和田毛馬内字上陣場19の５
ＴＥＬ　0186－35－4011

印　刷　所　　（有）　大館孔版社